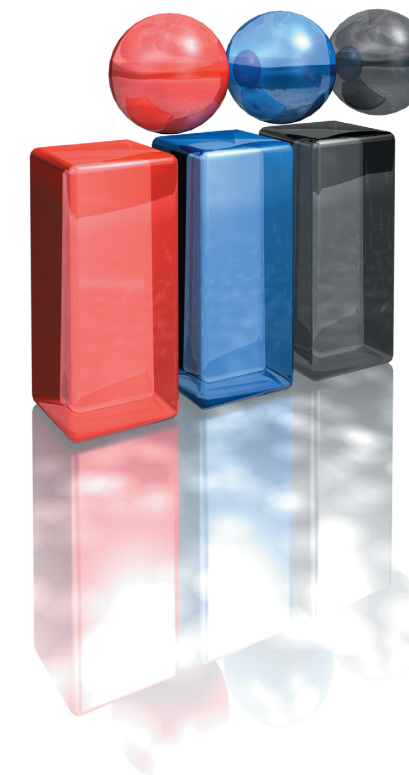


東京大学大学院情報学環・学際情報学府年報

Annual Report

第4号
(通巻36号)

Interfaculty Initiative in Information Studies
Graduate School of Interdisciplinary Information Studies
The University of Tokyo



2008



Interfaculty Initiative in Information Studies
Graduate School of Interdisciplinary Information Studies
The University of Tokyo

東京大学大学院情報学環・学際情報学府

東京大学大学院情報学環・学際情報学府

東京大学大学院情報学環・学際情報学府年報

二〇〇八年度

第四号(通巻三十八号)

東京大学大学院情報学環・学際情報学府

東京大学大学院情報学環・学際情報学府年報

Annual Report

Interfaculty Initiative in Information Studies

Graduate School of Interdisciplinary Information Studies

The University of Tokyo

第 4 号 (通巻 36 号)

2008 年度

東京大学大学院情報学環・学際情報学府

I. 現状と課題	1
1 組織説明	1
1.1 概要	1
1.1.2 政府予算に基づく大型研究・教育プロジェクト	3
1.1.2.1 文部科学省21世紀COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」	3
1.1.2.2 コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム	4
1.1.2.3 コンテンツ創造教育研究コア	4
1.1.2.4 文部科学省「セキュアユビキタスコンピューティングプラットフォーム」	5
1.2 理念と沿革	6
1.3 教職員数	8
1.4 財務	10
1.5 運営	12
1.5.1 情報学環教授会	12
1.5.2 学府委員会	13
1.5.2.1 社会情報学コース	13
1.5.2.2 文化・人間情報学コース	13
1.5.2.3 学際理数情報学コース	14
1.5.2.4 総合分析情報学コース	14
1.5.3 教務委員会	15
1.5.4 財務法務委員会	15
1.5.5 将来計画委員会	15
1.5.6 ハラスメント相談員	15
1.5.7 施設整備委員会	15
1.5.8 情報セキュリティ委員会	16
1.5.9 情報ネットワーク委員会	16
1.5.10 情報倫理審査会	17
1.5.11 業績評価委員会	17
1.5.12 企画広報委員会	18
1.5.13 図書出版委員会	18
1.5.14 国際活動委員会	18
1.5.15 利益相反アドバイザー	19
1.5.16 産学連携委員会	19
1.5.17 知的財産室	19
1.5.18 社会情報研究資料センター運営委員会	19
1.5.19 WEB発表会運営委員会	20
1.5.20 学生・留学生委員会	20
1.5.21 情報学環教育部委員会	21

1.6	事務組織	22
2	教育活動	22
2.1	概況	22
2.2	教育カリキュラム	23
2.3	カリキュラム支援体制	24
2.3.1	主指導教員・副指導教員の配置	24
2.3.2	修士・博士 研究計画書の作成	24
2.3.3	ウェブ発表	24
2.3.4	修士論文中間発表会	25
2.3.5	博士課程コロキウム	25
2.3.6	E-learning 授業 (iii online)	25
2.3.6.1	iii onlineの目標	25
2.3.6.2	iii onlineの概要	26
2.3.6.3	iii onlineの評価	27
2.3.7	ソウル大学大学院との大学院国際共同演習授業	28
2.4	学際情報学府への進学	29
2.5	修士論文及び博士論文の執筆	30
2.6	学際情報学府からの就職・進学動向	33
2.7	学際情報学府以外の教育活動	33
2.7.1	教育部	33
2.7.2	コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム	35
2.7.3	ベネッセ先端教育技術学講座 (寄附講座)	40
2.7.4	電通コミュニケーションダイナミクス寄付講座	41
2.7.5	OKIユビキタスサービス学寄附講座	41
2.7.6	ユビキタス情報社会基盤学寄附講座	41
3	研究活動	42
3.1	概況	42
3.1.1	文理の相互作用と連携	42
3.1.2	流動教員制度	43
3.2	大型研究プロジェクト	43
3.2.1	文部科学省21世紀COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」	43
3.2.2	文部科学省 セキュア・ユビキタス・コンピューティング・プラットフォーム構築のための基盤アーキテクチャの研究開発および検証	46
3.2.3	NEDO「情報家電用マルチメディアセキュアチップ TRON-SMPの研究開発」	47
3.2.4	大型有形・無形文化財の高精度デジタル化ソフトウェアの開発	48
3.2.5	超高精細映像と生命的立体造形が反応する新伝統芸能空間の創出技術	49
3.2.6	その他の大型研究プロジェクト	50

3.3	社会情報研究資料センターの役割	52
3.3.1	新規教育研究事業「社会情報研究資料センターの高度アーカイブ化事業」	52
3.3.2	閲覧室の環境整備とデジタル化対応	53
3.3.3	貴重資料保存書庫の設置	53
3.3.4	新展示室の設置	54
3.3.5	新聞マイクロフィルムのPET化・デジタル化によるバックアップ作成	54
3.3.6	購入資料および資料の再配置	54
3.3.7	「情報学環アーカイブズ」構築に向けての試み	55
4	社会との交流	56
4.1	国際的委員会	56
4.2	政府・自治体委員会	57
4.3	学協会活動	59
4.4	セミナー・研究会・公開講座	59
4.5	出版活動	66
	東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究	66
4.5.1	『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』	66
4.5.2	『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究・調査実研究編』	67
4.5.3	『英文紀要』	67
4.6	定期刊行物・ホームページ	68
4.6.1	定期刊行物	68
4.6.2	ホームページ	68
4.7	国際交流	69
II.	資料	71
1	沿革	71
2	学環の教員（定員）	72
3	学府の学生数	74
4	教育部	75
5	コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム	76
6	予算	83
7	土地・建物面積	85
8	入試定数と受入数	85
9	年度別入試データ詳細	86
10	修了者数の推移	92
11	学生支援機構（旧育英会）奨学生数	94
12	日本学術振興会特別研究員数	94
13	リサーチアシスタント数	95
14	就職状況	96
15	ベネッセ先端教育技術学講座	99
16	電通コミュニケーションダイナミクス寄付講座	99

17	客員講座等	104
18	研究員（客員）等	105
19	学会賞など受賞者リスト	106
20	論文数	107
21	特許出願・公開数	108
22	東京大学21世紀COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」平成19年度の活動	109
23	国際団体役員・委員数	111
24	政府関係委員会委員数	112
25	地方公共団体関係委員会委員数	112
26	ジャーナル編集・会議運営	112
27	定期刊行物一覧	113
28	留学生数の推移	114
29	留学生国籍別一覧	116
Ⅲ.	個人業績編	119
Ⅳ.	外部資金獲得状況	227

I. 現状と課題

1 組織説明

1.1 概要

1.1.1 情報学環組織と学際情報学府組織

東京大学大学院情報学環・学際情報学府は、従来の研究科とは異なる形態の大学院組織として、2000年4月に設置された。この大学院組織は、研究組織（教員が所属）である情報学環と教育組織（学生が所属）である学際情報学府という2つの対をなす機構によって構成されている。大学院の組織モデルとして、研究科が研究と教育の統合モデルであるのに対して、学環・学府は分離モデルだといえる。従来の研究科が専門深化と恒常性を基本的な特質とするのに対して、この大学院組織は、全学にわたる情報関連の諸領域をネットワーク的に連携させる横型の組織として設置され、情報学分野の総合的な教育研究を先端的かつダイナミックに推進するのに適した形態として考え出された。

その基本的特徴は、組織構成員の流動性と全学的連携、及び研究組織である情報学環と教育組織である学際情報学府の両立という点にある。すなわち、研究組織である「情報学環」は、固有の基幹教員と、学内既存の研究科・研究所等から3年ないし7年の期間をもって情報学環に教員枠及び身分を異動する多数の流動教員によって構成されている。ここでは、多数の分野横断的なプロジェクト研究を柱に据え、文系理系の区別を越えた情報分野の学融合を目指している。教育組織である「学際情報学府」における大学院学生に対する研究指導は、情報学環の基幹教員と流動教員が行うが、授業科目の担当は、これらの教員以外に他研究科・研究所等に所属する教員にも委嘱する。また、副指導教員制や副専攻制度の積極的な運用を図ることによって、情報関連の広範な学問分野を覆う幅広い学際的教育を目指している。

研究組織である大学院情報学環は、学際情報学圏と社会情報学圏という2つの学圏から構成されている。それぞれの学圏は、次のようにいずれも5つの学域からなっている。

大学院 情報学環

■学際情報学圏

情報生命・思想学域

情報システム・言語学域

情報表現・造形学域

情報環境・認知学域

情報社会・制度学域

■社会情報学圏

ジャーナリズム・メディア学域

情報行動・機能学域

情報法・政策学域

情報経済・産業学域

情報文化・歴史学域

めるとともに、あわせて他分野と協調して学際的に情報学のフロンティアを切り拓いていくための幅広い学識を身につけた研究者及び表現者を養成している。

分析情報学コース

本コースは、平成 18 年 4 月に設立された。センサーから大量のデジタル情報を取得し、それを必要な場所や機器へ通信し、保存・解析したうえで、有効に活用する分析情報学の学際的な専門教育を実施している

これらの 4 つのコースそれぞれで、一般の入試と並び、実践的な経験や目的を重視し、社会人を主要な対象とした特別選抜を実施している。

情報学環教育部

また、学部生を対象とした教育カリキュラムとして、情報学環教育部がある。教育部では、大学 2 年次以上の在学者及び大学卒業生の中から、将来、新聞、放送、出版などジャーナリズムの諸分野で活動することを志す者、あるいはマス・メディア、コミュニケーション及び社会情報現象、さらには学際的な情報学の学問的研究に関心を持っている者を毎年 50 名程度研究生として受け入れ、一定のカリキュラムのもとに、修業年限 2 年で基礎的な専門教育を実施し、修了に必要な単位を修得した者には修了証書を授与している。

1.1.2 政府予算に基づく大型研究・教育プロジェクト

情報学環の中には多様な研究・教育プロジェクトが展開されているが、競争的政府予算に基づく大型の研究プロジェクトとして、①文部科学省 21 世紀 COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」、②コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム、③文部科学省特別教育研究経費（教育改革）「コンテンツ創造教育研究コア」、④文部科学省「セキュアユビキタスコンピューティングプラットフォーム」、⑤NEDO「情報家電用マルチメディアセキュアチップ TRON-SMP の研究開発」の 5 つがあげられる。

1.1.2.1 文部科学省 21 世紀 COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」

東京大学大学院情報学環を核とした、文部科学省 21 世紀 COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」（平成 16 年度～20 年度）が採択された。本プログラムは、あらゆる分野や場面において、デジタル情報、特に状況認識技術によって得られたコンテキスト情報を活用した、効率的で効果的な情報サービスが実現される、ユビキタス情報社会基盤の確立と課題の解決に向け、情報学を核とした理論基盤研究や技術基盤研究、社会基盤研究にわたる幅広い新たな学際的な学問基盤を確立することを目的としている。

現在、本研究拠点は、東京大学大学院情報学環の教員を中心として、計算機科学から社会科学、人文科学の分野の研究者 19 人を中心として発足し、更に活発に研究を推進するために、更に特任教員や非常勤研究員、RA などの採用を続けている。また、ユビキタスコンピューティングの多様な基盤

技術や応用技術をカバーするために、産官より本分野のオーソリティーの4名に非常勤の特任教授に就任いただいている。本拠点は、拠点リーダーのリーダーシップの基、主に3つの領域を統括しており、それらは、ユビキタス情報技術研究プロジェクト、ユビキタス情報社会国際研究プロジェクト、ユビキタス情報コンテンツ形成プロジェクトである。

ユビキタスコンピューティングの基盤技術として、組み込みシステム開発プラットフォームの研究やコンテキストウェアコンピューティングの基盤方式の研究を行っている。また、それら基盤技術を用いてユビキタス情報ベースの研究を行っている。美術作品のユビキタス情報ベース、モノと情報、場所と情報の連携を実現した東京大学キャンパス GIS コンテンツなどが実現されている。さらに、ユビキタス情報社会の国際的基盤の確立にむけての、社会的問題に関する研究として、情報社会学的分析、法学的観点や経済学的観点からの社会制度改革や政策提言などを行っている。

1.1.2.2 コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム

コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム（以下、コンテンツ創造科学と記す）は平成16年度文部科学省科学技術振興調整費（以下、振興調整費と記す）における新興分野人材養成プログラムで採択されたものであり、平成16年度から5年間の計画として実施されている。なお、平成16年度の振興調整費においては、548件の申請のなかから、137件がヒアリングを受け、最終的に60件が採択されており、採択率は約11%である。特に、当該課題が採択されたプログラム（新興分野人材養成）においては、76件の申請のなかから、34件がヒアリングを受け、最終的に18件が採択されており、採択率は約24%となっている。

コンテンツ創造科学が主眼とするのは、わが国におけるデジタルコンテンツ分野を率いる人材の養成であり、特に①プロデューサー、②技術開発者、③指導的教育者という3種の人材の養成を目標としている。

これらの人材を養成するために、本学において以前からデジタルコンテンツ分野の研究を推進していた研究者が大学院情報学環を中心として集結し、さらに産業界からコンテンツ産業の第一線で活躍する実務者を指導者として招聘することで人材養成を進めている。

このプログラムにおける被養成者は主として東京大学に所属する修士課程の学生を中心として選抜しているが、学部学生・博士課程学生・社会人であっても履修に十分な学力を有する場合には、選考の対象としている。また、修了年限は2年間であり、副教育プログラムという全学的な位置づけとなっている。

1.1.2.3 コンテンツ創造教育研究コア

コンテンツ創造教育研究コアは、文部科学省特別教育研究経費（教育改革）のもとで平成17年度から5年間の計画として実施されているものであって、東京大学としてのコンテンツ創造に関する教育モデルを構築し、横断型連携をおこなう教育研究体制を整備することを目的としている。

具体的には、上記の「コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム」における教育実践、ならびに学内外のコンテンツ関係者とも連携して、①コンテンツ創造へ向けた学部教育のありかた、②コンテ

ンツ創造へ向けた大学院教育のありかた、③コンテンツ創造教育研究拠点の整備、の3項目について検討を進めている。

①の学部レベルのコンテンツ創造教育に関しては、新学科設立を含むさまざまな可能性について検討した結果、本学としては、従来の教育の枠組みに拘ることなく総合大学としての特色を生かした全学レベルでの横断型、開放型教育を目指すことが適当であるとの結論が得られた。この立場から、平成18年度より「コンテンツ創造学部横断型教育プログラム」の試行を開始し、これは、東京大学における全学の授業カタログ（10学部後期課程授業総覧）において学部横断型教育プログラムとして初めて紹介されるなど、学内的にも注目される試みとなった。また部局を横断した学内教員の連携による横断型教育プログラムの先行的試行は他の分野にも影響を与え、現在、コンテンツ創造分野に限らず、学部後期課程における横断型教育プログラムを東京大学の恒常的な制度として整備すべく、全学的な検討が進められている。

②の大学院教育についても、コンテンツ創造分野の特質を活かした学際的な教育体制の整備を目指して、コンテンツ創造情報学教育へ向けたカリキュラムの詳細な設計が進められた。すなわち、わが国のコンテンツ産業界が必要とする人材は、知識・技能だけでなく、みずからコンテンツ産業界を先導し、コンテンツイノベーションを実現する人材、創造力に富んだコンテンツをプロデュースし世界的に活躍する人材、独創的なデジタル先端技術を開発する人材であるとする立場から、その教育カリキュラムの設計をおこない、現在これを学際情報学府における恒常的な教育カリキュラムとして実現すべく、既存教育コースの再編や外部資金の導入も視野にいたした検討を進めている。

③の教育研究環境の整備は、産学・地域・大学間連携、および学内連携によって教育研究を戦略的に行うための物理的な建物拠点の整備を目指すものであり、拠点となる建物建設へ向けて民間の篤志家の全面的な協力の見通しが得られるなど、当初の計画以上の成果が得られている。現在、学内の関連部局と連携した推進体制も整いつつあり、その早期の実現を目指した検討が進められている。また本事業では、関連して「文の京・大いなる学びシリーズ」を発足させるなど、文京区を中心とする地域連携の新たなモデルの構築もおこなっている。

1.1.2.4 文部科学省「セキュアユビキタスコンピューティングプラットフォーム」

ユビキタスコンピューティング環境をセキュアにする基盤技術として、高性能かつ容量の大きい耐タンパ実装されたセキュアチップ（eTRON/NG：Next Generation）と、それを利用することでソフトウェアやコンテンツをセキュアに扱うセキュア組込み OS（SE-T-Kernel: Security Enhanced T-Kernel）を研究する。更に本技術を、医療や食品などの情報セキュリティが求められるユビキタス応用に適用し、有効性を検証する。この研究を3つのサブテーマに分けて実施した。ひとつが、高性能セキュアチップに関する研究であり、静止画、音声、電子カルテ等、多くのユビキタス応用で必要とされるより大きなデータの処理を安全に実行するために、十分な計算能力や記憶容量、I/O性能、暗号計算モジュールをもち、耐タンパ実装されたハードウェア LSI を構築する。開発したハードウェアは、耐タンパ実装の IC チップとしては、この時点では世界最大のメモリ容量である 64MB のフラッシュメモリを搭載し、従来のセキュリティチップである eTRON に加えて、アクセス権の強化など

の新機能を実装した。そして、セキュア組込み OS に関する研究では、セキュアチップと連動したセキュアファイルシステムをはじめ、セキュアチップの機能を OS に組込むことでセキュア OS の構築を実現した。さらに、セキュアなユビキタス応用の研究では、従来ではなかった新たな応用を開拓すべく、電子お薬手帳、ならびに ucodeQR などの新規アプリケーション、新規技術の開発を行った。

1.2 理念と沿革

* 情報学環・学際情報学府設立の経緯

情報学環・学際情報学府設立の背景には、次のような認識があった。近年にみられる情報技術の急速な発展と利用の拡大によって、「情報」が現代社会において果たす意味は、決定的に重要なものとなってきた。技術的体系だけでなく、人間の行動や意識、社会のさまざまなシステム、文化や芸術、産業や政治・国際関係など、人間社会のあらゆる側面が、「情報」の様式変化のインパクトによって、根本的な変革を促されつつある。21 世紀には、この情報様式のあり方が、地球上の生命や人間、社会の動向を大きく規定する基盤となることは確実だ。こうした状況を背景に、「情報」に関する、より総合的でより高度な教育研究の社会的意義が高まり、それに応えうるような教育研究体制の整備が、喫緊に求められていた。

情報にかかわる教育研究は、今日、きわめて多様な学問領域で行われており、しかも、各個別領域に固有な対象や方法とも深く結びつきながら発展してきている。こうした実態を有効に生かしながら、相互間の有機的連携を促し、学際的な教育研究をすすめることが、情報学の総合的な発展のためには不可欠だと考えられた。また、情報学は、急速な発展途上にある学問分野であることから、一方では研究面で、先端的な学融合に就中に取り組みうる緊密な共同体制を設ける必要があると同時に、他方では教育面で、カリキュラム編成や研究指導体制の幅広さと研究内容の進展や時代の要請の変化に即応できる組織的柔軟性を確保する必要があった。こうした特性をもっている情報学の教育研究上の目的を効率的かつ実効的に達成するために、平成 12 年 4 月から、学校教育法第 66 条に定める「研究科以外の教育研究上の基本となる組織」として、東京大学大学院に、「情報学環」及び「学際情報学府」が設置されたのである。

「情報学環」と「学際情報学府」が両者一体となって構成されるこの大学院組織は、専門深化と恒常性を基本的な特質とする従来の研究科とは違って、全学にわたる情報関連の諸領域をネットワーク的に連携させる横型の組織として設置され、情報学分野の総合的な教育研究を先端的かつダイナミックに推進するにふさわしい形態をとった。

前述の通り、その基本的特徴は、組織構成員の流動性と全学的連携、及び研究組織である情報学環と教育組織である学際情報学府の両立という点にあり、その組織構造は次のように作られた。研究組織である「情報学環」は、基幹教員と流動教員によって構成された。基幹教員とは情報学環が固有のもつ教育枠で採用される教員であり、流動教員とは既存の研究科・研究所等から 3 年ないし 7 年の期間をもって情報学環に定員及び人が移され、それによって情報学環教員となる教員のことである。ここでは、多数の分野横断的なプロジェクト研究を柱に据え、文系理系の区別を越えた情報分野の学融合が目指された。

教育組織である「学際情報学府」における大学院学生に対する研究指導は、情報学環の基幹教員及び教育にも従事する流動教員が行なう。学際情報学府における授業科目の担当は、これらの教員が行うほか、他研究科・研究所等に所属する教員にも兼担当教員として委嘱する。

*** 社会情報研究所の合流、新組織設立に至る経緯**

このようにして設立された情報学環・学際情報学府は、2004年4月1日、東京大学社会情報研究所と組織統合し、新たな一步を踏み出した。社会情報研究所は国立大学附置研究所であり、その歴史をたどれば約75年間にわたる伝統をもつ研究機関であった。

1929年10月1日、東京帝国大学文学部に新聞に関する学術研究施設として新聞研究室が設置された。新聞研究室は、帝国大学の法学部、文学部、経済学部からそれぞれ1名の指導教授が横断的に参加し、1名の指導補助、および3名の研究員が置かれるという、規模は小さいが、今日の情報学環のさきがけをなすような仕方では東京帝国大学を横断的につなぐ学際的な研究組織であった。またその運営は、渋沢栄一や阪谷芳郎、本山彦一、徳富蘇峰、杉村廣太郎といった、当時の財界、新聞界の名士たちが協力して募られた寄附金によってまかなわれ、今日の産学連携のさきがけをなす形態をとっていた。設立時の新聞研究室の指導教授としては、法学部から南原繁教授が、文学部から戸田貞三教授が、経済学部から河合栄治郎教授がというように、戦前期日本の法学、社会学、経済学をまさしく代表する教授3名が参画し、指導補助として実質的な研究組織の中核を担った小野秀雄（初代新聞研究所長）を支えていた。

このような前史を経て、戦後の1949年に新聞研究所が正式に東京大学附置研究所として発足した。その根拠をなす国立学校設置法（49年5月31日公布）には、「新聞及び時事についての出版、放送又は映画に関する研究、並びにこれらの事業に従事し、又は従事しようとする者の指導及び養成」と規定されていた。すなわち、新聞研究所は設立の当初から、狭義の新聞に限らず、雑誌、放送、映画などを含むマス・メディア全般を研究対象とする学際的な研究組織として出発していたわけである。また、「新聞」という言葉そのものも、今日のように狭義の新聞紙だけを指していたわけではなく、ニュースや報道媒体全般をも含みこんだ概念であるという理解がその当時にはあった。

やがて、新聞研究所は20世紀後半の放送をはじめとするマス・コミュニケーションの発展を受けて組織の拡充と研究部門の再編を重ねていった。1957年度からは、基礎部門：マス・コミュニケーション理論、歴史部門：マス・コミュニケーション史、特殊部門1：コミュニケーション過程、特殊部門2：マス・コミュニケーション・メディア、特殊部門3：世論及び宣伝という5研究部門の構成となり、63年度からはこれに放送部門が、さらに74年度からは情報社会部門が、80年度からは社会情報システム部門が加わった。このような部門構成から明らかなように、東京大学新聞研究所は、マス・コミュニケーション研究を基本に据えながら、トータルな社会的コミュニケーション研究をも視野に収めつつ、日本の国立大学では唯一の現代社会の最も中枢的な研究課題たる情報の社会的側面に関する学際的、総合的な研究として発展し、高い評価を得た。

そして、このような実績を基盤にして、1992年4月1日、「社会情報の総合的研究」を目指して新聞研究所から社会情報研究所への改組が行われた。改組後の社会情報研究所は、情報メディア、情報

行動、情報・社会という3大部門を置き、旧新聞資料センターを改称した情報メディア研究資料センターを附置するという体制をとって、1992年から95年まで続いた文部省科学研究費重点領域研究「情報化社会と人間」をはじめ、情報化社会に対する学際的な取り組みを本格的かつ先端的に進めた。1996年には外部評価を実施し、高い評価を得た。そのときの産業界パネルの委員は小池唯夫（毎日新聞社長）、川口幹夫（NHK 会長）、関本忠夫（日本電気会長）、大塚信一（岩波書店社長）、福川伸次（電通総研所長）の方々であった。

高度情報社会の深まりのなかで、東京大学における情報をめぐる教育研究体制の再編が議論になるたびに社会情報研究所は、文系の研究所として、その流れに身を置いてきた。そして、情報学環・学際情報学府の設立構想の際には積極的にに関わり、人的リソースの提供において文系部局としては最大の貢献を果たした。社会情報研究所は情報学環・学際情報学府の設立後も密接な関係をもち、学環・学府を支援してきた。そして、国立大学法人化を前にした、国立大学附置研究所の見直し方針のなかで、社会情報研究所は情報学環・学際情報学府との合併を選択し、大学附置研究所から大学院組織へと全面的に移行したのである。それは、文系のなかでの学際的研究から、文理相互浸透のなかでの学際的教育研究へのシフトであり、情報現象を研究対象として組織としてはある意味で必然的な流れであり、新たなスプリングボードであったといえよう。

1.3 教職員数

給与の財源が運営費交付金となっている教職員（常勤教職員）の採用枠は71人及び特別教育研究経費による教員は1名、計72人となっている。内訳は図1-3-1のとおり、教授等の常勤教員58人、常勤職員14人となっている。このほか、大学院情報学環は、外部資金に基づく特任教員や研究補助等の非常勤職員から構成される。

また、大学院情報学環の組織の一つとなっている基幹教員と流動教員の内訳について見ると、図1-3-2のとおりとなっている。基幹教員の定員数は37名、流動教員の定員数は19名とほぼ同数であり、両方の教員で情報学環の研究教育組織が等しく支えられていることがわかる。

図 1-3-1 教職員採用枠（全 72 人）の内訳
（平成 19 年 4 月 1 日現在）

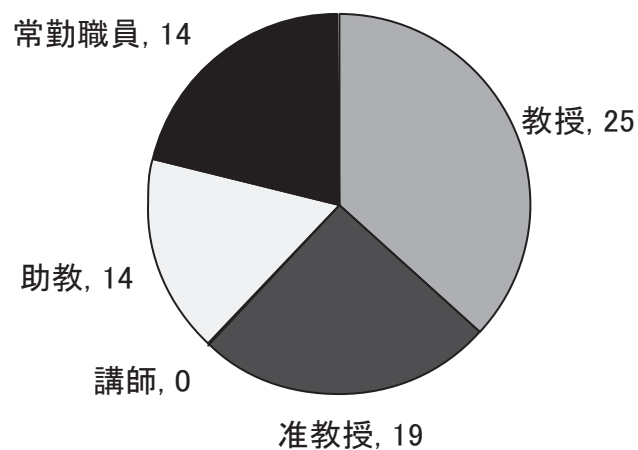
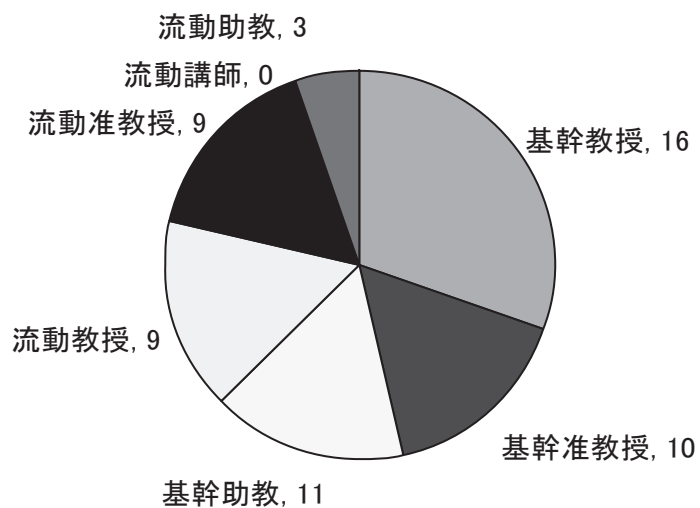


図 1-3-2 常勤教員採用枠（58 人）の内訳



1.4 財務

平成 19 年度予算に基づき、大学院情報学環の財務構造を説明する。なお、対象は、部局の研究教育に直接関係する運営費交付金と外部資金（科学研究費補助金等）とし、常勤教職員の人件費及び部局の管理が直接に及ばない授業料及び入学検定料については特に言及しない。

さて、具体的な数字を見る前に、学環財務の特徴である流動教員に関する資金の取り扱いについて説明する。資金計上の段階では、流動教員に係る資金及び基幹教員に係る資金のいずれの取り扱いに差がない。すなわち、運営費交付金及び外部資金のいずれも、一旦、大学院情報学環の予算として計上される。しかしながら、執行の段階に入ると、流動教員に係る資金は流動元部局に移る。そして、大学院情報学環に残るのは基幹教員に係る資金と社会情報資料センターなどの大学院情報学環固有の事務に関するものだけとなる。このため、教員の研究教育資金に付随する間接経費については、流動教員分は流動元で執行され、大学院情報学環に残り執行されるのは基幹教員分だけとなる。

それでは、数字に基づき、大学院情報学環の財務構造を概観する。平成 19 年度の収入総額は 1,074 百万円で、比率としては、運営費交付金¹が 2 割弱に対して外部資金が 8 割以上を占めている。

次に、運営費交付金の使途内訳を見ると²、表 1.4.1 のとおりとなる。他部局にない特徴としてあげられるのが、流動元部局に移される資金（約 55 百万円）が全体の約 3 割を占めることである。したがって、運営費交付金のうち、大学院情報学環の裁量が及ぶのは、残り約 7 割の約 1 億 5 千万円となる。そして、約 1 億 5 千万円のうち約 4 割（全体の約 30%）が、消耗品等一般経費や非常勤職員人件費という事務管理の経費となる。残りの 6 割（全体の約 40%、約 8 千 5 百万円）が、直接の研究教育活動に充てられることになる。このうち、約 1 千 2 百万円の社会情報資料センター経費と約 1 千 2 百万円の図書費は、同センター及び図書室を維持するために必要な資料等の購入に充てられ、固定的経費の性格を帯びている。

¹ 本項では、運営費交付金のうちコンテンツコア分(58,218 千円)及び新規教育研究事業（社会情報研究センター高度アーカイブ化：36,450 千円）については外数として扱っており、収入総額等には含まない。

² 本段落では、部局長裁量経費（約 15 百万円）については、外数として扱い、割合の算出の際には分母及び分子のいずれにも含まれない。

経費区分	執行額(単位：千円)	備 考
光熱水料	0	*間接経費より支出 (9,912千円)
通信運搬費	1,994	
建物保守料/業務委託料	6,341	
非常勤職員人件費（事務）	5,243	
非常勤職員人件費（教育教育）	26,212	
旅費交通費	1,062	
事務/教育研究一般用経費	23,482	
教員研究費	19,664	
各種委員会等経費	64,529	*委員会内訳
施設整備委員会		5,000
情報ネットワーク委員会		1,950
業績評価委員会		2,015
企画広報委員会		4,720
図書・出版委員会		12,328
社会情報研究資料センター運 営委員会		11,550
国際活動委員会		1,160
教務委員会		379
学生留学生委員会		480
入試実施委員会		2,942
教育部教務委員会		413
福武ホール経費		21,592
小計	148,527	
流動教員分	55,448	
総計	203,975	
部局長裁量経費	15,267	

表 1.4.1 平成19年度実績（運営費交付金）

外部資金の収入内訳は、表 1.4.2 のとおりである。ここに計上しているのは、外部資金関係間接経費（学環分）を除いては、直接、研究教育に充当される資金の金額となっている。外部資金のうち、大学本部及び流動元部局の間接経費となる金額については計上していない。なお、外部資金についても、流動教員の外部資金に係る間接経費は流動元の部局に移され、大学院情報学環では計上されない点は同じである。

区分	総額	うち流動元執行分	学環収入分
寄附講座	129,000	0	129,000
寄附金	51,906	26,080	25,826
科学研究費補助金	119,310	48,600	70,710
受託研究費	394,515	94,910	299,605
共同研究費*	24,326	17,620	6,706
科学振興調整費*	97,999	0	97,999
COE 拠点形成	186,000	0	186,000
間接経費（部局分）	67,849	13,884	53,965
外部資金合計	1,070,905	201,094	869,811
*:一部に間接経費および実質的な間接経費を含む		(単位：千円)	

表 1.4.2 外部資金の収入内訳

大学運営費交付金が毎年度削減される一方で、学際的な情報学に対する研究及び教育ニーズが引き続き高いことを踏まえると、外部資金の積極的な獲得は極めて重要である。定常的な研究・教育のための資金であっても例外とは言えず、特に新たな資金を必要とする場合には外部資金の確保は不可欠となっている。また、外部資金は基本的に時限的という性格を有していることを踏まえると、現在進行中の研究等のプロジェクトで確実に成果をあげるにとどまらず、時代を先取りした研究及び教育テーマを設定していけるように、資金的なリソース配分についても常に見直しを行い、フィードフォワード的な対応を取っていくことが課題となる。

1.5 運営

1.5.1 情報学環教授会

大学院情報学環教授会が研究組織としての情報学環の意思決定機関である。教員が所属するのは情報学環であり、情報学環教授会は基幹教員と流動教員によって構成され、両者の間に権利と義務において相違はない。教授会は月に1度開催され、重要事項を審議し決定する。人事に関しては人事教授会が開催される。

部局長たる情報学環長は教授会における選挙によって選任され、総長によって任命される。被選挙

権は教授にあり、選挙権は講師以上にあるが、基幹教員と流動教員は同等の権利を持つ。学環長の任期は旧情報学環と旧社会情報研究所の統合後の最初の学環長は2年、その後の、つまり2006年4月からの学環長は3年となっている。再任はない。

学環長が副学環長2名を指名する。学環長が主宰する総務委員会が、教授会と教授会の間で諸案件や方針について協議し、教授会にかけるとの準備をする。また、総務委員会が決定し、教授会に報告すると定められた事項もある。総務委員会は学環長、副学環長、両学圏長、重要委員会の委員長、3コース長、学環長補佐などによって構成され、ほぼ週に1度開催される。これが実質的な執行部である。

1.5.2 学府委員会

教育組織としての大学院学際情報学府の決定機関は、学府委員会である。そこで教務関係、入試関係、学生の身分の異動などの重要事項が審議され決定される。学府委員会の構成メンバーは学府の教育に関わる教員であり、情報学環の教員のほか兼任教員がこれに加わる。学府のもとに学際情報学専攻の専攻長が置かれており、学環長が指名する。専攻長は教務委員会と入試実施委員会を組織する。

学府は社会情報学コース、文化・人間情報学コース、学際理数情報学コース、分析情報学コースに分かれて入試を行い、合格した学生はそれぞれのコースの所属となるが、それぞれのコースの運営に責任を持つ、コース会議および運営委員会が置かれている。各コース長が責任者を務め、適宜開催される。

1.5.2.1 社会情報学コース

社会情報学コース運営委員会の主な業務は、他のコース運営委員会と協力しつつ、入試実施委員会の指示下で修士課程入学試験および博士課程入学試験を実施することである。その際、修士課程入試問題のスケジュール作成、問題作成者の決定も大きな任務の一つである。また、入学試験同様、他のコース運営委員会と協力しながら、教務委員会の指示下で、修士課程学生の「修士論文中間報告会」、博士課程学生の「博士課程コロキウム」の実施に携わっている。

2007年度において社会情報学コースでは、修士課程、博士課程ともに、ほぼ前年の選考方式を引き継ぐ形で実施した

今後の課題として、(1)とくに修士課程入学試験において、他コースとの共通性を高めつつ、より適切な人材を選抜する入試方法のあり方を検討すること、(2)修士課程在学生在が効率的に社会情報学を学習し、質の高い修士論文を執筆できるよう、コースワーク・カリキュラムおよび論文指導を充実させること、(3)博士課程在学生在が在学期間内に博士論文を執筆できるよう論文執筆指導に関わる授業・演習を充実させ、段階的に無理なく論文提出できる教務スケジュールを構築すること、等が考えられる。

1.5.2.2 文化・人間情報学コース

文化・人間情報学コースは、社会科学系の社会情報学コースと自然科学系の学際理数情報学コースをつなぐ中間の位置にあり、文理の融合を進めながら、新しい学際的な情報学の創造に正面から取り組んでいる。このコースを担当している教員には、基礎情報学、進化学、生態心理学、科学技術コミ

コミュニケーション、知覚情報論、記号学、映像学、カルチュラル・スタディーズ、歴史情報学、アーカイブ論、メディア・リテラシー、メディア表現、教授・学習設計、計量社会分析、統計学、身体運動論などの諸領域の専門家が揃い、新しい融合的な知の地平を拓きながら授業や学生の指導、いくつかの教育上のプロジェクトの実施に当たっている。このコースの教育は、基本的に、①生命・身体・環境、②文化・表象・映像、③メディア表現・学習・リテラシー、④アーカイブ・歴史情報という、より理論的なものから実践的なものまでの4つの大きな柱を軸にしている。文化・人間情報学コースは、これらの4本の太い幹の周囲に多様で野心的な枝葉を伸ばしながら、情報学という新しい学問の森で、文化・人間科学の諸領野を体系的に再編し、それこそ生命現象や進化、身体知覚から現代文化、メディア、映像、テキスト、アーカイブ、リテラシー、学習環境までの幅広い21世紀的諸課題に理論的かつ実践的に取り組もうとしているものである。そして、そのための深い学識と精緻な方法的能力を備えた研究者や実践者を養成し、未来の世界に送り出そうとしている。そのために、とりわけこのコースの選択必修科目である文化・人間情報学基礎(4単位)と文化人間情報学研究法(2単位)では、上記の4つの柱に応じた基礎力増強のトレーニングとフィールドワーク型のグループ実習などが実施されている。

1.5.2.3 学際理数情報学コース

学際理数情報学コースには、教員24名(学環基幹2名、流動6名、兼任・課程担当14名、兼任・授業担当2名)が所属しており、毎年修士(定員20名)と博士(定員9名)の学生を受け入れて教育している。

コースは、学際理数情報学コース運営委員会(コース会議)のもとに、コース長、副コース長、教務担当、入試担当がおかれ、他のコースと協力しながら運営されている。

このコースの特徴は、学環の基幹教員のみならず、関連部局(情報理工学系研究科、工学系研究科、総合文化研究科、生産技術研究所、情報基盤センターなど)からの多くの流動教員、兼任教員、さらには授業担当・併任・客員教員の協力によって運営されていることである。これによって、多様な背景と目的を持つ学生の教育が可能になっているが、一方で関係教員の負担が課題となっている。

今後の課題としては、(1)多様な背景を持つ学生を、「学際的に協調できる理数系情報学の専門家」として育成するための、入学試験選抜方法の検討、教育カリキュラムの検討、(2)幅広い部局からの教員の協力により成り立っているコース運営方法の改善、などが挙げられよう。

1.5.2.4 総合分析情報学コース

総合分析情報学コースは、平成17年度に概算要求を行った結果、平成18年4月に設立された最も新しいコースである。本コースでは、主にコンピュータサイエンスやコンピュータネットワークの基礎知識を基に、センサーや観測衛星から大量のデジタル情報を取得し、それを必要な場所や機器へ通信し、それを保存・解析したうえで、更に実社会において有効に活用する分析情報学の学際的な専門教育を実施している。分析情報学が有効に適用できる分野は多岐にわたり、農学や水産学、環境学、資源学、社会学、考古学といった学問分野をはじめ、災害支援や遭難救助、社会安全保障、国土や社

会基盤の管理保全といった国レベルの施策、更には情報セキュリティーポリシーの策定やインターネット等のサイバー空間の管理といった分野へも及ぶ。こうした現実社会に深く関わる技術課題とともにそれを支える社会制度までも興味を持ち、膨大な情報を活用して確固たる決断を下すことが可能な人材並びに、分析情報学及び計算機科学の研究者を育成することを目標としている。

1.5.3 教務委員会

教務委員会は、大学院学際情報学府の教育運営の中核をなしている。大学院学際情報学府では、情報学環に属している基幹・流動の教員に加え、学内兼任教員、授業担当教員、客員及び非常勤講師などから成る教員スタッフが学生指導に当たっている。その数は、平成19年度現在で、基幹教員21（教授10、准教授11）、流動教員18（教授8、准教授10）、兼任・課程担当教員26（教授16、准教授10）、兼任・授業担当教員9（教授7、准教授2）、客員教員4（准教授4）、非常勤講師9、総計87名となっており、修士課程1学年約90名、博士課程1学年約40名、学府全体で約300人の大学院生を教育するにも十分な教師陣を備えている。教務委員会では、これらの多数の教員に協力をしていただきながら、カリキュラムの運営と改善、授業時間割の編成と講師の手配などの基本的な業務の他に、後述するような大学院生たちの教育研究促進のための諸々のプログラムを実施している。

1.5.4 財務法務委員会

情報学環の予算案の検討、予算の適切な執行等を行うほか、他の委員会の所掌に属さない一般的な事項に関する規程案の検討などを行い、総務委員会等における情報学環の管理運営を補佐している。（学環の財務状況については、1.4を参照）

1.5.5 将来計画委員会

将来計画委員会は、2004年度に、大学院情報学環の長期的な戦略を検討する委員会として設置された。2007年度は、中長期的な学環・学府の運営についての検討をおこなった。とくに、組織拡大に伴って組織内のコミュニケーションや理念共有が困難になってきたという側面もあり、対応策を協議した。また、外部資金の増加によって急増した特任スタッフの組織内での位置づけについても、検討課題として認識された。

1.5.6 ハラスメント相談員

ハラスメント相談員は、アカデミック・ハラスメントあるいはセクシャル・ハラスメントなどの問題に対応するために新しく設置された。現在のところは、ハラスメントに関する相談はうけていないが、今後は男女共同参画室やハラスメント相談所と連携を取り合いながら、具体的な相談を受けた場合に対応できるように体制を整えていきたい。

1.5.7 施設整備委員会

施設整備委員会の最大のミッションは現在の情報学環がおかれている最低必要面積も確保されてい

ないという認識のもと、なんとか教育研究に必要な施設を確保することにある。昨年度（平成 18 年度）は総合分析情報学コースの新設による学生・教員の定員も増加したためさらに必要面積が増えその確保に努力した。また、護国寺にある東大病院分院跡地に学環プロジェクト共同ルームの利用している。21 世紀 COE 用の教育研究プロジェクトスペースとして、第二本部棟の 3 階のフロアの約半分の確保しその利用を開始している。更に、平成 20 年 3 月には、以前より建設を進めていた福武ホールが竣工した。平成 20 年度からは、この建物を有効に使う研究教育が実施できるようになる。しかしながらこれでもまだ、情報学環所属教員と学際情報学府の所属院生に十分な基準面積を準備できておらず、今後も必要最小限の面積を確保できるように、引き続き努力するつもりである。

1.5.8 情報セキュリティ委員会

2006 年 3 月に東京大学情報セキュリティ委員会が、東京大学保有情報資産のセキュリティを確保することを目的として「東京大学情報セキュリティ・ポリシーの基本方針」とともに定めた「東京大学情報セキュリティ・ポリシーの対策基準」は、部局情報セキュリティ責任者（部局長もしくは部局長を補佐する役職に相当する職務の者）を委員長とする部局情報セキュリティ委員会の設置を求めている。これらの全学方針に基づいて 2006 年 9 月に各部局に依頼のあった情報セキュリティ調査への対応を機に、吉見学環長を部局情報セキュリティ責任者・委員長として情報学環情報セキュリティ委員会が組織され、10 月から事実上活動を開始して部局調査のとりまとめを行うとともに、11 月の教授会で承認され正式に発足した。

2007 年度の主な活動としては、2007 年 12 月 20 日の「情報セキュリティ・ポリシー実施手順に関する部局説明会」（吉見委員長に代わり原田（至）委員が出席）において、前記基本方針・対策基準に対応する実施手順を本部提案雛形の要求水準を下回らぬよう各部局で制定すべきことについて説明を受け、過度の厳格さや形式主義を避け実効性のある実施手順を制定すべきことを骨子とする部局意見を取りまとめ、総務委員会、教授会の承認を経て、2008 年 1 月 18 日に情報化推進グループ情報企画チームに提出した。

2008 年度には前記実施手順に関する取り組みが想定されている。

1.5.9 情報ネットワーク委員会

2000 年の情報学環発足以来、所属教職員ならびに学際情報学府学生に対して、部局内 LAN、学内 LAN である UTnet、さらにはインターネットへの接続環境を提供し、また部局としての電子メール・サーバ、WWW サーバ等を運営することなどを中心とする、情報ネットワークに関わるサービス提供と管理が要請されてきた。しかし、これを専門に担当する委員会は当初は存在せず、部局ウェブページのコンテンツ管理等も含め、「HP・ネットワーク担当」の数名の助教授および助手が任に当たっていた。2002 年 6 月になって、情報学環の広報及び情報システム等に関する事項の審議のため、「広報・情報委員会」が設置された。さらに、2004 年 4 月の社会情報研究所との組織合併に際して機能分化が図られ、部局ウェブページのコンテンツ管理に当たる「企画広報委員会ホームページ担当」とともに本委員会が設置された。本委員会は、2002 年 11 月に設置された情報倫理審査会が行う調査・審査

等や、学生・留学生委員会その他が管理する個別端末、さらに 2006 年に設置された情報セキュリティ委員会の担当範囲等をも除き、インフラ等、部局の情報ネットワークに関して残る部分を、関係委員会等と協力しつつ、全般的に担当している。

2005 年 4 月に定めた本委員会の課題と目標は以下のとおりである。情報学環・学際情報学府の情報ネットワーク全般に関する情報を集約し、提供するとともに、関係各所との責任分担を明確にし、直轄部分については適切な対処を迅速にかつ正当に行えるよう、規則整備を含め、ガバナンスの体制を確立し、運用する。その際、利用者の利益および意見の尊重と、内外におけるアカウントビリティの確保に努める。

2005 年度に委員会活動が本格化し、情報ネットワーク運営管理体制の明確化・強化、基幹ネットワークの更新・整備、サーバ室の環境改善、基幹サーバの更新などを行ったことを受け、2006 年度は日常的管理・運営活動に加えて、従来まったく欠けていた、学環・学府の情報ネットワークに関するガバナンスの根拠となるべき諸規則の整備を行い、複数の基幹実務担当者の相互牽制と協力による管理体制の確立と情報セキュリティ対応の強化を図るとともに、情報基盤センターPKI プロジェクトと協力しつつ iii-PKI(Public Key Infrastructure)を構築して安全な通信・情報共有のための基盤形成に努めた。

以上のような経緯を踏まえ、2007 年度は、新たに完成した情報学環・福武ホールの情報ネットワーク環境整備や、ウェブ発表等への協力を含む日常的管理・運営活動の他、iii-PKI の活用拡大に務め、確実な個人認証に基づく VPN システムや、会議資料をオンライン閲覧できるシステムの構築・運用等を通じた利便性の向上や省資源化に努めた。

2008 年度には、これまでの活動を継続、強化する他、とりわけ情報セキュリティ委員会と連携しつつ、情報セキュリティ確保への取り組みを強化することが想定されている。

1.5.10 情報倫理審査会

情報倫理審査会は、東京大学の情報倫理委員会が定める情報倫理規則にもとづき、主査と委員 3 名をおいて、情報倫理の遵守のための審査をおこなっている。2003 年度の新情報学環の発足以来、構成員への連絡通知のための ML をつうじてネットワーク利用者への注意喚起などをおこなってきた。2007 年には一件、情報倫理案件が生じたため、3 度の会議を開催し、事情聴取と適切な指導を行うと同時に情報ネットワーク委員会で緊急対応を行い、事案を実害のない状態で収拾させることができた。さらに同様の事案を防止するために、あらためて情報倫理に関して ML 等で関係者に周知をはかった。その後重大な事案は生じていない。

1.5.11 業績評価委員会

業績評価委員会は、情報学環・学府の研究・教育活動に対して行われる、学内外の様々な評価に関連する業務を遂行することが任務である。

2007 年度は、国立大学法人評価現況調査表および情報学環・学際情報学府年報の作成に注力し、特に現況調査表に関しては各委員の尽力をもって 2008 年 2 月に最終版を完成、本部に提出することが

できた。

1.5.12 企画広報委員会

本委員会は、情報学環・学際情報学府の活動や行事（入試説明会、シンポジウム、ワークショップ、教員研修会など）を企画・運営すること、および両組織の情報を、ニューズレター、ホームページ、メール等で、学内外に案内するなどの広報活動を行うために設置されている。福武ホールの完成まで、工学部9号館を拠点に活動してきた。現在はよりインフォーマルな連携や情報共有のためのサポート、教員・学生の萌芽的な活動を支援することも進みはじめている。

1.5.13 図書出版委員会

2007年度から図書委員会と出版編集委員会が統合されて、図書出版委員会となった。

1. 図書室関係

情報学環図書室は、新聞研究所、社会情報研究所以来のマス・メディア、ジャーナリズム研究の資料に加えて、平成15年度の情報学環との統合以降は、文系・理系を問わず、情報の学際的な研究に関する資料を幅広く収集し、利用に供している。

2007年度は図書購入のあり方について再検討し、図書購入方針案としてまとめた。内容は次の通りである。購入図書の推薦方法として、①見計らいによる推薦、②基幹教員による推薦、③授業用図書の推薦、の3方式とし、図書・出版委員会によって購入可否を決定し、購入決定図書については基幹教員へ周知することとする。

そのほか、臨時経費によって、雑誌製本の滞貨処理、書庫内の空きスペースへの書架の増設、閲覧室の改装等を行った。

表1：2007年度図書受入冊数

	購入	寄贈	計
和書	240	429	669
洋書	227	285	512
計	467	714	1,181

表2：貸出冊数の年度推移

年度	2005	2006	2007
図書	4,651	4,919	5,332
雑誌	843	751	448
計	5,494	5,670	5,780

2. 出版関係

(4.5 出版活動を参照されたい)

1.5.14 国際活動委員会

情報学環への外国人研究員等の受け入れを審議し許可することが委員会の役目である。最近の受け入れ総数を見ると、平成14年度8、平成15年度7、平成16年度9名、平成17年度13名、平成18年度15名、平成19年度15名と堅調である(ただし、15年度までは旧情報学環と社会情報研究所の合計)。情報学環の多様な研究背景を生かし、今後ともさまざまな教員を受け入れていくことがこれから

の課題であろう。

1.5.15 利益相反アドバイザー

現在、東京大学の教職員は、東京大学が定める規定の範囲内で、様々な立場を学外において持つことが可能である。例えば、学会の役員や政府委員、他大学の非常勤講師、産学連携のための民間企業の兼職などがある。こうした立場に立って、様々な活動を行うと、東京大学の構成員としての利害と、学外の立場における利害がぶつかる場合がある。そのようなケースを利益相反と呼ぶが、利益相反アドバイザーは、情報学環内において、利益相反が心配されるときに相談を受け、本部事務とも連絡を取りながら、利益相反に関する対応をアドバイスする役割を担っている。今後、産学連携が進む上で、起こることが予想される利益相反の問題に対して適切に対応していきたい。

1.5.16 産学連携委員会

産学連携委員会は、情報学環・学際情報学府における研究・教育活動を、産業界との連携を通して社会還元をすることを目的として設置されている。2007年度の産学連携委員会の活動は、職務発明特許やそれに類する著作権等の知財に関する規定の策定に関して、東京大学産学連携委員会を通して参加をしている。また、東京大学産学連携協議会に参加し産業界との交流を行うことも行っている。今後、学環・学府において、産業界と連携するケースが増えると思われるが、そのために必要な内部の制度づくりや、連携する上で生じた様々な課題に対応していきたい。

1.5.17 知的財産室

知的財産室では、情報学環・学際情報学府の教職員が発明したり、著作物を作成した際に、届け出てもらおうところである。ここで、それらの発明や著作物が、職務上のものであるか、そうでないかを、届け出の内容から判断する。

1.5.18 社会情報研究資料センター運営委員会

社会情報研究資料センターは、新聞資料を中心に、各種メディア情報資料を研究のために収集、整理し、それらの資料を学内外の研究者に提供することを目的としている。現在、本センターの所蔵資料は製本済原紙約 20,000 冊、縮刷版約 8,000 冊、マイクロフィルム約 45,000 リールに達している。

本センターの沿革は、1964年に当時の新聞研究所に開室された「プレスセンター」が1967年、新聞研究所附属施設「新聞資料センター」として正式に発足し、1992年4月に新聞研究所が社会情報研究所に改組されるにあたって「情報メディア研究資料センター」と改称された。その後、2004年4月、大学院情報学環・学際情報学府と社会情報研究所の統合にともなって、「社会情報研究資料センター」と改称した。センター運営委員会は、この社会情報研究資料センターの運営にあたっており、2007年度からは新規教育研究事業「社会情報研究資料センターの高度アーカイブ化事業」を推進している。

なお、本センターの現在の年間利用者数は2,000人を越えており、2007度における月別利用者数は、下記の通りである。

表 1-5-1 社会情報研究資料センター月別利用者数 (2007 年度)

(開室日数)	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
	20	21	21	21	21	18	22	21	18	17	20	20	
学内	56	96	151	94	76	82	144	206	212	126	95	64	1,402
学外	27	53	31	58	59	41	54	73	53	28	49	69	595
不明	1	4	1			2	3	4	3	6		1	25
合計	84	153	183	152	135	125	201	283	268	160	144	134	2,022

1.5.19 WEB 発表会運営委員会

WEB 発表会運営委員会では、学際情報学府修士課程学生の修士論文研究進捗を促し、かつ、1 年目終了時点での進捗状況を確認する目的で毎年度 3 月末から翌年度の 4 月にまたがる形で WEB 発表会を開催している。

WEB 発表会は具体的には報告者各自が研究計画・中間報告をウェブページとして提出（アップロード）し、相互に閲覧するオンライン発表会と、実際に口頭で発表するオフライン発表会に分けられる。オンライン発表会の際には相互評価のために投票結果に基づきアイディア賞、進捗賞、プレゼンテーション賞についてそれぞれ金賞、銀賞、銅賞が与えられる。またオフライン発表会の際に参加者は、他者の報告を評価する側に回って、研究について相互に論評することが義務づけられている。

本年度は 2008 年 1 月 22 日に説明会を行い、1 月 29 日に参加登録を締め切った。実際のオフライン発表会は 3 月 21 日をウェブページ提出期限とし、3 月 24 日からオンライン上の閲覧を開始し、閲覧期間を 4 月 10 日までとした。なお、オンライン発表に対する投票は 3 月 28 日が締切りであった。

オフライン発表会は新入生進学ガイダンスの翌週、4 月 7 日に工学部 2 号館 92B および 93B 教室で行われ、発表者の総数は 72 名であった。

1.5.20 学生・留学生委員会

学生・留学生委員会では、大学院生全般を対象としたサービスに関して、学際情報学府に在籍する大学院生（留学生を含む）の福利厚生に関する以下の業務を担当してきた。

- (1) 大学院生の勉強・研究用スペースの整備、維持
- (2) 大学院生用備品の購入、管理
- (3) 大学院生と教職員スタッフとのコミュニケーションの維持
- (4) 大学院生向け情報の提供
- (5) 大学院生奨学金および研究支援経費関係

これらのうち、(1) については、本郷キャンパス情報学環本部棟 4 階に加えて、工学部 2 号館 9 階に大学院生室を設け、共用の机を配置して提供している。また福武ホール学環コモンズにおいて勉学する環境を用意している。

(2) については適宜学生の希望を募り、必要と認められた場合には、共通予算で備品購入をおこなっている。特に今年度は、工学部 2 号館 9 階の備品を整備した。

(3) については、年に 2～3 回、院生向けの連絡会を開催し、情報の相互流通をはかるとともに、年度はじめの新生歓迎会、留学生懇親会、留学生旅行、年度末の謝恩会を開催している（新生歓迎会は在校生が、謝恩会は当該年度の修了生が企画実施）。

(4) については、教務関係の情報は上記 (3) のルートのほか、適宜掲示板、学務係メールニュースでの情報配信をおこなっている。また、大学院生向けの奨学金・就職・住宅などの情報を、学務係横のスペースで閲覧できるようにしている。

(5) については、各種奨学金の付与に関して希望者を募り、適宜順位付けをして申請している。

留学生を対象としたサービスの現状に関しては、留学生専用の窓口となる部署はないが、学生・留学生委員会、事務部学務係、チューター制度等が機能しており、部局としての留学生の受入体制はほぼ整っていると思われる。2004 年度以降、「留学生懇談会」を学環として開催しており、留学生、日本人学生、教職員が交流を図る場をもっている。

次に課題についてであるが、大学院生全般を対象としたサービスに関しては、学際情報学府全体としてスペースが不足していることから、大学院生用のスペースも十分ではない。勉強用の机やロッカーも、大学院生ひとりひとりに充当できていないのが現状である。しかし、工学部 2 号館 9 階に院生室を設け、また、情報学環・福武ホールが完成したため、状況はかなり改善されているはずである。学生にアンケートを採るなどして、要望の具体的な把握を試みたい。

留学生を対象としたサービスの課題に関しては、今後、留学生数は増加することが予想されるため、対応組織を整備し、留学生全般を対象としたサポート体制、例えば入学時の留学生向けオリエンテーションの開催などを整備していくことが課題となる。特に冬学期から入学してくる留学生に対するガイダンスを加える必要がある。また、他部局には留学生係および留学生担当の専任講師を設置しているところも多い。学府も、これまでの学生・留学生委員会、事務部、チューター制度等のサポートを強化することと同時に、担当部局を設置することも考えていかななくてはならないと思われる。

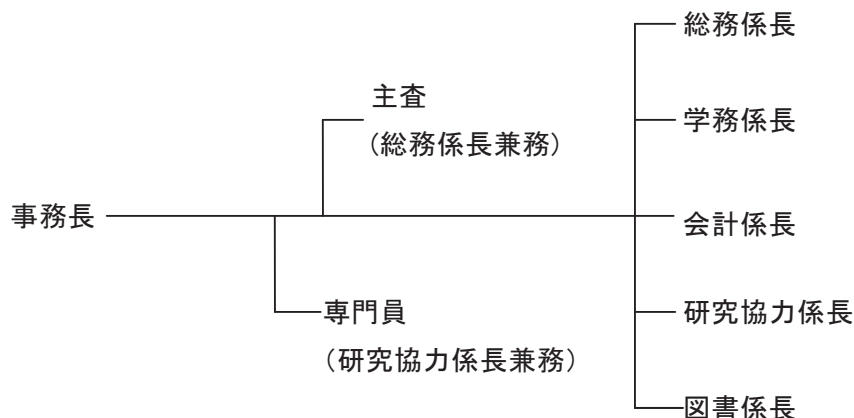
1.5.21 情報学環教育部委員会

大学院情報学環教育部は、平成 16 年 4 月 1 日の社会情報研究所と大学院情報学環の組織統合により、社会情報研究所教育部を大学院情報学環に引き継いだ制度である。教育部の制度は、社会情報研究所の前身である新聞研究所設置（昭和 24 年 5 月）まで遡り、60 年近い歴史をもっている。

平成 18 年度には組織統合に対応した大幅なカリキュラムの拡充・改訂を実施したが、本年度は実際の研究生の実態をアンケート調査などによって把握し、基本的な理念からカリキュラム、施設、入学試験のあり方などにいたるまで、本格的な改革プランの策定に取り組んだ。来年度以降、その成果を現実のかたちに落としていく予定である。

1.6 事務組織

図 1-6-1 事務部組織図(平成19年4月1日現在)



事務長	専門員	主査	係長	主任	係員	計
1	1	1	3	5	3	14

2 教育活動

2.1 概況

学際情報学府の教育は、情報学についての文理相互浸透の学際的カリキュラムとネットワーク型の教員編成による教育指導体制に最大の特色がある。学際情報学という分野が、すでに体系化された学問の修得と継承というよりも、従来の学問体系の組み換えと新しい学問の創生というところに目標を据え、そのような教育を実施しようと考えているからである。

学際性の学問論とネットワーク型の組織を引き継ぎつつ、2004年4月の組織統合にあたって、3コース制が導入された。これは、修士課程学生定員70名という規模に適合するためと、ディシプリンの基礎をもった学際性への教育効果のためと、2つの理由から導入された構成であった。現在は、2006年4月に総合分析情報学コースが設立され、4コースとなっている。

このコース制は設立当初からの学際性の目標と矛盾するものではない。むしろ高水準の学際性を備えた人材を育成するために必要な措置であった。入り口で基礎学力のある優秀な学生を採用するためにコースごとの入試を行い、出口で学力の品質管理をするためにコースごとの修了試験を行う。しかし、入試における面接でも、修了試験の口述試験でも、学際的な教員構成での審査体勢がとられているし、また入学後の学生はミニマムな選択必修科目のほかは全コースに開かれている多数の自由選択科目群から自分の研究計画と関心に合った科目を選んで、自分の学習メニューを組み上げることが可能となっている。

コースはあくまで学府学生が帰属するより小さな枠組みであり、研究科の専攻のようにそこに決し

て教員が所属しているわけではない。教員はあくまで学環に所属しているのであって、コースとの関わりはどのコースの学生を主として指導するかという点である。コース制は、学生が自らの学問的なアイデンティティを構築しつつ、同時に学際性へと越境していくための、バランスのよい舞台を提供しようとしているのである。

2.2 教育カリキュラム

学際情報学府の授業科目群は、(1) コース共通必修科目、(2) コース別選択必修科目、(3) コース共通選択科目の3つの科目群から構成されている。

第1のコース共通必修科目は、それぞれの学生の指導教員による個別研究指導のほか、学際情報学府の大学院生が、専門分野の視点や立場の違いを越えて、今日の情報学の様々なアプローチについての基礎知識を身につけてもらう「学際情報学概論」が主軸である。この科目には、情報学環のほぼすべての基幹・流動教員が関与し、学生は e-learning システムでの受講も可能な仕組みになっている。同時に、学際情報学府院生には、修士1年ではWeb 発表会における修士1年間の研究の成果発表が、修士2年では博士論文中間発表会での発表が、また博士課程では毎年の博士課程コロキウムでの発表が、大学院での必修カリキュラムの一部として課せられている。

第2のコース別選択必修科目は、修士課程の大学院カリキュラムとして設けられている科目群で、それぞれのコースにおいて専門的な研究能力のトレーニングをしていくためのものである。この科目群は、「基礎」の4単位と「研究法」の2単位の6単位から成り、「基礎」は主として、各専門分野の基礎的方法論についてのトレーニング、「研究法」は、そのようにして習得した専門的方法論を生かした実習（調査、制作、実験、政策立案など）が分野に応じたやり方で実施されている。それぞれのコースの院生にとって、一般的に最もエネルギーを割かなくてはならない科目群であり、コースごとの特徴が最も明瞭に示されるカリキュラム編成になっている。

第3の共通選択科目群は、学府を担当しているそれぞれの教員が開講する大学院授業科目であり、形式としては一般的な大学院のゼミ科目と変わらない。但し、学際情報学府の共通選択科目の大きな特徴は、いずれも「情報」や「メディア」を中心的な対象としながらも、情報科学からジャーナリズム論までの幅広い専門家が集まっていることによる横断性にある。すなわち、ここでの共通選択科目には、自己組織情報、アジア情報政策、異文化コミュニケーション、学習環境デザイン、情報行動、映像文化、メディア表現、情報記号、情報倫理、自然言語処理、情報法、ジャーナリズム、ヒューマンインタフェース、数理言語、ユビキタスコンピューティング、知覚情報、ネットワーク経済、歴史情報、シミュレーションシステム、情報造形、視覚情報処理、医療福祉情報、身体情報認知、情報データベースなど、きわめて多様な分野が含まれている。これらの科目は、学際情報学府のカリキュラム編成においては、①情報・言語・行動系科目、②社会・制度系科目、③メディア・文化系科目、④表現・リテラシー系科目、⑤数理・システム系科目の5つの領域に分けられている。

2.3 カリキュラム支援体制

大学院学際情報学府では、上記のカリキュラムを大学院教育の基軸に据えながら、以下のような教育上の支援体制を組織し、運営している。

2.3.1 主指導教員・副指導教員の配置

学際情報学府では、指導教員の個別研究指導に加え、副指導教員による側面からの研究指導という複眼的な指導体制を整えている。情報に関する研究は、専門的であると同時に学際的な性格をもつため、既存の単一の学問分野の知識だけでは適切に対応できないことが多い。学際情報学府では、既存分野の専門的な知識や方法を十分に身につけつつ、それらを複眼的に結びつけて新しい情報研究に挑む若手研究者を効果的に育てるために、従来の指導教員による指導だけでなく、副指導教員を加えた指導体制を採用している。この体制は、これまでもそれぞれの院生の視野を広くし、より柔軟な学問的展開を可能にする点で、有益な効果を挙げてきた。

2.3.2 修士・博士 研究計画書の作成

学際情報学府の大学院生は、修士1年及び博士2年の段階で、自分の研究計画書を作成して学府に提出する。このうち修士1年の段階での研究計画書は、修士論文に向けての対象設定、おおよその研究視角を示す概要的なものであり、提出された計画書は、修士1年生全員がお互いの研究テーマについての認識を共有するための冊子にまとめられる。博士2年での研究計画書は、その学生が博士論文を執筆していくための第一歩となる。

2.3.3 ウェブ発表

ウェブ発表は、学際情報学府修士1年生が、その年度の末から翌年度初めにかけて、それまでの約1年間に進めてきた学習や研究の成果をまとめ、約1年後に提出する修士論文の構想や進捗状況について発表するものである。この発表は、学際情報学府に所属する教員と学生に対して行われるもので、各自が研究の内容・計画をウェブページにまとめて学府サーバに掲載するオンライン発表会と、それを踏まえてポスター発表形式で行うオフライン発表会から成る。

オンライン発表会は年度末から約2週間続くが、発表者は1週間の間に自分以外の発表を閲覧し、アイデアの面白さ・斬新さ、進捗度合い、プレゼンテーションの良さ等の観点から良いと思うものに投票する相互評価を行い、各項目の上位の発表は公表される。

オフライン発表会は新年度に入ってから1日を数セッションに分けて行われ、教員や在学生の他、発表者も自分の発表のないセッションでは聞き役に回り、コメントシートを提出する。

発表者は、このような中間総括と相互評価のプロセスを経ることで、修士論文に向けた残り1年間の研究をより一層充実させるための手がかりを得ることとなる。また、学際情報学府の新入生もオンライン発表を閲覧し、オフライン発表会の聞き役となることで、学府における研究の内容や修士論文に向けたプロセスについて具体的なイメージをつかむことができる。

2.3.4 修士論文中間発表会

学際情報学府では、多くの修士2年の学生が修士論文執筆に本格的に取り組む7月上旬に修士論文中間発表会を開催している。この発表会では、その年度に修士論文を提出するすべての学生が自分の研究の進捗状況を発表しなければならないことになっており、指導教員や福指導教員だけでなく、関連分野の教員や他の学府の大学院生が発表会に参加する。教務委員会は、それぞれの教員のスケジュールを調整して、91名に及ぶ発表者の全体の進行表を作成し、中間発表会全体を組織する。この発表会には、学府の院生は誰でも参加することができるので、修士1年の院生たちにとっては、先輩たちがどのような研究を進めているのかについて広く知る貴重な機会となっている。

2.3.5 博士課程コロキウム

学際情報学府では、博士課程に在籍している学生を対象に、毎年11月上旬に博士課程コロキウムを開催している。このコロキウムでは、博士課程3年までに在籍しているすべての学生が、博士論文執筆に向けての研究の進捗状況を発表しなければならない。教務委員会は、それぞれの教員のスケジュールを調整して、84名に及ぶ発表者の全体の進行表を作成し、博士課程コロキウム全体を組織する。このコロキウムには、学府の院生は誰でも参加することができるので、博士課程の学生たちにとっては、他の学生たちがどのような研究を進めているのかについて広く知る貴重な機会となっている。

2.3.6 E-learning 授業 (iii online)

2.3.6.1 iii online の目標

iii online は2002年4月に始まった学際情報学府のeラーニングサイトである。iii online は、学部・研究科レベルでは東京大学初のeラーニングサービスである。

eラーニングを開始した最大の理由が、社会人大学院生の学習機会の確保である。

学際情報学府は独立大学院であるために、多種多様な学生が集まっている。2003年度までは、実践情報学コースという社会人学生をターゲットとしたコースが設けられており（現在は、社会人特別選抜枠に変更）、マスコミ関係者やシステムエンジニアなど、学生の2割程度が社会人という状況であった。

学際情報学府に入学する社会人は、銀行や製造業につとめている一般的な社会人に比べ、比較的時間に自由がきく代わりに、忙しくなる時期とそうでない時期が交互にやってくる。たとえば、広告代理店に勤めている場合、コマースの撮影などで1ヶ月間は仕事が超過密スケジュールで入るが、企画段階ではそれほど時間に制約がないという状態である。

このような状況では、講義に毎回出席することは難しくなる。iii online が始まる前は、出席しなければ自動的に欠席になり、全く講義の情報が手に入らない状態であった。2回、3回と欠席が続けば、当然講義の理解に影響が現れてくるので、教育水準の確保上、大きな問題となっていた。

通常社会人向けの大学院では授業を夜間に開講することによって、この問題を解決している。しかし、フルタイムの学生は昼間に授業が開講されることを望んでおり、学際情報学府で授業を夜間に持つてくることは、非現実的であった。

2.3.6.2 iii online の概要



図 2-3-1 : iii online の画面

iii online はこのような問題を解決するために、ビデオのストリーミングと掲示板を組み合わせたサービスを提供している。ビデオのアイコンを押すと、およそ 15 分×6 つにカットされた授業の映像を見ることができる。ストリーミングは FlashVide 形式 500kbps エンコーディングで行っている。FlashVideol 形式を選んだのは、利用者として Windows ユーザー、Mac ユーザー、Linux ユーザーが混在しているからであり、エンコーディングレートは、ブロードバンドで十分スピードがでない場合でも対応できるという観点から設定してある。

15 分にカットしたのは、90 分の映像を一気に見るのは大変だからである。利用者アンケートからも、朝 30 分、会社の休憩時間に 30 分、夜帰ってから 30 分見ると行ったような分割視聴が日常的に行われていることが明らかになっている。

ビデオは、パワーポイント連動型ではなく、カメラで撮影したものをそのまま流している。理由はパワーポイントを使う授業スタイルを教員に押しつけるのは良くないと判断したからである。OHP を使う人もいれば、ホワイトボードの方がインタラクティブにできるという教員もいる。そういう多様な授業スタイルを認めなければ、e ラーニングを導入すると、かえって授業がやりにくくなるということになりかねない。日常的に e ラーニングを展開する場合には、「e ラーニングだから」といった制約条件を減らすことが重要である。

データのアイコンを押すと、授業の資料を見ることができる。資料はすべて PDF ファイル形式にしてある。これも前述の通りユーザー側が多様な環境にいるためである。

アンケート調査では、実際に利用するときには、この PDF ファイルを印刷し、それをノートとして使いながら授業を聞いている。

配信年	講義名	授業者
2002	自然言語処理論	辻井 潤一
	コミュニケーション・システム	原島 博
	メディア表現論	水越伸
	情報政策論	浜田純一
	学際情報学概論	オムニバス
2003	情報リテラシー論	山内 祐平
	情報記号論	石田 英敬
	情報進化論	佐倉 統
	シミュレーション・システム	荒川 忠一
2004	学際情報学概論	オムニバス
	文化・人間情報学基礎	水越伸・山内祐平
	医療福祉情報学	山本 隆一
	社会情報システム	松浦幹太
2005	学際情報学概論	オムニバス
	ネットワーク経済論 II	田中秀幸
	学際理数情報学概論 VI	鈴木高宏
2006	学際情報学概論	オムニバス
	身体行動情報論	深代千之
	能動情報論	奈良高明
2007	学際情報学概論	オムニバス
	学習環境デザイン論	山内祐平
	歴史情報論	本郷和人

表 2-3-1 : iii online で閲覧可能な授業の一覧

2.3.6.3 iii online の評価

利用動向を確認するために、2002 年夏学期授業終了後に、iii online に利用者登録した全学生（大学院生） 130 名に対してアンケート調査を実施した。有効回答数は 62（有効回答率 47.7%）であった。このうち社会人学生の回答者は 16 名（有効回答数に占める割合 25.8%）である。

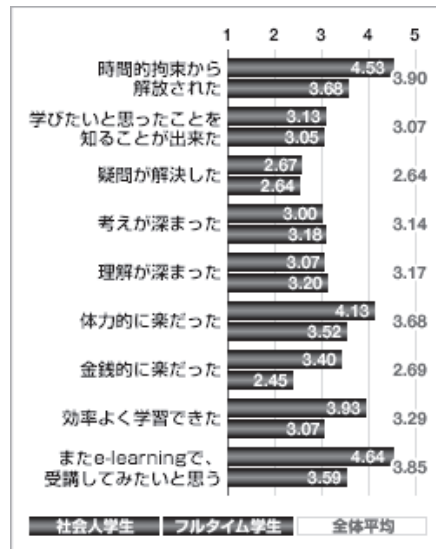


図 2-3-3 : iii online のメリット

iii online のメリットは「時間的拘束からの解放」、「体力的に楽であること」、そして「効率のよい学習」である。社会人学生にとくにこの傾向が強くみられたことが特徴的である。特に e-learning で受講してみたいという総合評価項目では、5段階スケールで 4.64 という好成績をマークしている。

この調査から、iii online が当所の目的としていた「社会人大学院生の学習機会」という目標はほぼ達成できているものと考えられる。

2.3.7 ソウル大学大学院との大学院国際共同演習授業

学際情報学府では、大学院授業の一環として、ソウル大学との間でインターネット回線とビデオ会議システムを用いた日韓国際協同演習授業—East Asia Media Study を実施している。これは、これまでの東京大学社会情報研究所とソウル大学言論情報研究所との長年の学術交流を基礎に、双方の会場をビデオ会議システムでつなぎ、両大学の教員、大学院生が、毎週、越境的に議論を重ねる授業をしていこうという試みで、8週間から11週間にわたり継続的に授業を行ってきている。また、授業のうちの1回は、毎年開催されるソウル大—東大合同シンポジウムに接続する形で、ソウル大学でゼミ生が一堂に会し、合同授業が行われている。

授業の進め方としては、両大学をビデオ会議でつなぎ、毎回、それぞれの大学から講師が報告をし、院生が参加した討論で進行させている。原則として英語の教材を使うが、講義は英語、日本語、韓国語で行われる。担当講師や大学院生たちの発表を通じて、日本と韓国から見た東アジアのメディアと文化、政治、社会の変化に対する認識を共有、討論している。

初年度の平成17年度は、情報学環本館6階実験室を使い、東アジアの構造変動の中で行われる日本、韓国のメディアと文化政治の変化に対して理論的、実証的に探求することを目的として、双方の大学の教員の講義を中心に授業を行った。東アジアの人々がどのように閉鎖的な民族主義から抜け出し、自己中心的な理解を越えて人間らしい社会共同体を目指して連帯できるのかということ、メデ

ィアと文化政治の歴史のおよび共時的観点から学び、探求した。

平成 18 年度は、工学部 2 号館 9 階の教室を使用し、ビデオ会議システムの性能も向上して各回支障なく授業運営をすることができた。また、授業専用の BBS を設けることによって、事前情報や知識の共有、学生同士のオンライン上の交流もスムーズに行き、授業の運営の円滑化は格段に進んだ。

同年度の授業では、前半は、ソウル大側と東大側の教員の講義を中心とし、各講義後にディスカッションを行なった。授業の後半では、ソウル大大学院生と東大大学院生の混合グループを編成し、各グループがオンライン上でディスカッションしながら、共同研究計画書をつくり、発表する時間に充てた。各グループのテーマは、「公共圏」「大衆文化」「文化政治の歴史認識」「社会と技術」であった。授業には、英語、日本語、韓国語が使われ、活発な討議の中から日本と韓国から見た東アジアのメディアと文化、政治、社会の変化の対する認識を共有することができたと見えよう。

平成 19 年度は、本学から姜尚中教授が、ソウル大からは姜明求教授が授業を担当した。本年は、とくにビデオ授業に加えて姜尚中教授は 9 月にソウル大学で集中講義を、姜明求教授は 1 月に東京大学で集中講義を行い、学生との交流を深めつつ共同授業にも専門性をもたせることを重視し、内容を一層充実させた。「交流」を目的化する授業から、相互の研究成果に基いた「専門性の交換」という方向へ大きく飛躍した年となったと言える。

2.4 学際情報学府への進学

2000 年度に設立されて以来、2003 年度まで、大学院学際情報学府は毎年、修士課程約 50 人、博士課程約 20 人の大学院生を受け入れてきた。2004 年度の社会情報研究所との合併により、それまで人文社会系研究科社会情報学専門分野の定員であった修士課程 14 人、博士課程 7 人が統合され、2006 年度からは総合分析情報学コースが新設されたため、学際情報学府の入学定員はさらに拡大し、現在では修士課程定員が 85 人、博士課程定員が 36 人となっている（詳しくは巻末資料参照）。

その結果、学際情報学府に在籍する大学院生数は、2000 年度の修士 52 人（修士）から出発して、01 年度が 102 人（修士）、02 年度が 139 人（修士 113 人、博士 26 人）、03 年度が 169 人（修士 128 人、博士 41 人）、04 年度が 205 人（修士 136 人、博士 69 人）、05 年度が 234 人（修士 151 人、博士 83 人）、06 年度が 279 人（修士 166 人、博士 113 人）、07 年度が 307 人（修士 177 人、博士 130 人）と増加し続けてきた。現在、東京大学のなかで大学院情報学環・学際情報学府は、大学院生数においては教育学研究科、経済学研究科などとほぼ同じ規模の組織となっている。

また、本学際情報学府の大学院生の構成についてみると、(1) 東京大学以外の他大学出身者の割合が高いこと、(2) 実践的キャリアを持つ人々や第一線で活動している社会人の割合が高いこと、(3) 外国人学生の割合が相対的に高いこと、(4) 入学者の男女比も、全体の 40～50%程度が女性と均衡がとれていることなど、きわめてハイブリッドな特徴がみられる。これらの特徴は、本学府が学生の構成という面からみても東京大学のなかできわめて新しい可能性をもった大学院組織であることを示している。

本学府への志願者についてみると、社会情報研究所との合併後の最近 3 年間では、修士課程の受入予定人員 70 人（～2005 年度）、90 人（2006 年度～）に対し、2005 年度入学試験が志願者 178 人（2.54

倍)、06年度入学試験が225人(2.5倍)、07年度入学試験が148人(1.64倍)、の志願者が応募している。しかも合併後では、本大学院への志願者が増加傾向にあり、今日、大学院重点化のなかで大学院生数の枠が急速に広がったために大学院入試への競争倍率が低下してきている全般的な傾向からすれば、顕著に異なる人気の高さを保っている。

2.5 修士論文及び博士論文の執筆

学際情報学府の修了者数は、修士修了者では、2001年度が38人、02年度が40人、03年度が51人、04年度が57人、05年度が62人と徐々に増え、06年度は59人、07年度は61人となり、毎年約60人程度の修士修了者を輩出している。

また、博士課程の修了者についてみるならば、学際情報学府では、設立されたのが2000年度なので、最初の入学者が博士3年に達する2004年度に初めて4人の博士号取得者を輩出することになった。05年度は1名だったが、06年度は7人、07年度は3人(他に論文博士1人)の博士号取得者を輩出するに至っている。

大学院学際情報学府では、新しい学生が修士課程に入学した段階から、入学ガイダンスでの丁寧な指導、M2の先輩たちによるWeb発表会への参加、主指導・副指導教員体制、修士課程研究計画書の提出、基礎演習および研究法授業、Web発表会の実施、修士論文中間発表会というように、修士論文完成に至る個々の段階で学生の研究をサポートしていく体制が完備している。また、博士課程進学後も、博士課程研究計画書や博士課程コロキウムの毎年の実施、主指導・副指導による指導というように日本の大学院教育としては珍しいほどに修士論文、博士論文の執筆をサポートする体制を整えている。このような体制のなかで、これまで多様な分野の専門的な修士論文、博士論文が書かれてきており、その一例は、別表のようなリストに示される。

(別表)

2007年度修士論文タイトル

- 映画女優の誕生：1910年代日本映画における〈女優〉概念の成立
- 戦後東京証券取引所一部上場企業の生存時間分析
- 環境と社会の知識社会学 —1970年代から90年代のアメリカ環境社会学を対象として—
- インターネット時代のユーザー創作と近代著作権法の限界
- 新宿二丁目クラブイベントのエスノグラフィー —〈ゲイとしての共同性〉と空間表象としての「二丁目」—
- 1950年代の日本映画と社会問題 ～ジャンル映画におけるジェンダーの表象を中心に～
- ジャニーズ系男性アイドルのファン・コミュニティにおける感情の共有化
- 「リストカット」の多角的理解とオンラインにおけるその表現について
- 個人情報保護政策へのリスク論的アプローチ —医療分野における検証—
- 日記の歴史社会学 <語り>と<メディア>の近代関係史
- Three Transitional States & Innovation Policies : ICT, Nanotechnology and Biotechnology

～A review of the role of service in today's innovation system～

☆ 『3つの移行期とイノベーション政策 : ICT、バイオテクノロジー、ナノテクノロジー』 副題:「イノベーションシステムにおけるサービスの役割」

- 『装苑』の時代 —— 「衣服」と「身体」の関係史
- 職業選択における連携に関する考察 —「職業紹介サービス」の展望と課題—
- 中学生の逸脱行動傾向とその携帯電話利用状況、親子友人関係、性格傾向の特徴 —中学生とその親における携帯電話利用状況調査から—
- デジタル・ネットワーク環境下における著作権の在り方に関する考察
- アメリカのアフガニスタン攻撃に関わる政策決定過程の分析
- サイバースペースにおける表現の自由の再検討
- 韓国における情報社会論の展開 ～韓国社会と情報社会論の関係性をめぐって～
- インターネット上の文化実践 —韓国におけるアメリカ・ドラマ・オンライン・コミュニティ—
- インターネット利用に関する情報媒体の影響 —モバイルとPCの差異に焦点を当てて—
- 口コミサイトにおける情報発信の構造 —アクティブな情報提供者に関する社会心理学的研究—
- 中国四大国有商業銀行経営体制改革とガバナンスに関する研究 ～ITとガバナンス～
- ジーザス・クライスト・アナトミア —メディアロジーはいかに言葉と肉を切断したか？
- 日本における「アフリカ」報道 —欧米諸国の報道との比較—
- 博物館と失敗 —過去の記憶から未来へ—
- 日本の科学コミュニケーションに関する一考察
- 音による板の形状の知覚の研究
- ベルナルド・スティグラーの技術哲学とその現象学批判
- 学習管理システム (LMS: Learning Management System) の選定支援を行うフレームワークの提案
- Effect of temporal fine structure on masking release 時間微細構造がマスキング解除に及ぼす影響
- ゲームの生態系における情報伝達メディア
- 表象空間としてのメディア —皇族妃の装いをめぐって
- 廃墟写真論 —「廃墟写真」から見た日本写真史の近代—
- 伝統芸能という幻想 —現代における歌舞伎の社会的イメージの変遷—
- 文化資源 3次元デジタルデータの利活用
- デジタルゲームにおけるボリュームデータの応用利用に関する研究
- 男性が育児休業を取る論理 —職場・家庭・制度の狭間で—
- 文楽の人形遣いにおける運動制御と呼吸パターンの関係
- ビデオゲームプレイが時間評価に与える影響とその要因
- アカデミックライティングにおける協同推敲活動支援環境の構築と評価

- 科学映画の日本史
- Packaged Television —「テレビ＝放送」概念を脱構築する—
- H・パトナムにおける合理性 —事実・価値、实在論—
- グローバル・ガバナンスにおける参加の規定要因と課題抽出 —世界情報社会サミット（WSIS）における市民社会—
- テレビ教育の歴史社会学
- ミュージアムにおけるリテラシー概念の意義と領域越境に関する研究
- アニメの視聴者層拡大モデル（リピートモデル）についての研究
- 「デジタルアーカイブ」の技術と思想をめぐる一考察
- ^{アイドルドラマ} 偶像劇とナショナリズム —「^{ハリー}哈日」、「^{ファーリー}華流」から「^{タイフォン}台風」へ
- 現代中国における「中産階層」イメージの析出 —メディア分析と社会分析をつなぐ
- 新しい労働者文化によるアイデンティティ・コミュニケーション様式の変容 —‘東京東部労組’及び‘女性ユニオン東京’を中心に
- The Transcritical Space of Karatani Kojin: A Strategy for overcoming the Closed Japanese Discursive Space
 - ◇ 柄谷行人のトランスクリティカル・スペース 閉じられた日本の言説空間を越える戦略
- モデル断面の非一様性を考慮した変形アニメーションの生成
- アニマシー表現のための柔軟ロボット外装のデザインと実現
- スケルトンを加味した弾性体アニメーション
- 超柔軟3次元ディスプレイに関する研究
- 対話型流体シュミレーターに関する研究
- PC環境における大規模ボリュームデータの実時間表示法
- 光速の有限性による時間遅れを考慮した相対論的運動の可視化とその応用に関する研究
- 空間型メディアコンテンツに関する研究
- 人型ロボットへのばね構造の組み込みと運動生成
- 脳磁図逆問題における大脳皮質の形状情報の利用
- 顔の魅力操作法 Manipulation of Facial Attractiveness
- 多足型人工生命の身体性と神経系の相互作用による行動生成
- 超音波を用いた空間的な音像提示システムの研究
- Texture Mapping for Large Scale 3D Model using Stereo Method ステレオ法による大規模物体モデルのテクスチャリング
- Interactive Design of Botanical Trees Using Movement History Information 移動記録を用いた樹木モデルによるインタラクションの研究
- 匂いセンシングに基づく体験映像記録・閲覧システムの研究
- 組み込みソフトウェア開発用プログラミング支援システム PARTS

- ユビキタスお薬手帳： 医療・医薬分野の安全性と信頼性の向上を目指す状況認識技術の応用
- アクティブ RFID タグによる移動体の接近検知システム
- Integrated Extensions of PlanetLab with VMM Framework VMM Framework による PlanetLab の統合的拡張
- T-Kernel/SS: Secure Filesystem for Ubiquitous Computing T-kernel/SS: ユビキタス・コンピューティングのためのセキュア・ファイルシステム
- P2P システムの再起動時間短縮方法に関する研究
- 大域的な場所を考慮した歩行者ナビゲーション用道案内文生成手法
- 実空間記述を用いた携帯端末向け場所コンテンツ生成システム
- 歩行者向け場所情報サービスにおけるアクティブ RFID タグを使った場所認識に関する研究

2.6 学際情報学府からの就職・進学動向

修士課程修了者のうち、博士課程進学者は全修了者の 35～40%程度である。したがって、修士課程を修了した者の 6 割以上が就職することになる。一般に、理系では修士修了後に就職をするケースが多く、文系では博士課程に進学するケースが多いが、文理相互浸透の大学院組織である学際情報学府は、ちょうどその中間的な割合を示しているといえる。修士修了者の就職先は別表の通りであり（別表 修士修了者の進路状況）、シンクタンク、マスコミ、情報通信およびコンピュータ関連企業、出版社など知識集約型の企業への就職が多数を占めているところが特徴的である。

2.7 学際情報学府以外の教育活動

大学院情報学環では、大学院教育組織である学際情報学府と密接に連携しながら、コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム、教育部及びベネッセ寄附講座、電通コミュニケーションダイナミクス寄付講座、OKI ユビキタスサービス学寄附講座、ユビキタス情報社会基盤学寄附講座でも教育活動を行っている。

2.7.1 教育部

情報学環教育部は、情報、メディア、コミュニケーションについて学びたい人々のために、2年間にわたって情報学の体系的な教育を行うユニークな教育組織である。講義は、各自が所属する学部や大学院の授業などと両立できるように、おおむね夕刻（15:15 分以降）から夜間にかけて開講されている。学部、研究科という「タテ糸」で成り立つ東京大学のなかに、情報というキーワードをめぐる教育研究を「ヨコ糸」で縫い合わせてできた情報学環。教育部は、その情報学環という斬新な組織の特性を活かした、魅力的な教育研究活動の場となっている。

情報学環教育部では、毎年、前年度後期に入学試験をおこない、一学年約 50 名の教育部研究生を選抜している。大学 2 年生以上（4 月以降大学 2 年生になる見込みの人を含む）であれば、東京大学の学生であるなしにかかわらず、社会人も含めて受験をすることができる。

情報学環教育部の歴史は古く、その起源は、1929 年（昭和 4 年）の文学部新聞研究室にまでさか

のぼる。小さな組織だった新聞研究室は、戦後まもない1949年（昭和24年）に、文系の学際的研究組織である新聞研究所へと発展した。新聞研究所は、その名のとおりに、新聞をはじめとするマスメディアが巻き起こす社会情報現象やコミュニケーション変容を体系的に研究することを目的として設立されたが、同時に、マスメディアで働く記者などの実務家を育成することも目的としていた。

1992年（平成4年）、新聞研究所は社会情報研究所として改組され、マスメディアに限定しない、情報に関わるあらゆる社会現象の研究を総合的に進めていくことになった。2004年（平成16年）には、大学院情報学環と合併し、今日まで情報学の伝統を脈々と引き継ぎながら、文理融合の最先端の研究を推進し、また教育活動にも力を注いでいる。

参考として平成19年度開講科目を以下に示す。

（夏学期）

	4限 15:15～16:55	5限 17:05～18:45	6限 18:55～20:35
月			
火		社会情報学基礎 VI（アジア研究 アジアバロメータを手がかりに）	実践メディア産業論 VII（広告）
水	特別講義 I （ワークショップで学ぶメディア社会史）	分析情報基礎論	○実践メディア産業論 IV（新聞）／○実践情報社会論（IT産業論/コンテンツ論）
木	文化・人間情報学基礎 VI （日本中世史を素材として歴史情報を考える）		実践メディア産業論 V（放送）
金			実践メディア産業論 VI（出版）

（冬学期）

	4限 15:15～16:55	5限 17:05～18:45	6限 18:55～20:35
月		社会情報学基礎 IV	
火		ワークショップのデザイン	
水	文化・人間情報学基礎 V （世論と政治）	学際理数情報学基礎 A（すみやすい社会をつくる学際理数情報学）	
木	特別演習 I		社会情報学基礎 V（社会理論とメディア）
金			

なお、2001年から2007年までの教育部志願者数、受験者数、合格者数については巻末参考資料を参照していただきたい

2.7.2 コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム

コンテンツ創造科学の目的

欧米諸国ではコンテンツは文化資源としてだけでなく経済資源としても重視され、20世紀初頭から国家戦略としてこの分野の人材育成が実施されていた。21世紀に入り、アジア諸国でも成長分野としてのコンテンツ産業振興を国家目標と掲げるなどして人材育成に注力している例も数多い。これらの国が高等教育機関から専門学校まで幅広い人材を育成しているのに対し、わが国では専門学校におけるクリエイター育成がほとんどであった。その結果、比較的に国際競争力を持っていたわが国のアニメーションとゲームも、人材育成に力を入れている他の国々に激しく追い上げられている。このような世界状況の中で、先端デジタル技術の知識を有し、国際競争力を持つ創造的コンテンツを制作し流通させる修士レベルの人材育成はわが国にとって急務である。

特に、デジタルコンテンツ分野においては、近年の情報技術の革新と連動して、作品制作における技術の比重が以前に比べて格段に高くなってきている。このため、製作者・監督者の両者において、通常のコンテンツ制作における知識のみならず技術に通暁することが強く求められてきている。また、同時に、新たな表現技術の研究開発を担う技術者の側においても、作品製作の現場における諸事情に通暁し、技術開発と作品制作の間の架け橋となることが求められている。これらの状況を総合的に評価した結果、人材養成の対象としては大きく①プロデューサー、②技術開発者の2者を掲げてはいるが、その間に広がる広範なスペクトルを包含する人材層を養成することを想定している。その結果として得られる、従来にない種類の人材は、日本のコンテンツ産業の水準の牽引と国際競争力の強化に大きく寄与するものと考えている。

特に、人材養成の推進により、高次の知識を有する専門家を体系的に産業界に供給することを可能とし、従来は希薄であったコンテンツ産業界と高等教育機関、さらには学会との連携の強化が実現される。同時に、これらの人材育成を行う際の教育プログラムの規範を提供できる。来日してアニメーションやゲームについて学ぶことを希望する者が多いため、海外から優れた人材が集結する国際的拠点の形成に発展しうるだろう。

養成の対象となる人材

本教育プログラムでは、3種の人材の養成を目的としている。各々の人材養成において想定する到達レベルは以下のようになっている。

プロデューサー： 先端技術と国際的なコンテンツビジネスの高度な専門知識を有し、実社会で研究成果を活用できる人材。

指導的教育者： デジタルコンテンツ創造に関する高度な人材育成プログラムを構築できる教育者

技術開発者 : 表現手法に詳しく、エンターテインメント技術の研究開発をクリエイターと共に
行える技術開発者。

人材養成における手法の独自性に関して

「わが国に欠落している人材の養成：プロデューサー」

国際競争力があるわが国のコンテンツが国際市場から評価に見合った経済的報償を得る機会を逃していることが少なくないのは、国際的なビジネス・スキームを組めないためである。本プログラムでは、国際的ビジネスの知見と、先端的な技術に関する知見をもったプロデューサーを養成することで、日本のコンテンツ産業の国際競争力を強化する。

「わが国に欠落している人材の養成：指導的教育者」

わが国にはクリエイター養成機関が多数存在するが、教育者そのものを育成する機関が存在しないため、教育も経験による属人的なものになっているのが実状である。そのため、本分野では教育者が絶対的に不足している。本プログラムでは、コンテンツ創造の人材育成で指導的な立場にたつ教育者を育成することで、日本における教育水準を向上させる。

「わが国に欠落している人材の養成：技術開発者」

国際競争力をもっていたわが国のアニメーションやゲームが守勢にあるのも、制作技術の開発の立ち後れに原因がある。コンテンツ産業の知見を有した先端エンターテインメント技術を研究開発できる技術開発者の育成が急務である。

「自然科学と人文・社会科学との融合」

東京大学では早くからデジタルコンテンツ創造に関する教育プログラムの実現に向けて検討を重ね、産業界の協力を得て「コンテンツビジネス概論」、「メディアビジネス概論」（共に浜野保樹）、「ゲームデザイン&エンジニア論」（馬場章）などの講義を実施し、『表現のビジネス：コンテンツ制作論』（浜野保樹著）、『CG入門』（河口洋一郎著）、『記憶のゆくたて：デジタル・アーカイブの文化経済』（武邑光裕著）などの教科書を作成した。また、コンテンツ創造の競争力を向上させるためには、自然科学と人文・社会科学との融合が不可欠であることを考慮すると、人材養成機関には先端的研究の裏づけが必須である。東京大学では、コンテンツ創造に活用できる映像処理技術やバーチャルリアリティ技術やアーカイブ技術など、多くの技術開発を行い、技術者養成で実績がある。

「高等教育機関と産業界との連携」

スタジオジブリには「東小金井村塾」、プロダクション I G には押井守氏による「押井塾」などがあり、自主的な人材育成が既に実施されている。その成果が『千と千尋の神隠し』や『攻殻機動隊』の国際的成功につながっている。コンテンツ分野では、実践現場における知識が重要であるため、この

ような試みで既に成果をあげている専門家と連携し、広範に教育を行うことで、より実践的な人材育成が行える。また、コンテンツ産業は東京に集中するため、産業界の協力を得て継続的に先端の人材育成を行うためには東京に立地している必要がある。

「人材養成のモデル」

国際的な成功を収めたコンテンツ業界の経験知と、東京大学の技術者教育の経験を科学的に融合させ、体系的に整理した本プログラムのカリキュラムは、コンテンツ人材の育成モデルとなる。

「非ハリウッド型人材育成」

コンテンツ人材養成はハリウッドの手法を流用することが多いが、ハリウッド・モデルは表現の多様性を阻害する方向に向かうことが多い。本プロジェクトでは表現の多様性を担保するわが国のコンテンツ産業が培ってきた技法やモデルに準拠しつつ、国際的に通用する実務知識を有する人材育成を行う。

国内外の類似事例との対比

● 国内

わが国におけるこの分野の人材育成は、専門学校によるクリエイター育成が中心である。プロデューサー養成としては教育特区構想の一環としてデジタルハリウッドが、株式会社の専門職大学院としてあげられるが、Webなどの小規模作品制作のプロデューサーとディレクターの育成が主眼である。大学としてデジタルコンテンツの関連学科を持つのは、東京工芸大学芸術学部アニメーション学科や大阪電気通信大学情報工学部デジタルゲーム学科などであるが、やはりクリエイター養成が目的である。

関連大学院として、東京大学情報学環と東京大学新領域創成科学研究科メディア環境学分野が内容的に最も近く、両者ともにプロデューサー養成を目的の一つとしている。これらの知見が活かされ、産業界との連携において拡張したものが本教育プログラムである。

その他、本学におけるメディアコンテンツに関する学部教育として、平成18年度冬学期より学部横断型教育プログラムが開始された。また、東京藝術大学、九州大学、立命館大学、慶応義塾大学、早稲田大学においても、本分野に力を入れてきている。

● 国外

海外では Film School と呼ばれる映画大学でデジタルコンテンツの教育が行われている事例が多く、先進諸国では、フェミス（仏）、BFI（英）、SFI（スウェーデン）、北京映画学院（中国）、北京广播学院动画学院（中国）、国立芸術学院映画演劇学科（台湾）といった国立の映画大学が存在する。米国でも政府の連邦政府資金が入った大学院大学AFIが存在する。

しかし、これらはクリエイター養成機関であって、デジタルコンテンツのプロデューサー育成を行

っているのは、米国のエンターテインメントに関するMBAコースである。これらと技術に関する研究開発を併せ持つ機関として、南カリフォルニア大学（USC）があげられる。既にUSC映画・テレビ学部長とも包括的な情報交換を定期的に行うことで合意しているが、USCはあくまでもハリウッド・モデルを前提としたものであり、本教育プログラムは日本型モデルを志向している点で大きく異なる。

コンテンツ教育の実施

本教育プログラムでは、東京大学の修士課程在籍者あるいはそれと同等以上の学力水準を持つ者を対象として、毎年40名程度を目標に選抜試験を実施している。平成19年度は66名の応募者のうち38名を履修生として認定、18年度までに認定した履修生とあわせて96名に対し授業を実施した。

我々は、マネージメント能力と工学的知見を兼ね備えた人材の養成を目指している。そのため、コンテンツ分野間でのバランスを保持した履修を促すために、カリキュラムを構成する科目群は、習得すべき知識・スキルに基づき4つの科目群に分けられている。さらに、被養成者自らが描くキャリアプランに合わせた柔軟な履修選択ができるよう、講義の選択に一定の幅を設けた。科目群とその履修における制約は以下の通りである。

- (1) デジタルコンテンツ創造科学講義は、デジタルコンテンツ創造のための基礎理論や基礎知識に関する授業を主として講義形式で行うものであり、3科目（6単位）以上を履修する。
- (2) エンタテインメントテクノロジー研究は、デジタルコンテンツ創造のための科学的先端技術に関する授業を講義あるいは演習形式で行うもので、1科目（2単位）以上を履修し、「デジタルコンテンツ創造科学特論」と合計して8単位以上を履修する。（平成17年度および18年度に認定した履修生は2科目（4単位）以上を履修する。）
- (3) デジタルコンテンツ創造科学特論は、コンテンツタイプごとに作品批評や製作現場における実践的な問題に関する授業を講義あるいは演習形式で行うもので、1科目（2単位）以上を履修し、「エンタテインメントテクノロジー研究」と合計して8単位以上を履修する。（平成17年度および18年度に認定した履修生は2科目（4単位）以上を履修する。）
- (4) デジタルコンテンツ創造科学演習は、産業界におけるインターンシップあるいは学内で製作・マーケティングシミュレーションや研究指導（論文作成）を行うもので1科目（6単位）を履修する。

「デジタルコンテンツ創造科学講義」、「エンタテインメントテクノロジー研究」では、コンテンツ製作におけるマネージメントや技術に関する知識を習得し、「デジタルコンテンツ創造科学特論」では表現様式ごとに固有な知識やスキルを習得することを目的としている。そして、「デジタルコンテンツ創造科学演習」では、上記の授業で習得した知識・スキルをインターンシップや製作・マーケティングシミュレーションなどの実践的演習を通して内在化することを目的としている。なお、本教育プログラムでは、大学院情報学環の他、大学院新領域創成科学研究科、大学院情報理工学系研究科、大学院人文社会系研究科、大学院工学系研究科、国際・産学共同研究センター（、先端科学技術研究セン

ターに所属する教員、ならびに、産業界から国際的な業績をあげている専門家の協力を得て被養成者の選考、授業の実施およびカリキュラム開発を実施している。また、企業からはインターンシップの受入を通じた協力も得ている。

参考として平成19年度開講科目を以下に示す。

科目区分	科目名・タイトル名	学期	曜日・時限	単位	修了要件
	デジタルコンテンツ創造科学特別講義	夏	夏季集中	2	—*1
デジタルコンテンツ創造科学講義	コンテンツ制作理論	夏	火・5	2	3科目(6単位)以上
	コンテンツ制作技術論	冬	月・5	2	
	グローバルストラテジー論	冬	金・6	2	
	コンテンツ法務	冬	木・6	2	
	コンテンツ財務	夏	木・6	2	
	コンテンツ文化史	夏	月・6	2	
エンタテインメントテクノロジー研究	バーチャルリアリティ	夏	金・2	2	2期生・3期生*2 2科目(4単位)以上
	コンピュータグラフィックス	夏	木・2	2	
	コンピュータグラフィックス	冬	木・2	2	
	コンテンツデザイン	夏	木・2	2	
	デジタル映像処理	冬	水・4	2	4期生*3 1~3科目(2~6単位)以上*3
	ゲームテクノロジー論	夏	水・6	2	
	コンテンツ知覚心理	夏	木・3	2	
	制作展示プロデュース	通	火・6	2	
	インタフェースデザイン	夏	水・5	2	
	先端科学技術と芸術表現論	夏	月・2	2	
	検索技術と情報ビジネス	冬	金・3	2	
デジタルコンテンツ創造科学演習	インターンシップ	通年	—	6	6単位
	製作・マーケティングシミュレーション ゲームプロデュースゼミ	通年	火・6-7	6	
	製作・マーケティングシミュレーション アニメーション企画ゼミ	通年	木・5	6	
	製作・マーケティングシミュレーション Webサイト企画ゼミ	通年	木・4	6	
	製作・マーケティングシミュレーション フィルムプロデュースゼミ	通年	—	6	
	製作・マーケティングシミュレーション 展示・出版プロデュースゼミ	通年	—	6	
	論文作成	通年	—	6	
デジタルコンテンツ創造科学特論	作品研究	通年	夏・火・6 冬・火・5	2	2期生・3期生*2 2科目(4単位)以上
	アニメーション制作理論	冬	水・5	2	4期生*3 1~3科目(2~6単位)以上
	ゲームプロデューサー論	冬	水・6	2	
	映画産業論	冬	土・4	2	
	デジタルメディア	冬	金・5	2	
修了要件単位数(修了に必要な総単位数)					20単位

*1 演習科目以外の任意の科目群(講義・研究・特論)の単位として認定する。

*2 平成17年度および18年度に認定した履修生

*3 平成19年度に認定した履修生

修了者の認定

修了認定は、各科目群の必要単位数を満たし、かつ、その合計が20単位以上の被養成者を対象に行われる。平成20年2月13日に行なわれた修了判定会議では、被養成者の取得単位数および履修状況などから総合的に判断した結果、平成19年度修了者として21名が認定された。なお、平成17年度修了者12名および平成18年度修了者26名とあわせると、59名の修了者がゲーム開発企業、アニメーション制作企業、放送局、広告代理店などのコンテンツ業界に就職、あるいは本学に引き続き在籍し、技術開発者あるいは教育的指導者となるべく研究活動に従事している。

2.7.3 ベネッセ先端教育技術学講座（寄附講座）

ベネッセ先端教育技術学講座（3.2.2を参照）では、教育活動として以下の2点に力を入れている。

・学際情報学府の教育活動との有機的連携

BEATで行われている研究プロジェクトに対する学際情報学府の大学院生の参加を奨励し、研究プロジェクトがそのままプロジェクト学習の基盤になるような工夫をしている。その中で特に研究プロジェクトに関心を持った学生については、研究プロジェクトの中で修士研究を行うなどの配慮をすることにより、先端教育技術に関する教育活動の拠点になっている。

・公開講座による社会還元的教育活動

一般社会に対して、先端教育技術に関する知見やノウハウの教育活動を行うため、3ヶ月に1回のペースで公開研究会 beat セミナーを開催している。昨年度開催された公開研究会は、以下の通りである。

第1回：知育玩具 ―創造的製作活動をアフォードする人工物―（2007年6月2日）

第2回：BEAT 特別セミナー オープンエデュケーションが切り開く未来 ―Education 2.0:OCWの次にくるもの―（2007年8月25日）

第3回：子どもの放課後学習環境（2007年12月1日）

第4回：BEAT 特別セミナー 未来の教育のために学校と家庭ができること ―フィンランドと日本の対話―（2008年3月29日）

2007年度はのべ500名を超える参加者が公開研究会に参加している。この中には、学生・大学教員に加え、教材開発を行っている社会人も数多く含まれており、デジタル時代の学習コンテンツ・システムに関する最新の知見を伝える機能を果たしている。

2.7.4 電通コミュニケーションダイナミクス寄付講座

情報学環では、株式会社電通からの寄付を受け、2007年度から2009年度の予定で、電通コミュニケーションダイナミクス寄付講座を設置し、研究を行っている。寄付金額は3年間で5千万円である。

研究目的は、急速に大きな構造変化を遂げつつあるメディア環境・コミュニケーション環境を背景に、メディアや広告が担う経済価値の変化、人々のコミュニケーション行動やメディア文化の変容、メディア制度の変化、さらに、情報発信の倫理やジャーナリズム、情報通信技術と社会の関係のあり方などを、総合的な視野にたつて研究することにある。メンバーは、情報学環の常勤教員のほか、外部の特任研究員から構成されている。

2007年度には、6回の研究会や授業を開催するなど、着実に研究を進めている。研究活動については、ウェブサイト(<http://dcom.iii.u-tokyo.ac.jp/>)を通じて積極的に公開している。詳しくは「II. 資料 16 電通コミュニケーションダイナミクス寄付講座」を参照されたい

2.7.5 OKI ユビキタスサービス学寄附講座

「OKI ユビキタスサービス学」寄附講座は、沖電気工業株式会社（以下 OKI）の寄附により平成19年4月に情報学環に開設された。情報学環では、21世紀 COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」（拠点リーダー：坂村健・教授）と呼ぶ拠点形成プログラムが進められており、既にユビキタス情報分野の世界的な研究教育拠点となっている。一方、OKIは企業ビジョンとして「ユビキタスサービスにあふれる e 社会」を掲げており、こうした東京大学における取り組みにご賛同いただき、相互に協力して本寄附講座の開設に至ることができた。

本講座の目的は、体系的な調査・分析および実践を通して、ユビキタスサービスに関する知見を深め、その実現に向けた研究開発を行うことで社会貢献を果たすことにある。そして、本講座で追求するユビキタスサービスに関する学問体系をユビキタスサービス学と呼び、本講座名に冠した。

本講座は、坂村健教授と新規に採用する数名の若手教員が中核となり、研究面では21世紀 COE の拠点形成プログラムと、教育面では学際情報学府総合分析情報学コースと連携して、研究教育活動を推進している。平成19年度は、21世紀 COE プログラムと共同で、本講座のキックオフを記念するシンポジウムを平成20年2月に開催した。

2.7.6 ユビキタス情報社会基盤学寄附講座

「ユビキタス情報社会基盤学」寄附講座は、凸版印刷株式会社の寄附により、東京大学大学院情報学環に平成19年10月1日に開設した。本寄附講座は、ユビキタスコンピューティングの基盤技術と、それを核とした社会イノベーションに関する研究教育の実施することを目的とし、ユビキタスコンピューティングシステムの基盤技術や、それが社会に与えるインパクトや影響の分析に取り組む。それによって、ユビキタス情報社会の基盤となる基礎学問分野を確立したいと考えています。その研究活動は、21世紀 COE プログラム「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」（拠点リーダー：坂村健）と、更に教育活動においては、大学院学際情報学府 学際情報学専攻 総合分析情報学コースと密な連携をして進めていきます。平成19年度は、21世紀 COE プログラムと共同で、本講座のキックオフ

を記念するシンポジウムを平成 20 年 2 月に開催した。

3. 研究活動

3.1 概況

研究組織としての情報学環は、異領域の出会いの場である。同じ学問領域の研究者が集まり、その集積性によってその学問領域の体系化を図り、またそれまで解決できなかった問題に突破口を開こうとする目標の立て方とやり方が存在する。しかし、情報学環は違う目標をもっており、違うアプローチを採っている。情報学環は学際情報学という新しい学問を創出するという目標をもっており、異なった学問領域の研究者に出会いの場を提供し、異種交配と相互越境というやり方によって、それを達成しようとしている。そのような研究組織は規模においてそれほど大きいものである必要はないが、しかし特有の研究組織論が必要とされる。

3.1.1 文理の相互作用と連携

伝統的に日本の大学においては、学問研究は文系と理系に大きく分けられてきたし、現在もそれが生きている。新しい分野、とりわけ学際情報学にとっては、その区分けを乗り越えて、文理連携、文理越境、文理相互浸透が必要であり、それなくして発展の展望はない。情報学環は最初からそのような文理連携の研究組織論に基づいて設立されたものである。しかも、その文理の比重がどちらかに大きく偏ることなく、バランスを取っているのが大きな特色である。

現在、情報学環では大小合わせてさまざまな文理連携型の研究プロジェクトが実施されている。なかでも最大のものが 21 世紀 COE「次世代ユビキタス社会基盤の形成」(研究リーダー：坂村健教授、副学環長)である。その予算規模は科学研究費補助金や寄附講座などを含めた学環の研究資金全体の 4 分の 1 を占めており、運営費交付金分の金額をさえ上回っている。その研究内容は、文理連携の下に次世代ネットワーク社会を大胆に構想している。その創造性が高く評価されて採択されたものと考えられる。情報学環のスタッフ体勢は、こうした文理連携の大型研究プロジェクトを自前でカバーしていくことができるのである。

そして、文理連携の 21 世紀 COE は、組織の財政上、情報学環ならではの効用とメリットを発揮することになった。国立大学に対する現在の財政政策の仕組みでは、文系の資金獲得には限界があり、困難が伴う。理系が必要とするような大きな額ではないにも関わらず、文系が運営費交付金や競争的資金を新たに得るのは容易なことではない。しかし、文理連携の研究計画のもとに 21 世紀 COE という競争的資金が獲得できたことによって、結果的に文系の研究分野へ資金が流れ、これまで経済的な理由からできなかった研究活動を展開できるようになったのである。これは、文理連携で情報学を構築していくという組織論が、財務上も有益な影響を生み出していることを物語っている。こうした研究資金状況の改善によって、文系は文系の側から文理連携の企てを積極的に展開していくことが可能になったのである。内部相互補助のやり方だと言えよう。

3.1.2 流動教員制度

情報学環独特の仕組みとして、流動教員制度がある。これは設立当初、学内の情報関連教員を糾合し、ネットワーク組織型に新しい大学院を創設するため、学内関連部局の協力を得て作り出されたものである。これにより、情報学環に所属する教員には、基幹教員と流動教員の2種類が存在する。基幹教員は、情報学環に固有のポスト、すなわち基幹教員枠（部局の「採用可能数」として割り当てられているポスト）で採用されている教員である。その教員室のスペースも学環によって手当てされている。それに対して、流動教員は、流動元の部局から情報学環へ時限で振替られている流動教員枠を使って、流動元の部局よりやはり時限で配置換えになって情報学環に所属している教員である。その教員スペースは現状では情報学環として手当てすることができず、流動元部局のスペースをそのまま使用している。

この流動教員制度により、情報学環の研究組織は研究者の循環と入れ替わりの仕組みを内蔵しており、もって研究活動に常にイノベーションの条件を保障しようとしているのである。流動教員の立場からすれば、情報学環に流動教員として参加することによって、元部局とは異なった学際的な教育研究環境に入ることが可能であり、また研究所が元部局の教員にとっては大学院教育に通常の義務と権利で加わる機会が得られることとなる。こうした条件が研究者同士に新たな刺激を生み出すとともに、従来の枠を脱する糧となると見込まれている。こうした組織論による利得は、現在、大小さまざまな研究プロジェクトの活動に見て取ることができる。

3.2 大型研究プロジェクト

3.2.1 文部科学省 21 世紀 COE 「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」

現在、状況認識技術（Context-awareness）を中核とする新しい情報分野（ユビキタスコンピューティング）の研究が世界的な大きな潮流となっている。ユビキタスコンピューティングは、世界に先駆けて本拠点リーダー（坂村）が 1984 年に開始したトロンプロジェクトの技術目標に掲げたコンセプトである。こうした経緯もあり、我が国は本分野において世界を先導しうる技術水準を有する。しかし、学術分野・産業分野双方で世界的に活発な研究開発がなされており、本分野の重要性は現在の世界的な共通認識となっている。そのため、本分野の研究の推進は、激しい国際競争の中で遅れをとらないためにも必須のものである。ユビキタスコンピューティングの適用分野は多岐にわたり、既に農学、医学、薬学、地理学、生物学等の諸学問分野をはじめ、災害支援や社会安全の実現、国土産業社会インフラ等の国家レベルの施策への適用も期待されており、本分野の研究レベルや技術競争力の低下は、我が国の将来の国力低下に直結する。したがって、ユビキタスコンピューティング分野の研究教育を積極的に推進することは緊急度と重要度が極めて高い。そこで、東京大学大学院情報学環が核となり、東京大学はユビキタスコンピューティング技術やそれを様々な分野に適用する研究や、当該分野の人材育成を行う教育のための拠点として、文部科学省 21 世紀 COE プロジェクトを平成 16～20 年度の 5 年計画で開始した。本拠点における研究は、基礎技術研究、応用技術研究、社会適用研究の 3 つの分野からなる。

(1) 基礎技術研究

ユビキタスコンピューティングにおける状況認識技術の核となる、超小型 RFID やセンサーネットワーク、リアルタイムシステム、組込みシステムなどの基盤情報技術の研究を実施する。更に、こうした要素技術を組み合わせて社会レベルの巨大システムを構築するためのトータルアーキテクチャの研究にも取り組む。

(2) 応用技術研究

ユビキタスコンピューティングの状況認識技術を、他の様々な分野に適用する応用研究を実施する。例えば、農学分野に適用する食品トレーサビリティ研究、医薬分野に適用する医薬品のトレーサビリティや医薬品の適正利用支援システム研究、交通分野に適用したユビキタス場所情報システム研究などの応用研究に対して、各種分野の研究者と連携して取り組む。

(3) 社会適用研究

ユビキタスコンピューティング技術を社会基盤として適用する際の社会的課題についての研究も行う。例えば、ユビキタスコンピューティング技術によって提供されるコンテンツの構成方法に関する課題、セキュリティやプライバシーの問題、法制度などの問題を検討し、最終的には政策提言を行うことを目指す。

ユビキタス情報技術研究プロジェクトは、常勤教員 10 名、特任教員 8 名、特任研究員 1 名、RA1 名によって構成され、主にユビキタスコンピューティングの基盤技術の研究分野である。ユビキタス情報社会国際研究プロジェクトは、常勤教員 7 名、特任教員 3 名、特任研究員 1 名、RA3 名により構成され、主にユビキタスコンピューティング技術を社会に適用するとき社会的な課題、あるべきユビキタス情報社会のあり方の研究分野である。ユビキタス情報コンテンツ形成プロジェクトは、常勤教員 4 名、特任教員 1 名、RA4 名によって構成され、コンテクストアウェアな情報配信を、社会規模で実施するために必要なコンテンツ記述技術の研究分野である。更に本拠点は、世界におけるユビキタスコンピューティング分野の研究教育のハブとしての役割を果たすべく、世界中の様々な大学や企業との共同研究や共同実験の実施、関連する政府機関等との密接な連携を行い、プロジェクトを推進している。

■ 総括班

坂村 健・教授（拠点リーダー）
須藤 修・教授（拠点リーダー補佐）
石崎 雅人・准教授（総括調整）
越塚 登・准教授（総括調整）

■ プロジェクト A:ユビキタス情報コンテンツ形成プロジェクト

馬場 章・教授（統括）

橋本 良明・教授
石田 英敬・教授
西野 嘉章・教授（総合研究博物館）
添野 勉・特任教員
大島 十二愛・RA
倉持 基・RA
松田 好史・RA
山下 大輔・RA

■プロジェクト B:ユビキタス情報技術研究プロジェクト

坂村 健・教授（統括）
原島 博・教授
辻井 潤一・教授
河口 洋一郎・教授
中川 裕志・教授（情報基盤センター）
清水謙多郎・教授（大学院農学生命科学研究科）
石崎 雅人・准教授
越塚 登・准教授
中尾 彰宏・准教授
石川 徹・准教授
大石 久和・特任教授（国土技術研究センター 理事長）
篠塚 勝正・特任教授（沖電気工業社長）
井村 亮・特任教授（日立製作所 情報・通信グループ. ミューソリューション事業部長）
岸上 順一・特任教授（NTT サイバーソリューション研究所所長）
石田 忠正・特任教授（日本郵船株式会社代表取締役）
石川 雄章・特任教授
小林 真輔・特任准教授
Wesley Dean Charles Hay・特任講師
富田 啓一・特任研究員（非常勤）
神尾 真人・RA

■プロジェクト C:ユビキタス情報社会国際研究プロジェクト

吉見 俊哉・教授（統括）
西垣 通・教授
濱田 純一・教授
須藤 修・教授

佐倉 統・教授
水越 伸・准教授
林 香里・准教授
竹之内 禎・特任講師
山本 拓司・特任教員
D. ビュースト・特任教員
西 兼志・特任研究員
阿部 卓也・RA
高畑 一路・RA
中路 武士・RA

19年度は、現在までの研究内容を踏まえた上で、ユビキタス技術の研究開発やその社会適用、コンテンツの形成など、本質的な部分の研究を推進した。また、教育プログラムは、昨年度同様、総合分析情報学コースとの連携を行い、拡充を図った。デジタル・アーカイブに関しては、世界でも広く利用されるダブリン・コア (Dublin Core) に基づいたデジタル・アーカイブを構築、これに基づいたメタデータとオントロジー・マップの活用により、資料間の意味連関と構造を持たせた、新たな概念に基づくアーカイブとして稼働させることに成功した。また、ユビキタス型情報配信を前提とする各デジタル・アーカイブの整備を進める一方で、これらのコンテンツを用いた研究・教育活動の実験を行った。また技術面では、歩行者ナビゲーションシステムの研究開発をさらに進め、大規模な実証実験にて実用性の確認を行うことができた。さらには、ユビキタスコンピューティングを実現するデバイス群の開発を行い、小型レシーバー、シューズリーダ、携帯型端末などの機器を開発し、研究の基礎となる土台の確立を行った。また、COEシンポジウムを平成 19 年度は 4 回開催し、研究教育の方向性の確認や問題提起を盛んに行った。

3.2.2 文部科学省 セキュア・ユビキタス・コンピューティング・プラットフォーム構築のための基盤アーキテクチャの研究開発および検証

本研究では、ユビキタスコンピューティング環境をセキュアにする基盤技術の提案を目的としている。基盤技術として (1) 大容量、高速演算及び通信能力を有し、多様なデータを堅牢制御及び管理する、耐タンパ型高性能セキュリティチップ、(2) 軽量ユーザ端末等を構築するための、セキュリティ機能を強化した基盤ソフトウェアを開発するを行った。

(1) に関しては、平成 18 年度に開発した UT01、UT02 の評価を元に、最終成果物である UT03 のセキュアチップの開発を平成 19 年度に実施した。新型のセキュアチップには電子署名検証ならびに生成機能、マルチアプリケーション対応、ucode によるグローバルファイルシステム機能などを搭載した。32 ビットの CPU、暗号化回路を搭載し、64MB の大容量フラッシュメモリを搭載している。

(2) に関しては、セキュアチップと連動する組み込み向けのリアルタイム OS の開発を進めた。平成 19 年度は、セキュアファイルシステムの開発を実施し、セキュリティチップと連動したファイ

ルシステムの構築に成功した。

さらに、本セキュアプラットフォームの応用として、電子お薬手帳システムの開発を進めた。セキュアチップにユーザの個人の薬歴やアレルギー歴などを記録し、それらの情報と薬の情報を照らし合わせることで個人個人に合わせた飲み合わせ情報の提示が可能となる。18年度に検討した方式に従って、平成19年度に実装を行い、セキュアチップを用いて検証などを行った。

3.2.3 NEDO「情報家電用マルチメディアセキュアチップ TRON-SMPの研究開発」

デジタル家電が普及し、広帯域網の整備やデジタル放送の開始にもかかわらず、デジタルコンテンツビジネスは大きく開花していない。原因の一つには、コンテンツ保護や課金処理の技術が十分でなく、著作権侵害の危機が迫っていることがある。著作権保護を強固に行いつつコンテンツ配信を可能にする新しい方式としてマルチメディアセキュアチップ TRON-SMP の研究開発を行っている。TRON-SMP は、暗号の復号処理や課金を行うセキュアな H/W チップ技術を元にマルチメディアストリーミング処理機能を追加した H/W チップである。Internet Commerce 等における電子マネーや電子チケットのデータの処理のためのネットワーク対応型チップであること、オープンなセキュアチッププラットフォームであることに加え、マルチメディアストリーミング処理と課金処理を同時に安全に行える耐タンパ型セキュアチップ TRON-SMP を実現する。TRON-SMP は、暗号化されたデジタルコンテンツにたいして復号処理と課金処理を分割することなく処理することを可能とする。これにより、課金漏れやデータのコピーによる著作権侵害などを防ぐことができる。TRON-SMP の特長としては、(1)「鍵」のポータビリティを利用したコンテンツの利用範囲制限、(2)耐タンパチップによる高いセキュリティレベルの実現、(3)特定の画像処理方式に依存しないアーキテクチャ、(4)課金と視聴をアトミックな処理として実現、(5)特許フリーでオープンな課金方式、が挙げられる。鍵の利用範囲に関しては、TRON-SMP をコンテンツ利用時の鍵として用いることによって明示的にコンテンツが利用できる範囲を制限することができる。コンテンツを無制限に利用させるのではなく、TRON-SMP が機器に接続されている場合のみ、コンテンツ利用を制限することで不正利用をなくすることができる。また、耐タンパチップにて実装することにより、クラッキングや解析により不正にデータを盗まれることはない。さらに、ソフトウェア上でストリーミング処理するのではなく、ハードウェア上で行うため、高いレベルのセキュリティを実現することができる。

本研究開発は、東京大学大学院情報学環、株式会社ルネサステクノロジ、パーソナルメディア株式会社の3社による共同研究である。それぞれ、東京大学がコンテンツ配信サーバならびに視聴端末の開発、ルネサステクノロジがマルチメディアセキュアチップ TRON-SMP の開発、パーソナルメディアが視聴端末のソフトウェアプラットフォームの開発を行った。東京大学においてはコンテンツ配信サーバの実装および、TRON-SMP を実装した視聴端末を開発し、TRON-SMP を用いたコンテンツ視聴システムを開発した。Full-HD サイズの H.264 形式の動画像をサーバ上で暗号化したファイルをネットワーク経由でダウンロードし、ファイルを TRON-SMP 内部でリアルタイムに復号、課金するメカニズムを確立した。

3.2.4 大型有形・無形文化財の高精度デジタル化ソフトウェアの開発

東京大学池内研究室が開発してきた大仏等の大型物体の3次元デジタル化技術および、京都大学松山研究室が開発してきた人間の動作を立体映像として記録する3次元ビデオ技術を基に、能・日本舞踊などの無形文化財および、寺院・遺跡などの大型有形文化財を対象とした高精度デジタル化ソフトウェアの開発を実施する。

東京大学では、大型有形文化財の高精度デジタル化ソフトウェアの開発を担当している。平成19年度の研究開発の成果概要を以下に示す。

(1) 大規模色彩データ計測システムの開発 RGB型・色彩取得センサを用いた簡易大規模色彩データ取得システムの開発

高解像度RGB型センサを複数台組み合わせた、屋外の大型有形文化財のための大規模色彩データ取得システムを開発した。本システムは、高精度に位置合わせされた複数台RGB型センサにより対象物と周囲の光学情報を同時に取得するものである。そして取得された光学情報と大規模距離画像を入力とし、絶対的輝度成分を含む色彩情報を求めることができる。大型有形文化財に対応するため、1入力で10メートル四方の範囲までの色彩データ取得が可能である。この手法により大規模物体の任意光源環境下での色彩情報シミュレーションも可能となる。本年度は試作システムを開発し、文化財に適用して性能評価を行った。

(2) スペクトル分布型・色彩取得センサを用いた高精度・高効率色彩データ計測システムの開発

上記の色彩データ取得システムはRGB型で、主に屋外の大型物体を対象としているが、文化財を扱う上では屋内にその解析を必要とする重要な色彩データ、壁画や装飾、が数多くある。そうした色彩データに使用された顔料の解析ができればオリジナルの色、すなわち、文化財が作られた当時の色彩を再現する道が開かれる。そのためには、色彩データを空間的かつ波長方向に高解像度な、高精度色彩データ計測システムが必要となる。本年度開発したシステムは、昨年度開発した二次元的に分光反射率情報（波長方向に高解像）を計測するシステム（センサ①）を基盤に、空間解像度の高い色彩取得センサ（センサ②）を併合し、短時間で広範囲に渡る色彩データ計測が行える。センサ①により取得する分光反射率情報は各点毎に380ナノメートルから780ナノメートルの範囲を4ナノメートル間隔で8ビット（センサの仕様上は16ビットまで可能）の精度である。こうして得られた分光反射率情報の空間的補間を、センサ②によるデータの領域分割、及び領域ごとの分光情報との対応付けにより自動的に実現できる。本システムを用いて大規模文化財の分光情報を計測し、性能を評価した。

(3) パーチャルバイヨン：ウェブ上における大型有形文化財データのインタラクティブ表示・データ検索システムの試作

大型有形文化財の例として、（縦；約100メートル）×（横；約100メートル）×（高さ；50メートル弱）の大きさを持つカンボジア王国アンコール遺跡群の1つであるバイヨン寺院の3次元データをインタ

ーフェイスとして、寺院に関する様々な情報を検索することが可能なシステムを構築した。昨年度までに計測した結果、これら 3 次元形状データの総量は 0.25 テラバイトにも上っている。本年度は、モデル化されたバイオン全体の 3 次元データをリアルタイムに表示する手法を開発し、表示された 3 次元データを利用して、尊顔、ペディメント、レリーフといった詳細データ(0.25TB の一部)や、写真、図面、保存・修復の情報 (0.25TB の 3 次元形状データには含まれない、ユーザ定義の情報) といった様々なデータにインタラクティブにアクセスできるシステムを開発した。また一般ユーザを対象として、ウェブ上で利用可能なシステムへの拡張を検討した。

(4) e-Monument : 高速ネットワーク・遠隔情報収集・デジタルデータに基づくオンライン・オンライン大型有形文化財遠隔体験システムの試作

インターネットを介することで、家庭や職場に居ながらにして、遠隔地にある有形文化財を仮想的に観光できるシステムの構築を試みた。ここで対象とする大型有形文化財とは、個別の建築物でなく、最終的には保存地区や小さな村全体といったレベルの 1 キロメートル四方といった街並みの範囲までを指す。仮想環境提示の際、これまで構築してきた手法により取得した 3 次元形状データを用いたモデルベースドレンダリングの手法のみでなく、全方位カメラにより取得された動画像を用いたイメージベースドレンダリングの手法を適宜組み合わせることで、それぞれのシステム利用者のネットワークバンド幅や PC の性能の違いに効率よく対処する方法の構築を行った。

(5) 幾何・色彩処理ソフトウェアの一体化・パッケージ化ならびに商品化の検討

これまでに開発したソフトウェア群を統合し、昨年度まで取得してきた 3 次元計測データ 0.25TB 以上を擁する大型有形文化財をモデル化するために必要となる一連の処理が可能なソフトウェアの開発を行った。本ソフトウェアでは、幾何データで 0.25TB、および、1000 枚オーダーの色彩データを扱える。データフォーマットの統一、ユーザインターフェイスのデザインなど、パッケージ化における種々の問題を洗い出し、これらの解決方法について検討を行った。また市販ソフトウェアに対する優位性や、市場規模などを再調査し、一体化・パッケージ化されたソフトウェアの商品化の可能性について検討を進めた。

3.2.5 超高精細映像と生命的立体造形が反応する新伝統芸能空間の創出技術

本研究は、日本古来の伝統空間における壁、間仕切り、装飾品などを、生物的・自然的な超高精細 CG からなる、繊細かつ濃密な紋様で装飾し、また、それらの空間構成要素が造形物として、情感的・美的・知的かつダイナミックに振舞う事の出来る、新しい日本の伝統芸能空間：「超高精細映像と生命的立体造形が反応する新伝統芸能空間」を生み出す事を目指している。

平成 19 年度においては、自然的・生物的 CG アルゴリズムの開発を基礎として、実際の伝統的襖への応用、超高精細映像への応用を試みた。また、情感的・知的かつ芸術的な造形物を構築するための基礎的な方法論の構築、および、制御機構の開発を試みた。

自然的・生物的 CG に関しては、流体の物理シミュレーション、流体と軟体の相互作用、および 4

次元空間の描画、以上3つを柱として研究を行った。特に、流体演算の拡張による砂時計のシミュレーション、イソギンチャクのシミュレーション、亜光速による運動物体の歪みの可視化、の基礎研究を行った。

また、CGに連動して3次的にスクリーン表面を変化させる事が出来る Gemotion screen を用いて、新伝統芸能空間の構成要素としての襖への応用を試み、SIGGRAPH'07 Art Gallery において発表展示を行った。

生命的立体造形に関しては、プロトタイプ制作を通して、デザインを網羅的に模索した上で、ロボットとして実際に実装するデザインを2,3点に絞りこんだ。またこれと並行し、脚式でも車輪式でもなく、従って、多くのデザインに対して幅広く柔軟に実装可能であり、デザインの芸術的価値を損なう可能性が少なく、かつ、専門的な制御の知識がないユーザーも実装・応用する事が可能な、新しい移動機構の開発・検証を行った。また、ロボットが実世界において安定した行動の生成を実現するための運動制御機構の開発・シミュレーションにおける検証を行った。さらに、エモーショナルな実世界エージェント構築に向けて、生物の情動生成原理を基にして、身体を震わせる事によって閾値以下の微弱な信号を抽出するための能動知覚システムを構築し、その性能評価を行った。

さらに、超高精細映像に関しては、8k4k レベルの超高精細スーパーハイビジョン映像で粗さが目立たない繊細なCGをレンダリングするためのシステムの構築に向けての設計検討を行い、特に今年度は独自にメタボールのアルゴリズムを開発し、実験・検討を行った。また、NHK 放送技術研究所の協力を得て、8k4k のプロジェクションシステムを用いて、動画作成から投影までの一連の実験を行い、また、具体的にどのような効果を持つ映像体験が可能になるのか、検討・実験を行った。

3.2.6 その他の大型研究プロジェクト

上述のように情報学環として組織的に遂行するもののほか、各教員が中心となって行う研究プロジェクトでも、以下の例（事業規模1千万円以上）に示すとおり、大型研究プロジェクトを積極的に展開している。（すべての外部資金による研究の状況は、IV. 外部資金獲得状況を参照のこと）

<科学研究費補助金(金額は直接経費分)、学環教員が研究代表者となっているもの>

須藤 修 2006-2010 特定領域研究 「知識社会経済システムの共創的發展とそのガバナンスに関する研究」(須藤修、田中秀幸、後藤玲子、中島直樹) 67,500 千円

開 一夫 2006-2008 基盤研究(A) 「ヒトとロボットの原初的コミュニケーションに関する発達認知神経科学的研究」(開 一夫、石黒浩、今井倫太、板倉昭二) 37,900 千円

山内 祐平 2006-2008 基盤研究(B) 「把持状態を利用したウェアラブル展示教材の開発」(山内 祐平、奈良高明、堀田龍也) 15,700 千円

吉見 俊哉 2004-2007 基盤研究(B) 「20世紀後半の東アジアの都市大衆文化における「アメリカ」の受容と反発：日本、韓国、台湾、フィリピンを中心に」(吉見俊哉、姜尚中、水越伸、伊藤守、小倉利丸、岩渕 功一、田仲康博、多田治、毛利嘉孝) 14,200 千円

河口 洋一郎 2005-2007 基盤研究(A) 「生き物のように凹凸反応する情感的な屏風画像装置システムの創出」(河口洋一郎、橋本康弘、堀聖司、原田隆宏、米倉将吾) 34,900 千円

石田 英敬 2005-2007 基盤研究(B) 「テレビ・コンテンツ分析の情報記号論的研究とハイパーメディア型事典の作成」(石田英敬、吉見俊哉、水越伸、増澤洋一、水島久光) 14,900 千円

本郷 和人 2006-2009 基盤研究(B) 「歴史史料と中世都市の情報学的研究」(本郷和人、五味文彦、安田次郎、藤原良章、鋤柄俊夫、近藤成一、新田一郎、本郷恵子、高橋慎一郎、前川祐一郎、井上聡、高橋典幸、西田友広、中島圭一) 15,600 千円

原島 博 2007-2008 基盤研究(B) 「空間共有通信を軸とした3次元光線情報処理技術の体系化」(原島博、相澤清晴、苗村健) 11,600 千円

深代 千之 2007-2010 基盤研究(B) 「ユビキタスによるトータルウェルネスシステムの構築」(深代千之、坂村健、越塚登、金久博昭、ヘイ ディーン) 14,700 千円

澤田 康文 2007-2009 基盤研究(B) 「薬物胎盤移行と作用のPK・PD評価に基づく胎児毒性予測システムの構築」(澤田康文、大谷壽一、堀里子、藤井知行、月森清巳) 14,400 千円

* 厚生労働科学省研究費

山本 隆一 2007-2009 厚生労働科学研究費「医療機関等が作成する書類の電子化の様式及び標準化に関する包括的研究」28,000 千円(=平成19年度)

<その他外部資金関係>

池内 克史 2007 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業(CREST)「油絵描画ロボットに関する研究」 28,600 千円

馬場 章 2007 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業(CREST)「オンラインゲームの教育目的利用のための研究」 18,200 千円

水越 伸 2007 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業(CREST)「メディアを活用

した市民芸術に関する俯瞰的理論と実践プログラムの研究・開発」 10,270 千円

大島 まり 2007 科学技術振興機構 社会技術研究開発事業「先端研究者による青少年の科学技術リテラシー向上」 15,025,400 円

吉見 俊哉 2007 「荒川下流域のはん濫に備えた住民意識・避難行動に関する調査」 17,325 千円

3.3 社会情報研究資料センターの役割

大学院情報学環附属社会情報研究資料センターは、1964 年 1 月、当時の新聞研究所内に開室された「プレスセンター」が 1967 年 6 月、新聞研究所附属施設「新聞資料センター」として正式に発足し、1992 年 4 月に新聞研究所が社会情報研究所に改組されるにあたって「情報メディア研究資料センター」と改称されたものである。2004 年 4 月、大学院情報学環・学際情報学府と社会情報研究所の統合に伴い、「社会情報研究資料センター」と改称し、今日に至っている。

本センターは、新聞資料を中心とした各種メディア情報資料を収集・整理し、学内外の研究者の利用に供することで、社会情報学に関する研究の発展に寄与している。現在、本センターの収蔵資料は製本済原紙約 20,000 冊、縮刷版約 8,000 冊、マイクロフィルム約 45,000 リールに達している。これらの新聞資料は情報学環書庫のほかに、駒場キャンパス内の旧宇宙航空研究所跡地などに別置されている。

センターの閲覧室には、利用者のために各種データベース閲覧用 PC3 台とマイクロフィルムのデジタルデータ変換機能をもつマイクロリーダーを本年度新規に設置して利用者の便宜を図ると共に、従来のマイクロリーダーも継続利用して需要に答えている。また、本センターの定期刊行物として「社会情報研究資料センターニュース」を刊行している。

3.3.1 新規教育研究事業「社会情報研究資料センターの高度アーカイブ化事業」

社会情報研究資料センターは、開設から 40 年以上が経過し、現在・将来の研究需要に応えるための環境整備が強く求められており、特に貴重な研究資源をより有効に活用するための最新技術の導入が急務である。その必要性和緊急性に鑑み、大学本部より予算措置を得、2007 年 4 月より 5 年計画で新規教育研究事業「社会情報研究資料センターの高度アーカイブ化事業」（高度アーカイブ化事業）に着手した。事前措置により 2006 年度後半より一部設備の改装などを行い、今年度より本格的に事業を開始した。

高度アーカイブ化事業では、1. 整理保存機能の高度化、2. 利活用機能の高度化、3. 教育研究機能の高度化、4. 情報化アーカイブ機能全般の高度化、という 4 つの観点の高度化理念に基づき、メディア資料アーカイブの情報学的な構造化を推進している。この具体化のための事業方針として、以下の 5 点を基本方針とし、課題の解決に積極的に取り組んでいる。

- ・利便性・公開性の向上

- ・既存のアナログアーカイブのデジタル化
- ・劣化マイクロフィルムの救済と貴重資料の保管システムの整備
- ・新規デジタルアーカイブの構築
- ・情報ネットワークの構築

また、本センターが取り扱う対象資料を従来の新聞を中心とした資料から拡大し、雑誌や写真など、幅広いメディア資料へと拡充するとともに、資料の受入・整理・配架・閲覧・保存という一貫したプロセス確立のため、先端技術を導入して研究環境の大幅な向上を図っている。以下に記す事項は、このうち 2007 年度に遂行した事業である。

3.3.2 閲覧室の環境整備とデジタル化対応

高度アーカイブ化事業によって最初に着手したもののひとつとして挙げられるのが、閲覧室の環境整備とデジタル化の進む研究環境への対応である。2007 年度当初、ふたつの閲覧室が本センター内に存在していたが、これを「第一閲覧室」「第二閲覧室」としてそれぞれ整備を行い、大幅な整理と機材の交換、新規データベースの導入などを実施した。

特に第一閲覧室については、旧式の PC を一掃、Dell 製の PC3 台とデータベースサーバ PC を設置し、読売新聞のデータベースを閲覧可能とした。現在、このほかにもデジタル化されたデータベースの購入を進めており、次年度以降、順次各 PC から閲覧可能にする予定である。また、マイクロフィルムリーダーについても、旧来の保有機材のうち実用に耐えうるものを残し、新たにキヤノン製のマイクロフィルムリーダーを導入した。これはマイクロフィルムを jpeg 画像に保管することのできる機材であり、紙利用の削減という環境問題への対処とデジタル化への対応をこれにより同時に成し遂げた。このほか、資料閲覧用大机を新たに導入し、案内の各種サイン表示も整備・増強するなど、利用者の閲覧環境の向上に努めた。

3.3.3 貴重資料保存書庫の設置

社会情報研究資料センターでは、旧新聞研究所所長であった小野秀雄氏のコレクションをはじめとして、数多くの貴重な資料を収蔵している。その中には明治時代初期の国家の中心的人物であった大久保利通関連の写真資料や、本学と縁の深い坪井正五郎博士（日本の人類学・考古学の礎を築いた人物）の資料を中心とした「坪井家寄託資料」などの寄託資料も多く、これらの保存環境の改善は急務と考えられる。

2007 年度は、高度アーカイブ化事業の予算措置によってこの保存環境問題にも取り組み、2 階書庫内に一定のスペースを区切って 3 室の貴重資料保存書庫を設置した。書庫内は常に一定の温度・湿度で管理されており、ログの取得によって急な環境変化にも迅速な対応がとれるように設定されている。現在、この貴重資料保存書庫内には「第一次大戦期プロパンガンダ・ポスター」「小野秀雄コレクション（かわら版・新聞錦絵ほか）」「号外コレクション」「内閣情報部宣伝資料」のほか、先述の「坪井家寄託資料」の一部と「大久保家写真資料」が保管されている。これらは研究やアーカイブ化の後、次項に述べる新展示室での一部公開などを行う予定である。

3.3.4 新展示室の設置

本センターには従来、貴重資料室を兼ねた展示室が情報学環本館 7 階に存在したが、貴重資料と展示空間を分離するだけの広さがなく、また建物の構造上、展示室への導線に問題があるなどしたため、これを有効に機能させることができなかつた。この反省をもとに、高度アーカイブ化事業では前年の事前措置による閲覧室の整備によって生じた 1 階の空間を利用し、閲覧室とパーティションで区切ったうえで、展示室を再編することとした。

新展示室には東京国立博物館で使用されているものと同タイプのコクヨ製展示ケースを設置し、大型資料まで含めた多様な資料の展示を可能とした。併せて電源工事を実施、調光照明器具・紫外線防止照明を設置することにより、スクリーンの設置と併せて展示資料への負荷を避けるための工夫を行った。

新展示室は恒常的な展示施設として 2008 年度中のオープンを目標とし、次年度には展示資料の選定、21 世紀 COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」の研究成果と連携した閲覧システムの構築を行う。研究成果の社会還元が求められる今日、情報学環と本センターの存在意義を発信する施設として重要な新施設である。

3.3.5 新聞マイクロフィルムの PET 化・デジタル化によるバックアップ作成

本センターは約 45,000 リールに及ぶ貴重な内外の新聞マイクロフィルムを所蔵しており、これらについて段階的に劣化対策を施している。2007 年度はこのうち特に劣化が顕著に見られる TAC ベースのマイクロフィルムについて、選別と PET ベースのフィルムへの複写を行い、並行してデジタルデータを作成してバックアップ作業を行った。海外の新聞マイクロフィルムについては、早い段階から劣化の少ない PET ベースのフィルムが使用されているが、日本国内の特に 1970 年代以前に作成されたマイクロフィルムに TAC ベースのものが多く、これらは劣化が進むことによって酢酸臭を発生させ、周辺資料にも影響を及ぼすことが確認されている。

既にオンラインサービス等でマイクロフィルム収蔵分のデータを得ることのできる新聞社のデータは積極的にこれを活用することで劣化対策に代替することが可能であるが、本センターが所蔵する TAC ベースのマイクロフィルムにはそうしたサービスが 2007 年時点で行われていないものも多数存在する。そのような新聞資料の中から、2007 年度は大阪毎日新聞、東京日日新聞、毎日新聞の 1872 年 2 月～1971 年 12 月までの TAC ベースマイクロフィルム計 697 リールを PET ベースのフィルムに置き換えるとともに、デジタルスキャンによる複製データを作成した。複製データの活用可能性については、2008 年以降の課題として検討を行う。

3.3.6 購入資料および資料の再配置

2007 年度には、従来からの資料購入とともに、高度アーカイブ化事業の予算措置により、これまで困難であった劣化の激しい縮刷版の入れ替えを行うことができた。特に戦前期の朝日新聞の縮刷版は利用希望者が多く、劣化の度合いが著しいことから、今後も予算措置の範囲内で継続的に置き換えを進めていく予定である。このほか、海外の新聞や雑誌のうち、マイクロフィルムやデジタルデータの

存在しない資料については、積極的な購入を進め、利用者の便益に資する体制を構築する予定である。

新聞・マイクロ資料の再配置については、先に述べた貴重書庫の設置に伴い、同設置箇所に置かれていたマイクロフィルムの移動・整理を実施し、併せて新聞原紙の一部移動を行った。なお、現在、大学院情報学環はスペースがきわめて狭小なため、本センターの主要な収蔵資料であるマイクロフィルムや新聞原紙に関し、必ずしも十分な保存・保管体制が整備できない状態である。特に、駒場地区の旧宇宙航空研究所跡地に別置している以下の新聞原紙資料に関しては、きわめて劣悪な保存環境に置いたままの状態にある。したがって、これらの資料の保存環境の改善は、本センターの重要な課題のひとつであり、早急に対応する必要がある。本センターでは、これらの原紙製本資料を、目白台東大病院分館の保存施設の改修後、目白台保存施設に移動し、本センターの分館的な施設を整備していきたいと考えている。

3.3.7 「情報学環アーカイブズ」構築に向けての試み

情報学環では、本センターや情報学環図書室に収蔵されている資料を中心に、旧新聞研究所関連資料の整備やデジタルアーカイブ構築の研究プロジェクトが推進されている。さらに、各研究室が個別に収集してきた研究データについても、知的資源としての有用性をはじめとした多様な観点から、アーカイブ化が進められており、「高度アーカイブ化事業」ではこれらを統合的に運用可能な形に深化させていくための道筋を模索している。

既に構築されているアーカイブとしても、ジャーナリストの「森恭三アーカイブ」や新聞研究所初代所長の「小野秀雄コレクション かわら版・新聞錦絵（ニュースの誕生）アーカイブ」、さらに「第一次大戦期プロパガンダ・ポスター・アーカイブ」などがあり、さらに現在、「内閣情報部宣伝資料アーカイブ」、「近代日本号外資料アーカイブ」や「満州・中国大陸新聞アーカイブ」など、旧新聞研究所の貴重資料を基礎としたアーカイブ構築研究が進められている。

これらに加え、情報学環の多様な知的資源を網羅し、統合的に運用可能なアーカイブとして「情報学環アーカイブズ」の構築を目標とすることで、本センターの枠を越えた知識情報センターとしての役割を果たしていきたい。ここで構築されるアーカイブは無論英語や中国語、韓国語などの他言語に対応することで、広く世界のメディア研究や歴史研究、地域研究などの利用に供することを想定している。また、読売新聞データベースのような商用データベースの利用も 2007 年度より本格化したことにより、さらに幅広い利用者の希望に対応する体制を今後とも整えていく。

4 社会との交流

情報学環教員は、以下に述べるとおり、国際的委員会や政府委員会委員、産学協同等を通じて社会との交流を進めながら、社会への貢献を積極的に行っている。

4.1 国際的委員会

情報学環教員は、IEEE 等の国際学会が開催する会議の運営委員等を通じて、国際的な研究の推進に貢献をしている。

(国際学会委員会委員：一部のみ抜粋)

池内克史	General Chair	8th Asian Conference on Computer Vision
池内克史	General Chair	ICCV2007
池内克史	Editor in Chief	International Journal of ITS Research
池内克史	Best ICRA 2008 Vision Paper Committee Chair	ICRA 2008
池内克史	International Advisory Committee	ICARCV 2008(10th International Conference on Control, Automation, Robotics and Vision)
池内克史	Associate Editors	IEEE/IROS 2008(International Conference on Intelligent Robots and Systems)
池内克史	Editor in Chief	International Journal of ITS Research
池内克史	Member of Editorial Board	Computer Vision Graphics Image Processing
池内克史	Editor-in-Chief (編集長)	International Journal of Computer Vision
池内克史	Member of Editorial Board	IEEE Fellow
池内克史	2nd Vice President (第二副会長)	IAPR(International Affiliation of Pattern Recognition) (国際パターン認識連合)
池内克史	Administrative Committee	IEEE Robotics and Automation Society
池内克史	会長	IEEE ITS Society
大島まり	組織委員長	Third Asian Pacific Conference on Biomechanics
須藤修	Associate Editor of Environmental Economics and Policy Studies	(the official journal of the Society for Environmental Economics and Policy Studies) Springer-Verlag
須藤修	Member	Member of the Heidelberg Club International (HCI) organized by the Mayor of Heidelberg City
馬場章	組織委員長	The Third DiGRA International Conference (DiGRA2007)
石崎雅人	Program Committee	InterSpeech2007
石崎雅人	Program Committee	The Third International Joint Conference on Natural Language Processing
石崎雅人	Program Committee	The Eighth SIGdial workshop on Discourse and Dialogue

石崎雅人	Area Chair of the Program Committee	The 46th Annual Meeting of the Association for Computational Linguistics
倉田博史	associate editor	Annals of the Institute of Statistical Mathematics
倉田博史	reviewer	Mathematical Reviews
佐藤洋一	Program committee member	IEEE Conference on Computer Vision and Pattern Recognition (CVPR2007)
佐藤洋一	Program Committee Member	International Conference on Artificial Reality and Telexistence (ICAT2007)
佐藤洋一	Program Committee Member	IEEE International Conference on Computer Vision (ICCV2007)
佐藤洋一	Program Committee Member	IAPR Coneference on Machine Vision Applications (MVA2007)
佐藤洋一	Program Committee Member	IEEE Workshop on Photometric Analysis for Computer Vision (PACV2007)
佐藤洋一	Program Committee Member	IEEE Workshop on Projector-Camera Systems (ProCams2007)
佐藤洋一	Program Committee Member	Brazilian Symposium on Computer Graphics and Image Processing (SIBGRAPI2007)
佐藤洋一	Program Committee Member	Visual Information Engineering 2007

4.2 政府・自治体委員会

情報学環教員は、政府・自治体委員会の委員等としても活躍し、情報通信などにかかわる政策立案等に参画することで、社会に貢献している（政府委員会委員数 45 人、地方自治体委員会委員数 10 人）。

（政府・自治体委員会委員：一部のみ抜粋）

<政府>

池内克史	文部科学省「デジタルミュージアムに関する研究会」委員
大島まり	文部科学省 研究開発局「宇宙開発委員会」委員
大島まり	文部科学省 初等中等教育局「中央教育審議会」専門委員
大島まり	科学技術振興機構「科学技術振興審議会科学技術理解増進部会」委員
大島まり	日本学術会議 連携会員
大島まり	日本原子力研究開発機構「核融合研究開発・評価委員会」委員
大島まり	科学技術振興機構「サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト推進評価委員会」委員
大島まり	国立科学博物館「日本の科学技術者展企画委員会」委員
大島まり	内閣府「原子力安全委員会原子炉安全専門審査会」審査委員
大島まり	国土交通省 総合政策局「交通政策審議会」委員

大島まり	国立環境研究所「スーパーコンピュータ研究利用専門委員会」委員
須藤 修	政府「IT 新改革戦略評価専門委員会」委員
須藤 修	政府「電子政府評価委員会」座長
須藤 修	政府「次世代電子行政サービス基盤等検討プロジェクトチーム」座長
須藤 修	内閣府「国民生活審議会」委員
須藤 修	内閣府「国民生活審議会個人情報保護検討部会」委員
須藤 修	内閣府「総合科学技術会議」情報通信分野推進戦略プロジェクトチーム 委員
須藤 修	総務省「電子自治体の推進に関する懇談会」座長
須藤 修	総務省「電子投票システム調査検討会」副委員長
須藤 修	総務省「地方活性化とユビキタスネット社会に関する懇談会」委員
須藤 修	総務省「地域ICT利活用モデル構築事業評価会」委員
須藤 修	総務省「地域情報化評価会」構成員
須藤 修	厚生労働省「最適化計画策定評価委員会」委員
須藤 修	経済産業省「企業ポイント研究会」委員
須藤 修	文部科学省「科学技術・学術審議会」専門委員
須藤 修	文部科学省「先導的情報セキュリティ人材育成推進委員会」委員
橋元良明	内閣府「情報化社会と青少年に関する調査委員会」委員長
馬場 章	特許庁「平成19年度特許出願技術動向調査委員会」委員長
原島 博	文部科学省「デジタルミュージアムに関する研究会」委員
原島 博	総務省「次世代放送技術に関する研究会」構成員
原島 博	文化庁「メディア芸術祭実行委員会」審査委員
原島 博	文部科学省 技術審査専門員
越塚 登 委員	総務省「情報通信審議会・情報通信政策部会, ICTによる生産向上に関する委員会」
越塚 登	総務省「ICT国際競争力懇談会, 新ビジネス・基本戦略WG」委員
越塚 登	国土交通省「自律移動支援プロジェクト推進委員会・技術検討WG」委員
越塚 登	総務省「NID 合同 WG」委員
鈴木高宏	特許庁 弁理士試験委員
鈴木高宏	国土交通省「サグ渋滞検討会」委員
原田至郎	総務省「ICT国際競争力会議・次世代IPネットワーク分科会」構成員
<自治体>	
大島まり	横浜市教育委員会「横浜市立科学技術高校（仮称）」技術顧問
須藤 修	東京都「システム評価委員会」委員
須藤 修	福岡県「新ふくおかIT戦略会議」委員長
須藤 修	福島県 IT 推進アドバイザー
須藤 修	高知県「電子自治体推進協議会」顧問

須藤 修	名古屋市「情報化推進専門委員会」委員
越塚 登	熊本県「くまもと安心移動ナビ・プロジェクト推進委員会」委員
越塚 登	奈良県「奈良自律移動支援プロジェクト小委員会」委員
越塚 登	静岡県「静岡自律移動支援プロジェクト委員会」委員

4.3 学協会活動

情報学環教員は、国内外の関係学会の活動に積極的に参加しており、会長や副会長など、学会の要職等を通じて学協会活動に貢献している。

(学協会役職：一部のみ抜粋)

池内克史	社団法人情報処理学会 財務委員
池内克史	IEEE ITS Society 会長
須藤修	日本社会情報学会 (JASI) 副会長
須藤修	日本社会情報学会 (JASI) 総務委員会委員長
須藤修	日本社会情報学会 (JASI) 学術委員会委員
須藤修	進化経済学会 理事
須藤修	情報社会学会 理事
須藤修	情報文化学会 会長
須藤修	国際 CIO 学会 副会長
橋元良明	日本マス・コミュニケーション学会 理事
橋元良明	日本社会言語科学会 監事
原島 博	日本バーチャルリアリティ学会 幹事
原島 博	日本バーチャルリアリティ学会 特別顧問
石崎雅人	社会言語科学会 理事
石崎雅人	自然言語処理学会 評議員
倉田博史	日本統計学会 理事
七丈 直弘	研究技術・計画学会 評議員
鈴木高宏	(社) 日本ロボット学会 評議員
田中秀幸	社会・経済システム学会 理事
田中秀幸	日本社会情報学会(JASI) 評議員
田中秀幸	日本社会情報学会(JASI)学術委員会 副委員長

4.4 セミナー・研究会・公開講座

情報学環・学際情報学府の研究・教育活動の成果を公表するとともに、その環を広げるために、下記に示すようなさまざまな公開の催しを実施した。入試説明会はたんなる入試事項の説明にとどまらないかたちで、過去の学環・学府シンポジウムの成果を引き継ぎつつ、学環・学府の全体像を示す機会となっている。概要説明から、院生紹介、主要プロジェクト紹介、鼎談などとともに、本年度も研

研究室や研究プロジェクトを紹介する熱帯雨林的な知識交換、共有の場「学環・学府めぐり」なども開催された。

この他、別表で一覧されているとおり、COEシンポジウムをはじめ、内外の関係者を集めた先端的な研究成果の披露の機会があった。学環の特徴でもあるさまざまなプロジェクトは、公開研究会、シンポジウムなどを通して学際情報学の研究情報を発信している。下記がその一覧（現在稼働しているもの）である。いずれも学際的なチャレンジをしている営みだといえる（学環ホームページ上に公開されたプロジェクトのみで、全てを網羅していないことを申し添えておく）。

■共同研究プロジェクト一覧

フィジックスペースビジョンプロジェクト	代表：池内克史
PlanetLab Japan	代表：中尾彰宏
大井町プロジェクト	代表：馬場章
人間行動観察学習ロボットプロジェクト	代表：池内克史
iii online プロジェクト	代表：山内祐平
戦争とメディア	代表：吉見俊哉
戦後東アジアとアメリカニズム	代表：吉見俊哉
新しい百科全書	代表：石田英敬・吉見俊哉
文化遺産のデジタル化プロジェクト	代表：池内克史
モード・プロジェクト	代表：水越伸
情報学の基盤形成プロジェクト「FINE」	代表：西垣通
メディア研究のつどい	代表：林香里
メル・プラッツ	—

■別表

学環・学府で開催されたイベント一覧である。なお、ここに挙げたのは学環ホームページ上に公開されたイベントのみで、個別研究室開催の研究会をはじめ学環・学府で開催された全ては網羅していないことを申し添えておく。

【シンポジウム】	
2007. 4. 25 工学部 2 号館 参加者：100	情報学環・工学系研究科・米国大使館共催シンポジウム「風景のリデザイン～都市学と情報学の日米対話～」 西村幸夫（東京大学大学院工学系研究科教授）司会 ケビン・オルブリッシュ（東京アメリカン・センター副館長） チェスター・リーブス（東京大学フルブライト客員教授） クリス・ウィルソン（ニューメキシコ大学教授） ウォレン・サック（カリフォルニア大学サンタクルス校准教授） 小泉秀樹（東京大学大学院工学系研究科准教授） 大瀧友梨奈（東京大学総合教育研究センター助教） 韓亜由美（東京大学大学院学際情報学府）
2007. 5. 16 安田講堂 参加者：700	21 世紀 C O E プログラム「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」 第 12 回シンポジウム「ユビキタス情報社会基盤と国土交通イノベーション」 坂村健（東京大学大学院情報学環教授） 安富正文（国土交通省事務次官） 宿利正史（国土交通省総合政策局長） 谷口博昭（国土交通省技監） 石澤直孝（株式会社 MTI 技術戦略グループプロジェクトマネージャー） 杉本陽一（株式会社パスコ代表取締役社長）
2007. 6. 25 武田ホール 参加者：300	21 世紀 C O E プログラム「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」 第 13 回シンポジウム「ユビキタス社会とケータイ」 橋元良明（東京大学大学院情報学環教授）コーディネーター 石井威望（ドコモ・モバイル社会研究所所長） 辻 大介（大阪大学大学院人間科学研究科准教授） 松田美佐（中央大学文学部准教授） 遊橋裕泰（NTT ドコモモバイル社会研究所主任研究員）
2007. 7. 11 教養学部 18 号館 ホール 参加者：175	情報学環・ポンピドゥーセンター IRI 主催シンポジウム〈 愛好者 Amatorat 〉 をめぐって モバイル環境による「クリティカル・スペースの創出」の試み 石田英敬（東京大学大学院情報学環教授） 藤幡正樹（東京藝術大学教授・大学院映像研究科長） ベルナール・スティグレル（ポンピドゥーセンター研究開発部長）

<p>2007. 7. 13－16 安田講堂 工学部 2 号館 参加者：748</p>	<p>堀場国際会議 ユビキタス・メディア アジアからのパラダイム創成—The Theory Culture & Society 25th Anniversary 蓮實重彦(東京大学元総長) フリードリヒ・キットラー (フンボルト大学教授) ベルナール・スティグレル (ポンピドゥーセンター文化開発局局長) バーバラ・スタッフォード (シカゴ大学教授) キャサリン・ヘイルズ (カリフォルニア大学教授) マーク・ハンセン (シカゴ大学教授)</p>
<p>2007. 11. 16 鉄門講堂 参加者：50</p>	<p>国際シンポジウム「『アジア』から考える メディア研究ネットワークの挑戦—東アジアにおける社会情報の新展開(The New Trends of Socio-information in East Asia)」 北田暁大 (東京大学大学院情報学環准教授) 司会 吉見俊哉 (東京大学大学院情報学環教授) Biella Coleman (ニューヨーク大学助教) 姜尚中 (東京大学大学院情報学環教授) Kang Nam Jun (ソウル大准教授) Aram Sinnreich (ニューヨーク大客員助教) Youn Sug-Min (ソウル大准教授) Lee Joong-Seek (ソウル大准教授) 田中秀幸 (東京大学大学院情報学環准教授) Ted Magder (ニューヨーク大教授) Kang Myung-koo (ソウル大学教授)</p>
<p>2008. 1. 15 鉄門講堂 参加者：200</p>	<p>21 世紀 C O E プログラム「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」第 14 回シンポジウム デジタルアーカイブの「標準化」に向けて～次世代アーカイブとユビキタス技術が開く未来～ 坂村健 (東京大学大学院情報学環教授) 田良島哲 (東京国立博物館) 小川千代子 (国際資料研究所) 杉本重雄 (筑波大学) 加茂竜一 (凸版印刷株式会社) 馬場章 (東京大学大学院情報学環教授) コーディネーター</p>
<p>2008. 2. 4 安田講堂 参加者：600</p>	<p>OKI ユビキタスサービス学寄附講座」開設記念シンポジウム 21 世紀 C O E プログラム「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」第 15 回シンポジウム 「ユビキタスではじまるサービスイノベーション」 篠塚勝正 (沖電気工業株式会社取締役社長兼 CEO) 須藤修 (東京大学大学院情報学環教授) 小野由樹子 (JR 東日本) 坂村健 (東京大学大学院情報学環教授)</p>

2008. 2. 16 鉄門講堂 参加者：200	ジャパンタイムズ創刊110周年 国際シンポジウム 「東アジアにおける英 字新聞の挑戦」 Michel Temman (「国境なき記者団」東京代表) Kang Myung Koo(ソウル大学教授) Dennis Peng (台湾国立大学新聞研究所所長) Kim Hoo Ran (コリア・ヘラルド論説委員) Amber Chang (タイペイ・タイムズ主筆)
2008. 3. 5 安田講堂 参加者：400	21世紀COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」 第16回シンポジウム「ユビキタス情報社会基盤学寄附講座」(凸版印刷)開 設記念シンポジウム「ユビキタスと多様な文化」 足立直樹(凸版印刷株式会社代表取締役社長) 青木保(文化庁長官) 樺山紘一(印刷博物館館長) 坂村健(東京大学大学院情報学環教授)
2008. 3. 8 経済学研究科棟 地下1階第1教室	東京大学創立130周年記念事業 公開シンポジウム「成功するネットワークコ ミュニティのデザインとは？」 福岡俊弘(株式会社アスキー取締役兼週刊アスキー総編集長) 高橋洋一(株式会社ソニマ取締役会長) 森山雅勝(株式会社ココア代表取締役社長) 稲船敬二(株式会社ダレット代表取締役社長) 原島博(東京大学大学院情報学環教授)
2008. 3. 17 駒場 KALS	東京大学現代GP 国際シンポジウム「ICTを活用したアクティブラーニング～ 未来の大学教室のデザイン～」 永田敬(東京大学総合文化研究科教授) Peter Dourmashkin(MIT) Daniel Gilbert (Stanford Center for Innovations in Learning) 美馬のゆり(はこだて未来大学教授) Tom Gally(東京大学教養学部附属教養教育開発機構特任准教授) 山内祐平(東京大学大学院情報学環准教授) 望月俊男(東京大学総合教育研究センター客員准教授)
【セミナー・講演会】	
2007. 6. 18	総合分析情報学コースオープンセミナー Nicolas Christin(CMU Japan 准教授)
2007. 7. 6-7	学際理数情報学コース制作展併催シンポジウム「七夕をぶつつぶせ！ ～学 際理数情報学の挑戦～」

2007. 12. 6	ラウンド・テーブル・セッション Vihalemm (グラスゴー大学客員教授) Lauristin (国連大学教授)
2007. 12. 19	ラウンド・テーブル・セッション<多文化共生>コンセプトから<トランスカル チュラルな共同参画社会>へ 前みち子 (デュッセルドルフ大学現代日本研究科教授)
2008. 3. 8 工学部 2 号館	「ろっぽんプロジェクト」セミナー 玉井愛美子 (テレビ朝日) 水越伸 (東京大学大学院情報学環准教授) 境真理子 (江戸川大学) くわはら美樹 (テレビ朝日) 黒木匠子 (テレビ朝日) 佐久間丈嗣 (テレビ朝日) 古池優佳 (テレビ朝日) ソフィア・ウー (台湾政治大学) 新谷弘 (読売テレビ) 水島久光 (東海大学) 小林和男 (テレビ朝日)
2008. 3. 29 安田講堂 参加者 : 800	アントニオ・ネグリ氏講演会記念講演「新たなるコモンウェルスを求めて」 姜尚中 (東京大学大学院情報学環教授) 上野千鶴子 (東京大学大学院人文社会系研究科教授) 石田英敬 (東京大学大学院情報学環教授) 鶴飼哲 (一橋大学大学院言語社会研究科教授)

【プロジェクト関連】	
「BEAT」ベネッセ先端教育技術学講座	
〔公開研究会〕	
2007. 6. 2	第 1 回 : 知育玩具 ー創造的製作活動をアフォードする人工物ー
2007. 8. 25	第 2 回 : BEAT 特別セミナー オープンエデュケーションが切り開く未来 ー Education 2.0 : OCW の次にくるものー
2007. 12. 1	第 3 回 : 子どもの放課後学習環境
2008. 3. 29	第 4 回 : BEAT 特別セミナー未来の教育のために学校と家庭ができること ー フィンランドと日本の対話ー
コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム	
2007. 7. 6-12	第 7 回東京大学大学院学際情報学府 コンテンツ創造科学産学連携教育プロ グラム 制作展 「iii exhibiton 7」

2007. 10. 22-11. 8	東京大学創立 130 周年記念事業 コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム主催「本郷零時 3 分」展 -写真家と学生のダイアログから- 広川智基が撮る、東京大学・もう一つの顔
2007. 12. 7-13	7 回東京大学大学院学際情報学府 コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム制作展 「iii exhibiton 8」
2008. 3. 8	東京大学創立 130 周年記念事業 コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム主催公開シンポジウム「アニメがみる未来～コンテンツが切り拓く将来」 アニール・セルカン（東京大学大学院工学系研究科助教） 七丈直弘（東京大学大学院情報学環准教授）パネルディスカッションモデレーター 渡邊淳司（独立行政法人科学技術振興機構さきがけ研究員） 東浩紀（東京工業大学世界文明センター特任教授） 古橋一浩（アニメ演出家・監督） 藤咲 淳一（アニメ脚本家・監督） 近義起（株式会社ウィルコム執行役員副社長） 石川光久（東京大学情報学環特任教授）全体コーディネーター
電通コミュニケーションダイナミクス寄付講座	
2007. 6. 22	第 1 回研究会「選挙とウェブ上の政策関心空間の構造分析」
2007. 7. 13	第 2 回研究会「地域メディア・地域情報化とシティ・プロモーション」
2007. 7. 22	情報学環教育部研究生授業「ワークショップで学ぶメディア社会史」
2007. 7. 24	第 3 回研究会「中国のテレビ放送における広告の発展と機能」
2007. 11. 27	第 4 回研究会「ブログ分析の現状と将来」
2008. 1. 22	第 5 回研究会「意見分析の理論と実践－対話型意見収集システムの実装を中心に－」
2008. 3. 27	第 6 回研究会「3 人の特任研究員による研究発表」

4.5 出版活動

2004年の社会情報研究所との統合後は、社会情報研究所で出されていた定期刊行物と情報学環・学際情報学府の定期刊行物を統合し、新たな出版体制を整備しつつある。その中心となるのは、以下の5つの刊行物である。

- (1)研究紀要『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』（年2回刊）
- (2)調査実験紀要『同 情報学研究・調査研究編』（年1回刊）
- (3)英文紀要（オンライン論文サイト"iii Online Research Journal"への移行を検討中）
- (4)年報『東京大学大学院情報学環年報』（年1回刊）
- (5)ニューズレター『学環 学府』

これらはいずれも、情報学環にとって基幹的な出版活動であり、相互に役割を分担しながら有機的に結びついている。

表 4-5-1 情報学研究/同調査研究編の発行状況

東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究	
68号	2005年1月
69号	2005年3月
70号	2006年1月
71号	2006年3月
72号	2007年5月
73号	2008年1月
74号	2008年3月
情報学研究・調査研究編	
22号	2005年1月
23号	2005年3月
24号	2007年3月

4.5.1 『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』

『情報学環紀要 情報学研究』は、2004年の情報学環と社会情報研究所との統合により、旧社会情報研究所の『社会情報研究所紀要』を改称したものである。

同紀要は、1952年に『新聞研究所紀要』として創刊されて以来、新聞学、世論研究、マス・コミュニケーション論、ジャーナリズム、メディア史、マス・メディアの制度と受容、社会的コミュニケーションの諸過程、災害や地域情報化などの政策課題、高度情報化や新しいメディア接触と情報行動などを理論的、実証的に扱う多くの論考を掲載し、半世紀以上にわたって国内外の専門研究者や学生に

多くの影響を及ぼしてきた。

社会情報研究所と情報学環との統合に際し、このような歴史と定評のある研究誌としての紀要の学問的な伝統と蓄積を、情報学環での教育研究基盤のうえでさらに発展させたいと考えた。このような視点から、『情報学環紀要 情報学研究』を、これまでの伝統を維持しつつも、理工学系において発展してきた情報学の基礎理論や応用分野の研究と融合した新しい研究成果が共に公刊されていく場として位置づけた。

そのために、本紀要は、巻頭エッセイの「思考の環」、巻末の「フィールド・レビュー」をはじめ、情報学環教員の研究論文や学際情報学府博士課程院生の査読論文（博士課程在籍者の投稿論文は、外部査読者を含む複数の審査員による審査の上、掲載を許可している）などさまざまなセクションから複層的に構成されている。大学院情報学環において育まれる研究の創造的成果の主要な発表媒体として、また新たな学問的視座や調査研究の発表の場として、本紀要は内外から高い評価を得ている。

4.5.2 『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究・調査実研究編』

『情報学環紀要 情報学研究・調査実研究編』は、1992年から刊行されてきた『社会情報研究所調査研究紀要』を継承するものである。

『社会情報研究所調査研究紀要』は、同研究所におけるさまざまな社会調査、情報行動や災害情報、インターネットなどに関わる多くの調査の成果が発表されていく主要な媒体であった。これらの社会調査は、関係する研究者や学会、自治体などで高く評価されているものが多く、そのデータの価値が高く評価されていた。

このような社会情報研究所時代の伝統を生かしつつ、情報学環と社会情報研究所との統合後は、これまで主要な柱をなしてきた情報行動や災害行動の調査の成果に加え、情報工学や情報科学との融合分野での実験の成果、文理相互浸透分野でのフィールドワーク、情報教育分野での実験、デジタル・アーカイブに関する諸実践、デザイン表現論などの調査や実験、実践の成果が多分野にわたって発表される媒体となっている。

4.5.3 『英文紀要』

『情報学環英文紀要』は、前記の『社会情報研究所紀要』が発展していく中で研究の国際化、グローバル化に対応して独立したものであった。『英文紀要』は、基本的には研究者の個人研究論文とともに、社会情報研究所で開催された国際的なシンポジウムなどの記録を収録していた。

このような社会情報研究所時代の伝統を生かしつつ、情報学環・社会情報研究所の統合後は、情報、メディア、コミュニケーションをめぐるより広い学問分野の知見が掲載できるように体裁をあらためた。

現在はオンライン・ジャーナル「iii Online Research Papers」への移行を検討中である。

4.6 定期刊行物・ホームページ

4.6.1 定期刊行物

情報学環・学際情報学府では、日々の活動を学内外の方々に知ってもらうため、ニューズレター『学環学府』を年4回発行している。内容は、教員へのインタビュー、研究室の活動報告、イベント予定、研究成果、受賞報告、展示会、各教員の書籍刊行情報など。2002年冬号から始まり、2007年度末までに通算20回発行した。デザイン性を高めた紙面は、情報学環・学際情報学府の特徴をよく表現しており、各方面から好評を得ている。ちなみに、2007年度のカバー・デザインは、情報学環所蔵の錦絵・かわら版のデジタル画像と学環学府所属の教員から提供されたロボットの画像をコラボし、文理融合を表現するデザインとした。また、第18号では、当時工事中だった福武ホールの仮囲いを使い学府院生によって構想されたメディアプロジェクト“Thinking Forest”をアレンジした表紙デザインとした。

『学環学府』は、情報学環教職員や学生だけでなく、学内他部局や本部役員をはじめ、学環にゆかりのある学外教員、そのほか広報用として入試説明会、ホームカミングデー、学環来訪者などに随時配布している。

4.6.2 ホームページ

情報学環・学際情報学府では、主に教育・研究における活動を広く国内外に周知するために、ホームページを開設し非常に理解しやすい構造で情報を発信している。情報は、総合案内、教員・研究員、研究、教育、入学案内、刊行物・アーカイブ、付属研究施設、内部向け情報、などの項目に分け掲載されている。(URL アドレスは <http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/>)

まず、「総合案内」項目では、学環長からのメッセージとして、様々な学問分野を統合しく学びの<環>を構造的に組み込んだ学際的な大学院組織である情報学環のミッションを紹介し、また組織や沿革などの情報を案内している。

「教員・研究員」項目では、所属する教員の専門分野、メッセージ、各個人のホームページへのリンク、メールアドレスなどが記載されている。

「研究」項目では、各教員がリードする研究プロジェクトの概要と詳細な情報へのリンクと、また情報学環の教員が主催するシンポジウムへのリンク、および、旧社会情報研究所部門研究へのリンクが掲載され、研究内容・成果に関する情報が入手できるようになっている。

「教育」項目では、学際情報学府における4つの教育コースである、社会情報学コース、文化・人間情報学コース、学際理数情報学コース、総合分析情報学コースの紹介に加えて、情報学環教育部の紹介、授業一覧と時間割、また、オンライン遠隔教育の一環として **iii-online** という新しい試み、そして、過去の修士論文・博士論文のリストを掲載している。**iii-online** では、企画された **e-learning** のシリーズ講義をこのホームページから聴講することができる。

「入学案内」では、修士課程、博士課程、教育部学生、外国人研究生のそれぞれについての入学・入試情報が掲載されている。

「刊行物・アーカイブ」では、情報学環で発行しているニューズレター、年報・紀要、研究叢書、

デジタル・アーカイブへのリンクを提供している。刊行物のデジタル・アーカイブや、ニューズレター『学環学府』のPDFファイルをダウンロードすることもできるようになっている。

この他、「付属研究施設」や「内部向けの情報」の項目もありそれぞれの内容を記載している。

また、これらの項目に含まれる各最新情報をショートカットでアクセスするためや、あるいは、情報学環関連のイベント情報、ニュース、などを紹介する **News & Events** のリンク、そして、入試などの重要情報へのショートカットを提供する **Hot Topics** のリンクなどをトップページに備え、迅速に利用者が最新情報へアクセスできることを可能にしている。

このように、「情報」を軸に連環している「百学連携」の情報学環にふさわしい情報の発信をめざすために、インターネットという普遍的な情報通信メディアを通じた種々の研究教育活動の紹介は、我々がもっとも力を入れて推進している広報活動の一つである。

4.7 国際交流

平成19年度は6月に台湾大学社会科学院と、11月には清華大学新聞与伝播学院と国際交流覚書を締結した。また、11月16日には、東大鉄門講堂にて恒例のソウル大学校言論情報研究所・社会科学大学言論情報学科との共催で日韓米合同シンポジウム『『アジア』から考える メディア研究ネットワークの挑戦—東アジアにおける社会情報の新展開』を開催した。今年のシンポジウムでは、ソウル大学の他、ニューヨーク大学の教員も参加し、さらなる議論の国際化を図った（参加者：吉見俊哉、姜尚中、林香里、田中秀幸、北田暁大、Biella Coleman、Kang Nam Jun、Aram Sinnreich、Youn Sug-Min、Lee Joong-Seek、Kang Myung-koo）。またこれとあわせて、翌日の17日には、学生間の国際交流の充実化を目指して、日韓米の学生によるワークショップも開催した。また、冬学期には、同学科とのビデオ会議システムによる国際共同演習を開講し両大学の教員によるオムニバス形式の講義を行ない、教員・学生双方の交流を深めた。さらに、9月には情報学環から姜尚中教授がソウル大学にて集中講義を、1月にはソウル大姜明求教授が学際情報学府にて集中講義を行い、それぞれ学生の人気を博した。

このような国際交流協定に基づく研究交流活動に加えて、学環の教員それぞれは、積極的に海外で研究調査活動を行ったり、学会やシンポジウムに参加したりしている。また、海外からの研究者を招聘して共同研究に取り組み、多彩なシンポジウムを主催している。今後とも、組織としても、また教員個人としても、多様な国々の多様な研究機関やその他の社会における交流を深めることが課題である。

II. 資料

1 沿革

(旧社会情報研究所)

- 1929年 東京帝国大学文学部新聞研究室
- 1949年 東京大学新聞研究所
- 1992年 東京大学社会情報研究所に改組
- 2004年 東京大学大学院情報学環・学際情報学府と組織統合

(大学院情報学環)

- 2000年 東京大学大学院情報学環・学際情報学府
- 2004年 東京大学社会情報研究所と組織統合
文化・人間情報学コース、社会情報学コース、学際理数情報学コース設置
- 2006年 総合分析情報学コース設置

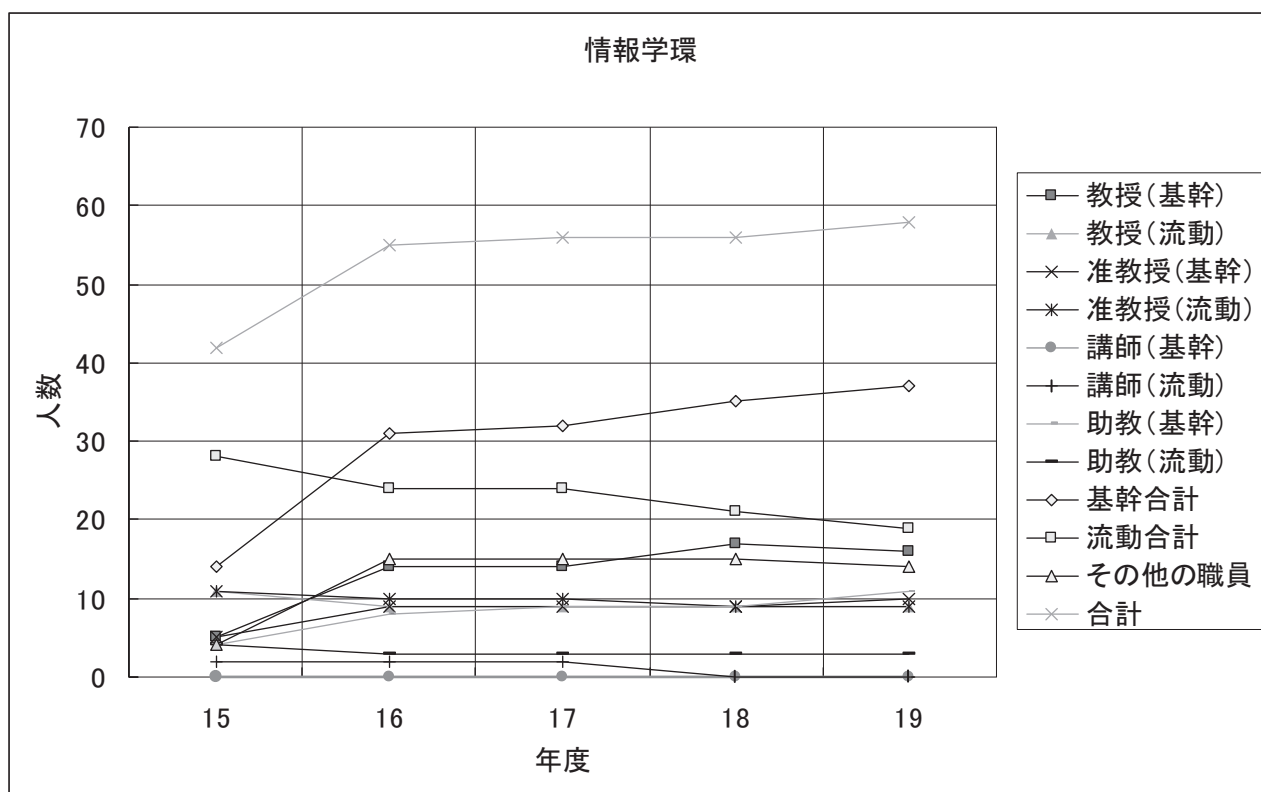
2 学環の教員（定員）

・情報学環(平成16年4月 社会情報研究所と合併)

年度	教授		准教授 (助教授)		講師		助教 (助手)		計		その他の職員	
	基幹	流動	基幹	流動	基幹	流動	基幹	流動	基幹	流動		
15	5	11	5	11	0	2	4	4	14	28	42	4
16	14	9	9	10	0	2	8	3	31	24	55	15
17	14	9	9	10	0	2	9	3	32	24	56	15
18	17	9	9	9	0	0	9	3	35	21	56	15
19	16	9	10	9	0	0	11	3	37	21	58	14

・社会情報研究所

年度	教授	客員教授	助教授	客員助教授	講師	助手	計	その他の職員
15	6	2	4	2	0	4	18	10

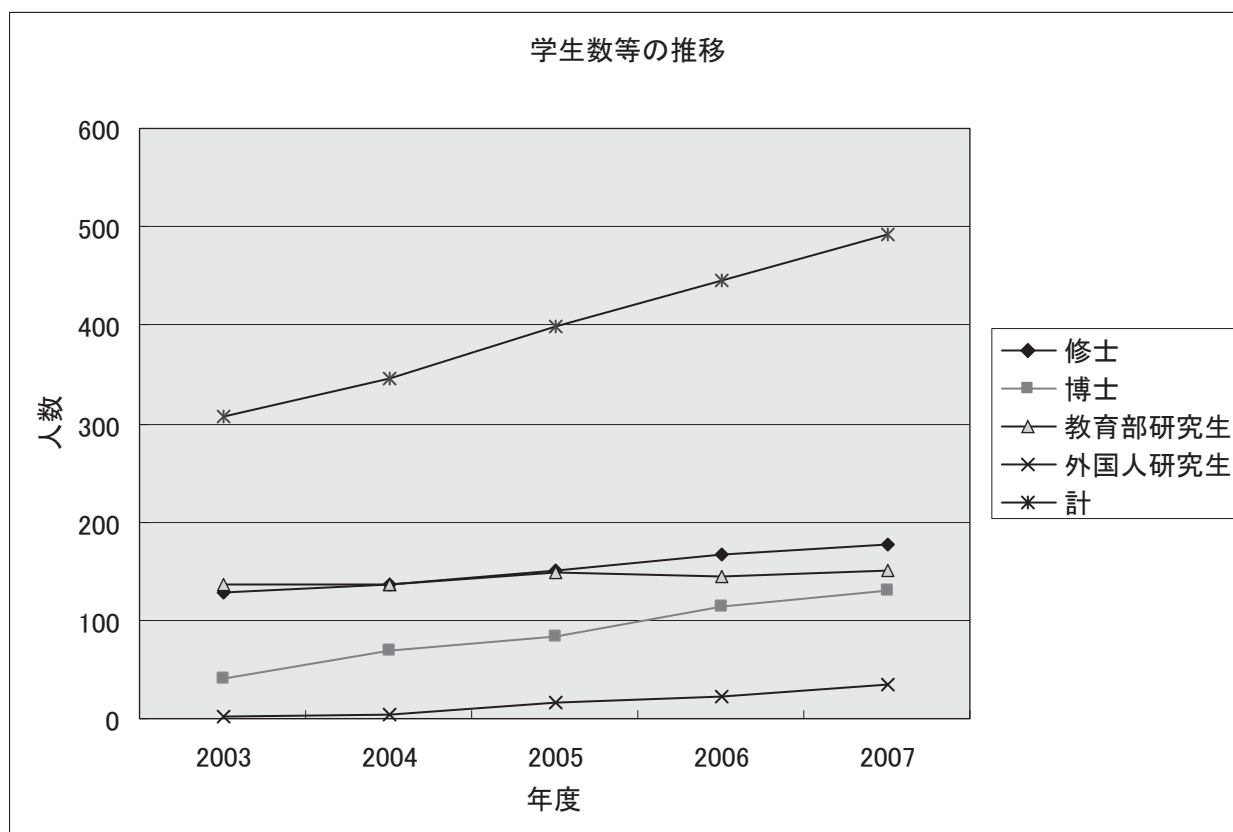


客員教員の状況

年度	職	氏名	担当授業	本務先
平成 15	客員教授	鈴木 正敏		(株)日本総合研究所
	客員教授	藤田 博司		上智大学文学部
	客員助教授	毛利 嘉孝		九州大学大学院比較社会文化 研究院
	客員助教授	港 千尋		多摩美術大学美術学部
平成 16	客員教授	伊藤 守	社会情報学特別講義 I	早稲田大学教育学部
	客員教授	村上 由見子	文化・人間情報学特別講義 I	著述業
	客員助教授	東 浩紀	社会情報学特別講義 II	国際大学グローバル・コミュニ ケーション・センター
	客員助教授	永井 由美子	学際理数情報学特別講義 I (病 気のため取止め)	多摩美術大学美術学部
平成 17	客員教授	フロリアン クルマス	社会情報学特論 II	ドイツー日本研究所
	客員助教授	深尾 葉子	文化・人間情報学特論 V	大阪外国語大学外国語学部
	客員助教授	宇治橋 祐之		NHKエディケーショナル
平成 18	客員教授	佐藤 哲	文化・人間情報学特論 VIII	長野大学産業社会学部
	客員助教授	魏 晶玄	文化・人間情報学特論 IX	ソウル(社)コンテンツ経営研 究所
平成 19	客員教授	飯吉 透		カーネギー財団知識メディア研究所
	客員准教授	奈良 高明		電気通信大学
	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論 IV	凸版印刷総合研究所
	客員准教授	大場 光太郎		産業技術総合研究所
	客員准教授	下畑 光夫	総合分析情報学特論 IX	沖電気
	客員准教授	荒牧 浩二		(株)日立製作所中央研究所

3 学府の学生数

	2003	2004	2005	2006	2007
修士	128	136	151	166	177
博士	41	69	83	113	130
教育部研究生	137	137	148	144	150
外国人研究生	2	4	17	22	35
計	308	346	399	445	492



4 教育部

教育部入学試験

平成 15(2003)年度から平成 19(2007)年度入学志願者数・受験者数・合格者数

年度	受入 予定 人員	日本人 ／外国 人	志願者			受験者			合格者		
			本学	他大 学	計	本学	他大 学	計	本学	他大 学	計
平成 15(2003) 年度	約 50	日本人	65	22	87	59	21	80	47	10	57
		外国人	0	1	1	0	1	1	0	1	1
		計	65	23	88	59	22	81	47	11	58
平成 16(2004) 年度	約 50	日本人	90	41	131	81	40	121	44	13	57
		外国人	1	1	2	1	1	2	0	1	1
		計	91	42	133	82	41	123	44	14	58
平成 17(2005) 年度	約 50	日本人	90	47	137	79	46	125	43	12	55
		外国人	1	3	4	1	3	4	0	1	1
		計	91	50	141	80	49	129	43	13	56
平成 18(2006) 年度	約 50	日本人	81	32	113	78	30	108	48	7	55
		外国人	0	1	1	0	1	1	0	0	0
		計	81	33	114	78	31	109	48	7	55
平成 19(2007) 年度	約 50	日本人	74	36	110	72	35	107	34	16	50
		外国人	1	1	2	1	1	2	1	1	2
		計	75	37	112	73	36	109	35	17	52
合計		日本人	400	178	578	369	172	541	216	58	274
		外国人	3	7	10	3	7	10	1	4	5
		計	403	185	588	372	179	551	217	62	279

5 コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム

■カリキュラム概要

1) デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅰ:コンテンツ制作理論

担当: 浜野保樹

本講義では、コンテンツ制作のワークフローとロジスティックスについて、理論的側面、実践的側面の両者に関して検討し、ケーススタディーを通してプロジェクト立案と遂行に必要な知識を学ぶ。

2) デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅱ:コンテンツ制作技術論

担当: 七丈直弘

本講義では、基本的な映像製作技術(CGモデリング等)について概観した後、先端的な技術の作品制作の現場への適用を、具体例を基に学ぶ。

3) デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅲ:グローバルストラテジー論

担当: 馬場 章

本講義では、グローバルな視点から、アニメ・ゲーム・コミック・映画など日本製コンテンツの海外戦略について学び、同時に海外で製作されたコンテンツの日本における受容や販売の実態についてケーススタディーを通して学ぶ。

4) デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅳ:コンテンツ法務

担当: 八代英輝

本講義では、コンテンツのプロデューサーに求められる著作権法の基礎知識を養い、コンテンツ制作に関連する権利及び権利処理を的確に行う実務知識を得る。さらに、契約に関する基本概念および将来のプロデューサーとして必要とされる海外展開及び海外取引についての基礎を学ぶ。

5) デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅴ:コンテンツ財務

担当: 逸見圭朗

本講義では、コンテンツ分野における金融に関する基礎知識を習得し、特に、資金調達に重点を置き、豊富な事例に基づいて論じる。また、昨今の複雑化するコンテンツファイナンスの動向についても学ぶ。

6) デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅵ:コンテンツ文化史

担当: 吉田正高

本講義では、コンテンツプロデューサーにとって必要不可欠であるコンテンツを見きわめる「目」を養うことを目的とし、時系列編年で戦後日本のコンテンツの歴史を概観し、多様なタイプのコンテンツをとりあげ、背景にある時代性を軸にそれぞれの関連性を論じる。

7) エンタテインメントテクノロジー研究Ⅰ:バーチャルリアリティ

担当: 舘 暲

本講義では、バーチャルの本質的な意味を認識しつつ、バーチャルを生じさせる人間の感覚のメカニズムを理解し、現在までのバーチャルリアリティー(VR:人工現実感)技術やテレイグジスタンスを講究して、新しい人工現実感の設計を試みる。

- 8) **エンタテインメントテクノロジー研究Ⅱa:コンピュータグラフィックス**
担当: 西田友是
本講義では、コンピュータグラフィックスの基礎、特に、座標変換、データ構造、陰影計算、材質表現、アニメーションの基礎など、3次元CGの基礎について学ぶ。
- 9) **エンタテインメントテクノロジー研究Ⅲ:コンテンツデザイン**
担当: 廣瀬通孝
本講義では、人間と計算機システムが円滑に情報交換するために必要なインタフェースの設計手法を学ぶ。最初に人間をどうモデル化してとらえるかについて解説した後、現在までに登場した種々のインタフェースの方法論やパラダイムを紹介し、まとめとしてバーチャルリアリティに代表される五感情報にかかわるインタフェース技術の具体的構成手法について人間と機械の両側面から論じる。
- 10) **エンタテインメントテクノロジー研究Ⅳ:デジタル映像処理**
担当: 池内克史
本講義では、コンテンツ制作の表現手法として不可欠なコンピュータビジョンの基礎知識(明るさ解析と反射率地図、物体認識それをささえる数理統計論、物体表現など)を学ぶ。
- 11) **エンタテインメントテクノロジー研究Ⅴ:ゲームテクノロジー論**
担当: 岩谷 徹、鈴木 裕、遠藤雅伸、馬場 章ほか
本講義では、ゲーム開発工程(プリプロダクション、プロダクション、ポストプロダクション)のうち特に企画(プランニング、デザイン)と制作の過程を中心に取り上げ、ゲームをいかに企画し、いかなる技術を用いてどのように制作するかという問題について学ぶ。
- 12) **エンタテインメントテクノロジー研究Ⅵ:コンテンツ知覚心理**
担当: 佐藤隆夫
本講義では、コンテンツの企画、製作を行う場合に必要と思われる視聴覚の基本的なメカニズム、および、それを解明するための実験手法について学び、さらに、視聴覚における心理的なリアリティーなどの興味深い現象、特に視覚的な安全性に関する知識を学ぶ。
- 13) **エンタテインメントテクノロジー研究Ⅶ:制作展示プロデュース**
担当: 荒川忠一
本講義では、研究発表をもとにさまざまな表現手法を議論し、作品展に向けて制作を行うほか開催に向けた企画等のマネジメントについても学ぶ。
- 14) **エンタテインメントテクノロジー研究Ⅷ:インタフェースデザイン**
担当: 苗村 健
本講義では、主に人間の感覚系に関する様々な知見と、それに基づくヒューマンインタフェースの実装・デザインについて技術的な観点から学ぶ。
- 15) **エンタテインメントテクノロジー研究Ⅸ:先端技術と芸術表現論**
担当: 河口洋一郎

本講義では、情報造形の基礎を学習するために、特に「自然界の形の造形」とメカニクな立体造形への応用に焦点を置き、その生成手法の基礎を学ぶ。

16) エンタテインメントテクノロジー研究Ⅹ：検索技術と情報ビジネス

担当：相澤清晴、松野将宏 ほか

本講義では、インターネットポータルビジネスにおける実際のコンテンツを例に、ウェブ検索技術や新しいコンテンツ創造の場として注目を集めているブログサービスなど、最先端の検索技術とサービスについて学び、それらを活用した情報ビジネスの現状と今後について学ぶ。

17) デジタルコンテンツ創造科学演習Ⅰ：インターンシップ

担当：馬場 章、藤原正仁

本演習では、講義で得た基礎理論や基礎知識を活用し、実際のコンテンツ制作現場において実務者との共同作業を通して、現場の経験知や実務を学び、新たなデジタルコンテンツ創造に結びつけることができる能力を体得する。

18) デジタルコンテンツ創造科学演習Ⅱ：製作・マーケティングシミュレーション

製作・マーケティングシミュレーションは以下の5つのゼミから構成されている。

Ⅱa: 製作・マーケティングシミュレーション ゲームプロデュースゼミ

担当：遠藤雅伸、堀聖司

本演習では、ゲームの本質的な面白さの具現化を目的として、ゲームプロデューサーのプロプライダクションへの関わり方をシミュレートし、ボードゲームによってゲームのプロトタイプ開発を学ぶ。

Ⅱb: 製作・マーケティングシミュレーション アニメーション企画ゼミ

担当：七丈直弘、八巻 磐、辻本幸七

本演習では、アニメーションや映像を主体としたコンテンツ制作に関する各工程の構造および実務を知った上で、実際に自ら企画を立て、その実現に向けて様々な作業を実施することで、この分野でビジネスを推進する上で必要となる実践力を身につける。

Ⅱc: 製作・マーケティングシミュレーション Web サイト企画ゼミ

担当：青木輝勝、山田和明 ほか

本演習では、企画立案とクリエイションを重視し、Webデザインを例に、課題に対する企画立案、制作、発表、成果物の分析・批評までを実務者を交えて行うことで、論理的思考や表現技術を身につける。

Ⅱd: 製作・マーケティングシミュレーション フィルムプロデュースゼミ

担当：馬場 章、公野 勉、堀 聖司

本演習では、実写による映像作品のプロデュースを実践的に習得する。すなわち、座学によって得られる企画立案、資金調達、制作行程管理、流通などに関する知識をもとに、地方都市をテーマとする実写映像作品の企画・制作・流通を実際に行って、実践力を身につける。

Ⅱe: 製作・マーケティングシミュレーション 展示・出版プロデュースゼミ

担当：馬場 章

本演習では、講義によって企画展の開催や写真集の刊行を実現するための基礎知識や理論を習得した上で、クリエイターとのディスカッションや実際の企画・営業を中心に実践力を身につけ、展示・出版形態によ

るプロデュースやプロモーションを実際に行う。

19) デジタルコンテンツ創造科学演習Ⅲ：論文作成

担当：荒川忠一、苗村健、青木輝勝

新たなデジタルコンテンツを生み出すための科学技術やコンテンツに関するマーケティングや商品流通の実態と今後の展望など、デジタルコンテンツの発展につながるテーマを選択し、担当教員の個別指導のもとコンテンツ分野に関連する論文の作成を行う。

20) デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅰ：作品研究

担当：浜野保樹、梶浦齊史、小倉正樹 ほか

コンテンツ作品（映画、ゲームなど）を毎回選び、その製作に参加した専門家によって製作の意図および過程について解説してもらい、様々な視点から語られる製作における重要事項を通じて、コンテンツが成立するために必要となる様々な知識を総合的に学ぶ。

21) デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅱ：アニメーション制作理論

担当：鈴木敏夫、押井 守、石川光久、七丈直弘 ほか

日本のアニメーション製作の第一線で活躍しているプロデューサー、監督などの関係者を講師に迎え、アニメーションの種類とプロダクションの現状、国際戦略の現状と今後の課題、アニメーション関連のビジネスモデルなどについて、その実践に必要とされる知識を総合的に学ぶ。

22) デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅲ：ゲームプロデューサー論

担当：松原健二、小沼謙太郎、馬場 章 ほか

本講義では、ゲームのビジネス、特にファイナンス、リーガル、マーケティング、プロモーションやリーテルを中心にとりあげ、ゲーム開発におけるそれらの役割と実際を、国際的なゲーム情報の流通という視点とゲームプロデューサーの立場から講義する。

23) デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅳ：映画産業論

担当：公野 勉

本講義では、総論として映画業界における制作・買付・配給・興行までにおよぶ産業構造を解説し、その国内外の市場実態を踏まえたコンテンツ戦略のあり方について、各論として映画製作におけるディベロップメント・撮影・ポストプロダクションの実際について学ぶ。

24) デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅴ：デジタルメディア

担当：青木輝勝

アニメ・ゲームに特化せず、次世代映像製作技術や TV・出版・CM・デジタルシネマ・立体映像・ケータイなどより広義なコンテンツに焦点をあて、これらの現状と今後の動向を学ぶ。

25) デジタルコンテンツ創造科学特別講義

担当：原島 博

コンピュータがマルチメディア、インターネット、ブロードバンドへと進化して、いまや情報社会の基盤となった今、情報メディア技術にいま何が起きているのかを展望する。なお、本講義は、被養成者に対して、メディアに関する幅広い視点を身につけさせるために、本年度新規に開講した。

科目・開講時期一覧

科目番号	科目名	担当教員	単位数	開講時期	備考
S001	デジタルコンテンツ創造科学特別講義	原島 博	2	夏学期	※1
A001	デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅰ： コンテンツ制作理論	浜野保樹	2	夏学期	※2
A002	デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅱ： コンテンツ制作技術論	七丈直弘	2	冬学期	※2
A003	デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅲ： グローバルストラテジー論	馬場 章	2	冬学期	※2
A004	デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅳ： コンテンツ法務	八代英輝	2	冬学期	※2
A005	デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅴ： コンテンツ財務	逸見圭朗	2	夏学期	※2
A006	デジタルコンテンツ創造科学講義Ⅵ： コンテンツ文化史	吉田正高	2	夏学期	※2
B001	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅰ： バーチャルリアリティ	舘 暲	2	夏学期	※3
B002a	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅱa： コンピュータグラフィックス	西田友是	2	夏学期	※3
B002b	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅱb： コンピュータグラフィックス	西田友是	2	冬学期	※3
B003	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅲ： コンテンツデザイン	廣瀬通孝	2	夏学期	※3
B004	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅳ： デジタル映像処理	池内克史	2	冬学期	※3
B005	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅴ： ゲームテクノロジー論	鈴木 裕 岩谷 徹 遠藤雅伸 馬場 章 各教員	2	夏学期	※3
B006	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅵ： コンテンツ知覚心理	佐藤隆夫	2	夏学期	※3

B007	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅶ: 制作展示プロデュース	荒川 忠一	2	通年開講	※3
B008	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅷ: インタフェースデザイン	苗村 健	2	夏学期	※3
B009	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅸ: 先端科学技術と芸術表現論	河口洋一郎	2	夏学期	※3
B010	エンタテインメントテクノロジー研究Ⅹ: 検索技術と情報ビジネス	相澤清晴 松野将宏	2	冬学期	※3
C001	デジタルコンテンツ創造科学演習Ⅰ: インターンシップ	馬場 章 藤原正仁	6	通年開講	※4
C002a	デジタルコンテンツ創造科学演習Ⅱa: 製作・マーケティングシミュレーション ゲームプロデュースゼミ	遠藤雅伸 堀 聖司	6	通年開講	※4
C002b	デジタルコンテンツ創造科学演習Ⅱb: 製作・マーケティングシミュレーション アニメーション企画ゼミ	八巻 磐 辻本幸七 七丈直弘	6	通年開講	※4
C002c	デジタルコンテンツ創造科学演習Ⅱc: 製作・マーケティングシミュレーション Web サイト企画ゼミ	青木輝勝 山田和明 各教員	6	通年開講	※4
C002d	デジタルコンテンツ創造科学演習Ⅱd: 製作・マーケティングシミュレーション フィルムプロデュースゼミ	馬場 章 吉田正高 各教員	6	通年開講	※4
C002e	デジタルコンテンツ創造科学演習Ⅱe: 製作・マーケティングシミュレーション 展示・出版プロデュースゼミ	馬場 章	6	通年開講	※4
C003	デジタルコンテンツ創造科学演習Ⅲ: 論文作成	各教員	6	通年開講	※4
D001	デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅰ: 作品研究	浜野保樹 梶浦斉史 小倉正樹 各教員	2	通年開講	※5
D002	デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅱ: アニメーション制作理論	七丈直弘 各教員	2	冬学期	※5
D003	デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅲ: ゲームプロデューサー論	松原健二 小沼謙太郎 馬場 章	2	冬学期	※5

		各教員			
D004	デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅳ： 映画産業論	公野 勉	2	冬学期	※5
D005	デジタルコンテンツ創造科学特論Ⅴ： デジタルメディア	青木輝勝	2	冬学期	※5

備考

※1 演習科目以外の任意の科目群(講義・研究・特論)の単位として認定する。

※2 科目番号 A001～A006 の中から 3 科目以上を選択の上、履修する

※3 科目番号 B001～B009 の中から 1 科目（2 単位）以上を履修し、「デジタルコンテンツ創造科学特論」と合計して 8 単位以上を履修する。（平成 17 年度および 18 年度に認定した履修生は 2 科目（4 単位）以上を履修する。）

※4 科目番号 C001～C003 の中からいずれか 1 科目を選択の上、履修する

※5 科目番号 D001～D005 の中から 1 科目（2 単位）以上を履修し、「エンタテインメントテクノロジー研究」と合計して 8 単位以上を履修する。（平成 17 年度および 18 年度に認定した履修生は 2 科目（4 単位）以上を履修する。）

6 予算

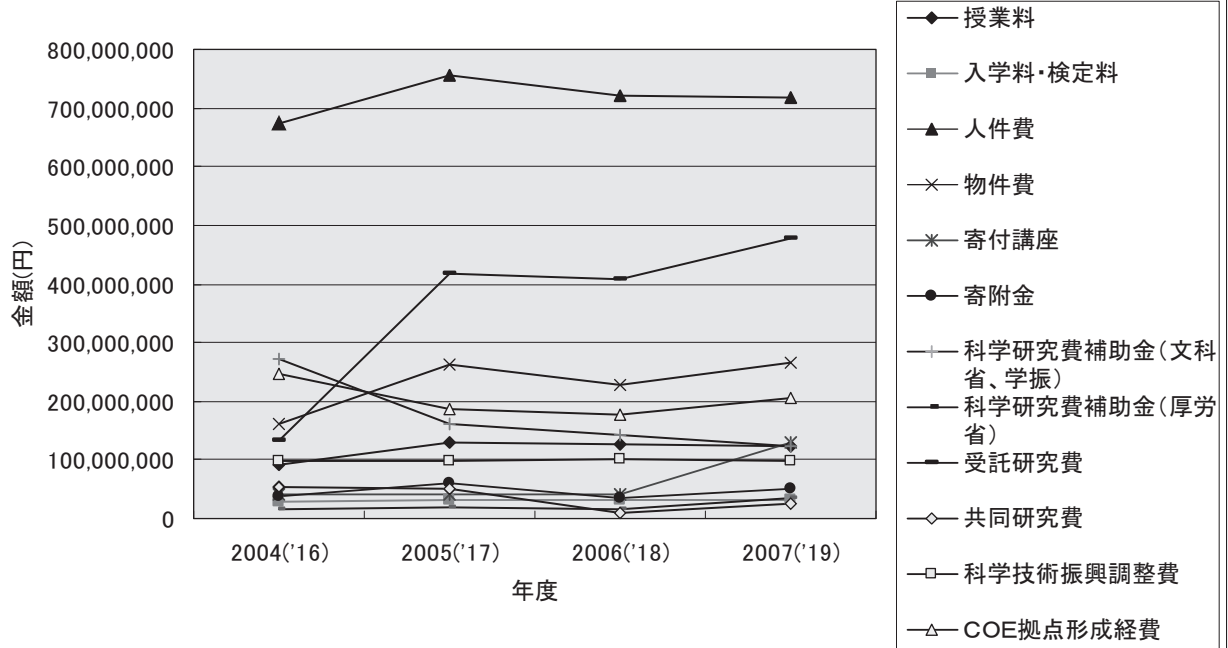
・情報学環

	2004('16)		2005('17)		2006('18)		2007('19)	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
授業料	—	90,136,400	—	130,079,250	—	126,550,530	—	121,873,050
入学料・検定料	—	28,393,000	—	30,056,800	—	30,227,200	—	31,936,600
人件費	—	674,461,271	—	754,176,257	—	722,514,839	—	716,814,000
物件費	—	160,385,580	—	261,876,000	—	228,921,285	—	266,379,000
寄附講座	1	40,000,000	1	40,000,000	1	40,000,000	4	129,000,000
奨学寄附金	38	38,110,800	38	60,357,398	34	35,269,141	43	51,906,345
科学研究費補助金 (文科省、学振)*	27	270,780,000	32	161,200,000	36	142,525,000	30	122,820,000
科学研究費補助金 (厚生省)	5	14,500,000	5	18,000,000	5	17,000,000	4	33,800,000
受託研究費	17	132,979,479	22	417,571,620	16	407,165,816	17	477,480,000
共同研究費	16	54,677,750	13	49,205,030	7	10,985,000	13	26,671,000
科学技術振興調整 費	2	96,572,000	1	97,204,000	1	99,998,000	1	97,999,605
COE 拠点形成経 費	1	248,000,000	1	188,000,000	1	177,180,000	1	204,600,000

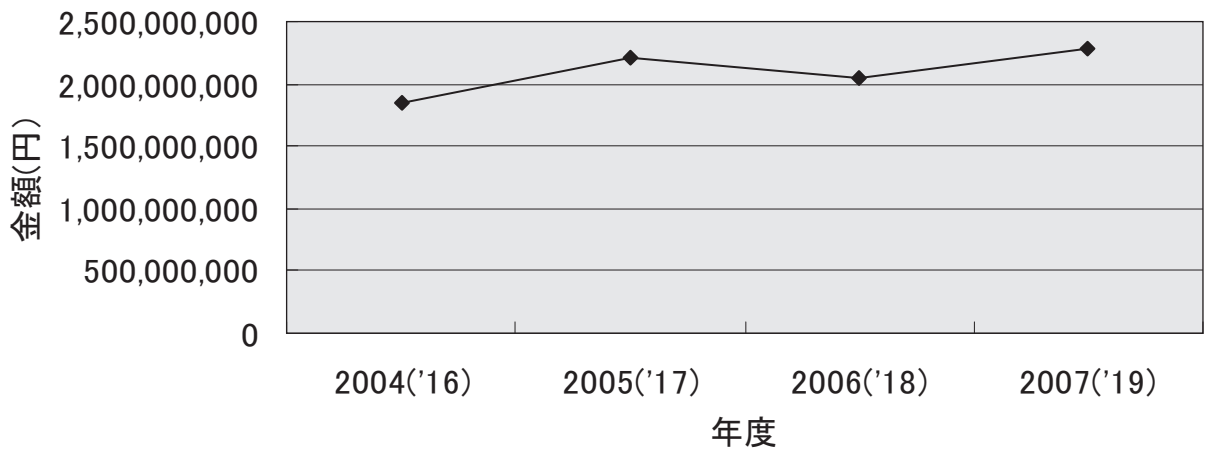
* 特別研究員奨励費は除く

(H19 物件費については、追加配分及び 2006 年からの目的積立金分を含む)

予算事項別



予算全体



7 土地・建物面積

・建物

建物名	建築年度	面積（延㎡）
学環本館	S.27	472
	S.29	26
	S.33	360
	S.58	4,171
	計	5,029
暫定アネックス	H.13	1,013
工学部 2 号館	*H18	*500
目白台西 1 号館	*H18	*492
目白台西 2 号館	*H18	*545
第 2 本部棟	*H18	*548
福武ホール	H19	*3,241

*=使用年度・使用㎡数

（福武ホール面積については全学
共用スペース分を除く）

・学外スペース

文京区本郷(フローラビル)	117.71㎡
文京区本郷(MAビル)	82.73㎡

8 入試定数と受入数

	修士		博士	
	入学定員	受入予定人員	入学定員	受入予定人員
平成 15 (2003)	37	48	16	20
平成 16 (2004)	70	70	30	30
平成 17 (2005)	70	70	30	30
平成 18 (2006)	85	90	36	38
平成 19 (2007)	85	90	36	38

9 年度別入試データ詳細

修士

	2003	2004	2005	2006	2007
志願者	134	157	178	225	148
合格者	58	53	75	85	79
入学者	56	47	70	80	73

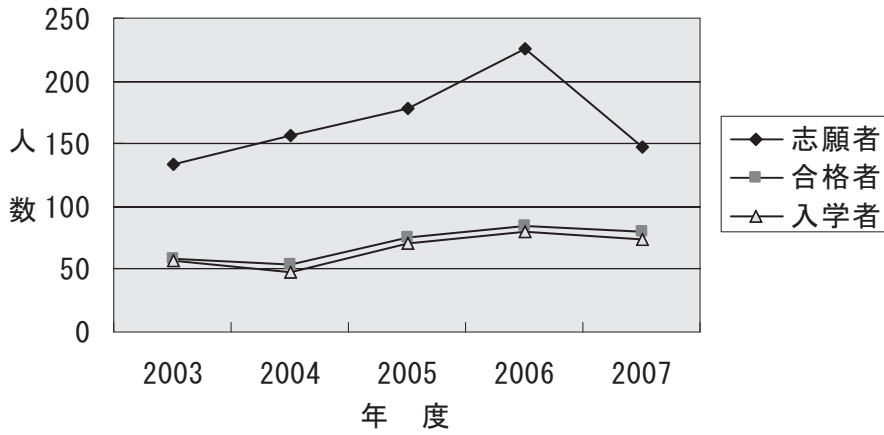
博士

	2003	2004	2005	2006	2007
志願者	29	34	55	62	58
合格者	15	21	25	37	36
入学者	15	21	25	37	36

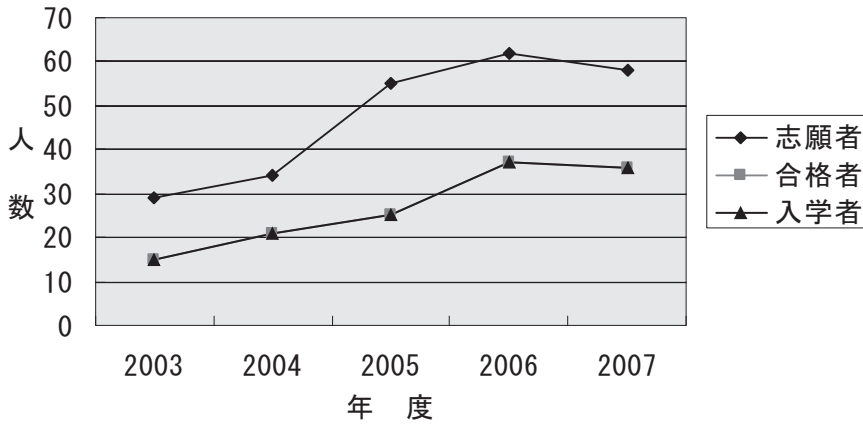
志願倍率（ 志願者数 / 入学定員 ）

	2003	2004	2005	2006	2007
修士	3.62	4.24	2.54	2.65	1.74
博士	1.81	2.13	1.83	1.72	1.61

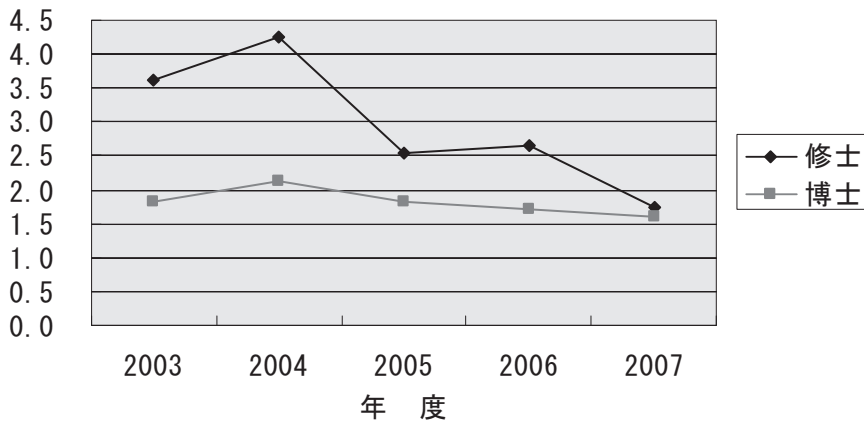
志願者・合格者・入学者の推移（修士課程）



志願者・合格者・入学者の推移（博士課程）



志願倍率



2007 年度修士入学試験詳細

志願者

本学	26
他大学	122

合格者

本学	17
他大学	62

入学者

本学	15
他大学	58

志願者

日本人	118
外国人	30

合格者

日本人	63
外国人	16

入学者

日本人	59
外国人	14

志願者

男	91
女	57
	148

合格者

男	44
女	35
	79

入学者

男	38
女	35
	73

志願者

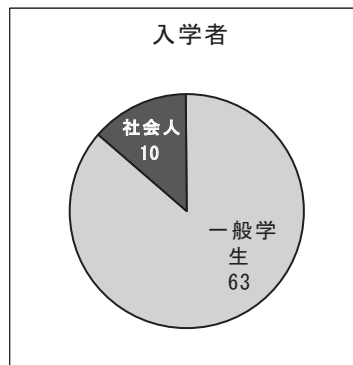
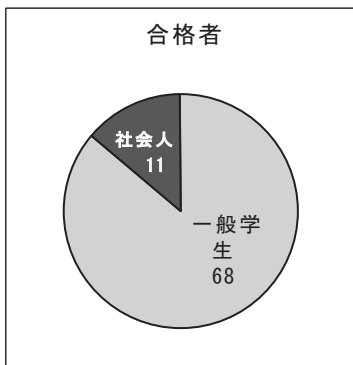
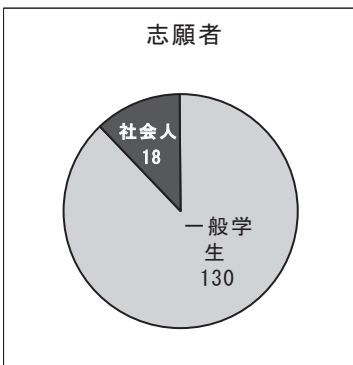
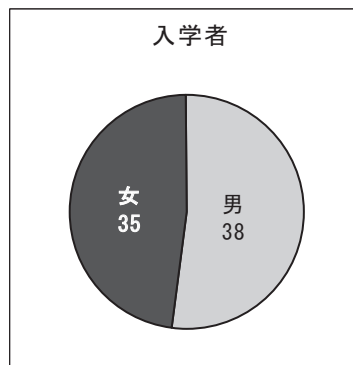
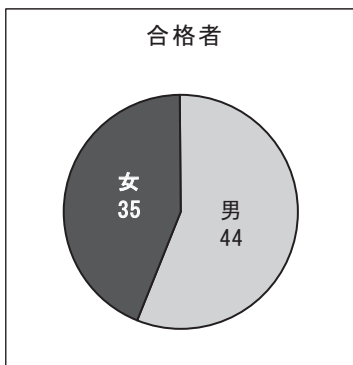
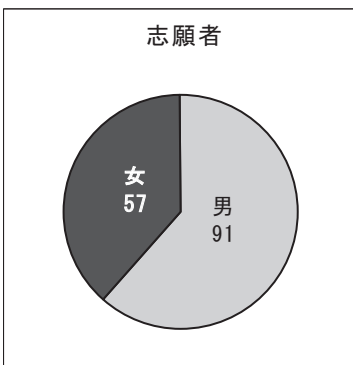
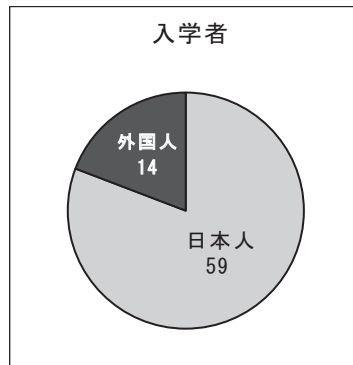
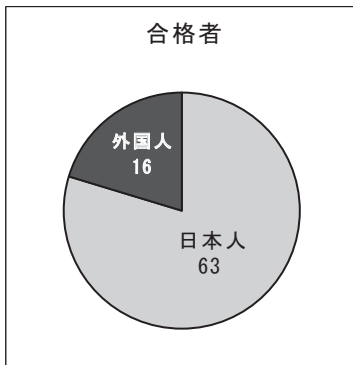
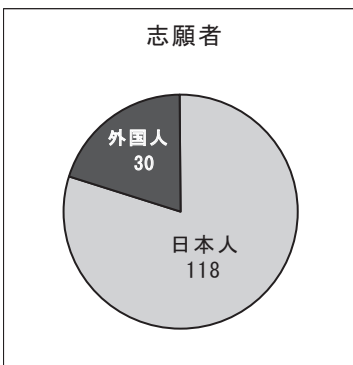
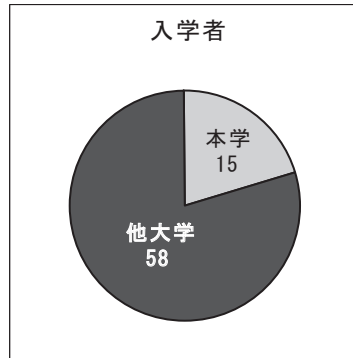
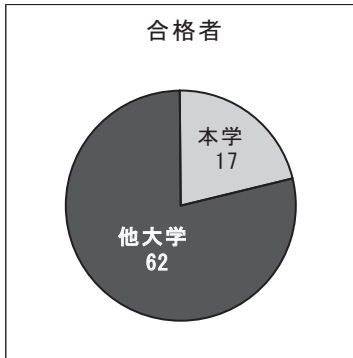
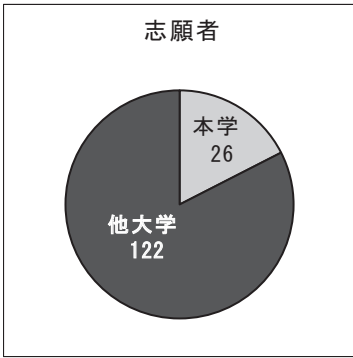
一般学生	130
社会人	18

合格者

一般学生	68
社会人	11

入学者

一般学生	63
社会人	10



2007 年度博士入学試験詳細

志願者

本学	39
他大学	19

合格者

本学	26
他大学	10

入学者

本学	26
他大学	10

志願者

日本人	47
外国人	11

合格者

日本人	28
外国人	8

入学者

日本人	28
外国人	8

志願者

男	35
女	23

合格者

男	20
女	16

入学者

男	20
女	16

志願者

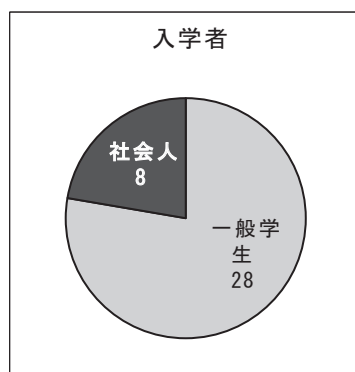
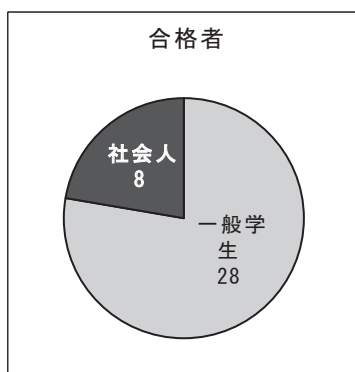
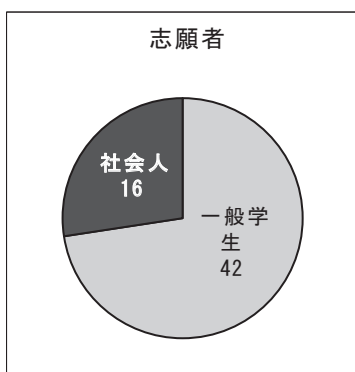
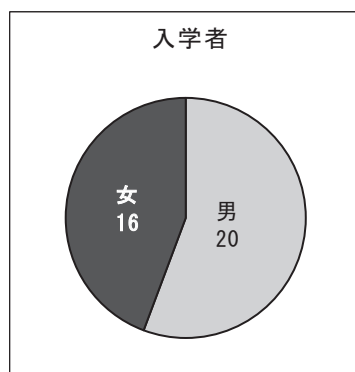
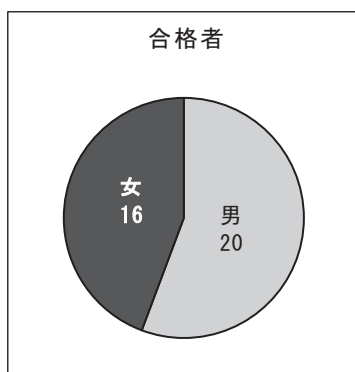
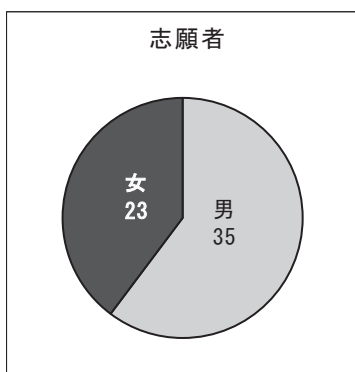
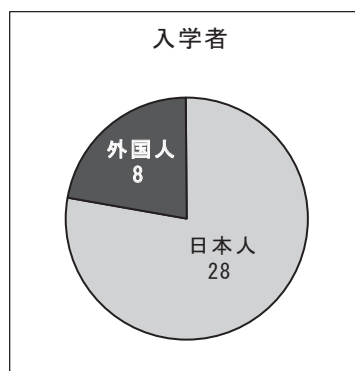
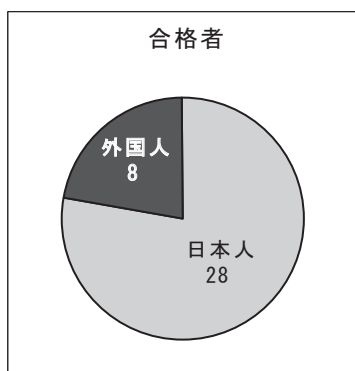
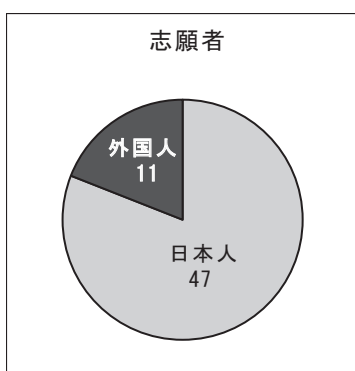
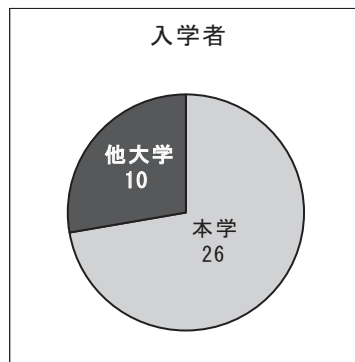
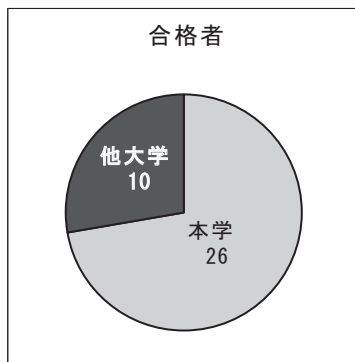
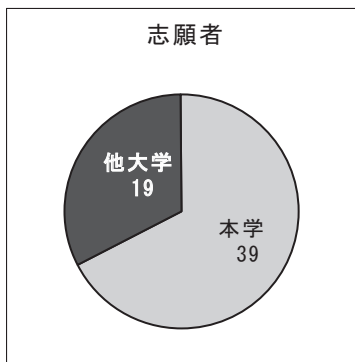
一般学生	42
社会人	16

合格者

一般学生	28
社会人	8

入学者

一般学生	28
社会人	8

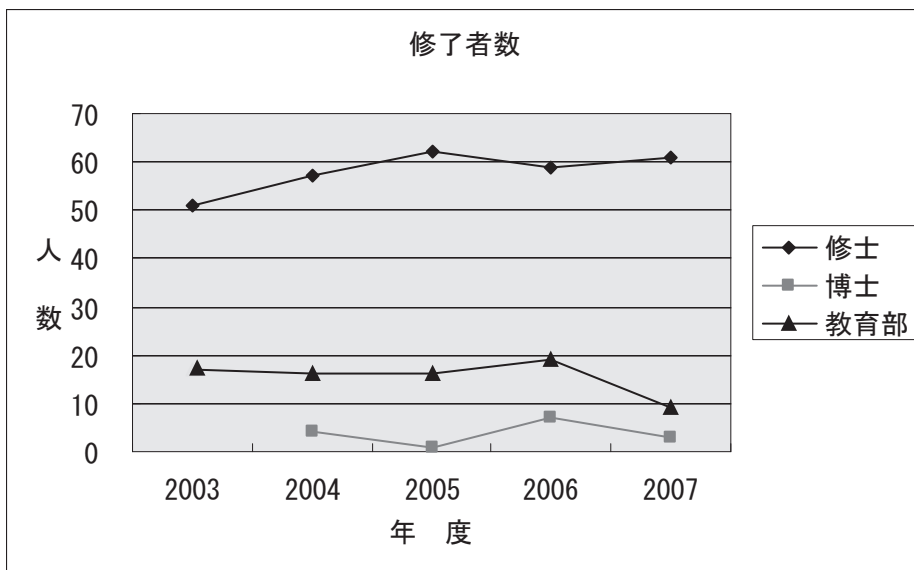


10 修了者数の推移

平成 15(2003)年度から平成 19(2007)年度修了者数（教育部研究生）

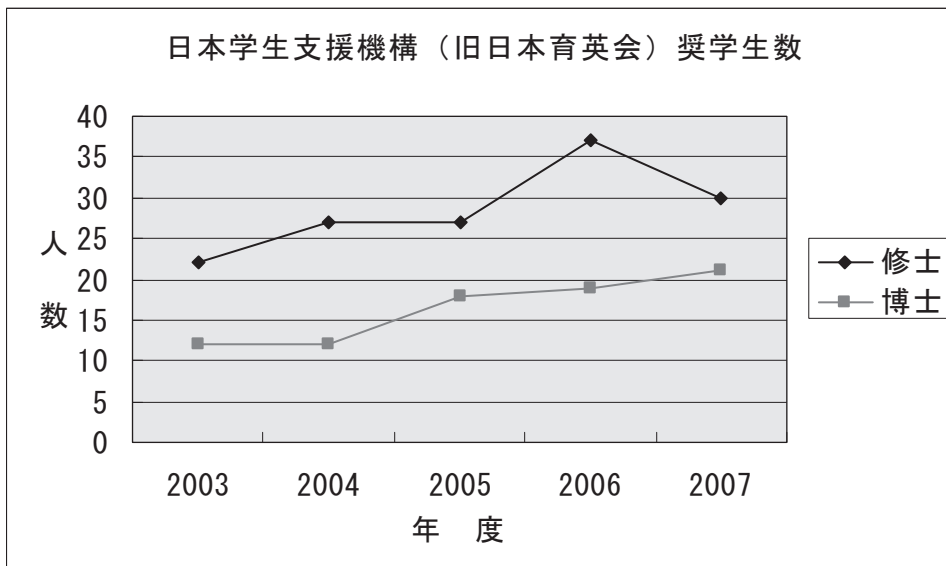
年度		修了者		
		本学	他大学	計
平成 15(2003)年度	日本人	7	9	16
	外国人	0	1	1
	計	7	10	17
平成 16(2004)年度	日本人	9	6	15
	外国人	0	1	1
	計	9	7	16
平成 17(2005)年度	日本人	5	11	16
	外国人	0	0	0
	計	5	11	16
平成 18(2006)年度	日本人	8	10	18
	外国人	0	1	1
	計	8	11	19
平成 19(2007)年度	日本人	3	6	9
	外国人	0	0	0
	計	3	6	9
合計		32	42	74
		0	3	3
		32	45	77

	2003	2004	2005	2006	2007
修士	51	57	62	59	61
博士		4	1	7	3
教育部	17	16	16	19	9



11 学生支援機構（旧育英会）奨学生数

	第一種		第二種		合計	
	修士	博士	修士	博士	修士	博士
2003 年度	14	9	8	3	22	12
2004 年度	18	12	9	0	27	12
2005 年度	16	17	11	1	27	18
2006 年度	21	18	16	1	37	19
2007 年度	20	15	10	6	30	21



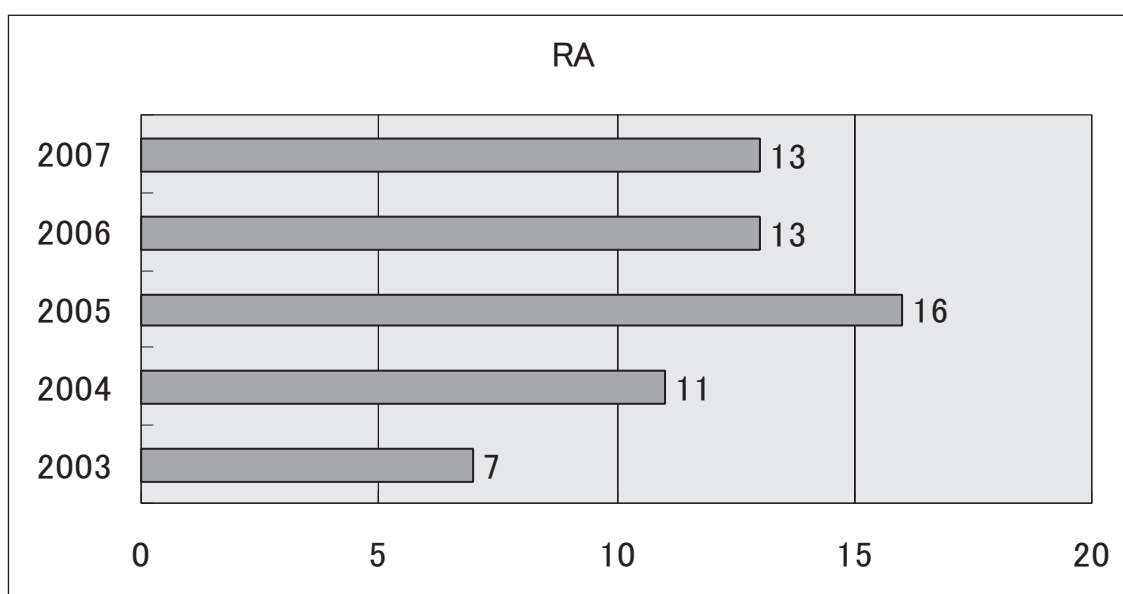
12 日本学術振興会特別研究員数

学際情報学府

	DC 1	DC 2	合計
2003 年度	0	0	0
2004 年度	1	0	1
2005 年度	1	0	1
2006 年度	4	2	6
2007 年度	1	10	11

13 リサーチアシスタント数

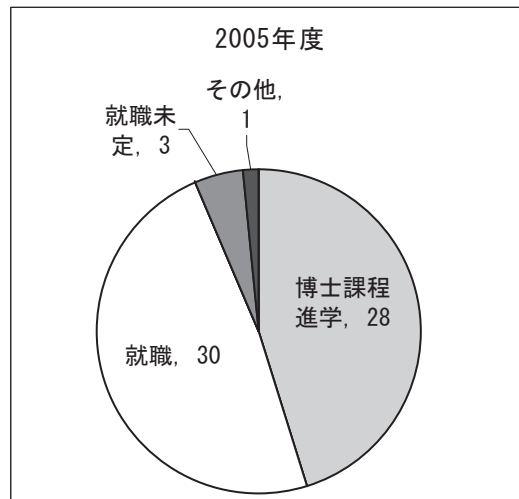
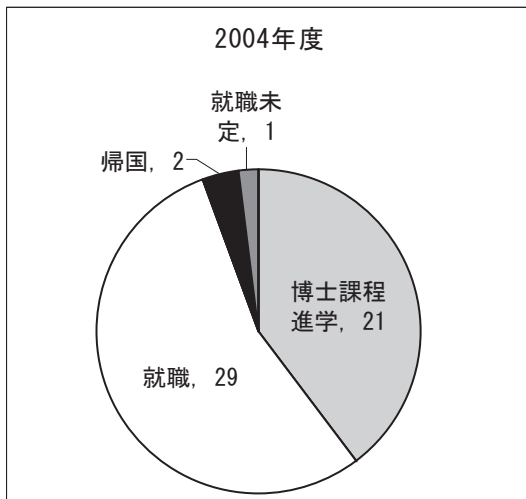
	情報学環	社会情報研究所
2003	2	5
2004	11	
2005	16	
2006	13	
2007	13	



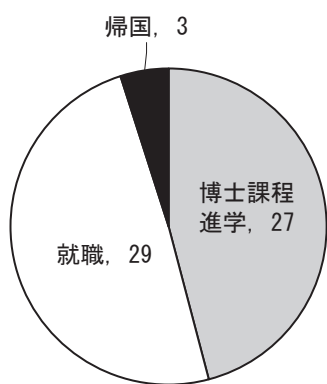
14 就職状況

学際情報学府修士課程修了者 進路状況資料 (2004年度～2007年度)

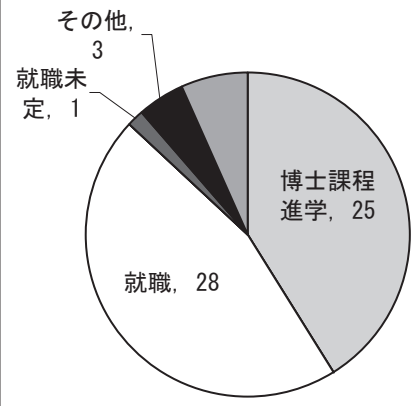
区分	2004年度			2005年度	2006年度	2007年度	
	学際情報学 コース	実践情報学 コース	計				
博士課程進学	学際情報学府	14	6	20	27	25	22
	学内他研究科	1		1	1		2
	学外					2	1
海外留学							
就職	12	17	29	30	29	28	
大学院研究生	学際情報学府						
	学内他研究科						
帰国(外国人留学生)	1	1	2		3		
就職未定	1		1	3		1	
その他				1		3	
不明						4	
合計	29	24	53	62	59	61	



2006年度



2007年度



<就職先一覧>

2004 年度	2005 年度	2006 年度	2007 年度
(株)ホストコンサルティンググループ 2	(株)三菱総合研究所 2	(株)電通 2	(株)野村総合研究所 3
(株)任天堂 2	(株)ワークスアプリケーションズ 1	(株)リクルート 2	(株)三菱東京UFJ銀行 2
(株)日本総合研究所 1	(株)ビービット 1	倉敷市立短期大学 1	日本電信電話(株) 1
(株)イースタンスポーツ 1	(株)takibi 1	(株)フロム・ソフトウェア 1	(株)リード エグジビション ジャパン 1
(株)ソニー 1	東日本旅客鉄道(株) 1	(株)コスモ・スペース サービス(株) 1	IBMビジネスコンサルティングサービス(株) 1
NTT 研究所 1	(株)スタジオジブリ 1	日本アイ・ビー・エム・システムズ・エンジニアリング(株) 1	(株)ツァイト・フォト 1
(株)東京リーガルマインド 1	ソニー・エリクソン・モバイルコミュニケーションズ(株) 1	モルガン・スタンレー証券(株) 1	(株)JM 1
YRP ユビキタスネットワーク研究所 1	(株)日立製作所 1	沖電気工業(株) 1	中日新聞社 1
(株)ジェアール東日本情報システム 1	楽天(株) 1	凸版印刷(株) 1	(株)思文閣 1
(株)日立製作所 1	(株)竹中工務店 1	(株)インフォバーン 1	(株)いまじん 1
(株)博報堂 1	日本テレビ放送網(株) 1	(株)プラップジャパン 1	松下電器産業(株) 1
(株)エヌ・ティ・ティ・コム 1	アクセンチュア(株) 1	(株)ヒューマンルネッサンス研究所 1	ソニー(株) 1
(株)三井物産 1	学校法人駿河台学園 1	(株)野村総合研究所 1	(株)日立システムズ アンド サービス 1
個人デザイン事務所 1	(株)アイ・ティ・フロンティア 1	セイコーインスツル(株) 1	グーグル(株) 1
日本経済新聞社 1	ア 1	(株)日本総合研究所 1	ソネットエンタテインメント(株) 1
(株)サイバーエージェント 1	社団法人共同通信社 1	日本電信電話(株) 1	(株)三菱総合研究所 1
(株)電通 1	ソフトバンク クリエイティブ(株) 1	ゴールドマン・サックス証券(株) 1	(株)内田洋行 1
衆議院議員事務所 1	日経ホーム出版社 1	名古屋鉄道(株) 1	任天堂(株) 1
(株)日本テレビ放送網 1	淑徳与野高等学校 1	NTT コミュニケーションズ(株) 1	富士通(株) 1
(株)ベネッセコーポレーション 1	(株)東芝 1	日本生命保険相互会社 1	ナブテスコ(株) 1
(株)スクウェア 1	三井物産(株) 1	(株)アイ・エム・ジェイ 1	(株)d Space Japan 1
(株)ソニー・コンピュータエンタテインメント 1	野村アセットマネジメント(株) 1	(株)ACCESS 1	(株)TBSテレビ 1
(株)セプテーニ 1	読売新聞東京本社 1	BOSCH(株) 1	NTTコミュニケーションズ(株) 1
福山大学 1	(株)博報堂 DY メディア 1	フリープランナー・ライター 1	トヨタ自動車(株) 1
(株)NTT データ 1	パートナーズ 1	NPO 法人日本臨床研究支援ユニット 1	(株)パスコ 1
(株)NEC ソフト 1	(株)電通 1	日本放送協会 1	
シティバンク、エヌ・エイ 1	自由業 2		
	特定非営利活動法人役員 1		
	その他(就職先不明) 1		

15 ベネッセ先端教育技術学講座

ウェブサイトアドレス <http://beatiii.jp/>

■スタッフ一覧

客員教授 飯吉透（カーネギー財団 知識メディア研究所所長）

准教授（併任） 山内祐平（東京大学大学院 情報学環 准教授）

特任助教（常勤） 北村智

特任助教（常勤） 山田政寛

コーディネータ 秋山大志（（株）ベネッセコーポレーション教育研究開発本部 Benesse 教育研究開発センター）

コーディネータ 中野真衣（（株）ベネッセコーポレーション教育研究開発本部 Benesse 教育研究開発センター）

コーディネータ 和気竜也（（株）ベネッセコーポレーション教育研究開発本部 Benesse 教育研究開発センター）

16 電通コミュニケーションダイナミクス寄付講座

表 16-1：電通コミュニケーションダイナミクス寄付講座構成員

濱田純一（教授 専門分野：情報法、情報政策）

清原聖子（客員教員(助教相当) 専門分野：テレコム政策、政治コミュニケーション）

石崎雅人（准教授 専門分野：コミュニケーションの科学）

田中秀幸（准教授 専門分野：ネットワーク経済）

水越 伸（准教授 専門分野：ソシオ・メディア論）

林 香里（准教授 専門分野：ジャーナリズム論）

山口いつ子（准教授 専門分野：表現の自由、サイバー法）

北田暁大（准教授 専門分野：メディア社会学）

樺島榮一郎（助教 専門分野：情報経済、知的財産）

杉山幹夫（特任研究員）

佐々木俊尚（特任研究員）

羽野仁彦（特任研究員）

小向太郎（特任研究員）

表 16-2: 2007 年度の活動状況	
第一回研究会「選挙とウェブ上の政策関心空間の構造分析」	
日時	2007年6月22日 金曜日 19:00-21:00
場所	東京大学大学院情報学環 6F 実験室
発表者	静岡大学佐藤哲也准教授 静岡大学の佐藤哲也准教授をお招きして、参議院選挙に関連したブログの関係性の分析などに関してご発表いただき、その後、研究メンバーを交えて、議論を行いました。
第二回研究会「地域メディア・地域情報化とシティ・プロモーション」	
日時	2007年7月13日 金曜日 12:30-14:30
場所	東京大学大学院情報学環 6F 実験室
発表者	杉山幹夫さん（NPO法人シビックメディア専務理事） 杉山さんがNPO法人で取り組んでいる札幌市の地域情報化とシティ・プロモーションの取組についてご発表いただきました。（杉山さんは、シティ・プロモーションの観点から札幌市の地域サイトである「ウェブシティさっぽろ」や「ようこそさっぽろ」の編集・運営に参加していらっしゃいます。）
情報学環教育部研究生授業「ワークショップで学ぶメディア社会史」	
日時	2007年7月22日 日曜日 14:00-17:30
場所	本郷キャンパス工学部新2号館93B（教室） このワークショップは、情報学環教育部の授業として、メディア論的に社会をとらえるセンスやパースペクティブを、講義とグループワークを通じて養うことを目的に行われました。 前半では、担当教員の経験した新聞研究所、社会情報研究所から情報学環へいたる歴史的経緯を語りつつ、その時代ごとのメディアと社会の関わり方、理論や思想のあり方について概説をしました。それらの知見を踏まえつつ、後半では1955年、65年、75年、85年、95年の5つのチームに分かれ、その年の日本のメディアと社会のあり方について知識支援システム「sohime」を活用して知識を蓄え、思考をめぐらし、身体を使って寸劇をしつつ発表しました。これは、メディア社会の歴史的ダイナミクスを学ぶための、一種のメディアリテラシー・ワークショップとなりました。 （情報学環教育部は、ジャーナリストをめざす人や、社会情報、マス・コミュニケーション及びジャーナリズム、学際情報の分野に関心をもつ人を対象として、教育指導を行っています。対象は、学部3年以上の学生および社会人となっています。）
第三回研究会「中国のテレビ放送における広告の発展と機能」	
日時	2007年7月24日 火曜日 13:00-15:00
場所	東京大学大学院情報学環 6F 実験室
発表者	楊霜さん（東京大学大学院人文社会系研究科博士課程） 楊霜さんの博士論文の一章を取り上げ中国のテレビ局に関する概要、入札を使ったCM枠の売買制度の成立とその後の制度および落札者の変遷などに関してご発表いただき、研究メンバーおよび電通総研研究員の方を交えて日本および中国のテレビビジネスの可能性などの議論を行いました。

第4回研究会「ブログ分析の現状と将来」



日時 2007年11月27日火曜日 16:30-18:30

場所 東京大学工学部新2号館 9F 92B

発表者 奥村 学（東京工業大学精密工学研究所 准教授）

概要 インターネットの普及に伴い、一般の多くの人々からの情報発信が盛んになり、その発信されている大量の情報を有効に活用したいという要求も高まっている。こうした状況を背景に、現在注目されている情報源の一つが **blog** であり、この **blog** を大量に収集し、収集した **blog** 集合をさまざまな手法で分析することで、一般の人々の「生の声」をうまく抽出することに現在関心が集まっている。「マス」としての **blog** 集合からは、社会の中の「みんなの意見」が取り出せる可能性があるからである、そのようないくつかの **blog** マイニング手法について概説するとともに、そのような **blog** マイニングシステムの1つの事例として、我々が現在開発中の **blogWatcher** について紹介する。また、我々の技術を元に、リクルート、電通、東工大の3者で設立した株式会社ブログウォッチャーおよび、その最初のサービス **SHOOTI** についても紹介する。

当日は、電通および情報学環から合計 22 名が参加し、質疑応答も活発に行われました。講演では、技術の動向だけでなく、具体的な内容についても説明をしていただきました。たとえば、ブログの中での製品の評価について、製品-観点-評価の3つ組を半自動的に学習したデータに基づくアルゴリズムの説明がありました。個人が言いたいことを手軽に **web** 上に残せることから、大量のデータが蓄積されていく。その情報にブログマイニング技術が適用されることにより、さらに新たな情報が生みだされる。ブログは情報社会のインフラになりつつあると感じました。

第5回研究会「意見分析の理論と実践—対話型意見収集システムの実装を中心に—」

日時 2008年1月22日火曜日 16:30-18:00

場所 工学部新2号館 9F 92B

発表者 大塚 裕子さん

(財)計量計画研究所言語情報研究室研究員

東京工業大学、九州大学非常勤講師（東京大学大学院人文社会系研究科博士課程）

政策決定プロセスや商品開発プロセスにおいて、市民や消費者の意見を反映させる仕組みや方法が注目されている。アンケートやインタビューによる意見収集および分析にどのような方法があるのかを概観するとともに、近年の社会的ニーズについて述べる。また、政策決定プロセスでの利用を目的に実装された対話型意見収集システムを紹介した。

第6回研究会「3人の特任研究員による研究発表」



日時 2008年3月27日木曜日 13:00-15:20

場所 情報学環本館 6F 実験室

発表者 杉山幹夫さん(シビックメディア専務理事)

佐々木俊尚さん(フリージャーナリスト)

羽野仁彦さん(ブログウォッチャー代表取締役)

○杉山さんご発表

NPO 法人シビックメディア専務理事として、「ウェブシティさっぽろ」、「ようこそさっぽろ」、「札幌スタイル」の運営を行っている。ウェブシティさっぽろは、札幌のシティプロモーションサイト、「よ

うこそさっぽろ」は観光情報、「札幌スタイル」は、デザイナーと中小企業のマッチングを行い製造業を支援する市のサイト。いずれも市民、行政、企業などを交えた運営委員会が運営にかかわり、多様なコラボレーションによる、地域活性化を果たしている。

○ 佐々木さんご発表

「ネット社会におけるジャーナリズムの変容」というテーマでお話しされました。

新聞を中心としたマスメディアが担ってきた、アジェンダ設定機能、世論形成の役割が揺らいでいる。また、記事のマイクロコンテンツ化によって、広告媒体としての機能も弱まる。一方で、ネットは、機関ではなく、場を提供しているにすぎない。しかし、ソーシャル・レコメンデーション、ソーシャルグラフを組織化していくことにより、公共圏的なものを形成できる可能性もある。

今後は、ネット世代は公共圏、世論形成装置をどう認識しているか、マスメディアに代わるアジェンダ設定装置は具現化するか、地方×中央、下流×上流、ケータイ×PC というデバイドの存在、についてさらに研究を進めたい、とのことでした。

○ 羽野さんご発表

「アルファブロガーに関する調査研究」というテーマでお話しされました。

東工大奥村准教授とブログウォッチャーを設立し、ブログウォッチャー社が提供しているブログ検索サイト SHOOTI で、500 人のアルファブロガーを選別、ブロガーに対するインタビューなどの記事を掲載してきた。また、thatsPing、滞在時間、検索された履歴などからブログ記事の影響力を測定するサイトも運営している。こういったツールや情報を生かしながら、アルファブルガーの形成過程などに関する研究を行うとのことでした。

17 客員講座等

■平成15年

客員教授 鈴木 正敏

客員教授 藤田 博司

客員助教授 毛利 嘉孝

客員助教授 港 千尋

■平成16年

客員教授 伊藤 守

客員教授 村上 由見子

客員助教授 東 浩紀

客員助教授 永井 由美子

■平成17年

客員教授 フロリアン クルマス

客員助教授 深尾 葉子

客員助教授 宇治橋 祐之

客員助教授 堀田 龍也

■平成18年

客員教授 佐藤 哲

客員助教授 魏 晶玄

■平成19年

客員教授 飯吉 透

客員准教授 奈良 高明

客員准教授 飯野 浩一

客員准教授 大場 光太郎

客員准教授 下畑 光夫

客員准教授 荒牧 浩二

18 研究員（客員）等

情報学環

事項／年度	15	16	17	18	19
受託研究員	0	0	2	2	0
中国政府派遣研究員	0	0	1	1	0
客員研究員	3	3	1	3	6
外国人研究員	1	2	4	7	5
内地研究員	0	1	0	0	0
外国人研修員	0	7	9	8	10
交流研究員	1	2	4	4	2
私学研修員	0	0	0	1	1

社会情報研究所

事項／年度	15
受託研究員	0
中国政府派遣研究員	0
客員研究員	0
外国人研究員	3
内地研究員	0
外国人研修員	3
交流研究員	0
私学研究員	0

19 学会賞など受賞者リスト

- ・池内 克史 Marker-Less Human Motion Estimation Using Articulated Deformable Model 優秀論文賞 (Best Vision Paper Award) 2007 IEEE International Conference on Robotics and Automation
- ・池内 克史 バーチャル飛鳥京：複合現実感技術による遺跡の復元 第3回デジタルコンテンツシンポジウム船井賞 第3回デジタルコンテンツシンポジウム ((社) 映像情報メディア学会)
- ・角田哲也, 大石岳史, 池内克史 バーチャル飛鳥京：複合現実感技術による遺跡の復元 第3回デジタルコンテンツシンポジウム船井賞 第3回デジタルコンテンツシンポジウム実行委員会
- ・大島まり Appreciation and Recognition of Editorial Contributions The Journal of Visualization APBiomechanics 2005 Young Investigator Award The Visualization Society of Japan
- ・大島まり 「知の社会浸透」ユニット 理事長賞 財団法人生産技術研究奨励会
- ・大島まり 計算力学分野で顕著な業績を上げ、JACM へのサポート、および関連国際学会に貢献した。 日本計算力学連合フェロー賞 (The JACM Fellows Award) 日本計算力学連合
- ・久保寺 祐一, 鶴坂 智則, 小林 真輔, 越塚 登, 坂村 健 パノラマ写真による歩行者ナビゲーションサポートシステムの提案と実装 電子情報通信学会 IN 研究会賞 電子情報通信学会
- ・久保寺 祐一, 鶴坂 智則, 小林 真輔, 越塚 登, 坂村 健 パノラマ写真による歩行者ナビゲーションサポートシステムの提案と実装 IN 研究賞 電子情報通信学会 情報ネットワーク研究会
- ・暦本純一 ACM SIGCHI Academy SIGCHI Awards ACM
- ・佐藤 洋一, 岡部 孝弘 近接点光源は未校正照度差ステレオにおける形状復元の不定性を解決するか? インタラクティブセッション優秀賞 画像の認識・理解シンポジウム MIRU2007
- ・熊野 史朗, 大塚 和弘, 大和 淳司, 前田 栄作, 佐藤 洋一 Pose-Invariant Facial Expression Recognition using Variable-Intensity Templates Honorable Mention Asian Conference on Computer Vision (ACCV2007)
- ・原田至郎 コンピュータにおけるクメール文字利用の標準化への貢献 カンボジア王国学術勲章 (Officer) カンボジア王国政府
- ・原田隆宏 GPU を用いた SPH シミュレーション グラフィックスアワード, 最優秀賞 第12回日本計算工学講演会
- ・原田隆宏 Real-time Fluid Simulation Coupled with Cloth Ken Brodlie Prize for Best Paper, Third Place Theory and Practice of Computer Graphics
- ・原田隆宏 GPU を用いた Smoothed Particle Hydrodynamics の高速化 Visual Computing 賞 Visual Computing/グラフィクスと CAD 合同シンポジウム
- ・原田隆宏 GPU を用いたリアルタイム剛体シミュレーション 平成 19 年度山下記念研究賞 情報処理学会研究報告
- ・原田隆宏 Smoothed Particle Hydrodynamics in Complex Shapes, 1st The Best Paper

Award Spring Conference on Computer Graphics

- ・原田隆宏 Construction of Non-Bloppy Surface from Particles The Best Poster Prize Eurographics
- ・原田隆宏 流体と布のリアルタイム連成シミュレーション グラフィックスと CAD 研究会, 優秀研究発表賞受賞 情報処理学会研究報告
- ・原田隆宏 Real-time Coupling of Fluids and Rigid Bodies The Best Computer Visualization Award Asian-Pacific Congress on Computational Mechanics
- ・山田政寛 東京工業大学社会理工学研究科長賞 東京工業大学社会理工学研究科

20 論文数

年度	件数	文理融合	学環・学府内協力
1999年度以前	323	1	0
2000年度	645	48	14
2001年度	654	49	18
2002年度	916	98	53
2003年度	949	107	54
2004年度	904	122	83
2005年度	846	232	91
2006年度	982	149	24
2007年度	947	45	17
年度不明	34	0	0

注：業績 DB 入力データに基づく各年度の論文数(著書，分担著書，雑誌論文，国際会議論文，その他の論文，講演発表)

21 特許出願・公開数

年度	出願件数	公開
2000年度	6	0
2001年度	8	2
2002年度	5	5
2003年度	5	4
2004年度	1	2
2005年度	1	3
2006年度	1	0
2007年度	2	0
2000-2007年度合計	29	16

22 東京大学 21 世紀 COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」平成 19 年度の活動

■COE シンポジウム

1. 第 12 回シンポジウム「ユビキタス情報社会基盤と国土交通イノベーション」

【開催概要】

日時：平成 19 年 5 月 16 日 14:00～17:00

場所：東京大学大講堂(安田講堂)

主催：東京大学 21 世紀 COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」

参加者：約 700 名

【成果内容】

シンポジウムにおいて、東京大学 21 世紀 COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」プロジェクトにおける内容の紹介として、未来の日本社会に資する ICT のインフラ、つまり「情報社会基盤」を「形成」することを目指して、広い様々な分野から検討を加えた研究を実施していることが話された。また、これまでも、場所情報基盤や食品トレーサビリティなどの食の安全・安心に関する社会情報基盤などに焦点をあてたシンポジウムを行い、議論を深めてきたことも話された。一方、国土形成や社会資本整備、国際輸送から地域交通に至る交通分野など、幅広く国民生活に密着する国土交通分野は、ICT のポテンシャルを発揮する余地が非常に大きいと考えられ、国土交通省においても 2006 年 10 月より、情報通信技術を活用した国土交通イノベーションに関する検討を重ねてきたことが国土交通省総合政策局長の宿利氏より紹介された。両者に共通した知見としては、個々の要素技術の「イノベーション」だけではなく、国土規模の物理的なインフラと、更にそれを運用するための法制や社会制度といったソフトなインフラの両方を含めた、インフライノベーションが必要だということである。さらに本シンポジウムにおいてパネルディスカッションを実施し、情報社会インフラや、国土交通分野におけるイノベーションの可能性と今後の展望について議論を深めた。

2. 第 13 回シンポジウム「ユビキタス社会とケータイ」

【開催概要】

日時：平成 19 年 6 月 25 日 13:00～17:30

場所：東京大学武田ホール

主催：東京大学 21 世紀 COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」

後援：NTT ドコモ・モバイル社会研究所

参加者：約 300 名

【成果内容】

携帯電話の人口普及率は約 80%に達し、とくに 10 代後半から 20 代の若年層にあつては携帯電話を利

用しない人は皆無に近い。今や「ケータイ」は音楽、動画、カメラ、財布機能等、考え得るあらゆる情報交換・収集・享受機能を備えたモバイル情報メディアとして、また片時も手放すことのない身体の一部として利用されている。ケータイは、ユビキタス社会の実現をサポートするごく身近なツールといえよう。生活シーンへのケータイの浸透により、我々の生活はどのように変わり、どのような豊かさをもたらされているのか、ケータイをもつ子ども達が増えることで、親子関係はどのように変わりつつあるのか、という疑問に対し、東京大学情報学環 COE 拠点リーダーの坂村健教授、NTT ドコモ・モバイル社会研究所の石井威望所長が、未来社会の展望を交え基調講演を行った。さらにパネルディスカッションでは、COEプロジェクトで実施した調査データを踏まえ、若手研究者たちがケータイと親子関係の変化ならびに新たな可能性について実証的な考察・議論を行った。

3. 第14回シンポジウム「デジタル・アーカイブの「標準化」に向けて～次世代アーカイブとユビキタス技術が拓く未来～」

【開催概要】

日時：平成20年1月15日 14:00～17:00

場所：東京大学鉄門講堂

主催：東京大学21世紀COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」

参加者：約200名

【成果内容】

本シンポジウムでは、図書館・文書館・ミュージアムというこれまで人類の文化的遺産を守り伝えてきた組織の現状とそのデジタル化の状況について議論するとともに、組織の枠組みを超えた次世代アーカイブのあり方として何が必要なのかを、理念的・技術的・システムの課題とともに論じることで、ユビキタス情報社会において求められる知のあり方について検討した。パネルディスカッションでは、パネリストとして、田良島哲（東京国立博物館）、小川千代子（国際資料研究所）、加茂竜一（凸版印刷株式会社）、杉本重雄（筑波大学）をお招きし、個別に構築された世界のアーカイブの横断・統合的活用のために、技術やシステム、理念のゆるやかな「標準化」に向けた、活発な議論を行った。

4. 第15回シンポジウム「ユビキタスではじまるサービスイノベーション」

【開催概要】

日時：平成20年2月4日 14:00～17:30

場所：東京大学大講堂(安田講堂)

主催 東京大学大学院情報学環・OKI ユビキタスサービス学寄附講座、東京大学21世紀COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」

共催 沖電気工業株式会社

参加者：約600名

【成果内容】

本シンポジウムでは、坂村教授による基調講演「ユビキタス情報社会基盤がつくるサービスイノベーション」において、要素技術の話や技術的な可能性に関して話を行い、篠塚特任教授より、基調講演「ユビキタスサービスにみる技術と社会のイノベーション」と題して、ユビキタス情報社会基盤を活用した様々なサービス(ユビキタスサービス)に関する話が合った。そして、パネルディスカッションにおいてこれまでのユビキタスサービスを俯瞰しつつ、ユビキタス情報社会基盤がもたらすサービスへのイノベーションについて議論した。そして、ユビキタスサービスが社会に普及するための課題を掘り下げた。

5. 第16回シンポジウム「ユビキタスと多様な文化」

【開催概要】

日時：平成20年3月5日 14:00～17:00

場所：東京大学大講堂(安田講堂)

主催：東京大学大学院情報学環・ユビキタス情報社会基盤学寄附講座、東京大学21世紀COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」

共催：凸版印刷株式会社

参加者：約400名

【成果内容】

今回のシンポジウムでは、あらゆる文化の基盤となる「文字」に焦点を当てた議論を行った。文字を扱う情報技術にはどのようなものがあるのか、また文字はどのように扱われるべきなのか、デジタル化された文字情報の蓄積や流通が、文化に与える影響はどのようなものなのか、こういったことを取り上げ、ユビキタスと多様な文化についての議論を深めた。デジタル社会と多様な文化、双方に大変造詣が深い、文化人類学者の青木保・文化庁長官が特別基調講演を行い、技術・文化の両面から、「ユビキタスと多様な文化」というテーマを掘り下げた。また、パネルディスカッションにおいて青木保文化庁長官、樺山紘一・印刷博物館館長、坂村教授による議論が行われ、ユビキタスコンピューティングの技術と、実世界における多様な文化に焦点を当てた場合に、その間の整合性や、また将来の新しい文化の創造への可能性に関して活発に議論した。

23 国際団体役員・委員数

区分	学術的な団体の役員・委員*1	その他の団体役員・委員等*2
2006年度	11	5
2007年度	10	4

*1 「学会・会議等役職」のうち「国際性有」かつ「学会役員委員」であるもの

*2 「団体役員・委員」のうち国際的なもの

24 政府関係委員会委員数

区分	2006年度	2007年度
内閣府	9	7
総務省	13	11
経済産業省	7	2
文部科学省	15	11
厚生労働省	1	1
国土交通省	5	6
文化庁	1	1
特許庁	1	2
日本学術会議	4	1
その他	2	3
政府全体	58	45

25 地方公共団体関係委員会委員数

区分	2006年度	2007年度
都道府県	14	8
市区町村	5	2
地方公共団体関係全体	19	10

26 ジャーナル編集・会議運営

区分	学会誌等編集査読*1	学術大会等運営*2
人数	10	35
うち国際的なもの	8	26

注：国内外の学会活動(学術誌編集委員，会議運営委員など) 注：2007年度のみ

*1 「学会・会議等役職」のうち「ジャーナル編集査読」であるもの

*2 「学会・会議等役職」のうち「大会組織運営」であるもの

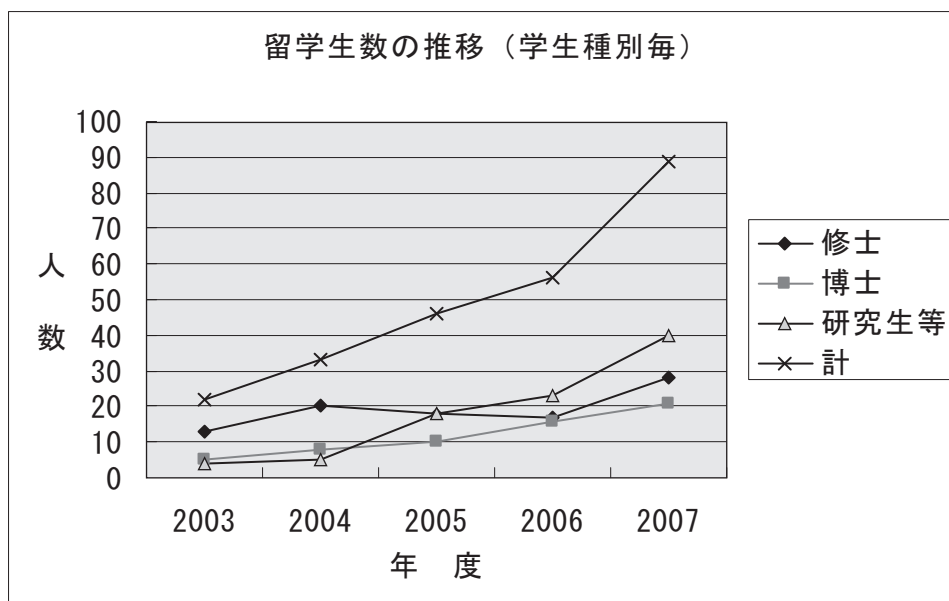
27 定期刊行物一覧

- ・『情報学研究 調査研究編』 2007 年度は刊行なし
- ・『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』 No.72 (2007 年 5 月), No.73 (2008 年 1 月), No.74 (2008 年 3 月)
- ・ニューズレター『学環学府』 No.17 (2007 年 4 月)、No.18 (2007 年 7 月)、No.19 (2007 年 10 月)、No.20 (2008 年 1 月)

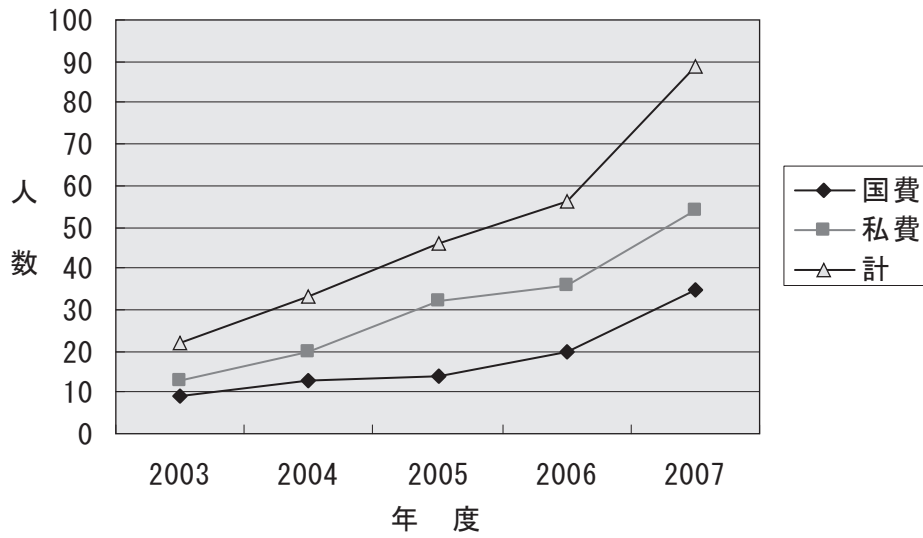
28 留学生数の推移

各年度5月1日現在

年度	修士		博士		外国人研究生		教育部 研究生	合計		総計
	国費	私費	国費	私費	国費	私費	私費	国費	私費	
2003	6	7	1	4	2	0	2	9	13	22
2004	9	11	1	7	3	1	1	13	20	33
2005	5	13	3	7	6	11	1	14	32	46
2006	5	12	7	9	8	14	1	20	36	56
2007	12	16	8	13	15	23	2	35	54	89



留学生数の推移（国費・私費）



29 留学生国籍別一覧

国又は地域	国費	私費	計
アジア			
インドネシア	1		1
バングラデシュ	1	1	2
スリランカ		1	1
タイ	1		1
マレーシア		2	2
シンガポール	1		1
韓国	7	15	22
中国	6	17	23
台湾		12	12
小計	17	48	65
中近東			
トルコ	1		1
イスラエル	1		1
小計	2	0	2
アフリカ			
コンゴ民主共和国		1	1
チュニジア	1		1
小計	1	1	2
オセアニア			
オーストラリア	4	1	5
小計	4	1	5
北米			
アメリカ合衆国	1		1
小計	1	0	1
中南米			
ブラジル	5		5
ベネズエラ	1		1
小計	6	0	6
ヨーロッパ			
イギリス	2		2

フランス		1	1
スイス	1		1
ルーマニア	1		1
ブルガリア	2		2
ロシア	1		1
小計	7	1	8
合計	38	51	89

(2007年5月1日現在)

Ⅲ. 個人業績編

平成 20(2008)年 3 月 31 日時点で情報学環に在籍していた教員各人の研究テーマおよび 2007 年度の研究業績を、各自が確認したデータベースの入力内容に基づき、収録しています。研究業績の分類は、データベースによって自動的に分類されたものです。各人の配列は、当時の肩書きに基づいた以下のカテゴリーの順、また同一カテゴリー内では氏名の 50 音順となっています。

1. 教授
2. 准教授
3. 講師
4. 助教
5. 科学技術振興特任准教授
6. 科学技術振興特任教員(助教)
7. 科学技術振興特任研究員
8. 研究拠点形成特任教員(助教)

安達裕之・教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2007 年度)

論文等

安達 裕之:「猶ほ土蔵附売家の栄誉を残す可しー横須賀製鉄所の創立ー」, 海事史研究, No.64, pp.1-28, 2007 年.【査読有】

池内克史・教授

研究テーマ(主たるもの)

文化遺産のデジタル化

世界各地の貴重な文化遺産をレーザ測定システムによって数ミリ精度で計測し、デジタルデータの形で保存するプロジェクトを進めています。これまでに鎌倉高德院の国宝阿弥陀仏像(鎌倉大仏)、奈良東大寺の国宝廬舎那仏坐像(奈良大仏)、タイ・スコタイのアチャナ仏、カンボジア・アンコールトムのパイヨン寺院などをデジタル化してきました。これらのデータは、VR(バーチャルリアリティ)のコンテンツ作成、文化遺産の破損、欠損時には修復のために、また製作当時の状態への仮想的復元といった応用など、幅広い分野での利用が期待されています。

人間行動観察学習ロボット

幼児の学習の大部分は、親の行動を見て真似ることから始まります。我々の研究室では、人間の行動を主に視覚によって観察し、これを理解して同じ行動を再現するロボットプログラムの自動生成を研究テーマとしており、主に「全身運動の獲得」と「手作業の獲得」の2つの課題について研究を進めています。

4次元仮想化都市

都市などの広域にわたる実空間の三次元モデル化を効率的に行うため、実験車両に搭載したカメラやレンジセンサおよび電子地図を利用して、要素技術となる画像・距離画像の処理手法を研究しています。また、実空間の動きを仮想空間に重畳する研究や、車両や車種を自動的に認識・判別する研究を行っています。

研究業績(2007 年度)

著書等

Katsushi Ikeuchi(編著): "Digitally Archiving Cultural Objects", Springer, 2007 年.

論文等

宮崎大輔, 柴田卓司, 池内克史: 「Wavelet-Texture 法: Daubechies ウェーブレットとパラメトリック反射モデルと円偏光板による BTF 圧縮」, 電子情報通信学会論文誌D, Vol.J90-D, No.8, 2007 年.【査読有】

Daisuke Miyazaki, Tomoaki Higo, Yuko Matsumoto, Takushi Shibata, Toru Takahashi, Yoichi Sato, Katsushi Ikeuchi: 「写実的仮想モデル生成のための偏光に基づくビジョンシステム」, IEEE Transaction on Pattern Analysis and Machine Intelligence(PAMI), 2007 年.【査読有】

Katsushi Ikeuchi, Takeshi Oishi, Jun Takamatsu, Ryusuke Sagawa, Atsushi Nakazawa, Ryo Kurazume, Ko Nishino, Mawo Kamakura, Yasuhide Okamoto: "The Great Buddha Project:Digitally Archiving, Restoring, and Analyzing Cultureal Heritage Objects", International Journal of Computer Vision, Vol.75, No.1, pp.189-208, 2007 年.【査読有】

鎌倉真音, 大石岳史, 高松淳, 池内克史:「3次元モデルによるバイヨン寺院尊顔の解析と制作背景の考察」, 映像情報メディア学会誌, Vol.61, No.4, pp.502-507, 2007 年.【査読有】

池内克史:「4次元仮想都市空間」, 交通工学, Vol.42, No.3, pp.3-4, 2007 年.

Atsuhiko Banno, Katsushi Ikeuchi: "Acquisition and Rectification of Shape Data Obtained by a Moving Range Sensor", 情報処理学会論文誌:コンピュータビジョンとイメージメディア, Vol.48, No.SIG9(CVIM 18), pp.21-38, 2007 年.【査読有】

Rei Kawakami,Jun Takamatsu,Katsushi Ikeuchi: "Color Constancy from Blackbody Illumination", Optical Society of America, Vol.24-7, pp.1886-1893, 2007 年.【査読有】

Jun Takamatsu, Koichi Ogawara, Hiroshi Kimura, Katsushi Ikeuchi: "Recognizing Assembly Tasks Through Human Demonstration", The International Journal of Robotics Research, Vol.26, No.7, 2007 年.【査読有】

Shin'ichiro Nakaoka, Atsushi Nakazawa, Fumio Kanehiro, Kenji Kaneko, Mitsuharu Morisawa, Hirohisa Hirukawa, Katsushi Ikeuchi: "Learning from Observation Paradium:Leg Task Models for Enabling a Biped Humanoid Robot to Imitate Human Dance", The International Journal of Robotics Research, Vol.26, No.8, pp.829-844, 2007 年.【査読有】

白鳥貴亮, 中澤篤志, 池内克史:「音楽特徴を考慮した舞踊動作の自動生成」, 電子情報通信学会論文誌 D-II, Vol.J90-D, No.8, pp.1-11, 2007 年.【査読有】

池内克史:「かけがえなきものを守る 3D 映像技術」, The Journal of Three Dimentional Images, Vol.21, No.3, pp.1-2, 2007 年.

宮崎大輔, 池内克史:「逆偏光レイトレーシングによる透明物体の形状推定」, IEEE Transaction on Pattern Analysis and Machine Intelligence(PAMI), Vol.29, No.11, pp.2018-2030, 2007 年.【査読有】

池内克史, 高松淳, 岡本泰英, 鎌倉真音:「大型有形文化財のモデル化とその利活用」, 映像情報メディア学会誌, Vol.61, No.11, pp.1549-1552, 2007 年.

佐川立昌, 大石岳史, 阪野貴彦, 池内克史:「大型有形文化財モデルの実際」, 映像情報メディア学会誌, Vol.61, No.11, pp.1553-1556, 2007 年.

Tetsuro Morimoto,Tohru Mihashi,Katsushi Ikeuchi:「Normalized cut を用いた分光情報に基づく色復元手法」, International Journal of Automation and Computing, 2008 年.【査読有】

三上武志, 小野晋太郎, 小川原光一, 川崎洋, 池内克史:「複数カメラ画像の統合による揺れの無い全方位画像列の生成手法」, 生産研究, 2007 年.

太田大介, 小野晋太郎, 池内克史:「ユーザ参加型の視覚情報統合による交差点仮想鳥瞰図の合成」, 生産研究, 2007 年.

トウ利洪, 小野晋太郎, 影沢政隆, 池内克史:「動的計画法を利用した市街地の住宅地図と実体形状の統合化」, 生産研究, 2007 年.

角田哲也, 大石岳史, 小野晋太郎, 池内克史:「バーチャル飛鳥京:複合現実感による遺跡の復元と観光案内システムへの展開」, 生産研究, 2007 年.

角田哲也, 大石岳史, 池内克史:「高速陰影法による飛鳥京 MR コンテンツの提案とその評価」, 第26回CG・可視化研究会(CAVE研究会), 2007 年.

白鳥貴亮, 池内克史:「人体動作と音楽の解析に基づく舞踊動作生成」, 情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM), 2007 年.

角田哲也,大石岳史,池内克史:「バーチャル飛鳥京:複合現実感技術による遺跡の復元」, 第 3 回デジタルコンテンツシンポジウム, 2007 年.【査読有】

鎌倉真音, 小野晋太郎, 工藤俊亮, 池内克史, 青柳正規:「鎌倉真音, 小野晋太郎, 工藤俊亮, 池内克史, 青柳正規「考える人」の3次元デジタルアーカイブとコンテンツ-デジタルコンテンツの教育的利用-」, 第 3 回デジタルコンテンツシンポジウム, 2007 年.【査読有】

鎌倉真音, 佐藤啓宏, 宮崎大輔, 池内克史, 青柳正規:「ロダン彫刻「カレーの市民」3次元デジタルアーカイブ」, 3 次元映像シンポジウム, 2007 年.

鎌倉真音, 大石岳史, 高松淳, 池内克史:「3 次元デジタルアーカイブ技術によるカンボジアバイヨン寺院尊顔の歴史考察」, UMAT:Ubiquitous Media Asian Transformations, 2007 年.【査読有】

川上玲, 池内克史:「光源線分による光源色推定の安定化」, 「画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2007)」, 2007 年.【査読有】

森本哲郎, 三橋徹, 池内克史:「分光情報とグラフカットを用いた画像の色復元」, 「画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2007)」, 2007 年.【査読有】

太田大介, 小野晋太郎, 池内克史:「車載カメラ画像を利用した交差点の仮想鳥瞰図合成 -ユーザ参加型の視覚情報収集と ITS への応用-」, 「画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2007)」, 2007 年.【査読有】

宮崎大輔, 原健二, 池内克史:「ガラス越しの Photometric Stereo」, 「画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2007)」, 2007 年.【査読有】

白鳥貴亮, 工藤俊亮, 池内克史:「舞踊動作の観察に基づく人体動作の時間伸縮手法」, 「画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2007)」, 2007 年.【査読有】

Bo Zheng, Jun Takamatsu, Katsushi Ikeuchi: "Adaptively Selecting Degrees for Shape-representing Implicit Polynomials", 「画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2007)」, 2007 年.【査読有】

佐藤亮, 三上武志, 川崎洋, 小野晋太郎, 池内克史:「IBR に基づいた仮想都市のリアルタイムレンダリングおよびデータ圧縮の効率化手法の提案」, 「画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2007)」, 2007 年.【査読有】

池内克史, 桑原雅夫, 須田義大, 田中敏久, 鈴木高宏, 田中伸治, 山口大助, 小野晋太郎:「サステイナブル ITS の展開」, 第 6 回 ITS シンポジウム, 2007 年.

佐藤亮, 尾池治郎, 川崎洋, 小野晋太郎, 池内克史:「車載カメラ映像の固有空間圧縮および GPU による実時間復元による写実的ドライビングシミュレータの実現」, 第 6 回 ITS シンポジウム, 2007 年.

藤原研人, 高松淳, 池内克史:「非剛体位置合わせ手法による古鏡の解析」, 情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM), 2008 年.

大蔵苑子,川上玲,池内克史:「全周画像を用いた屋外拡散反射物体の表面反射率の推定」, 情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM), 2008 年.

大石慶祐,川崎洋,池内克史:「屋外画像への EPI 解析による反射・透過層の分離手法の適用」, 電子情報通信学会 総合大会, 2008 年.

中尾一貴, 大石岳史, 池内克史:「PCクラスタを用いた大規模三次元距離画像の統合」, 3次元映像シンポジウム, 2008 年.

池田聖, 岡部孝弘, 佐藤智和, 阪野貴彦, 向川康博, 山崎俊太郎, 佐藤洋一:「The 11th IEEE International Conference on Computer Vision (ICCV2007) 報告」, 情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア研究報告(CVIM), 2008 年.

国際会議等

Rei Kawakami,Katsushi Ikeuchi: "Stabilizing Illumination Chromaticity Estimation using the Illumination Line Segment", IAPR Conference on Machine Vision Applications (MVA2007), pp.437-440, 2007. 【査読有】

Shunsuke Kudoh, Koichi Ogawara, Miti Ruchanurucks, Katsushi Ikeuchi: "お絵描きロボット", 2007 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems, 2007. 【査読有】

Miti Ruchanurucks, Shunsuke Kudoh, Koichi Ogawara, Takaaki Shiratori, and Katsushi Ikeuchi: "Robot Painter: From Object to Trajectory", 2007 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems, 2007. 【査読有】

Manoj Perera, Takaaki Shiratori, Shunsuke Kudoh, * Atsushi Nakazawa, and Katsushi Ikeuchi: "Multilinear Analysis for Task Recognition and Person Identification", 2007 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems, 2007. 【査読有】

Shirmila Mohottala, Masataka Kagesawa, Katsushi Ikeuchi: "Vehicle Classification in Traffic Surveillance", 第 13 回 ITS 世界会議, 2007. 【査読有】

Bo Zheng, Jun Takamatsu, Katsushi Ikeuchi: "Adaptively Determining Degrees of Implicit Polynomial Curves and Surfaces", Asian Conference on Computer Vision(ACCV2007), 2007. 【査読有】

Shintaro Ono, Tetsuro Morimoto, Jun Takamatsu, Takeshi Oishi, Masataka Kagesawa, Katsushi Ikeuchi: "ヴェズヴィオ火山埋没遺跡の三次元モデリング — ソンマ遺跡・ポンペイ遺跡 —", 第 5 回火山都市国際会議島原大会, 2007. 【査読有】

池内克史,小野晋太郎,高松淳, 影沢政隆,森本哲郎,川上玲,鎌倉真音,肥後智昭,大蔵苑子: "火山被災遺跡における形状と色彩再現: ソンマヴェスビアーナとポンペイを例として", 火山噴火罹災地の文化・自然環境復元—ソンマ・ヴェスビアーナ、指宿、浅間 戦略的学融合研究 2007—, 2008. 【査読有】

口頭発表等

Katsushi Ikeuchi: "Programming-by-demonstration: From Assembly plan through dancing humanoid", IEEE Intern. Conf on Robotics and Automation, 2007. 【招待講演】

池内克史:「軍事力と文化力」,「画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2007)」, 2007. 【招待講演】

Katsushi Ikeuchi: "Digital Bayon Project", Digital Archive 2007(Digital Archive Workshop on Human Civilization), 2007.

Katsushi Ikeuchi: "Art and Robotics, Digital Bayon Project", CIS Distinguished Lecture, 2007. 【招待講演】

池内克史: "Art and Robotics", 日韓セミナー, 2007. 【招待講演】

池内克史: 「産学連携の現状」, Innovation Japan, 2007. 【招待講演】

Katsushi Ikeuchi: "e-Heritage Project", Seminar DLR (German Aerospace Center), 2007. 【招待講演】

Katsushi Ikeuchi: "Art and Robotics", Seminar Palazzo dele arti Napoli, 2007.

池内克史, 大石岳史, 高松淳: 「デジタルバイオン — 大型有形文化の e-monument 化の実際」, アジアグラフ 2007 東京, 2007.

Katsushi Ikeuchi: "VR applications for traffic safety and travel comfort", Symposium on Intelligent Transport Systems, 2007.

池内克史: 「デジタルアーカイビングから見たアンコール寺院」, 「「迫真のアンコール遺跡 尊顔とバイオン寺院」展 シンポジウム, 2007.

Katsushi Ikeuchi: "e-monument project", 3rd International Conference on the Universal Digital Library, 2007.

池内克史: 「「踊るロボット」クン」, サイエンスカフェ 東京大学ホームカミング(東京大学のヒューマノイド), 2007.

Katsushi Ikeuchi: "e-monument project", ビジヨングループセミナー(インフォーマルセミナー), 2007.

Katsushi Ikeuchi: "Art and Robotics", Robotics Symposium(招待セミナー), 2007.

Katsushi Ikeuchi: "e-Heritage Project", 講演(パキスタン), 2007.

Katsushi Ikeuchi: "e-monument project", JPL ビジヨングループセミナー(インフォーマルセミナー), 2007.

池内克史: 「バイオン関係の講演」, バイオン関係の講演, 2007.

katsushi Ikeuchi: 「文化遺産のメディアコンテンツ化: 「静」と「動」の解析」, 第11回国際塾, 2008.

池内克史: 「『東大 ITS センターにおける取組み』」, 北九州 ITS セミナー ~東京大学 ITS セミナーシリーズ③~, 2008.

一般向け記事・報道等

肥後智昭, 宮崎大輔, 池内克史: 「物体の全体形状と反射パラメータの同時推定 — 多視点 Photometric stereo の利用」, 画像ラボ(日本工業出版), Vol.18, No.11, pp.31-36, 2007 年.

池内 克史: 「日本ロボット学会協力企画 名物研究室からの未来研究者へのメッセージ第 32 回」, ロボコンマガジン ROBOCON Magazine No.51 pp.104-106, 2007.

池内 克史: 「3D で再現されたアンコール王朝の都(pp.14-29)」, Newton 株式会社ニュートンプレス, 2007.

池内 克史: 「SCIENCE WALK 「人のふり見て渋滞を予測」」, 読売新聞(夕刊 12 面), 2007.

池内 克史:「文化力と軍事力 かけがえなきものを守る技術開発」, RIETI LETTER リーチレター(財団法人経済産業調査会) No. 544 pp.3 平成 19 年 6 月 25 日発行, 2007.

池内 克史:「特集 「文化財をデジタル化に広がる可能性・・・」, テレビ東京 「ワールドビジネスサテライト」, 2007.

池内 克史:「渋滞研究 最前線」, NHK おはよう日本 午前7時10分頃に放映予定, 2007.

池内 克史:「『夢の美術館 うるわしのアジア 仏の美 100 選』(再放送)」, NHK BS ハイビジョン, 2007.

池内 克史:「アンコール遺跡 尊顔とバイヨン寺院展」, 朝日新聞(33 面 社会 14 版), 2007.

池内 克史:「第 4 章 飛鳥京と飛鳥時代 飛鳥の地に芽吹いた古代日本という国家」, 株式会社双葉社 CG 日本史シリーズ② 古代日本, 2007.

池内 克史:「高徳院・鎌倉大仏と鎌倉古仏(CG 提供)」, 株式会社講談社 日本の仏像 No.19, 2007.

池内 克史:「『NEWS』で掲載 池内研「千金甲古墳デジタル計測」」, 学環学府 Number. 19, 2007.

池内 克史:「進化する博物館ー デジタルアーカイブの可能性を探るー 迫真のアンコール遺跡 尊顔とバイヨン寺院展 展示期間中、説明の録音テープをながす。」, 九州国立博物館, 2007.

池内 克史:「『バーチャル飛鳥京プロジェクト』(p1-2) 『この人に聞こう』(p3)」, 国営飛鳥歴史公園ニュース No.19, 2007.

池内 克史:「技術の粋 古代見えた バーチャル飛鳥京プロジェクト ゴーグルつけて「現在+仮想」空間」, 朝日新聞(夕刊) 3 版 6, 2007.

池内 克史:「最新情報で時間旅行 目の前に古代の建物が! 東大研究室が「バーチャル飛鳥京」」, 朝日放送「NEWS ゆう」, 2007.

池内 克史:「サイエンス ZERO 『いにしへの謎に迫れ 情報考古学最前線』」, NHK 教育 午後 11:45~0:29, 2007.

池内 克史:「表紙のロボットの写真」, 学環学府 No.20, 2008.

池内 克史:「第 1 回未来をひらく画像処理」, 茨城放送, 2008.

池内 克史:「第 2 回もうひとつのアンコール遺跡」, 茨城放送, 2008.

池内 克史:「第 3 回芸術家ロボットの目」, 茨城放送, 2008.

池内 克史:「第 4 回安全安心からゆとりまで」, 茨城放送, 2008.

池内 克史:「サイエンス ZERO ZERO スペシャル 科学の目で歴史発見! 『いにしへの謎に迫れ 情報考古学最前線』」, NHK 教育 午後 11:45~0:29, 2008.

池内 克史:「中学スタンダード 歴史資料」, 株式会社帝国書院(pp.7), 2008.

石田英敬・教授

研究テーマ(主たるもの)

記号論・情報記号論の研究

記号論を情報学研究に活用する研究

言語態の研究

社会や文化の単位としての言語活動の研究

現代文学、現代思想の研究

近代ヨーロッパ文学および現代思想の研究

研究業績(2007 年度)

著書等

石田英敬:「一般言語学講義: コンスタンタンのノート」, 影浦峯・田中久美子 編, 東京大学出版会, 2007 年.

石田英敬:「テレビ記号論とは何か」, 日本記号学会 編, 慶應義塾大学出版会, 2007 年.

石田英敬+渡邊守章:「今、フーコーを読むとは」, ミシェル・フーコー+渡邊守章 編, 朝日出版社, 2007 年.

ジャック・デリダ:「精神分析の抵抗」, 鶴飼哲、守中高明、石田英敬 訳 編, 青土社, 2007 年.

ミシェル・フーコー:「ミシェル・フーコー講義集成 6 社会は防衛しなくてはならない」, 石田英敬+小野正嗣 (訳) 石田英敬(解説) 編, 筑摩書房, 2007 年.

論文等

石田英敬:「私たちの世界の〈記憶〉の現在…クリス・マルケルの『レヴェル 5』をめぐって」, 『沖縄 暴力論 2007』, pp.138-141, 2008 年.

石田英敬:「思考の幹 fluctuat nec mergitur」, 『東京大学大学院情報学環紀要』No.72, 2007 年.【査読有】

口頭発表等

石田英敬:「批評はなぜ後退するのか」, 「〈愛好者 Amatorat〉をめぐって: モバイル環境による「クリティカル・スペースの創出」の試み」, 2007.【招待講演】

一般向け講演等

石田英敬, 中谷礼仁, 三中信宏:「アーカイヴが紡ぐ未来: 再連結する情報」, ICC 開館 10 周年記念連続シンポジウム「メディア・テクノロジーと生成する〈知〉」, 2007.【招待講演】

石田英敬:「知のデジタル・シフト : 知識テクノロジー時代の人間を求めて」, 日立システムアンドサービス社 2007 年度事業化・技術発表会, 2007.【招待講演】

藤幡正樹、ジャン＝ルイ・ボワシエ、石田英敬:「ケータイと表現メディア」, ポケット・フィルム・フェスティバル (東京芸術大学), 2007.【招待講演】

一般向け記事・報道等

東京大学大学院情報学環石田研究室(訳・解説)、石田英敬(監修):「ベルナール・スティグレル「愛好者(アマトラ)をめぐる」」, InterCommunication, Vol.No.62 2007.autumn, pp.48-64, 2007年.

石田英敬:「「デ、禿ノ女歌手ハ？」と「美しい国」:不条理劇としての安倍劇場」, 『論座』, Vol.2007年10月号, pp.35-43, 2007年.

石田英敬、楠典子、塚田博康:「何が石原三選を招いたのか:ネオリベラルなく石原的なもの>を超えて」, 『世界』, 座談会, 2007年.

石田英敬:「ベルナール・スティグレル「批評の危機」という象徴的貧困」, 『世界』, インタビューと解説, 2007年.

石田英敬:「「メディア社会の記号哲学」(インタビュー)」, 『学問の英知に学ぶ』, 第四巻, 2007年.

石田英敬:「時代相 2008(11) 変容する「テレビ国家」:政治と新たな関係追求」, 『北海道新聞』, 2008年1月23日夕刊7面, 2008年.

石田英敬:「ニュースにだまされるな」, 朝日ニュースター、2007年8月, 2007.

石田英敬:「ニュースにだまされるな」, 朝日ニュースター、2007年9月, 2007.

石田英敬:「筆洗」, 『東京新聞』2007年9月6日, 2007.

石田英敬:「天声人語」, 『朝日新聞』2007年9月11日, 2007.

石田英敬:「雑誌を読む」, 『毎日新聞』2007年9月27日夕刊, 2007.

石田英敬:「もっと知りたい」, 『朝日新聞』2007年11月15日, 2007.

石田英敬:「ニュースにだまされるな」, 朝日ニュースター、2008年3月, 2007.

石田英敬:「ニュースにだまされるな」, 朝日ニュースター、2007年12月, 2007.

石田英敬:「特集ワイド:発言からのぞく福田政治」, 『毎日新聞』2007年12月11日夕刊, 2007.

永ノ尾信悟・教授

研究テーマ(主たるもの)

古代インドにおける儀礼の変容

ポスト・ヴェーダ期においてヒンドゥー教、仏教を取り込んだタントラ化の現象の中で、儀礼の変容がどのような特質を示すのかを考察する。

研究業績(2007年度)

口頭発表等

永ノ尾信悟:「仏教と古代インドの儀礼:護摩、供養、花祭り、仏塔」, 龍谷大学仏教学学術講演会, 2007.

永ノ尾信悟:「お水取りと古代インド」, シルクロード・奈良国際シンポジウム2007 専門セミナー, 2007.

永ノ尾信悟:「仏教の未来と共生」, シルクロード・奈良国際シンポジウム2007 公開セミナー パネルディスカッション, 2007.

永ノ尾信悟:「Vedic Predecessors of One Type of Tantric Ritual」, 2007 年度(第14回)インド思想史学会学術大会, 2007.

永ノ尾信悟:「儀礼を通して『インド的文明』を通覧する」, 日本南アジア学会 20周年記念連続シンポジウム, 2007.

大島まり・教授

研究テーマ(主たるもの)

医用画像に基づく血管循環系のマルチスケール・マルチフィジックス解析

本研究は血管病変の発症, 進行に関わる流体力学的な要因を数値解析により解明することを目的としている。実際の生体内を再現したモデルや境界条件を採用するために, ここでは CT や MRI などの医用画像から抽出した血管形状モデルを用い, 末梢血管網など循環系全体の影響を考慮した境界条件を導出・適用した大規模血流解析システムを構築している。さらに血流および血管壁内での物質輸送・透過モデルを取り入れ, 悪玉コレステロールなどの病変に関わる物質の血管壁内への蓄積についても予測を行っている。

血流と血管壁の相互作用を考慮した連成解析と in vitro モデルを用いた可視化計測

本研究では脳動脈瘤の発生・成長のメカニズムの解明を目的とし, 血流によって変形する血管壁の力学応答メカニズムを考慮した数値解析を行うとともに, in vitro モデル実験による結果と比較することで評価を行っている。医用画像から再構築した脳動脈瘤モデルを対象として, 数値解析では血管壁を超弾性体とした流体構造連成解析を行い, 実験では速度 3 成分のデータを得られるステレオ PIV という計測手法を用い, 内部の流動構造と血管壁の挙動, およびそれらの相互作用を評価している。

共焦点 Micro PIV による微小流路内混相流の可視化計測

微小血管を流れる赤血球やマイクロ分析チップのような微小流体デバイスの内部の混相流を可視化計測するツールとして, 共焦点マイクロ PIV システムを開発している。本手法は, 流れの中にトレーサ粒子と呼ばれる微小な蛍光ビーズを混濁させ, 共焦点スキャナ・特殊な蛍光顕微鏡・高感度高速度カメラを用いて流れを撮影し, 得られた画像を PIV 解析処理を用いて速度分布を求める。共焦点マイクロ PIV を用いることで, マイクロサイズの微小領域における 3 次元的な流れの様子を定量的に知ることができる。

研究業績(2007 年度)

著書等

大島まり:「非侵襲・可視化技術ハンドブック -ナノ・バイオ・医療から情報システムまで-」, 小川誠二、上野照剛 編, NTS.INC, 2007 年.

大島まり:「機械工学便覧 基礎編 α6 「計算力学」, 日本機会学会編 編, 丸善, 2007 年.

論文等

R. Torii, M. Oshima, T. Kobayashi, K. Takagi, T. E. Tezduyar: "Numerical Investigation of the Effect of Hypertensive Blood", International Journal for Numerical Methods in Fluids, Vol.54, No.6-8, pp.995-1009, 2007年.【査読有】

大島まり:「中学生・高校生を対象とした研究を通しての科学技術教育」, 日本機械学会誌, Vol.110, No.1064, pp.509-510, 2007年.

大島まり:「Ladies」, 創立110周年記念 機械工学 最近10年のあゆみ 1997~2006, pp.369-374, 2007年.

大島まり:「脳血管障害に関するマルチスケール・マルチフィジックス解析」, 日本流体力学会誌「ながれ」, Vol.26, No.6, pp.369-374, 2007年.【査読有】

大島まり:「高速道路からの光景」, 高速道路と自動車,財団法人高速道路調査会,, 2007年.

大島まり:「科学技術とコミュニケーション」, 日立グループPR誌「ひたち」, 技術に会う10, 2007秋号,, 2007年.

徳田茂史, 畝村毅, 大島まり:「血管壁内への物質透過を考慮した Image-Based Simulation」, 生産研究, 2007年.

武藤昌也, 大島まり, 大島伸行:「高粒子体積率で存在する粒子に負荷する流体抵抗力の検証」, 生産研究, 2007年.

大島まり:「理工系は楽しい！」講演会&ワークショップ」, 「女子生徒のための理工系チャレンジ応援BOOK」, 2007年.

A.Hossain, N.Oshima, M.Oshima:「A Comparative Numerical Study on the Behaviors of Flame in a Channel Influenced by Ignition Zone and Preheating Phenomenon」, 生産研究,, 2007年.

国際会議等

M. Oishi, H. Kinoshita, M. Oshima, T. Fujii, T. Kobayashi: "Simultaneous Measurement on Liquid-Liquid Two-Phase Microflow using Multicolor Confocal Micro PIV", The 6th Pacific Symposium on Flow Visualization and Image Processing, 2007.【査読有】

R. Torii, M. Oshima, T. Kobayashi, K. Takagi, T.E. Tezduyar: "Fluid-structure Interaction Modeling of Blood Flow and Arterial-Wall Deformation: Influence of Structural Modeling", Computational Methods for Coupled Problems in Science and Engineering (COUPLED PROBLEMS 2007), 2007.【査読有】

M. Muto, T. Ushijima, N. Oshima, M. Oshima, T. Kobayashi: "Flow Field Statistics of Nearly Isotropic Turbulence Generated Using Rotating Grids", The 9th Asian Symposium on Visualization, 2007.【査読有】

H. Fukunari, M. Oshima, T. Washio, H. Watanabe, T. Hisada: "Image-based Modeling and Simulation of Middle Cerebral Aneurysm: Fluid-structure Interaction Analysis using Finite Element Method", Fourth M.I.T. Conference on Computational Fluid and Solid Mechanics-Focus: Fluid-Structure Interactions, 2007.【査読有】

S.Tokuda,T.Unemura,M.Oshima: "Computational Study on the Effects of Periphral Vessel Network on the Arterial Circle of Willis", Proceedings of the ASME 2007 Summer Bioengineering Conference (SBC2007-176706), 2007.【査読有】

R. Torii, M. Oshima, T. Kobayashi, K. Takagi, T. E. Tezduyar: "Fluid-structure Interaction Modeling of Blood Flow and Cerebral Aneurysm: Significance of Arterial and Aneurysm Shape", USNCCM(US National Congress on Computational Mechanics), 2007. 【査読有】

M.Oishi, H.Kinoshita, M.Oshima, T.Fujii, T.Kobayashi: "Measurement of Rotational Motion of Solid Microbead using Multicolor Confocal Micro PIV", International Symposium Particle Image Velocimetry (PIV07), 2007. 【査読有】

M. Muto, M.Oshima, N. Oshima: "Motion of Particles at High Volume Fraction in Turbulent Flow", FLUCOME2007, 2007. 【査読有】

Y. Bando, M. Oshima, M. Oishi: "Measurement of Wall Shear Stress in an in vitro Model of Cerebral Aneurysm at Pulsatile Flow", Asian Pacific Conference on Biomechanics, 2007. 【査読有】

S.Tokuda,T.Unemura,M.Oshima: "Hemodynamic Simulation of Mass Transport through the Arterial Wall with Multi-Layered Wall Model", Asian Pacific Conference on Biomechanics, 2007. 【査読有】

H. Yabusaki, M.Oishi, H. Kinoshita, M. Oshima: "Quantitative Measurement of Distribution of Blood", Asian Pacific Conference on Biomechanics, 2007. 【査読有】

Y. Akimura, T. Uneruma, S. Tokuda, M. Oshima: "Numerical Study of the Cerebral Arterial Circle of Willis with an Angiostenosis or Occlusion", Asian Pacific Conference on Biomechanics, 2007. 【査読有】

Y. Bando, M. Oishi, M. Oshima: "Evaluation of Wall Shear Stress in a Patient-specific Model of a Cerebral Aneurysm using Stereo PIV", APS(60th Annual Meeting of the division of Fluid dynamics), 2007. 【査読有】

M. Oishi, H. Kinoshita, M. Oshima, T. Fujii: "Investigation of Micro Droplet Formation in a T-Shaped Junction using Multicolor Confocal Micro PIV", ASME Micro/Nonoscale Heat Transfer International Conference, 2007. 【査読有】

M. Oshima: "Patient-Specific Modeling and Multi-Scale Simulation of Blood Flow in the Arterial Circle of Willis", Blood and air flow modeling in complex geometries, 2007. 【査読有】

口頭発表等

大石正道,大島まり,木下晴之,藤井輝夫,小林敏雄:「多波長共焦点マイクロ PIV による微小液滴内外流れの同時計測」, 第 12 回マイクロフロービジュアライゼーション研究会, 2007.

大島まり:「生体流れのシミュレーションと可視化計測」, 第 1 回マイクロフルイデクス計測技術セミナー, 2007.

大島まり:「器官・組織・細胞マルチスケール・マルチフィジックスシミュレーション」, 文部科学省次世代IT基盤構築のための研究開発 第2回「革新的シミュレーションソフトウェアの研究開発」シンポジウム, 2007.

大石正道,大島まり,木下晴之,藤井輝夫,小林敏雄:「多波長共焦点マイクロ PIV によるマイクロ液滴生成機構の定量的計測」, 第 35 回可視化情報シンジウム, 2007.

藪崎仁史,Alexandros Charalambides,大石正道,木下晴之,大島まり:「マイクロ PTV を用いた微小路内における赤血球軸集中挙動の定量的解析」, 第 35 回可視化情報シンジウム, 2007.

大島まり,畝村毅,福成洋,徳田茂史:「脳血管障害に関するマルチスケール・マルチフィジックス解析」, 日本流体力学会年会 2007, 2007.

坂東佳憲,大石正道,大島まり:「中大脳動脈瘤における流速および壁面せん断応力の計測」, 日本流体力学会年会 2007, 2007.

大島まり:「循環系の計算バイオメカニクス」, 第 24 回 NEC HPC 研究会, 2007.

徳田茂史,畝村毅,関井雄一郎,大島まり:「動脈壁における物質透過を考慮した Image-Based 血流解析」, (社)日本機械学会 2007 年度年次大会, 2007.

大島伸行,森吉泰生,大島まり,新井淳,武藤昌也,伊藤寿,久保田正人:「インジェクターズプレーの LES における粒子分裂モデルの評価」, (社)日本機械学会 2007 年度年次大会, 2007.

坂東佳憲,大石正道,大島まり:「脳動脈瘤モデル内の拍動流れのステレオ PIV 計測と壁面せん断応力の分布」, 可視化情報学会全国講演会, 2007.

前川利満,福成洋,大島まり,畝村 毅:「血流・血管壁の連成解析における血管壁モデルの検討」, 第 18 回バイオフロンティア講演会, 2007.

前川利満,福成洋,畝村 毅, 大島まり:「医用画像に基づく血管モデリングと流体構造連成解析」, 日本流体力学会 第 21 回数値流体力学シンポジウム(CFD2007), 2007.

武藤昌也, 大島まり, 大島伸行:「高粒子体積率で存在する粒子に負荷する流体抵抗力の検証」, 第23回生研 TSFD シンポジウム, 2007.

大島まり:「循環器系疾患を対象とした数値シミュレーション手法の開発」, RIKEN SYMPOSIUM Computation Biomechanics , 2007.

大 島まり:「循環器シミュレーションソフトウェアの開発: マルチスケール・フィジックスシミュレーション」, 平成 19 年度厚生労働科学研究費補助金 医療品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業 医療機器・医用材料のリスクアセスメント手法開発に関する研究, 2007.【招待講演】

一般向け記事・報道等

大島まり:「人「若者向けに科学広める」」, 朝日新聞, p27(科学面), 2007.

大島まり:「女子学生歓迎します、女性研究者増加目指して、女子限定説明会を初めて開催、学部単位でも取り組み始まる」, 週刊 東京大学新聞, p.9, 2007.

大島まり:「立命館で、科学の未来を感じてみよう-立命館大学サイエンスフォーラム・名古屋-」, 読売新聞,p.20, 2007.

大島まり:「東大、求む女子学生 来月“男子禁制”の説明会」, 朝日新聞夕刊,p.18, 2007.

岡田猛・教授

研究テーマ(主たるもの)

創造性の認知科学

芸術創作や科学的発見などの創造的認知プロセスの解明

研究業績(2007 年度)

論文等

岡田猛, 横地早和子, 難波久美子, 石橋健太郎, 植田一博: 「現代美術の創作における「ずらし」のプロセスと創作ビジョン」, 認知科学, Vol.14, pp.303-321, 2007 年. 【査読有】

横地早和子, 岡田猛: 「現代芸術家の創造的熟達の過程」, 認知科学, Vol.14, pp.437-454, 2007 年. 【査読有】

国際会議等

Okada, T., Yokochi, S., Ishibashi, K., Namba, K., & Ueda, K.: "Analogical modification in the creation of contemporary art.", Cognitive Science Society 29th Annual Meeting, Tutorial Workshop on Analogy, 2007. 【査読有】

河口洋一郎・教授

研究テーマ(主たるもの)

CG によるメカニック造形研究

生き物のように反応するメカニックな立体造形技術ならびに新伝統芸能を演出するロボティックな造形研究

ジェモーション(Gemotion)によるインタラクション研究

伝統芸能との融合によるパフォーマンスアーツとして、人にインタラクティブに反応する情感的な CG 映像空間の創出、および生き物のように映像に凸凹反応するジェモーション・ディスプレイの研究

グロースモデル(Growth Model)による超高精細3D 映像研究

飛び出る 3D 立体視映像や、スーパーハイビジョン(8K×4K)による超高精細の CG 生物・物理シミュレーションによる映像生成研究

研究業績(2007 年度)

国際会議等

Takahiro Harada, Seiichi Koshizuka, Yoichiro Kawaguchi : "Smoothed Particle Hydrodynamics in Complex Shapes", Spring Conference on Computer Graphics, 2007. 【査読有】

Takahiro Harada, Masayuki Tanaka, Seiichi Koshizuka, Yoichiro Kawaguchi : "Acceleration of Rigid Body Simulation using Graphics Hardware Symposium on Interactive", 3D Graphics and Games, 2007. 【査読有】

小谷 潔, 飯田文明, 赤川智洋, 斉藤 毅, 神保泰彦, 河口洋一郎, 高増 潔: "体動の影響下におけるリアルタイム副交感神経活動推定法の開発とインタラクティブ CG の生成", 電気学会論文誌 C, Vol.電子・情報・システム部門誌, No.127(10), pp.1762-1769, 2007. 【査読有】

原田隆宏, 田中正幸, 越塚誠一, 河口洋一郎: "粒子ベースシミュレーションの並列化", 情報処理学会論文誌, No.48(11), pp.3557-3567, 2007. 【査読有】

原田隆宏, 田中正幸, 越塚誠一, 河口洋一郎: "グラフィックスハードウェアを用いた個別要素法の高速度化", 日本計算工学会論文集, Vol.20070011, 2007. 【査読有】

原田隆宏、田中正幸、越塚誠一、河口洋一郎: “GPU を用いた粒子法シミュレーションのためのスライスデータ構造”, Trans. Of JSCES Paper , Vol.20070028 , 2007. 【査読有】

原田隆宏、越塚誠一、河口洋一郎: “粒子からの表面構築の改良”, 情報処理学会論文誌, No.48(12), 2007. 【査読有】

Takahiro Harada, Seiichi Koshizuka, Yoichiro Kawaguchi: “Acceleration of Smoothed Particle Hydrodynamics using Graphics Hardware”, International Conference on Computational Methods , 2007. 【査読有】

Yoichiro Kawaguchi: “Art of the GEMOTION Screen responds 3D Computer Images”, ASIAGRAPH, Vol.1, No.1, pp.127-132, 2007. 【査読有】

Yoichiro Kawaguchi, Shogo Yonekura: “Artistic and robotic principles for the synthesis of Martians for Mars exploration”, ISDC, 2007. 【査読有】

原田隆宏、越塚誠一、河口洋一郎: “GPU を用いた SPH シミュレーション”, 第 12 回日本計算工学講演会論文集, 2007. 【査読有】

Takahiro Harada, Seiichi Koshizuka, Yoichiro Kawaguchi : “Smoothed Particle Hydrodynamics on GPUs”, Computer Graphics International , 2007. 【査読有】

原田隆宏、越塚誠一、河口洋一郎: “GPU を用いた Smoothed Particle Hydrodynamics の高速化”, Visual Computing/グラフィクスと CAD 合同シンポジウム, 2007. 【査読有】

Takahiro Harada, Seiichi Koshizuka, Yoichiro Kawaguchi : “Real-time Fluid Simulation Coupled with Cloth”, Theory and Practice of Computer Graphics , 2007. 【査読有】

Yoichiro Kawaguchi, Takahiro Harada, Shuhei Tsuruoka: “Hydrodynamics Ocean”, ACM SIGGRAPH, pp.204, 2007. 【査読有】

Shunsuke Ohno, Shinichiro Yagi, and Yoichiro Kawaguchi: “Simulation techniques for generating behavior for unifiable artificial life”, Computer Graphics, Imaging and Visualization (CGIV2007) , 2007. 【査読有】

Tomohiro Akagawa and Yoichiro Kawaguchi: “Flight simulation of butterflies and hypothetical morphology”, Computer Graphics, Imaging and Visualization (CGIV2007) , 2007. 【査読有】

Takahiro harada, Seiichi Koshizuka, Yoichiro Kawaguchi : “Physics on GPUs”, ACM SIGGRAPH , 2007. 【査読有】

Takahiro Harada, Seiichi Koshizuka, Yoichiro Kawaguchi : “Construction of Non-Blobby Surface from Particles”, Eurographics Short Paper , 2007. 【査読有】

Yoichiro Kawaguchi: “The Art of Multi-Dimensional Structured Butterflies”, ASIAGRAPH, pp.193-200, 2007. 【査読有】

Takahiro Harada, Seiichi Koshizuka, Yoichiro Kawaguchi: “Sliced Data Structure for Particle - Based Simulations on GPUs”, GRAPHITE, pp.55-62, 2007. 【査読有】

作品等

Yoichiro Kawaguchi: 「3D 展」, 「aniGma」 novosibirsk 【招待】, 2007.

Yoichiro Kawaguchi: 「3D Lenticular-BYOBU」, Shanghai International Science and Art Exhibition 【招待】, 2007.

Yoichiro Kawaguchi: 「Gemotion Dance-musical instrument-」, 「aniGma」 novosibirsk 【招待】, 2007.

Yoichiro Kawaguchi: 「Gemotion Dance-interactive performance-」, Shanghai International Science and Art Exhibition 【招待】, 2007.

Yoichiro Kawaguchi: 「Gemotion Dance performance-collaboration with Noriko Seki-」, UBIQUITOUS MEDIA ASIAN TRANSFORMATIONS (UMAT) 【招待】, 2007.

Yoichiro Kawaguchi: 「BANNER 「Cytolon」」, UBIQUITOUS MEDIA ASIAN TRANSFORMATIONS (UMAT) 【招待】, 2007.

Yoichiro Kawaguchi: 「Sculpture「Eggy」, 「JellyFish」」, UBIQUITOUS MEDIA ASIAN TRANSFORMATIONS (UMAT) 【招待】, 2007.

Yoichiro Kawaguchi: 「3D Lenticular 「Eggy」」, UBIQUITOUS MEDIA ASIAN TRANSFORMATIONS (UMAT) 【招待】, 2007.

Yoichiro Kawaguchi: 「Gemotion 凸凹 Screen」, UBIQUITOUS MEDIA ASIAN TRANSFORMATIONS (UMAT) 【招待】, 2007.

Yoichiro Kawaguchi: 「3D Animation 「Fire, Water, Future」」, UBIQUITOUS MEDIA ASIAN TRANSFORMATIONS (UMAT) 【招待】, 2007.

Yoichiro Kawaguchi: 「Gemotion Screen-Hydrodynamics Ocean-」, Art Gallery SIGGRAPH 【査読審査】, 2007.

Yoichiro Kawaguchi: 「Gemotion Dance」, Opening Performance SIGGRAPH, 2007.

Yoichiro Kawaguchi: 「Gemotion Dance- Marriage of Japanese drum and Dance」, ASIAGRAPH 【招待】, 2007.

Yoichiro Kawaguchi: 「3D lenticular Byobu “Xenion”, “Festival”, “Eggy”, Banner “Xenion” “Festival” “Paradise”」, World Creative City Forum 2007 in Osaka 【招待】, 2007.

Yoichiro Kawaguchi: 「Advanced-Technology Exhibition (Site-specific Installation with GemotionScreen “Hydrodynamics ocean”, lenticular “festival” “cell”, Sculpture “Trepang” “Jelly Fish” “Eggy”, Folding fan, Animation “Fire+Water+Future”)」, ASIAGRAPH 【招待】, 2007.

Yoichiro Kawaguchi: 「Live Performance; Gemotion with Music」 as Keynote Performance」, ICAT, Denmark 【招待】, 2007.

河口洋一郎: 「Gemotion Dance Performance for Hiten」, 天へのシルクロード-「飛天」, 2007.

河口洋一郎: 「Gemotion Dance/Performance」, 鹿児島 Drink 【招待】, 2007.

口頭発表等

Yoichiro Kawaguchi: “自己組織化デザイン”, 「aniGma」 novosibirsk, 2007. 【招待講演】

河口洋一郎:「技術と芸術「CG 映像と立体造形」, UBIQUITOUS MEDIA ASIAN TRANSFORMATIONS (UMAT), 2007.

河口洋一郎:「アジアの映像表現の魅力を探る」, ASIAGRAPH, 2007. 【招待講演】

河口洋一郎:「メディアアートと大阪の可能性」, 世界創造都市フォーラム 2007 in 大阪, 2007. 【招待講演】

Yoichiro Kawaguchi: “舞踊と反応する CG 世界”, ICAT, 2007.

河口洋一郎、伊藤攘一、増田順一、森川展男:「笑いは IT 未来で待っている」, エンジン01文化戦略会議「オープンカレッジ in 新潟」, 2007.

河口洋一郎、木村晋介、佃一可、原島博、藤原和博、船曳建夫、やすみりえ:「文化人大喜利」, エンジン01文化戦略会議「オープンカレッジ in 新潟」, 2007.

大樋年雄、河口洋一郎、織作峰子、北山孝雄、黒川雅之、多田宏行、蜷川有紀、蜂谷宗、原島博:「島サミット」, 第29回 日本文化デザイン会議2007 兵庫, 2007.

河口洋一郎:「飛天プロジェクトと宇宙文化・芸術の紹介」, 天へのシルクロード「飛天」, 2007.

河口洋一郎:「宇宙と生命」, 鹿児島 Drink, 2007.

茂木健一郎+河口洋一郎:「アートとサイエンス-その不思議な関係-」, 文京シビックセンター, 2007.

一般向け記事・報道等

河口洋一郎:「動くスクリーン 自在に立体映像」, 朝日新聞, 2007.

河口洋一郎:「表紙、1 ページ」, 月刊 NEW MEDIA, 2007.

河口洋一郎:「命の根源求めジャングルへ -探検-」, 朝日新聞, 2007.

姜尚中・教授

研究テーマ(主たるもの)

東北アジアにおけるコリアンネットワークの形成

東北アジアにはこの地域を覆った植民地支配と戦争、さらに内戦と冷戦構造のために、数百万人に及ぶコリアン系マイノリティが散在し、言語、文化、社会、経済、アイデンティティなどの違いがありながらも、コリアンネットワークとも言える越境的(トランスナショナル)な移動、連鎖、交流の歴史が続いてきた。本研究は、このようなコリアンネットワークの形成とその歴史を辿りつつ、それが分断された朝鮮半島の平和的な共存と統一にどのような影響を与えることになるのか、その展望を明らかにすることにある。

東北アジア共同体形成の可能性とその展望

グローバル化の進展とともに、世界の多極化が進み、地域統合や地域主義の動きが顕著になりつつあるが、本研究では、このようなリージョナリズムの可能性と展望を、東北アジア地域に即して明らかにしようとするものである。具体的には、地政学的に東北アジア地域の中心に位置する朝鮮半島の共存と統一の問題を視野に、この地域の冷戦構造の終結と冷戦以後の地域秩序の構築がどのようにしたら可能になるのか、その条件と展望を地域主義の構想を通じて明らかにすることにある。

近代日本の国民意識の形成とアジア認識

東アジアにおいて早熟的に国民国家の形成に成功し、日清戦争、日露戦争を通じて近隣アジア諸国との支配・従属関係を築いていくことになる近代日本は、その過程を通じて「日本型オリエンタリズム」ともいべき特異なアジア認識、アジア・イメージを形成していくようになった。本研究は、そのような近代日本のアジア認識の理念型的な構造とその歴史を、学問的な言説や論説、ジャーナリズムなどを素材に浮き彫りしようとするものである。

研究業績(2007年度)

著書等

姜尚中:「ニッポン・サバイバル:不確かな時代を生き抜く10のヒント」,集英社,2007年.

坂村健・教授

研究テーマ(主たるもの)

TRON(The Real-time Operating system Nucleus)

リアルタイムオペレーティングシステム(RTOS)はコンピュータ組込システム構築の際に最も中核となる基本ソフトウェアである。本研究では、RTOSの基礎研究であるリアルタイムスケジューラのアルゴリズムやアーキテクチャ設計など、基礎分野の研究から、RTOSの開発環境、応用システムまで幅広く研究をすすめている。1980年から20年以上にわたり進めているライフワーク的な研究となっており、TRONは現在、携帯電話や車のエンジン制御、デジタルカメラ、電子辞書、レーザープリンタなど多くの機器で使われており、組込システムの分野で世界でもっとも大きな実績をあげている。また、漢字のような大規模文字セットを使用する国において技術的な限界による文化制限を行わないですむ多言語コンピュータの研究も進め、その成果をふまえて構築されたBTRONでは17万字以上の文字を扱えるシステムの構築に成功している。

Ubiquitous Computing

コンピュータを身の回りのあらゆるものに埋め込み、それらをネットワークで結び、互いに協調動作させることで、人間生活をあらゆる面から支援するコンピュータシステム、ユビキタスコンピューティングの考え方や手法を、世界に先駆けて提唱した。これは、2000年以後の情報分野の学界・産業界をリードするコンセプトとして受け入れられ、このユビキタスコンピューティングに関する研究開発が世界的に盛んに行なわれるようになった。研究室では、Context-aware Computingや超小型チップのアーキテクチャ、ネットワークプロトコル、セキュリティシステム等の基礎的研究から応用システムまで幅広い研究を行い、世界的な成果を達成している。

Digital Museum

高度なデジタル技術を博物館や美術館に活用することで、新しいミュージアムの確立を提唱し「デジタルミュージアム」と名づけた。デジタル技術を駆使した、資料の収集、保存、修復、展示などの研究を行い、その成果をいかして構築した情報システムや展示システムは、東京国立博物館、国立歴史民族博物館、国立民俗学博物館、国立科学博物館、日本科学未来館といった、国内の主要な博物館での展示に採用された。この研究では複数のユーザが同時に共有できる三次元仮想空間システム:MMUD(Multi-Media Multi-User Dungeon)の研究開発を行い実用システムレベルにまで完成させた。

研究業績(2007年度)

論文等

T. Norimatsu, R. Fujiwara, M. Kokubo, M. Miyazaki, A. Maeki, Y. Ogata, S. Kobayashi, N. Koshizuka, K. Sakamura, "A UWB-IR Transmitter With Digitally Controlled Pulse Generator", IEEE Journal of Solid-State Circuits, Vol.42, No.6, pp.1300-1309, 2007年.【査読有】

小林真輔、諸隈立志、坂村健:「様々な通信規格に対応 可能なマルチプロトコル RFID リーダライタの提案」, 情報処理学会論文誌, Vol.48, No.9, pp.2946-2955, 2007 年.【査読有】

R. Fujiwara, A. Maeki, K. Mizugaki, G. Ono, T. Nakagawa, T. Norimatsu, M. Kokubo, M. Miyazaki, Y. Okuma, M. Hayakawa, S. Kobayashi, N. Koshizuka, K. Sakamura: "0.7-GHz-bandwidth DS-UWB-IR System for Low-power Wireless Communications", IEICE Transactions on Communications, Vol.E91-B, No.2, pp.518-526, 2008 年.【査読有】

小野豪一、中川樹生、藤原亮介、乗松崇泰、寺田崇秀、宮崎祐行、鈴木敬、矢野和男、緒方祐次、前木陽、小林真輔、越塚登、坂村健:「3.4nW/bps 通信、22cm 測位を実現する 1cc センサノード」, 電子情報通信学会平成 19 年 7 月集積回路(ICD)研究会, ICD2007-37-68、pp.59-64, 2007 年.

寺田崇秀、藤原亮介、小野豪一、乗松崇泰、中川樹生、水垣健一、宮崎祐行、鈴木敬、矢野和男、前木陽、緒方祐次、小林真輔、越塚登、坂村健:「間欠動作型 CMOS UWB-IR 受信機アナログフロントエンド」, 電子情報通信学会 平成 19 年 7 月集積回路(ICD)研究会, ICD2007-37-68、pp.65-70, 2007 年.

寺田崇秀、藤原亮介、小野豪一、乗松崇泰、中川樹生、水垣健一、宮崎祐行、鈴木敬、矢野和男、前木陽、緒方祐次、小林真輔、越塚登、坂村健:「間欠動作型低消費電力 UWB-IR 受信機アナログフロントエンド」, 電気学会「超集積化・環境 CMOS デバイス調査専門委員会」、「高度ワイヤレスユビキタス社会を支える超高速デバイス・回路技術調査専門委員会」合同委員会, 2007 年.

紙名哲生, 小林真輔, 越塚登, 坂村健:「汎用的ユビキタス基盤による場所識別子に基づくキャンパスツアー」, FIT2007 第 6 回情報科学技術フォーラム 一般講演論文集, 第 4 分冊, pp.259-260, 2007 年.

水垣健一、藤原亮介、中川樹生、宮崎祐行、前木陽、緒方祐次、小林真輔、越塚登、坂村健:「マルチパス環境下での UWB 高精度測位システム」, 電子情報通信学会ソサイエティ大会, B-20-9, 2007 年.

藤原亮介、水垣健一、中川樹生、宮崎祐行、前木陽、緒方祐次、小林真輔、越塚登、坂村健:「高精度 TOA 推定 UWB 受信器の開発」, 電子情報通信学会ソサイエティ大会, B-20-10, 2007 年.

久保寺祐一、鶴坂智則、小林真輔、越塚登、坂村健:「パノラマ写真による歩行者ナビゲーションサポートシステムの提案と実装」, 電子情報通信学会技術研究報告, IN, Vol.107, No.314, pp. 19-24, 2007 年.【査読有】

藤原亮介、水垣健一、中川樹生、宮崎祐行、前木陽、緒方祐次、小林真輔、越塚登、坂村健:「UWB-IR を用いた相対位置検出システムの開発」, 電子情報通信学会全国大会, B-20-58, 2008 年.

国際会議等

Tetsuo Kamina, Toshinori Aoki, Yoshiteru Eto, Noboru Koshizuka, Jun Yamada, and Ken Sakamura: "Verifying Identifier-Authenticity in Ubiquitous Computing Environment", IEEE International Symposium on Ubiquitous Computing and Intelligence 2007, No.2, pp.403-408, 2007.【査読有】

Shinsuke Kobayashi, Ken Sakamura, and Tatsushi Morokuma: "A Dynamic Retargettable Multi-Protocol RFID Reader/Writer", IEEE International Symposium on Ubiquitous Computing and Intelligence 2007, No.2, pp.340-346, 2007.【査読有】

T. Terada, R. Fujiwara, G. Ono, T. Norimatsu, T. Nakagawa, K. Mizugaki, M. Miyazaki, K. Suzuki, K. Yano, A. Maeki, Y. Ogata, S. Kobayashi, N. Koshizuka, K. Sakamura: "A CMOS UWB-IR Receiver Analog Front End with Intermittent Operation", 20th IEEE Symposium on VLSI Circuits, Vol.9, No.2, pp.86-87, 2007.【査読有】

G. Ono, T. Nakagawa, R. Fujiwara, T. Norimatsu, T. Terada, M. Miyazaki, K. Suzuki, K. Yano, Y. Ogata, A. Maeki, S. Kobayashi, N. Koshizuka, K. Sakamura,; "1-cc Computer: Cross-Layer Integration with 3.4-nW/bps Link and 22-cm Locationing", 20th IEEE Symposium on VLSI Circuits, Vol.9, No.4, pp.90-91, 2007. 【査読有】

Masahiro Bessho, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "A Pedestrian Navigation System Using Multiple Space-Identifying Devices Based On A Unique Identifier Framework", Proceedings of the International Conference on Machine Learning and Cybernetics (ICML) 2007, pp.2100-2105, 2007. 【査読有】

T. Nakagawa, T. Matsuura, E. Imaizumi, J. Kudoh, G. Ono, M. Miyazaki, A. Maeki, Y. Ogata, S. Kobayashi, N. Koshizuka, K. Sakamura: "1-GHz Input Bandwidth 6-bit Under-Sampling A/D Converter for UWB-IR Receiver", Proceedings of the 33rd European Solid-State Circuits Conference 2007, pp.163-166, 2007. 【査読有】

R. Fujiwara, K. Mizugaki, T. Nakagawa, M. Miyazaki, A. Maeki, Y. Ogata, S. Kobayashi, N. Koshizuka, K. Sakamura: "Accurate TOA Estimating UWB-IR Receiver for Ranging/Positioning System in Multi-path Environment", 2007 IEEE International Conference on Ultra-Wideband, 2007. 【査読有】

T. Nakagawa, M. Miyazaki, G. Ono, R. Fujiwara, T. Norimatsu, T. Terada, A. Maeki, Y. Ogata, S. Kobayashi, N. Koshizuka, K. Sakamura: "1-cc Computer using UWB-IR for Wireless Sensor Network", 13th Asia and South Pacific Design Automation Conference, pp.392-397, 2008. 【査読有】

Masahiro Bessho, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura,; "A Space-Identifying Ubiquitous Infrastructure and its Application for Tour-Guiding Services.", Proceedings of the 23rd Annual ACM Symposium on Applied Computing 2008, pp.1616-1621, 2008. 【査読有】

口頭発表等

坂村健:「情報技術のグローバルスタンダードと国家戦略」, 東京大学公開講座「グローバリゼーション」, 2007.

一般向け記事・報道等

坂村健:「Dr. Sakamura has a Bold Vision of Enabling Technology」, RFID Product News, 2007.

坂村健:「変わる国・日本へ」, 読売新聞, 2007.

坂村健:「スシポリスとミシュラン 文化戦略に欠ける日本」, 毎日新聞, 2007.

坂村健:「「予測不能」を前提とせよ」, 日経ビジネス 4月30日号, 2007.

坂村健:「日本を変えるイノベーション」, ASCII, 2007.

坂村健:「東京ミッドタウンマネジメントーユビキタス端末によるアート作品ガイド、商用サービスとして開始」, 日経 BP ITpro 事例データベース, 2007.

坂村健:「ユビキタス・コンピューティングから見た国土ーその未来」, JACIC 情報, 2007.

坂村健:「指先に心地よさを感じる μ TRON キーボード 理想のキーボードとは」, モノ・マガジン No.559, 2007.

坂村健:「上野動物園で携帯案内端末で3歳児火傷」, フジテレビ 日本テレビ, 2007.

坂村健:「変わる国・日本へ」, NIKKEI COMPUTER 2007.04.16, 2007.

坂村健:「哲学的魅力に溢れた2つの海外 SF 小説」, 宝島 business wonderland 2007/Jun, 2007.

坂村健:「デジタル・ディバイドと自己責任 巨大システム 個が支え」, 毎日新聞, 2007.

坂村健:「ESEC 第 10 回組込みシステム開発技術展」, EETIMES JAPAN No.23, 2007.

坂村健:「富士通、 μ T-Kernel 準拠の次世代組込み用リアルタイム OS を発売開始」, 日経プレスリリース, 2007.

坂村健:「国交省と東大がユビキタスシンポ 目標決定型から環境整備型へ政策の転換を」, 日刊建設工業新聞, 2007.

坂村健:「いよいよまとまる! 国土交通分野のイノベーション大綱の中身とは」, イエイリ建築 IT ラボ, 2007.

坂村健:「技術そのものより使い方をー東京ユビキタス計画・銀座シンポジウム」, 毎日新聞ユニバーサロン, 2007.

坂村健:「銀座にタグや赤外線装置を 1 万個設置」, ユビキタス実証実験」, 日経 BP ITPRO, 2007.

坂村健:「ICT 活用へ共通基盤構築 東大、国交省がユビキタスシンポ」, 日刊建設通信新聞, 2007.

坂村健:「IC タグで電波送受信」, 日経産業新聞, 2007.

坂村健:「ベンダーロックインからの脱却を図る政府」, 日経 BP ITPro, 2007.

坂村健:「古民家再生し食文化発信東大大学院と連携富士宮」, 静岡新聞 (Internet), 2007.

坂村健:「携帯端末ガイドで美術品巡り、「東京ミッドタウン」で導入」, 読売新聞 YOMIURIONLINE (Internet), 2007.

坂村健:「東京ミッドタウン、ユビキタス技術を利用しアート作品を紹介するタウンツアーを開始」, NIKKEINET (Internet), 2007.

坂村健:「東京ミッドタウン ユビキタス使い アートツアー」, 日経産業新聞, 2007.

坂村健:「ucode」タグを利用したアートツアー、東京ミッドタウンで開催」, インプレス インターネットウォッチ, 2007.

坂村健:「東京ミッドタウン、携帯情報端末を利用したアート作品のガイドツアーを開始」, asciijp, 2007.

坂村健:「東京ミッドタウン、注目のユビキタス・アートツアーを 13 日より開始」, マイコミジャーナル, 2007.

坂村健:「ユビキタスでアートツアー・三井不が東京ミッドタウンで」, NIKKEI NET, 2007.

坂村健:「三井不「東京ミッドタウン」ユビキタスで施設ツアー」, 日本経済新聞, 2007.

坂村健:「東京ミッドタウンが「ユビキタス・アートツアー」を開始」, ITMedia, 2007.

坂村健:「東京ミッドタウンでユビキタス技術を利用したアートツアー開始」, ITPro Nikkei BP, 2007.

坂村健:「東京ミッドタウンで「ユビキタス」技術を利用した最先端アートツアーが始まります」, Yahoo!ニュース フジテレビ系, 2007.

坂村健:「“仕掛け”で人を呼べるのか?」, ワールドビジネスサテライト/テレビ東京, 2007.

坂村健:「未知の世界知った原点」, 日本経済新聞, 2007.

坂村健:「「引き算」か「足し算」か」, SNKEI WEB, 2007.

坂村健:「未来感じ取り聴きほれる」, 日本経済新聞, 2007.

坂村健:「世界に友人広げる趣味に」, 日本経済新聞, 2007.

坂村健:「誇りこそ未来切り開く力」, 日本経済新聞社, 2007.

坂村健:「日本の良さを再確認」, 日本経済新聞, 2007.

坂村健:「イノベーション 人材育成ということ」, 毎日新聞, 2007.

坂村健:「来週の日経夕刊 NAVI」, 日本経済新聞社, 2007.

坂村健:「「引き算」か「足し算」か」, 産経新聞, 2007.

坂村健:「第7章 イノベーション基盤としてのユビキタス・ネットワーク」, 日本の基本問題, 2007.

坂村健:「ユビキタス情報社会基盤の構築に向けて」, 第6回情報メディア学会研究大会 発表資料, 2007.

坂村健:「東邦薬品の物流管理システム—IC タグで出荷ミス防ぐ」, 日本経済新聞, 2007.

坂村健:「ユビキタスで作る情報社会基盤(図書紹介)」, 電子情報通信学会, 2007.

坂村健:「東京ミッドタウンをユビキタス化—情報端末使い館内案内」, 日経産業新聞, 2007.

坂村健:「空間コード、実証実験へ—物流分野活用に重点、業務効率化メリット」, 物流ニッポン, 2007.

坂村健:「第2章 社会の学 ユビキタスが世界を変える」, 学問の扉 東京大学は挑戦する, 2007.

坂村健:「I wish 「技術開発の原動力は進化を信じる人のこころ」」, 夕刊フジ, 2007.

坂村健:「学問の扉(講談社)」, 朝日新聞, 2007.

坂村健:「「ユビキタス」への取り組み 多様に展開」, Fuji Sankei Buskinessi, 2007.

坂村健:「「ユビキタスとは何か」(岩波新書)」, 読売新聞, 2007.

坂村健:「「ユビキタスとは何か」(岩波新書)」, 朝日新聞, 2007.

坂村健:「物流におけるイノベーション」, TRUCK NAVIGATION, 2007.

坂村健:「社会基盤 新たな技術で情報の非対称性を破るために」, 毎日新聞, 2007.

坂村健:「ICT が変える、私たちの暮らし～国土交通分野のイノベーション推進～パネルディスカッション・ユビキタス情報社会基盤と交通イノベーション」, 国土交通(国土交通省広報誌), 2007.

坂村健:「情報社会をどう生きるかーIT 社会とは、どういう現実か「どこでもコンピュータの時代」」, 第 8 回信州岩波講座講演要旨・対談記録集, 2007.

坂村健:「 μ T-Kernel は、ROM が10K バイト強、RAM が 2.8 バイトの構成でも動作する」、T-Engine フォーラム由良氏」, Tech-On!, 2007.

坂村健:「T-Kernel は中国でも高い注目を集めている」、トロンプロジェクトリーダー坂村氏は語る」, Tech-On!, 2007.

坂村健:「ユビキタス・コンピューティングが次代の世界的インフラヘインフラがイノベーションを生み出す」, 三菱総研倶楽部 8 月号, 2007.

坂村健:「「組込みソフト産業推進会議」ー「次世代インフラとしてのユビキタスと組込み技術」」, 社団法人関西経済連合会サイト, 2007.

坂村健:「民間と連携し推進ー携帯端末使用の観光案内システム」, 奈良新聞, 2007.

坂村健:「銀座ユビキタス実験 実用化へ参加企業募集」, 日本経済新聞, 2007.

坂村健:「ユビキタスとは何か(広告)」, 朝日新聞, 2007.

坂村健:「ユーコード、実用化広がるーIC タグから情報入手」, 日経産業新聞, 2007.

坂村健:「住宅長寿化へ税優遇ー国交省、中古市場整備で支援策」, 日本経済新聞, 2007.

坂村健:「亜洲在 IT 業将扮演極重要角色ー日本 TRON 之父坂村健呼籲推誠合作」, CPRO 資傳網, 2007.

坂村健:「社会変える「センサーネット」日立、専門部署で事業化ーユビキタス社会の先駆け」, 日刊工業新聞, 2007.

坂村健:「いつでもどこでも“ユビキタス医療”ICT 利用で進む遠隔診療・治療」, 日刊工業新聞, 2007.

坂村健:「著書「ユビキタスとは何か」紹介」, 読売新聞, 2007.

坂村健:「センサー使い生活予測、人間関係もデータ化」, 日経産業新聞, 2007.

坂村健:「総務省の概算要求 7.6%増、ICT 分野強化など」, 電波新聞, 2007.

坂村健:「IC タグ利用に手応え」, 日経流通新聞, 2007.

坂村健:「ICT で最先端維持管理/次世代の河川あり方小委、12 月に提言」, 建設通信新聞, 2007.

坂村健:「国交省/河川管理効率化へ ICT 駆使/「中央洪水予測センター」設備も検討」, 建設通信新聞, 2007.

坂村健:「8 月 28 日に初会合/ICT 活用した河川管理で国交省検討小委員」, 建設通信新聞, 2007.

坂村健:「次世代社会資本整備と電腦コンクリート」, 建設マネジメント技術, 2007.

坂村健:「いま公共放送を考えるニュースと教育の重視を」, 毎日新聞, 2007.

坂村健:「次世代安心・安全 ICT フォーラムー実証実験を本格化、災害時でも有効な通信技術」, 日刊工業新聞, 2007.

坂村健:「総務省 次世代 IP にカー情報通信の国際強化」, 日経産業新聞, 2007.

坂村健:「熊本県情報サービス産業協会が 70 人集めシンポジウム、組込みソフトウェア部会を立ち上げ」, 日刊電波新聞, 2007.

坂村健:「ユビキタスで情報快適空間が実現する」, ダカーポー「世界一の日本の技術」, 2007.

坂村健:「様々な通信規格に対応可能なマルチプロトコル RFID リーダライタの提案」, 情報処理学会論文誌, 2007.

坂村健:「進化する建設技術、住友大阪セメント コンクリートの情報管理ーセメントから建物完成まで、IC タグで一括」, 日経産業新聞, 2007.

坂村健:「日本圧着端子が創立 50 周年記念式典」, 電波新聞, 2007.

坂村健:「ベターリビングの警報器管理システムーIC タグで設置場所把握」, 日経産業新聞, 2007.

坂村健:「管理・運営組織を設立、盛んにイベント」, フジサンケイビジネスアイ, 2007.

坂村健:「地球環境部会、初の懇談会ー「低炭素社会」検討開始、坂村・東大教授熱弁」, 産経新聞, 2007.

坂村健:「IC タグ実用化着々」, 日経流通新聞, 2007.

坂村健:「いのちの王国ーIC タグと端末で解説、東京都恩賜上野動物園」, 毎日新聞別刷, 2007.

坂村健:「毎日 21 世紀フォーラム:ユビキタス社会実現に、坂村氏「制度改革を」」, 毎日新聞(大阪), 2007.

坂村健:「「低炭素社会」の日本モデル発信ー懇談会が方針」, 北海道新聞, 2007.

坂村健:「環境省が低炭素社会の実現へ中央環境審議会の有識者ヒアリングを開始」, 電気新聞, 2007.

坂村健:「一見さんいらっしゃい、ユビキタスで誰でも過ごしやすい東京へ」, 日経コンピュータ, 2007.

坂村健:「トレーサビリティー建材・設備の“履歴”が取得できる」, 日経アーキテクチュア, 2007.

坂村健:「ユビキタスは建築をどう変えるか」, ユビキタスは建築をどう変えるか, 2007.

坂村健:「そろそろ死語でもまだ言うゾ! ~『ユビキタスとは何か』」, NB online(日経ビジネス), 2007.

坂村健:「Preserving World HeritageーCube Routes」, The Japan Journal, 2007.

坂村健:「次世代インフラとしてのユビキタスと組込み技術」, 経済人, 2007.

坂村健:「「イノベーションとユビキタス」社会の基盤整備急務」, 毎日新聞(夕刊), 2007.

坂村健:「もったいない日本住宅事情ー「家歴」情報技術活用を」, 毎日新聞, 2007.

坂村健:「ユビキタスでつくる情報社会基盤」, 学術の動向, 2007.

坂村健:「組み込み総合技術展 Embedded Technology 2007 特別講演 坂村健 ユビキタス環境のための次」, EE Times Japan 2007 年 10 月号, 2007.

坂村健:「ユビキタスとは何か。」, ニコスマガジン 11 月号, 2007.

坂村健:「JAPIC に期待する」, JAPIC パンフレット, 2007.

坂村健:「広辞苑 10 年ぶり改訂—新収項目 (ユビキタス、IC タグ、TRON)」, 毎日新聞, 2007.

坂村健:「視覚障害の現状知って—サイトワールド 2007、来月 2-4 日、東京」, 日刊工業新聞, 2007.

坂村健:「ユビキタス時代のユニバーサルデザイン」, 日経ビジネス, 2007.

坂村健:「組み込みソフトウェア開発の世界にイノベーションを起こすことが必要」, ITpro Special, 2007.

坂村健:「市場を開く—物流「見える化」開発に没頭」, 日本海事新聞, 2007.

坂村健:「技術を磨く—外部も支援、MTI で花開く」, 日本海事新聞, 2007.

坂村健:「大志を抱く—リスク恐れず新技術に挑む」, 日本海事新聞, 2007.

坂村健:「東京・銀座でユビキタス実験、NEC など 14 社」, 日経流通新聞, 2007.

坂村健:「ユビキタスとは何か (選書)」, ascii, 2007.

坂村健:「 μ T-Kernel 8~16 ビットの小型 CPU で動作する組み込み機器向けリアルタイム OS」, 月刊コンピュータワールド, 2007.

坂村健:「ユビキタス時代のユニバーサルデザイン」, NIKKEI DESIGN, 2007.

坂村健:「パノラマ写真による歩行者ナビゲーションサポートシステムの提案と実装」, 信学技報, 2007.

坂村健:「ユーコードで館内案内—NEC がシステム、青森県立美術館に納入」, 日経産業新聞, 2007.

坂村健:「「ユーコード」対応案内システム、青森県立美術館に納入、NECなど」, 日刊工業新聞, 2007.

坂村健:「青森県立美術館、ucode を用いたユビキタス案内サービスを導入」, ITmedia エンタープライズ, 2007.

坂村健:「国内初、赤外線屋内位置管理システム SmartLocator とID体系 ucode を使用した「美術館ユビキタス案内システム」を青森県立美術館」, NEC NEWS RELEASE, 2007.

坂村健:「NECエンジニアリング、美術館ユビキタス案内システム納入」, 電波新聞, 2007.

坂村健:「コンピュータ社会の行方さぐる」, 産経新聞, 2007.

坂村健:「サイトワールド2007」, 毎日新聞ユニバーサルサロン, 2007.

坂村健:「「人工の自然」—生きるための教育を」, 毎日新聞, 2007.

坂村健:「横浜で「ET2007」開幕」, 電波新聞, 2007.

坂村健:「マルチコア対応の OS デモ」, 電波新聞, 2007.

坂村健:「ET2007 に見る組込み最新技術」, 電波新聞, 2007.

坂村健:「日本のイノベーションを考える」, 日経産業新聞, 2007.

坂村健:「The T-Engine Tomorrow Happening Today」, Electronics For You, 2007.

坂村健:「第 27 回台日工程技術検討会、建築研究組工作成果報告」, 第 27 回台日工程技術検討会記念集, 2007.

坂村健:「銀座でユビキタス実験ー店舗や災害情報、携帯で手軽に入手」, 日本経済新聞, 2007.

坂村健:「住の安全性とユビキタスー住宅部品のトレーサビリティ管理システムが拓くユビキタス社会」, 住まいと電化, 2007.

坂村健:「中国やインドでも」トロン技術者認定試験を 2008 年 4 月に開始、TRONSHOW2008 で模擬試験」, ITpro, 2007.

坂村健:「T-Engine フォーラムとトロン協会「トロン技術者認定試験」実施へ」, アットマーク・アイティ NewsInsight, 2007.

坂村健:「IC タグ、高精度で位置検出ーユビキタス研、倉庫管理に活用」, 日本経済新聞, 2007.

坂村健:「トロン技術者認定試験ーT-Engine フォーラムとトロン協会、組込みシステム技術者を対象に、来年 4ー6 日から開始」, 電波新聞, 2007.

坂村健:「「組込み技術者不足への対策に」トロン技術者試験を実施へ」, Tech-On!, 2007.

坂村健:「宅麻伸が訊く、あの人の ON と OFF」, 日経 WagaMama 日経ビジネス 日経おとなの OFF 連動企画, 2007.

坂村健:「TRONSHOW2008、「ユビキタスとそれを支える技術、両面を紹介する」坂村教授がプレビューで」, Tech-On!, 2007.

坂村健:「TRONSHOW2008、東京大学坂村研究室、39 万字から成る漢字フォント・セットを無償公開」, Tech-On!, 2007.

坂村健:「TRONSHOW2008-UWB 基地局を大幅に小型化、PDA 機器への搭載を可能に」, Tech-On, 2007.

坂村健:「TRONSHOW2008-unicode 対応タグを新たに 4 種認定、合計 21 種に」, Tech-On, 2007.

坂村健:「最新のユビキタスソリューションを紹介、TRONSHOW2008、東京国際フォーラムで開幕」, 毎日新聞 ユニバーサロン, 2007.

坂村健:「TRONSHOW2008-実用化始まった unicode、「インフラ整備は競争よりも標準化で」」, Tech-On, 2007.

坂村健:「UNL、世界初の携帯型 UWB 基地局を開発」, エレクトロニックジャーナル, 2007.

坂村健:「イノベーションー技術でなく勇気を」, 毎日新聞, 2007.

坂村健:「新聞界の常識が崩れ去った」, 産経新聞, 2007.

坂村健:「新聞界の常識が崩れ去った」, 産経新聞(web), 2007.

坂村健:「銀座で一般公開型ユビキタス実験」, 日経 MJ, 2007.

坂村健:「日本酒の製販管理近代化」, 日経産業新聞, 2007.

坂村健:「ユビキタスは都市をどう変える?」, 日刊建設工業新聞, 2007.

坂村健:「トロン技術者認定試験」, 電波新聞ハイテクノロジー, 2007.

坂村健:「食の安全とユビキタスー先端技術を追うーその光と影」, 農業と経済, 2007.

坂村健:「東大の総合力を活かしてユビキタス社会を設計する」, 東京大学アクション・プランガイドブック, 2007.

坂村健:「インフラ・イノベーションとしてのユビキタス・コンピューティング」, RESEARCH BUREAU 論究 第4号, 2007.

坂村健:「ユビキタスの導入で、防災や健康を連携し、地域力の結集をめざす」, 道 21 世紀新聞, 2007.

坂村健:「ユビキタス技術で実現するユニバーサルデザインーTRONSHOW2008」, 毎日新聞ユニバーサロン, 2007.

坂村健:「先進サービスアピール」, 日刊工業新聞, 2007.

坂村健:「イノベーション基盤としてのユビキタス」, NEC技報, 2007.

坂村健:「OKIがユビキタスサービス学寄附講座、来月4月に東大で開設記念シンポ」, 電波新聞, 2008.

坂村健:「ユビキタス、意識させずにコンピューターの恩恵どこでも」, フジサンケイビジネスアイ, 2008.

坂村健:「東京ユビキタス計画・銀座ー銀座の案内は最先端情報技術にお任せ」, Tokyo News(東京都広報), 2008.

坂村健:「イノベーション基盤としてのユビキタス」, NEC技法抜刷, 2008.

坂村健:「最先端ICTと防災減災④ーユビキタスは命綱」, 日刊工業新聞, 2008.

坂村健:「最先端ICTと防災減災③ーレスキューロボット」, 日刊工業新聞, 2008.

坂村健:「最先端ICTと防災減災②ー災害時の携帯電話」, 日刊工業新聞, 2008.

坂村健:「最先端ICTと防災減災①ー現場志向の研究開発」, 日刊工業新聞, 2008.

坂村健:「広がる世界共通 u コード 銀座で公開実験中」, 織研新聞, 2008.

坂村健:「東京ユビキタス計画・銀座の実証実験開始/東京都、国交省」, 日刊建設工業新聞, 2008.

坂村健:「老いるニッポンの姿ー崩壊する社会資本」, WBS, 2008.

坂村健:「「ユビキタスとは何か」(紹介&インタビュー)」, 月間 e・コロンブス 1 月号, 2008.

坂村健:「デジタル文明の行方ー第三の変化」, 日本経済新聞, 2008.

坂村健:「デジタル文明の行方ー規格世界の流動化」, 日本経済新聞, 2008.

坂村健:「デジタル文明の行方ー物理的枠組み」, 日本経済新聞, 2008.

坂村健:「障害者の必要情報いつでもどこでもーコンピューターで便利な生活」, 毎日新聞, 2008.

坂本健:「Uコード使い宅配実験ーユビキタス基盤推進協議、本稼動むけ課題検証」, 物流ニッポン, 2008.

坂村健:「日本全国 8 時ですー月尾嘉男先生、東京ユビキタス計画を紹介」, 森本毅郎・スタンバイ!, 2008.

坂村健:「ユビキタス社会を予測するための 3 冊、ユビキタス情報社会の哲学を読む、「ユビキタスでつくる情報社会基盤」紹介」, @IT, 2008.

坂村健:「デジタル文明の行方 漂流し始めた社会」, 日本経済新聞, 2008.

坂村健:「2007 年日経優秀製品・サービス賞」, 日本経済新聞, 2008.

坂村健:「「街中ユビキタス」拡大中、移動・観光情報いつでもどこでもアクセス、国交省銀座など 8 ヶ所実施」, 日経MJ, 2008.

坂村健:「フードジャーナル21」, スカイパーフェクトTV, 2008.

坂村健:「場所に ucode を付与する「空間コード」が描く社会」, @IT, 2008.

坂村健:「ニフティ、「東京ユビキタス計画・銀座」の実証実験で情報支援を実施」, IT Media, 2008.

坂村健:「ニフティ、銀座でのユビキタス実験にコンテンツ提供」, ケータイ Watch, 2008.

坂村健:「銀座で「ユビキタス」実験ー専用端末で情報を受信しながら街を散策」, 銀座経済新聞, 2008.

坂村健:「手元に届く街情報、銀ブラー層楽しく」, 産経新聞, 2008.

坂村健:「ユビキタスで目的地にスイスイ」, 毎日新聞, 2008.

坂村健:「未来の銀ブラ「ユビキタス」実験」, 朝日新聞, 2008.

坂村健:「ユビキタス計画、携帯端末に街の情報を受信ー一段差もお知らせ、銀ブラの案内役」, 東京新聞, 2008.

坂村健:「千の風になってーデジタルデータよ永遠に」, 毎日新聞, 2008.

坂村健:「大手ゼネコンーICT共同研究加速、共通パスで情報共有」, 日刊建設工業新聞, 2008.

坂村健:「u-city ユビキタス技術が支える都市の新しいカタチ」, 日刊建設工業新聞, 2008.

坂村健:「銀ブラで実証実験 ユビキタス社会の実現目指す」, フジサンケイビジネスアイ, 2008.

坂村健:「2007 年日経優秀製品・サービス賞、審査を終えて「長年の積み重ね 実を結ぶ」, 日経産業新聞, 2008.

坂村健:「ユビキタスIDセンター、ucode タグのラインナップを大幅拡充」, MATERIAL FLOW, 2008.

坂村健:「ユビキタスID技術、TRON SHOW2008」, MATERIAL FLOW, 2008.

坂村健:「ヨーロッパ出羽の守、バレンタインデー」, 毎日新聞, 2008.

坂村健:「デジタル文明の行方ー情報的価値とは」, 日本経済新聞, 2008.

坂村健:「音声の方向感で避難場所に誘導、OKIが実証実験を披露」, ITpro, 2008.

坂村健:「東京・銀座でユビキタス実験ー専用端末で“スイスイ銀ブラ”」, 道 21 世紀新聞, 2008.

坂村健:「「ゆきなび」携帯で実験/弘前」, 陸奥日報(web), 2008.

坂村健:「路面情報「ゆきなび」弘前で実験 青森と国土交通省」, 北海道新聞, 2008.

坂村健:「拡大し続ける「組込みシステム技術」の 29 年史」, Tech 総研, 2008.

坂村健:「新情報コード実証実験、イラスト内に埋め込み」, 日経産業新聞, 2008.

坂村健:「大災害時の支援物資 ICタグで輸送管理」, 読売新聞(夕刊), 2008.

坂村健:「メッセージの中身を見て最適経路にルーティング、荷物配送の実証実験で」, Internet Watch, 2008.

坂村健:「東京ユビキタス計画 in 銀座」, JanJan News, 2008.

坂村健:「デジタル文明の行方ーデジタル化の未来」, 日本経済新聞, 2008.

坂村健:「デジタル文明の行方ー広がる国内格差」, 日本経済新聞, 2008.

坂村健:「配達時に個人情報保護、中央区など 100 ヶ所でUコード利用実験」, G-Search(神戸新聞記事情報), 2008.

坂村健:「〈大阪の阪急三番街〉地下街でもGPSサービス」, 電波新聞, 2008.

坂村健:「OKIが記念シンポジウムー東大大学院情報学環、19 年度寄附講座開設で」, 電波新聞, 2008.

坂村健:「ユビキタス基盤が餃子問題も解決」, @IT, 2008.

坂村健:「コンピューターは神か」, 朝日新聞(夕刊), 2008.

坂村健:「ユビキタスが都市を変える!?ー新たなインフラとして整備の動き、障害者向けから利用広がる」, 日経グローバル, 2008.

坂村健:「情報ネットワークが未来の都市基盤に」, 日経グローバル, 2008.

坂村健:「人工知能の未来像は外す」, 朝日新聞, 2008.

坂村健:「建設共通パス、10年度実用化目指しシンポ」, 日刊建設工業新聞, 2008.

坂村健:「INFOPRO2007 特別講演「イノベーション基盤としてのユビキタス」」, 情報管理, 2008.

坂村健:「どこでもICタグ」, 日経MJ第2部, 2008.

坂村健:「坂村健の提案—先端土木技術にユビキタス技術を融合...環境親和型「21世紀運が建設可能である」」, 月刊朝鮮, 2008.

坂村健:「プラネタリウムに行きたい」, Design News Japan, 2008.

坂村健:「ユニバーサルデザインのガイドライン策定へ—TEPS 活動の20年を踏まえて」, Design Japan News, 2008.

坂村健:「T-Engine やユビキタスID技術に関する技術展、TRONSHOW2008」, Iner Face, 2008.

坂村健:「ICカードビジネス・イヤーブック 2000—進化を続けるICカードソリューション「RFID」」, 月刊 Card Wave3月号, 2008.

坂村健:「東京都/国土交通省/全銀座会—「東京ユビキタス計画・銀座」公開実験がスタート、ICタグなどのツールを使い次世代情報サービスを実践」, 月刊 Card Wave 3月号, 2008.

坂村健:「花について」, MOSTLY CLASSIC, 2008.

坂村健:「伝統文化活性化シンポジウム、日本文化の未来像」, 伝統文化・シンポジウム特集号, 2008.

佐倉統・教授

研究テーマ(主たるもの)

科学技術コミュニケーション

科学技術の専門家と非専門家間のコミュニケーションを、円滑化、活性化するための方法論や制度策定および科学的・文明的な理論枠組みの構築。

脳神経倫理(ニューロエシックス)

脳神経科学の倫理的、社会的、哲学的諸問題を考察し、教育現場や社会とのコミュニケーションなどにおける実際の問題の解決をめざす。

進化生物学史、動物行動学史

とくに日本における進化生物学、動物行動学の歴史を、諸外国の事例と比較しつつ、特徴を抽出する。

研究業績(2007年度)

論文等

Yurina Otaki, Osamu Sakura and Masahiro Otaki: "Water systems and urban sanitation: A historical comparison of Tokyo and Singapore.", Journal of Water and Health, Vol.5, No.2, pp.259-265, 2007年。【査読有】

朝比奈泰子・堀里子・大谷壽一・佐倉統・澤田康文:「健康食品に関する使用実態調査研究の統合により見いだされた諸問題解決のための提案」, 医薬品情報学, Vol.9, No.2, pp.150-157, 2007年.【査読有】

佐倉統・福士珠美:「脳神経倫理——脳科学と社会の健全な関係をめざして——」, 生命倫理, Vol.17, No.1, pp.18-27, 2007年.【査読有】

福士珠美・佐倉統:「脳-機械インターフェイス研究開発の倫理実装」, 計測と制御, Vol.46, No.10, pp.772-777, 2007年.【査読有】

口頭発表等

北澤茂・本田学・佐倉統:「脳と社会」分科会活動報告」, 第2回「脳を活かす」研究会, 2007.

佐倉統:「社会生物学と俗流進化論:ポップであることの功と罪」, 日本科学史学会第54回年会・総会シンポジウム「ポピュラー・サイエンスとポピュラー科学史:アカデミック科学史はポピュラー・サイエンスといかに向き合うか」, 2007.

佐倉統:「脳神経倫理——脳科学と社会の健全な関係をめざして——」, 第44回総合科学技術会議生命倫理専門調査会, 2007.

佐倉統:「進化生物学から」, 第43回日本周産期・新生児医学会学術集会シンポジウム1「子どもの心を育む」, 2007.【招待講演】

佐倉統(主催・コーディネーター), 正木信夫・近藤武夫・福士珠美(話題提供者):「ランチョンセミナー「脳機能イメージングにおける倫理を考える“Ethics of Neuroimaging”」」, Neuro2007, 2007.

佐倉統:「社会はなぜ最先端科学技術を嫌うのか?—フランケンシュタイン・コンプレックスと上流制御」, 第6回科学技術社会論学会, 2007.

佐倉統(企画・主催):「ワークショップ「社会が最先端の科学と出会うとき—何が必要なのか?」」, 第6回科学技術社会論学会, 2007.

佐倉統:「脳神経科学と社会を架橋する」, 「意識の先端的脳科学がもたらす倫理的・社会的・宗教的影響の調査研究」研究班主催研究会, 2007.

佐倉統:「学際という幻想～文理融合ではなく文理越境を～」, 東北大学大学院情報科学研究科「情報科学における人文学知の理論」プロジェクト主催講演会, 2008.【招待講演】

佐倉統:「脳神経倫理——脳科学と社会の健全な関係をめざして——」, 玉川大学脳科学研究所脳科学リテラシー部門第3回研究会, 2008.

佐倉統:「科学技術と社会のコミュニケーションはなぜ難しいのか?」, 名古屋大学エコトピア科学研究所「エネルギー・環境制約社会における技術コミュニケーション」に関する研究会, 2008.【招待講演】

一般向け講演等

佐倉統:「知識の進化—智慧と創造性は社会がはぐくむ」, ヒューマンエデュケーション主催講演, 2007.【招待講演】

佐倉統(講師)・長神風二(ファシリテータ):「信用しますか?—テレビの中の科学」, 第48回科学技術週間サイエンスカフェ, 2007.

佐倉統(ナビゲーター), 鎌田東二・松岡正剛・松沢哲郎・入來篤史・加藤忠史(パネリスト):「古今東西～脳科学の由来と未来」, 理化学研究所脳科学総合研究センター創立 10 周年記念シリーズトーク, 2007.

佐倉統(ナビゲーター), 田中寅彦・引田裕一・松村京子・宮崎充治・入來篤史・加藤忠史・ヘンシュ貴雄(パネリスト):「脳と教育～鍛えるだけが脳じゃない!？」, 理化学研究所脳科学総合研究センター創立 10 周年記念シリーズトーク, 2007.

佐倉統(ナビゲーター), 小倉麻矢・藤森照信・布施英利・宮本文昭・茂木健一郎・岡ノ谷一夫・田中啓治(パネリスト):「脳と芸術～ヒトとは何か」, 理化学研究所脳科学総合研究センター創立 10 周年記念シリーズトーク, 2007.

佐倉統(講演):「こころと知性への挑戦」, 理化学研究所脳科学総合研究センター創立 10 周年記念シンポジウム, 2007.

産業技術総合研究所広報部(主催)高柳謙一・佐倉統・目代邦康・岡田小枝子・神野智子(登壇):「セミナー「研究機関の広報の役割」」, サイエンスアゴラ 2007, 2007.

佐倉統(企画委員会委員):「第 6 回社会技術フォーラム「ライフサイエンスの倫理とガバナンス—社会と協働する科学技術を目指して—」」, サイエンスアゴラ 2007, 2007.

小宮山宏・佐倉統・吉田博・北澤宏一・中村桂子・茂木健一郎(パネリスト), 柴山充弘(司会):「これから 50 年の科学は?」, 東京大学物性研究所創立五〇周年記念シンポジウム・パネルディスカッション, 2007.

菅野巖・佐倉統・本望修・吉田博(パネリスト), 安井信之(モデレータ):「脳科学分野研究成果の社会還元と未来」, 地域イノベーションフォーラム in 北東北～脳科学と未来～パネルディスカッション, 2008.

一般向け記事・報道等

佐倉統:「佐倉統のサイエンスつれづれぐさ(連載)」, 言語, 2007 年.

佐倉統:「ダーウィン「フジツボ研究熱中してた」」, 読売新聞夕刊, 2007.

佐倉統:「サイエンス ZERO」, NHK テレビ, 2007.

佐倉統:「「卵子だけ生殖」時代」, 朝日新聞, 2007.

澤田康文・教授

研究テーマ(主たるもの)

理理融合・文理融合による、国民の安心安全を確保するための「投薬ミス予測システム」プロジェクト

情報分野の理理融合と文理融合という情報学環の特色を活かし、薬物治療に関するヒヤリハット・ミス事例を収集し、学際的に解析することで、投薬ミスを事前予測し、予防することを目指す。さらに、予測不能であった新規の要因による事例も含めて「薬物治療ヒヤリハット・ミスライブラリー」を構築し、「リスクマネジメント文化」の糧とする。

臨床事例を活用した実践的薬学教育研修システムの確立とその評価

臨床事例(教育的事例素材)の効果的な収集、その評価・体系化・加工、ならびに教育用事例を用いた薬学教育、薬剤師研修のための方法論を確立するとともに、その方法論を実行・評価する。

薬物の胎児移行性及び胎児毒性の予測と、薬物動態・動力学理論に基づくテーラーメイド・処方設計システムへの応用

ヒト胎盤を活用し、さまざまな実験系における薬物の輸送実験を行うことで、薬物の胎児移行性を *in vitro* において効率的かつ定量的に推測するための方法論を構築する。さらにそれらに薬物動態・動力学理論を適用し、処方設計や処方チェックの場面に最適な形で適用するための「テーラーメイド処方設計支援システム」のモジュールを開発する。

研究業績(2007 年度)

著書等

澤田康文 他:「知恵蔵」, 朝日新聞社事典編集部 編, 朝日新聞社, 2007 年.

澤田康文, 大谷壽一 他:「臨床検査データブック 2007-2008 年版」, 黒川清, 春日雅人, 北村聖 編, 医学書院, 2007 年.

澤田康文 他:「生物薬剤学 改訂第 2 版」, 林正弘, 谷川原祐介 編, 南江堂, 2007 年.

澤田康文, 大谷壽一, 堀里子, 三木晶子:「薬剤師のための徹底リスクマネジメント」, NPO 法人医薬品ライフタイムマネジメントセンター 編, 南山堂, 2007 年.

澤田康文:「薬を育てる 薬を学ぶ」, 東京大学出版会, 2007 年.

澤田康文, 堀里子 他:「機能性食品の安全性ガイドブック」, 津志田藤二郎, 梅垣敬三, 井上浩一, 村上明 編, サイエンスフォーラム, 2007 年.

澤田康文, 大谷壽一 他:「くすりの地図帳」, 伊賀立二, 小瀧一, 澤田康文(監修) 編, 講談社, 2007 年.

澤田康文 他:「医療従事者のための医療安全対策マニュアル」, 日本医師会 編, 日本医師会, 2007 年.

論文等

K. Shintaku, Y. Arima, Y. Dan, T. Takeda, K. Kogushi, M. Tsujimoto, H. Nagata, S. Satoh, K. Tsukimori, H. Nakano, S. Hori, H. Ohtani and Y. Sawada: "Kinetic analysis of the transport of salicylic acid, a nonsteroidal anti-inflammatory drug, across human placenta", *Drug Metab. Dispos.*, Vol.35, No.5, pp.772-778, 2007 年.【査読有】

C. Tanaka, H. Ohtani, M. Tsujimoto, S. Ohdo, M. Taniguchi, Y. Mizooku, Y. Saitoh, M. Kimura, H. Uchimaru, S. Irie and Y. Sawada: "Effects of dosing interval on the pharmacokinetic interaction between oral small spherical activated charcoal and amlodipine in humans", *J. Clin. Pharmacol.*, Vol.47, No.7, pp.904-908, 2007 年.【査読有】

D. Yamasaki, M. Tsujimoto, S. Ohdo, H. Ohtani and Y. Sawada: "Possible mechanisms of the pharmacokinetic interaction between phenytoin and folinate in rats", *Ther. Drug Monit.*, Vol.29, No.4, pp.404-411, 2007 年.【査読有】

H. Ohtani, T. Ikegawa, Y. Honda, N. Kohyama, S. Morimoto, Y. Shoyama, M. Juichi, M. Naito, T. Tsuruo and Y. Sawada: "Effects of various methoxyflavones on vincristine uptake and multidrug resistance to vincristine in P-gp-overexpressing K562/ADM cells", *Pharm. Res.*, Vol.24, No.10, pp.1936-1943, 2007 年. 【査読有】

K. Ito, H. Ohtani and Y. Sawada: "Assessment of α 1-adrenoceptor antagonists in benign prostatic hyperplasia based on the receptor occupancy theory", *Br. J. Clin. Pharmacol.*, Vol.63, No.4, pp.394-403, 2007 年. 【査読有】

S. Hori, N. Matsuo, A. Yamamoto, T. Hazui, H. Yagi, M. Nakano, Y. Suzuki, A. Miki, H. Ohtani and Y. Sawada: "Piloerection induced by replacing fluvoxamine with milnacipran", *Br. J. Clin. Pharmacol.*, Vol.63, No.6, pp.665-671, 2007 年. 【査読有】

K. Miyata, H. Ohtani, M. Tsujimoto and Y. Sawada: "Antacid interaction with new quinolones: dose regimen recommendations based on pharmacokinetic modeling of clinical data for ciprofloxacin, gatifloxacin and norfloxacin and metal cations", *Int. J. Clin. Pharmacol. Ther.*, Vol.45, No.1, pp.63-70, 2007 年. 【査読有】

S. Ito, R. Nasu, M. Tsujimoto, H. Murakami, H. Ohtani and Y. Sawada: "Effect of macrolide antibiotics on uptake of digoxin into rat liver", *Biopharm. Drug Dispos.*, Vol.28, No.3, pp.113-123, 2007 年. 【査読有】

K. Taniguchi, H. Ohtani, T. Ikemoto, A. Miki, S. Hori and Y. Sawada: "Possible case of potentiation of the antiplatelet effect of cilostazol by grapefruit juice", *J. Clin. Pharm. Ther.*, Vol.32, No.5, pp.457-459, 2007 年. 【査読有】

S. Inoue, H. Ohtani, M. Tsujimoto, S. Hori and Y. Sawada: "Development of a pharmacokinetic model to optimize the dosage regimen of TS-1, a combination preparation of tegafur, gimeracil and oteracil potassium", *Drug Metab. Pharmacokinet.*, Vol.22, No.3, pp.162-168, 2007 年. 【査読有】

A. Yamauchi, S. Dohgu, T. Nishioku, H. Shuto, M. Naito, T. Tsuruo, Y. Sawada and Y. Kataoka: "An inhibitory role of nitric oxide in the dynamic regulation of the Blood-Brain Barrier function", *Cell Mol. Neurobiol.*, Vol.27, No.3, pp.263-270, 2007 年. 【査読有】

H. Nishimuta, H. Ohtani, M. Tsujimoto, K. Ogura, A. Hitatsuka and Y. Sawada: "Inhibitory effects of various beverages on human recombinant sulfotransferase isoforms SULT1A1 and SULT1A3", *Biopharm. Drug Dispos.*, Vol.28, No.9, pp.491-500, 2007 年. 【査読有】

M. Fujiyoshi, S. Ohtsuki, S. Hori, M. Tachikawa and T. Terasaki: "24S-hydroxycholesterol induces cholesterol release from choroid plexus epithelial cells in an apical- and apoE isoform-dependent manner concomitantly with the induction of ABCA1 and ABCG1 expression", *J. Neurochem.*, Vol.100, No.4, pp.968-978, 2007 年. 【査読有】

N. Perriere, S. Yousif, S. Cazaubon, N. Chaverot, F. Bourasset, S. Cisternino, X. Declèves, S. Hori, T. Terasaki, M. Deli, JM. Scherrmann, J. Temsamani, F. Roux and PO. Couraud: "A functional in vitro model of rat blood-brain barrier for molecular analysis of efflux transporters", *Brain Res.*, Vol.1150, pp.1-13, 2007 年. 【査読有】

S. Ohtsuki, M. Kamoi, Y. Watanabe, H. Suzuki, S. Hori and T. Terasaki: "Correlation of induction of ATP binding cassette transporter A5 (ABCA5) and ABCB1 mRNAs with differentiation state of human colon tumor", *Biol. Pharm. Bull.*, Vol.30, No.6, pp.1144-1146, 2007 年. 【査読有】

S. Ohtsuki, S. Ito, A. Matsuda, S. Hori, T. Abe and T. Terasaki: "Brain-to-blood elimination of 24S-hydroxycholesterol from rat brain is mediated by organic anion transporting polypeptide 2 (oatp2) at the blood-brain barrier", *J. Neurochem.*, Vol.103, No.4, pp.1430-1438, 2007 年. 【査読有】

三木晶子, 堀里子, 大谷壽一, 澤田康文: 「薬薬連携に関するアンケート調査～疑義照会の現状と問題点」, 医薬品情報学, Vol.8, No.4, pp.296-301, 2007年. 【査読有】

佐田宏子, 大谷壽一, 矢崎泰三, 坂本浩己, 堀里子, 澤田康文: 「医薬品適正使用推進のためのWEBページを用いた薬剤師向けe-Learningシステムの利用者による評価」, 医薬品情報学, Vol. 8, No.4, pp.307-314, 2007年. 【査読有】

朝比奈泰子, 堀里子, 大谷壽一, 佐倉統, 澤田康文: 「健康食品に関する使用実態調査研究の統合により見いだされた諸問題解決のための提案」, 医薬品情報学, Vol.9, No.2, pp.150-157, 2007年. 【査読有】

堀里子, 寺門千佳子, 石河利恒, 大和田邦明, 宇野幹子, 三木晶子, 大谷壽一, 天野武城, 澤田康文: 「後発医薬品の使用に伴い生じたインシデント・アクシデント事例の実態とその解析」, 医薬品情報学, Vol.9, No.3, pp.205-209, 2007年. 【査読有】

澤田康文, 堀里子, 大谷壽一: 「薬と食の相互作用(88) III.薬と食事の相性 28.バルガンシクロピルと食事」, 医薬ジャーナル 43(1), 2007年.

澤田康文, 堀里子, 三木晶子, 大谷壽一: 「薬と食の相互作用(89) III.薬と食事の相性 29.イトラコナゾールと食事(3)」, 医薬ジャーナル 43(2), 2007年.

澤田康文, 堀里子, 大谷壽一: 「薬と食の相互作用(90) III.薬と食事の相性 30.インジナビルと食事」, 医薬ジャーナル 43(3), 2007年.

澤田康文, 堀里子, 大谷壽一: 「薬と食の相互作用(91) III.薬と食事の相性 31.ラベプラゾールと食事」, 医薬ジャーナル 43(4), 2007年.

澤田康文, 堀里子, 大谷壽一: 「薬と食の相互作用(92) III.薬と食事の相性 32.クロピドグレルと食事」, 医薬ジャーナル 43(5), 2007年.

澤田康文, 堀里子, 大谷壽一: 「薬と食の相互作用(93) III.薬と食事の相性 33.ビスホスホネート製剤と食事」, 医薬ジャーナル 43(6), 2007年.

澤田康文, 佐田宏子, 堀里子, 大谷壽一: 「薬と食の相互作用(94) III.薬と食事の相性 34.ニューキノロン系抗菌剤と食事」, 医薬ジャーナル 43(7), 2007年.

澤田康文, 堀里子, 大谷壽一: 「薬と食の相互作用(95) III.薬と食事の相性 35.メトホルミンと食事」, 医薬ジャーナル 43(8), 2007年.

澤田康文, 堀里子, 大谷壽一: 「薬と食の相互作用(96) III.薬と食事の相性 36.リンコマイシン, クリンダマイシンと食事」, 医薬ジャーナル 43(9), 2007年.

澤田康文, 堀里子, 大谷壽一: 「薬と食の相互作用(97) III.薬と食事の相性 37.セレコキシブと食事」, 医薬ジャーナル 43(10), 2007年.

澤田康文, 堀里子, 大谷壽一: 「薬と食の相互作用(98) III.薬と食事の相性 38.スピロラクトンと食事」, 医薬ジャーナル 43(11), 2007年.

澤田康文: 「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (65)」, ふくおか県薬会報 20(1), 2007年.

澤田康文: 「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (66)」, ふくおか県薬会報 20(2), 2007年.

澤田康文: 「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (67)」, ふくおか県薬会報 20(3), 2007年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際(68)」, ふうおか県薬会報 20(4), 2007年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際(69)」, ふうおか県薬会報 20(5), 2007年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際(70)」, ふうおか県薬会報 20(6), 2007年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際(71)」, ふうおか県薬会報 20(7), 2007年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際(72)」, ふうおか県薬会報 20(8), 2007年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際(73)」, ふうおか県薬会報 20(9), 2007年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際(74)」, ふうおか県薬会報 20(10), 2007年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際(75)」, ふうおか県薬会報 20(11), 2007年.

澤田康文:「「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際(76)」, ふうおか県薬会報 20(12), 2007年.

澤田康文監修:「東大・薬剤師会「育薬セミナー」」, 市薬ジャーナル(福岡市薬剤師会会報) 131, 2007年.

澤田康文監修:「東大・薬剤師会「育薬セミナー」」, 市薬ジャーナル(福岡市薬剤師会会報) 132, 2007年.

澤田康文監修:「東大・薬剤師会「育薬セミナー」」, 市薬ジャーナル(福岡市薬剤師会会報) 133, 2007年.

澤田康文監修:「東大・薬剤師会「育薬セミナー」」, 市薬ジャーナル(福岡市薬剤師会会報) 134, 2007年.

澤田康文監修:「東大・薬剤師会「育薬セミナー」」, 市薬ジャーナル(福岡市薬剤師会会報) 135, 2007年.

澤田康文監修:「東大・薬剤師会「育薬セミナー」」, 市薬ジャーナル(福岡市薬剤師会会報) 136, 2007年.

澤田康文:「ヒヤリハット事例に学ぶ 年齢・容姿からの予断は禁物」, 日経ドラッグインフォメーション 111, 2007年.

澤田康文:「ヒヤリハット事例に学ぶ 祖父母の孫への与薬でトラブル」, 日経ドラッグインフォメーション 113, 2007年.

澤田康文:「ヒヤリハット事例に学ぶ 錠剤の嚥下トラブルに要注意」, 日経ドラッグインフォメーション 115, 2007年.

澤田康文:「ヒヤリハット事例に学ぶ 併売品同士の切り替えに注意」, 日経ドラッグインフォメーション 117, 2007年.

澤田康文:「ヒヤリハット事例に学ぶ 服薬回数が減って逆に混乱」, 日経ドラッグインフォメーション 119, 2007年.

澤田康文:「ヒヤリハット事例に学ぶ 薬の味や色が変わり服薬中止」, 日経ドラッグインフォメーション 121, 2007年.

澤田康文:「ヒヤリハット事例に学ぶ ティーエスワン適正使用(1)」, 日経ドラッグインフォメーション 111, 2007年.

澤田康文:「ヒヤリハット事例に学ぶ ティーエスワン適正使用 (2)」, 日経ドラッグインフォメーション 120, 2007 年.

澤田康文:「Ph.D. Sawada の Rp.チェック! メスチノンはどのような患者に処方されるかをチェックする」, Rp.[レシピ] 6(1), 2007 年.

澤田康文:「Ph.D. Sawada の Rp.チェック! 喫煙をしながらジプレキサを服用している患者が禁煙を決意したときの適正な用法用量をチェックすること」, Rp.[レシピ] 6(2), 2007 年.

澤田康文:「Ph.D. Sawada の Rp.チェック! クラリスと他の薬剤との相互作用をチェックする」, Rp.[レシピ] 6(3), 2007 年.

澤田康文:「Ph.D. Sawada の Rp.チェック! ザンタックが適正な処方かどうかをチェックする」, Rp.[レシピ] 6(4), 2007 年.

澤田康文, 堀里子, 三木晶子, 大谷壽一:「健康食品・サプリメントの情報」, 月刊薬事 49(4), 2007 年.

澤田康文:「適応を誤れば良薬も毒となる」, 自分で健康を守る 100 の智慧, 2007 年.

澤田康文:「健康食品の市販後調査について考える」, FOOD STYLE 21 11(2), 2007 年.

澤田康文:「「ヒヤリハット事例」に学ぶ医療過誤防止と薬剤師の役割」, くらしとからだ 53, 2007 年.

澤田康文:「病院・診療所と調剤薬局との協力関係 -処方せんをめぐるリスクマネジメント」, 診療研究 429, 2007 年.

澤田康文:「VII. 抗菌薬 副作用, 安全性 相互作用」, 日本臨床 65 増刊号 2, 2007 年.

澤田康文:「I. 薬物による神経障害 1. 薬物相互作用」, 日本内科学会雑誌 96(8), 2007 年.

澤田康文:「高齢者の確実な服薬をサポートするには? 口腔内崩壊錠の有用性」, Medi Cafe 1(2), 2007 年.

大谷壽一, 澤田康文:「チトクローム P450 (CYP) アレル命名委員会ページのご紹介」, 医薬品情報学 9(1), 2007 年.

澤田康文:「テレビ番組取材・制作に協力する科学者の危うさ! 科学者の取るべき行動は?」, 医薬品情報学 9(2), 2007 年.

朝比奈泰子, 大谷壽一, 堀里子, 澤田康文:「健康食品の情報提供ホームページ紹介」, 医薬品情報学 9(2), 2007 年.

澤田康文:「全国薬剤師間情報交換研修システム (アイフィス) による医薬品適正使用・育薬の推進」, 日本病院薬剤師会雑誌 43(2), 2007 年.

澤田康文:「薬物相互作用回避のための処方設計支援 代謝阻害に関する時間依存性相互作用」, 医薬品相互作用研究 30(2), 2007 年.

澤田康文:「ジェネリック医薬品普及はなにを変えるか 国民と医療に広がる「医薬品」の波紋 後発医薬品のための「育薬」を考えるべきだ」, 新医療 34(1), 2007 年.

口頭発表等

- 澤田康文: 広島ワーファリンセミナー、広島(1月26日), 2007.【招待講演】
- 澤田康文: 佐賀県薬剤師生涯教育研修会、佐賀(1月27日), 2007.【招待講演】
- 澤田康文: 第2回「ホクナリンテープ: Advisory Board for Pharmacists」、大阪(2月13日), 2007.【招待講演】
- 澤田康文: 平成18年度薬事情報冬期研修会、大分(2月18日), 2007.【招待講演】
- 澤田康文: 学校薬剤師のための学術研修会、福岡(3月3日), 2007.【招待講演】
- 澤田康文: 先端創薬科学講座セミナーコース、東京(3月5日), 2007.【招待講演】
- 澤田康文: 伊勢崎佐波薬剤師会学術講演会、群馬(3月15日), 2007.【招待講演】
- 澤田康文: 長野県病院薬剤師会第5回専門薬剤師養成講座、長野(5月13日), 2007.【招待講演】
- 澤田康文: 沖縄県薬剤師会総会講演会、沖縄(5月27日), 2007.【招待講演】
- 澤田康文: 東四国医療セミナー、徳島(6月18日), 2007.【招待講演】
- 澤田康文: 第34回県西薬学懇話会、茨城(6月20日), 2007.【招待講演】
- 澤田康文: 平成19年度第1回地区薬剤師研修会、東京(6月25日), 2007.【招待講演】
- 澤田康文: 南空知病院薬剤師会学術講演会、北海道(7月5日), 2007.【招待講演】
- 澤田康文: 平成19年度第2回「一般用医薬品・植物製剤の現状と将来」研究会、東京(7月27日), 2007.【招待講演】
- 澤田康文: メディカルサミット2007 in 福岡、福岡(9月2日), 2007.【招待講演】
- 澤田康文: 新潟県病院薬剤師会学術講演会、新潟(9月21日), 2007.【招待講演】
- 澤田康文: 薬剤師臨床セミナー、北海道(10月3日), 2007.【招待講演】
- 澤田康文: 平成18年度新潟薬科大学薬学部セミナー、東京(10月4日), 2007.【招待講演】
- 澤田康文: 県民公開講座、香川(10月21日), 2007.【招待講演】
- 澤田康文: 気仙薬剤師会学術講演会、岩手(10月26日), 2007.【招待講演】
- 澤田康文: アステラス製薬製剤研究所内講演会、静岡(10月30日), 2007.【招待講演】
- 澤田康文: 日本医師会医療安全推進者養成講座講演会、東京(11月4日), 2007.【招待講演】
- 澤田康文: 京都薬薬学連携症例検討会第2回講演会、京都(11月5日), 2007.【招待講演】
- 澤田康文: 第46回日本薬学会・日本薬剤師会・日本病院薬剤師会中国四国支部学術大会、高知(11月10日), 2007.【招待講演】

澤田康文: 学術講演会、千葉 (11 月 10 日), 2007. 【招待講演】

澤田康文: 伊勢崎佐波薬剤師会学術講演会、群馬 (11 月 14 日), 2007. 【招待講演】

澤田康文: 下関市薬剤師会学術講演会、山口 (11 月 17 日), 2007. 【招待講演】

澤田康文: 第 7 回福井臨床薬理を考える会、福井 (11 月 19 日), 2007. 【招待講演】

澤田康文: 豊島区薬剤師会学術講演会、東京 (11 月 22 日), 2007. 【招待講演】

澤田康文: (社) 全国栄養士養成施設協会第 100 回研修会、福岡 (11 月 23 日), 2007. 【招待講演】

澤田康文: 第 28 回日本臨床薬理学会年会、栃木 (11 月 28 日), 2007. 【招待講演】

澤田康文: ひたちなか薬剤師会学術講演会、茨城 (12 月 21 日), 2007. 【招待講演】

渡邊哲夫, 三木晶子, 堀里子, 大谷壽一, 澤田康文: 「ツロブテロール貼付剤の PK 解析による製剤間の比較」, 第 17 会日本医療薬学会年会 (群馬, 2007 年 9 月), 2007.

松尾律子, 田中祥子, 加納美知子, 磯野喜美子, 田中泰羽, 田浦智子, 浅田由紀, 赤嶺有希子, 沢井一, 須藤智美, 木下正和, 三木晶子, 堀里子, 大谷壽一, 澤田康文: 「クラリスロマイシンドライシロップとカルボシステイン併用時のコンプライアンスの向上に関する検討」, 日本薬学会 127 年会 (富山, 2007 年 3 月), 2007.

鈴木理恵, 佐藤宏樹, 堀里子, 大谷壽一, 大嶋俊二, 梶原良夫, 大竹康之, 澤田康文: 「OATP-B の輸送能に及ぼす飲食物由来ポリフェノールの阻害効果の検討」, 日本薬学会 127 年会 (富山, 2007 年 3 月), 2007.

佐藤宏樹, 堀里子, 大谷壽一, 藤井知行, 武谷雄二, 澤田康文: 「ヒト胎盤トロホプラスト細胞による有機アニオンの取り込みへの有機アニオントランスポーター OATPs の関与」, 日本薬学会 127 年会 (富山, 2007 年 3 月), 2007.

佐田宏子, 大谷壽一, 堀里子, 澤田康文: 「剤形加工可否情報の規格化と処方オーダーリングシステムへの実装に関する基礎検討」, 日本薬学会 127 年会 (富山, 2007 年 3 月), 2007.

三上晶子, 堀里子, 大谷壽一, 澤田康文: 「テルビナフィンによる CYP2D6 阻害を介した薬物間相互作用の定量的予測」, 日本薬学会 127 年会 (富山, 2007 年 3 月), 2007.

堀里子, 宇野幹子, 三木晶子, 寺門千佳子, 大和田邦明, 石河利恒, 天野武城, 大谷壽一, 澤田康文: 「後発医薬品導入に伴うトラブル事例とその解析」, 日本薬学会 127 年会 (富山, 2007 年 3 月), 2007.

寺門千佳子, 堀里子, 三木晶子, 大和田邦明, 石河利恒, 天野武城, 大谷壽一, 澤田康文: 「後発医薬品導入に伴う問題点の実態調査と対策」, 日本薬学会 127 年会 (富山, 2007 年 3 月), 2007.

住広匡謙, 堀里子, 佐田宏子, 大谷壽一, 澤田康文: 「一般用医薬品が関係した薬物相互作用チェックシステムの構築」, 日本薬学会 127 年会 (富山, 2007 年 3 月), 2007.

久澄礼子, 大谷壽一, 堀里子, 澤田康文: 「PK/PD に基づくオピオイド投与最適化・製剤変更支援システムの構築と評価」, 日本薬学会 127 年会 (富山, 2007 年 3 月), 2007.

堀里子, 三木晶子, 大谷壽一, 澤田康文: 「インターネットを活用した医師に対する情報システム構築の運用」, 第 10 回日本医薬品情報学会総会・学術大会 (札幌, 2007 年 7 月), 2007.

住広匡謙, 堀里子, 佐田宏子, 大谷壽一, 澤田康文:「一般用医薬品の販売における情報提供の現状と課題」, 第 10 回日本医薬品情報学会総会・学術大会 (札幌, 2007 年 7 月), 2007.

三木晶子, 堀里子, 大谷壽一, 澤田康文:「薬薬連携に関するアンケート調査 (2) -入退院に関して-」, 第 10 回日本医薬品情報学会総会・学術大会 (札幌, 2007 年 7 月), 2007.

斉田翌美, 井上綾子, 石橋久, 富永宏治, 勢島充, 高木淳一, 堀里子, 三木晶子, 小野信昭, 大谷壽一, 澤田康文:「ケトプロフェンテープの先発医薬品と後発医薬品の使用感調査」, 第 10 回日本医薬品情報学会総会・学術大会 (札幌, 2007 年 7 月), 2007.

佐藤宏樹, 大谷壽一, 三木晶子, 堀里子, 澤田康文:「薬剤師を対象とした集合研修へのインターネット TV 会議システムの導入と評価」, 第 10 回日本医薬品情報学会総会・学術大会 (札幌, 2007 年 7 月), 2007.

篠原千枝, 佐藤宏樹, 堀里子, 大谷壽一, 大嶋俊二, 梶原良夫, 大竹康之, 澤田康文:「飲食物中に含まれる各種ポリフェノール類が CYP3A4 の機能に与える影響」, 第 17 会日本医療薬学会年会 (群馬, 2007 年 9 月), 2007.

玉木啓文, 堀里子, 佐藤宏樹, 大谷壽一, 澤田康文:「ABCG2 の輸送機能に及ぼす各種サプリメント成分の影響」, 第 17 会日本医療薬学会年会 (群馬, 2007 年 9 月), 2007.

鈴木理恵, 大谷壽一, 堀里子, 澤田康文:「男性型脱毛症治療薬フィナステリドの PK/PD モデル解析」, 第 17 会日本医療薬学会年会 (群馬, 2007 年 9 月), 2007.

永井麻理枝, 佐藤宏樹, 堀里子, 大谷壽一, 藤井知行, 武谷雄二, 澤田康文:「ヒト胎盤灌流法を用いたパロキシセチンの胎児移行特性の解析」, 第 17 会日本医療薬学会年会 (群馬, 2007 年 9 月), 2007.

住広匡謙, 堀里子, 大谷壽一, 澤田康文:「一般用医薬品に関する薬物相互作用回避のためのシステム構築と評価」, 第 17 会日本医療薬学会年会 (群馬, 2007 年 9 月), 2007.

朝比奈泰子, 堀里子, 大谷壽一, 佐倉統, 澤田康文:「健康食品情報の規格化とそれを基礎とした医療従事者への提供システムの開発」, 第 17 会日本医療薬学会年会 (群馬, 2007 年 9 月), 2007.

森千江子, 江崎明子, 関直子, 田平由美子, 澤田康文:「メーリングリストを使用したインシデント・アクシデント報告」, 第 40 回日本薬剤師会学術大会 (神戸, 2007 年 10 月), 2007.

斉田翌美, 井上綾子, 金澤彩子, 堤真理子, 石橋久, 森千江子, 勢島充, 高木淳一, 小野信昭, 堀里子, 三木晶子, 大谷壽一, 澤田康文:「別物調剤事例の要因解析とその評価」, 第 40 回日本薬剤師会学術大会 (神戸, 2007 年 10 月), 2007.

Hiroki Satoh, Satoko Hori, Hisakazu Ohtani, Tomoyuki Fujii, Yuji Taketani, and Yasufumi Sawada: "Contribution of organic anion-transporting polypeptides (OATPs) to the uptake of estrone-3-sulfate by trophoblast cells isolated from human term placenta", 8th International ISSX Meeting (Sendai, October, 2007), 2007.

須藤修・教授

研究テーマ(主たるもの)

ICTの発展とそれに伴う経済システムの変容に関する研究

北アメリカ、EU、中国、日本という 21 世グローバルシステムに大きな影響力を行使する地域経済システム (Regional Economic System) の動向を比較検討しながら、ICTの発展とそれぞれの経済構造との相互作用的な関係について、またICTの発展と経済活動のグローバル化との相互作用的な関係に関して研究を行い、ネットワークを基盤にした知識創造型社会経済システムを構想する。

センサーネットワークを用いた予防医療システムに関する研究

産・官・学の連携を促しながら、センサーネットワーク、高度データマイニング、グリッド・コンピューティングを組み合わせた ICT 基盤を用いて、糖尿病を中心とした生活習慣病の予防に関する実証実験を推進し、その実験と連動させて、産・官・学・民の共創を活性化させるセンサーネットワーク基盤地域コミュニティの形成とそのガバナンスに関する制度構想の研究を進めたいと考えている。そして、電子行政および医療情報基盤について、社会基盤としての ICT プラットフォームに関する政策科学的研究を推進する。

地球環境問題と持続可能な発展に関する研究

深刻化している地球環境破壊について検討するとともに、IT及びバイオテックの動向とネットワークを基盤にした経済活動の動向を関連させながら、環境保全型(循環型)の持続可能な地域経済発展について研究を行う。

研究業績(2007 年度)

著書等

須藤修監修・デジタルコミュニティーズ推進協議会:「市民が主役の自治リノベーション」,(1-202 ページ)ぎょうせい, 2007 年.

須藤修・小尾敏男・工藤裕子・後藤玲子:「CIO 学」,(1-220 ページ)東京大学出版会, 2007 年.

久隆浩・須藤修・加藤恵正:「ウェブの進化と新しいコミュニティ」,(1-44 ページ)兵庫自治学会, 2007 年.

須藤修:「電子政府評価委員会平成 19 年度報告書」,(1-70 ページ)電子政府評価委員会(座長:須藤修)IT新改革戦略評価専門調査会, 2007 年.

須藤修:「情報爆発時代の知識社会形成ガバナンス」,『文部科学省科学研究費補助金特定領域研究平成 19 年度成果報告書・情報爆発時代に向けた新しい IT 基盤技術の研究』(B01、1-7 ページ)喜連川優・安達淳 編, 国立情報研究所, 2007 年.

須藤修・田中秀幸・後藤玲子・中島直樹・井上創造:「知識社会経済システムの共創的発展とそのガバナンスに関する研究:オープン・イノベーションを通じた社会進化と戦略的ガバナンス」, 文部科学省科学研究費補助金特定領域研究平成 19 年度成果報告書・情報爆発時代に向けた新しい IT 基盤技術の研究』(B01-00-01、1-11 ページ)『喜連川優・安達淳 編, 国立情報研究所, 2007 年.

須藤修・田中秀幸・後藤玲子・中島直樹・井上創造:「知識社会経済システムの共創的発展とそのガバナンスに関する研究:オープン・イノベーションを通じた社会進化と戦略的ガバナンス」,『情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究』(1-99 ページ、90 ページ所収) 喜連川優・安達淳 編, 国立情報学研究所, 2007 年.

須藤修:「地球環境と市場経済」,『中国語版・市場経済』(265-280 ページ)山口重克 編, 社会科学文献出版社<中国>, 2007 年.

須藤修:「市場とネットワーク—NPOの存在意義」,『情報技術革命の射程』(205-229 ページ)SGCIM 編, 御茶ノ水書房, 2007 年.

須藤修:「ICTを用いた行政革新とCIO」,『CIO 学』(55-74 ページ)須藤修・小尾敏男・工藤裕子・後藤玲子編, 東京大学出版会, 2007 年.

須藤修・田中秀幸ほか:「IT社会」,『現代用語の基礎知識』編, (802-807 ページ)自由国民社, 2007 年.

須藤修:「新ふくおかIT戦略」, (1-41 ページ)新ふくおかIT戦略会議(委員長:須藤修) 福岡県, 2008 年.

須藤修:「オープン・イノベーションと企業通貨」,『企業通貨マーケティング』(105-108 ページ) 野村総合研究所 編, 東洋経済新報社, 2008 年.

論文等

久隆浩・須藤修・加藤恵正:「ウェブの進化と新しいコミュニケーション」,『兵庫自治会』, No.14, pp.9-17, 2007 年.

須藤修:「ICTとイノベーション—持続可能な社会発展に向けて」,『経済研究』(静岡大学)【招待論文】 , Vol.12, No.4, pp.1-18, 2007 年.

須藤修:「イノベーション基盤としての電子自治体」,『地方自治』(地方自治制度研究会), No.714, pp.2-16, 2007 年.

須藤修・後藤玲子・田中秀幸:「情報化と社会制度の構築に関する研究」,『情報処理』(社団法人情報処理学会)【招待論文】 , Vol.48, No.6<通巻 508 号>, pp.653-661, 2007 年.

須藤修:「電子自治体と地域情報基盤の新たな展開」,『都市問題研究』(都市問題研究会), Vol.59, No.10, pp.69-83, 2007 年.

須藤修:「イノベーション基盤としての電子自治体」,『地方自治』(地方自治制度研究会、2007 年 5 月号), 2-16 ページ, 2007 年.

須藤修:「ユビキタスネットと社会発展の方向」,『ユビキタスネット社会への日本の課題—ウェブ新時代を迎えて—』, 社団法人日本経済調査協議会(島田精一委員会、主査:西垣通)編 (社団法人日本経済調査協議会、2007 年 7 月)57-68 ページ, 2007 年.

Osamu Sudoh: "Designs for a New Social Architecture", Highlighting Japan, Cabinet Office, Government of Japan, September 2007, p.19, 2007 年.

須藤修:「オープン・イノベーション」,『情報学研究<学環>』第 74 号, 東京大学大学院情報学環、2008 年 3 月、i-ii ページ, 2008 年.

国際会議等

Osamu Sudoh: "Innovation and Sensor Network in The Era of info-explosion", the Microsoft Government Leaders Forum-Asia (Microsoft), pp.1-9, 2007.

Osamu Sudoh: "Community Governance and Sensor Network in The Era of Info-Explosion", Tongji University ed., Proceedings of International Symposium on Urban Governance and Community Development, Shanghai【招待論文】 , Vol.May 2007, pp.161-183, 2007.

口頭発表等

William Schneider, Jr., Lincoln Bloomfield, 川原淳平, 武田仁己, 佐藤英明, 須藤修: 「パネル討論・Japanese Strategy to guard Critical Infrastructures」, NPO セキュアなデジタル社会を推進する会主催『デジタル社会推進シンポジウム 2007』(国連大学、2007 年 4 月 12 日), 2007. 【招待講演】

須藤修: 「電子政府評価と今後の展望」, 政府『各府省情報化統括責任者連絡会議』(内閣府、2007 年 4 月 13 日), 2007.

Osamu Sudoh: “Innovation and Sensor Network in The Era of info-explosion”, Microsoft org., Government Leaders Forum-Asia 2007, China World Hotel, April 19th 2007, 2007. 【招待講演】

Jae-Yong Choung, Zhang Weiyang, Osamu Sudoh, Boo Swan Foo: “Plenary Forum : Innovation as a Driver for Sustained Growth”, Microsoft org., Government Leaders Forum---Asia 2007, China World Hotel, April 13th 2007, 2007.

Osamu Sudoh: “Community Governance and Sensor Network in The Era of Info-Explosion”, Tongji University org., International Symposium on Urban Governance and Community Development, Tongji University in Shanghai, May 24th 2007, 2007. 【招待講演】

Zhu Shanshan, E.S.Savas, Osamu Sudoh, Yoshiko Terao, Lorna Heidenheim, Zhou Xiang-hong: “Panel Interview : Urban Governance and Community Development, Tongji University org.”, International Symposium on Urban Governance and Community Development, Tongji University in Shanghai, May 25th 2007, 2007.

須藤修: 「知識社会経済システムの共創的発展とそのガバナンスに関する研究」, 『文部科学省科学研究費補助金特定領域研究平成 19 年度情報爆発 IT 基盤キックオフシンポジウム』(学術総合センター、2007 年 6 月 21 日), 2007.

須藤修: 「知識社会経済システムの共創的発展とそのガバナンスに関する研究と支援班連携」, 『文部科学省科学研究費補助金特定領域研究平成 19 年度情報爆発 IT 基盤キックオフシンポジウム』(学術総合センター、2007 年 6 月 22 日), 2007.

須藤修: 「情報システム統合と電子自治体」, 総務省自治大学校主催『合併後の市町村地域経営』(総務省自治大学校、2007 年 7 月 11 日), 2007.

須藤修: 「情報システム統合と電子自治体」, 総務省自治大学校主催『合併後の市町村地域経営』(総務省自治大学校、2007 年 7 月 11 日), 2007.

須藤修、後藤玲子、赤津雅晴: 「電子行政の評価フレームワークと電子申請の利用促進方法の分析結果」, 『平成 19 年度第 2 回電子政府評価委員会』(政府永田町合同庁舎、2007 年 7 月 26 日), 2007.

須藤修: 「電子自治体と地方行政の展開」, 総務省自治大学校講演(総務省自治大学校、2007 年 7 月 27 日), 2007.

須藤修: 「個人情報の利用と保護」, 日本社会情報学会第 22 回全国大会『ワークショップ・個人情報保護法の理念と課題』(名古屋大学、2007 年 9 月 9 日), 2007.

須藤修: 「Web based Community の創造」, 兵庫自治学会 2007 年度研究発表大会(兵庫県立大学、2007 年 9 月 29 日), 2007.

須藤修、久隆浩、加藤恵正:「パネル討論・ウェブの進化と新しいコミュニティ」, 兵庫自治学会 2007 年度研究発表大会(兵庫県立大学、2007 年 9 月 29 日), 2007.

須藤修:「情報爆発時代におけるイノベーションと社会設計」, 日本ソフトウェア科学会第 24 回全国大会(奈良先端科学技術大学院大学、2007 年 9 月 12 日)【基調講演】、2007.【招待講演】

須藤修:「電子自治体—eGov と地域活性化」, 総務省自治大学校講演会(総務省自治大学校、2007 年 10 月 25 日), 2007.

須藤修:「電子政府・電子行政が目指す社会」, 次世代電子商取引推進協議会主催『第 26 回 ECOM セミナー』(機械振興会館、2007 年 10 月 26 日), 2007.

須藤修・田中秀幸・後藤玲子:「知識社会経済システムの競争的発展とそのガバナンスに関する研究」, 文部科学省科学研究費補助特定領域研究「情報爆発時代に向けた新しい IT 基盤技術の研究」柱 B01「情報爆発時代における知識社会形成ガバナンス」研究発表会(東京大学、2007 年 10 月 27 日), 2007.

須藤修:「IT サービスと次世代電子行政サービス基盤」, ネットワーク経済フォーラム主催『ネットワーク経済フォーラム講演会』(KKR ホテル東京、2007 年 11 月 15 日), 2007.【招待講演】

須藤修:「IT サービスとイノベーション」, 2007 年度国際 CIO 学会秋季大会(早稲田大学小野講堂、2007 年 11 月 22 日), 2007.

樋口泰行、須藤修、水越尚子、吉崎正弘、小尾敏夫:「パネル討論・IT 国際競争力と CIO」, 2007 年度国際 CIO 学会秋季大会(早稲田大学小野講堂、2007 年 11 月 22 日), 2007.

須藤修:「電子自治体推進に向けた課題と対策—次世代電子行政サービス基盤」, 地方自治体情報システム研究会主催『地方自治体情報システム研究会市区町村分科会』(東京ステーションコンファレンス、2007 年 11 月 29 日)【基調講演】、2007.

須藤修:「IT サービスと次世代電子行政基盤」, 国土総合研究機構主催『LCDM 推進フォーラム設立総会記念講演会』(都市センターホテル、2008 年 1 月 16 日)【基調講演】、2008.

須藤修・田中秀幸・後藤玲子:「知識社会経済システムの競争的発展とそのガバナンスに関する研究」, 文部科学省科学研究費補助特定領域研究「情報爆発時代に向けた新しい IT 基盤技術の研究」柱 B01「情報爆発時代における知識社会形成ガバナンス」研究発表会(東京大学、2008 年 1 月 28 日), 2008.

篠塚勝正・小野由樹子・須藤修・坂村健:「ユビキタスサービスにはじまるサービスイノベーション」, 東京大学大学院情報学環 21 世紀 COE・次世代ユビキタス情報社会基盤の形成第 15 回シンポジウム『ユビキタスではじまるサービスイノベーション』(東京大学安田講堂、2008 年 2 月 4 日), 2008.

須藤修:「ネットワーク進化とタイムビジネスの必要性」, 日本社会情報学会主催『タイムビジネスの現状と展望』(中央大学駿河台記念館、2008 年 2 月 16 日)【基調講演】、2008.

須藤修:「The Next Stage of Digital Development and Risk Management」, 日本セキュリティ・マネジメント学会主催『安全とリスクテイク—第 2 回 JSSM セキュリティ公開討論会』(中央大学駿河台記念館、2008 年 2 月 24 日), 2008.【招待講演】

山口英・須藤修・辻井重男・佐々木良一・平松雄一・大井正浩:「情報社会はリスクといかに向き合うべきか」, 日本セキュリティ・マネジメント学会主催『安全とリスクテイク—第 2 回 JSSM セキュリティ公開討論会』(中央大学駿河台記念館、2008 年 2 月 24 日), 2008.

須藤修:「地方公共団体における情報セキュリティの考え方」, LASDEC :e-Learning(LASDEC、NTT 東日本)2008年2月, 2008.

須藤修・田中秀幸・後藤玲子・中島直樹・井上創造・鶴岡政子:「知識社会経済システムの共創的発展とそのガバナンスに関する研究」, 『文部科学省科学研究費補助金特定領域研究・情報爆発時代に向けた新しい IT 基盤技術の研究』(領域代表:喜連川優)平成 19 年度研究成果発表会(秋葉原 ダイビル、2008 年 3 月 4 日), 2008.

須藤修:「ITの世界動向と新ふくおかIT戦略」, 福岡県主催『新ふくおかIT戦略シンポジウム』(ホテルニューオータニ福岡、2008 年 3 月 27 日)【基調講演】、2008.

Mychelle Mowry、山本隆一、大井川和彦、須藤修:「医療・健康管理のサービスイノベーション」, 2007 年度国際CIO学会春季大会(東京大学医学部鉄門講堂、2008 年 3 月 18 日), 2008.

一般向け講演等

須藤修、泉田裕彦、佐藤直良、山下純一、今岡亮司:「パネル討論・情報化と社会資本の未来を地方から考える」, 財団法人日本建設情報総合センター主催『情報化と社会資本の未来を地方から考えるシンポジウム』(ホテルはあといん乃木坂、2007 年 5 月 28 日), 2007.

須藤修:「電子政府・電子自治体とデータ標準」, 財団法人日本建設情報総合センター主催『情報化と社会資本の未来を地方から考えるシンポジウム』(ホテルはあといん乃木坂、2007 年 5 月 28 日)【基調講演】、2007. 【招待講演】

須藤修:「情報流通と持続可能な発展」, 日本経済新聞社・奈良先端科学技術大学院大学主催『先端科学技術を駆使した環境配慮社会』(日経ホール、2007 年 6 月 25 日), 2007.

椎野孝雄、須藤修、高野守、田中隆治、土本一郎、砂原秀樹、宮崎緑:「パネル討論・先端科学技術を駆使した環境配慮社会」, 日本経済新聞社・奈良先端科学技術大学院大学主催『先端科学技術を駆使した環境配慮社会』、2007.

須藤修:「電子自治体推進に向けた課題と対策」, NEC主催『NEC自治体セミナー』(NEC 名古屋支社、2007 年 6 月 26 日)【基調講演】、2007. 【招待講演】

須藤修:「ユビキタスネット社会の未来図——地域活性化イノベーション基盤のために」, Zetta Technology 主催『Zetta Technology25 周年記念特別講演会』(新丸ビル、2007 年 6 月 15 日)【基調講演】、2007. 【招待講演】

須藤修:「Web2.0 時代の電子社会の針路」, 福島県高度情報化推進協議会、福島県、情報通信月間推進協議会、東北情報通信懇談会主催『情報通信月間特別講演会』(ホテルサンルートプラザ福島、2007 年 6 月 13 日)【基調講演】、2007. 【招待講演】

須藤修:「Open Innovation and e-Government」, 福岡県主催『第 1 回福岡県新IT戦略会議』(福岡、2007 年 9 月 25 日), 2007.

須藤修:「電子自治体推進の課題と地域活性化」, 株式会社両備システムズ主催『自治体ソリューションフェア 2007』(岡山コンベンションセンター、2007 年 9 月 5 日)【基調講演】、2007. 【招待講演】

須藤修:「個人情報保護と情報セキュリティ——ネット社会の新たなガバナンス」, 福山市主催『個人情報保護と情報セキュリティ研修会』(広島県民文化センター福山ホール、2007 年 11 月 28 日)【基調講演】、2007.

須藤修:「情報爆発とイノベーション」, 次世代産業ナビゲーターズフォーラム主催『次世代産業ナビゲーターズフォーラム講演会』(竹橋安田ビル、2007年11月13日), 2007.【招待講演】

須藤修:「ITサービスと電子政府・電子自治体連携」, マイクロソフト主催『公共パートナー・カンファレンス』(目黒雅叙園、2007年12月12日)【基調講演】、2007.

清原慶子、須藤修、福田豊、岡野貞彦、黒田かをり、古賀純一郎:「大学の役割:CSRと産学協働システムの構築」, 政策分析ネットワーク主催『第9回政策メッセ』(明治大学リバティタワー、2008年3月22日), 2008.

一般向け記事・報道等

須藤修・田中秀幸ほか:「IT社会」, 『現代用語の基礎知識』(自由国民社), 802-807ページ, 2007年.

須藤修・大山永昭・鈴木義伯・村上憲郎・池上徹彦・小尾敏彦:「イノベーションと内部統制」, 『日本経済新聞』2007年4月27日付け朝刊, 2007.

須藤修:「ICカードで地域通貨の新時代がはじまる—コミュニティ振興の可能性が拡大する」, 『月刊・石垣』第27巻第2号(日本商工会議所、2007年5月)、27-28ページ, 2007.

北川正恭・須藤修:「市民が主役の電子政府・電子自治体とは」, 須藤修監修・デジタルコミュニティーズ推進協議会編『市民が主役の自治リノベーション』(ぎょうせい、2007年6月)140-158ページ, 2007.

須藤修・松岡功:「対談・Communicationが拓く、ITの新境地」, 『Club Unisys Plus』(ユニシス)第11号(2007年7月発行), 2007.

椎野孝雄、須藤修、高野守、田中隆治、土本一郎、砂原秀樹、宮崎緑:「討論・先端科学技術を駆使した環境配慮社会」, 『日経産業新聞』2007年8月2日付け朝刊, 2007.

須藤修・島田達巳・植松浩二:「電子自治体がつくるIT社会」, 『自治日報』2007年9月21日付け, 2007.

須藤修:「どこへ向かう”e-Japan”」, 『戦略経営者』第253号(株式会社TKC、2007年11月)68-72ページ, 2007.

須藤修:「第6回ワセダ国際CIOフォーラム開催—CIOが決する国際競争力の優劣」, アスキー『アスキービジネス』(2007年11月24日), 2007.

樋口泰行・須藤修・水越尚子・吉崎正弘・小尾敏夫:「変革牽引するCIO—IT国際競争力」, 『日本経済新聞』2007年12月20日付け朝刊, 2007.

須藤修:「LCDM推進フォーラム発足—2年後データマネジメント実現」, 『建設通信新聞』2008年1月18日付け, 2008.

須藤修:「LCDM推進フォーラム発足—利用促進施策を展開」, 『日刊建設産業新聞』2008年1月18日付け, 2008.

須藤修:「福岡県がIT戦略シンポジウム」, 『天神経済新聞』2008年3月10日付け, 2008.

須藤修:「谷島宣之の目」, 『日経コンピュータ』(日経BP社)2008年3月15日号218ページ, 2008.

須藤修:「オープン・イノベーション戦略の視点を」, 『日本経済新聞』2008年3月17日付け朝刊, 2008.

須藤修:「第1回技術部会を開催—LCDM推進フォーラム本格的な活動開始」、『日刊建設産業新聞』2008年3月21日付け, 2008.

須藤修:「全国から注目されている福岡のITへの取り組み」、『九州企業特報』(2008年3月28日), 2008.

田中明彦・教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2007年度)

著書等

田中明彦、猪口孝、園田茂人、ティムール・ダダバエフ:「アジア・バロメーター 躍動するアジアの価値観」, 田中明彦、猪口孝、園田茂人、ティムール・ダダバエフ 編, 明石書店, 2007年.

田中明彦:「アジアのなかの日本」, NTT出版, 2007年.

田中明彦:「第10章 新自由主義の時代 1980年代」, 五百旗頭真 編, 有斐閣, 2008年.

論文等

田中明彦:「日本外交の勝利と課題 世論調査「アジア・バロメーター」から明らかになったアジア各国の視線」, 論座, No.3月, pp.98-103, 2007年.

Akihiko Tanaka: "Pocas perspectivas de una Corea del Norte desnuclearizada", CUADERNOS DE JAPON, pp.6-9, 2007年.

Akihiko Tanaka: "L'opinion des Asiatiques sur le Japon reste mitigee", CAHIERS DU JAPON, No.AUTOMNE, pp.39-42, 2007年.

田中明彦:「北朝鮮問題と日本外交」, 潮, No.4月, pp.60-65, 2007年.

田中明彦:「「いい顔」と「怖い顔」—二つの顔の行方」, 朝日総研レポート AIR21, No.203, pp.20-39, 2007年.

Akihiko Tanaka: "Asian Opinions: A Mixed Bag for Japan", JAPANECHO, No.6月, pp.31-34, 2007年.

田中明彦:「二十一世紀の世界システムをどう見るか」, 21世紀フォーラム 第29回「グローバル・システムと文明」研究会, No.107, pp.30-40, 2007年.

田中明彦:「日本外向的勝利と課題—興論“亜洲晴雨表”顯示的並洲各国的視線」, 越洋聚焦 日本論壇, No.7月, pp.23-26, 2007年.

Akihiko Tanaka: "INTRODUCTION", Japan's New Defence Establishment: Institutions, Capabilities, and Implications, 2007年.

Akihiko Tanaka: "The development of the ASEAN+3 framework", Advancing East Asian Regionalism, 2007年.

口頭発表等

田中明彦:「これからの国際情勢と日本の対応」, 第49期九州生産性大学経営講座, 2007.

田中明彦:“上海協力機構—日米欧とのパートナーシップは可能か”, 上海協力機構—日米欧とのパートナーシップは可能か, 2007.

田中明彦:「21世紀の世界システムと日本」, 平成19年度「第1回市議会議員特別セミナー」, 2007.

田中明彦:“Regional Realities: Focus on Asia”, Regional Dynamics, 2007.【招待講演】

田中明彦:“Japan-India Partnership in the Era of Asian Regional Integration”, Japan-India Partnership in the Era of Asian Regional Integration, 2007.

田中明彦:“東南アジアの民主主義と信頼”, 日本学術会議政治学分野民主主義と信頼分科会, 2007.

田中明彦:“2007年度 東南アジアを分析する”, アジア・バロメーター, 2007.

田中明彦:“Trends in Japan and their Implications for ASEAN”, International Conference on Japanese Relations with ASEAN since the Fukuda Doctrine, 2007.【招待講演】

田中明彦:“Community Building after the Second Joint Statement on East Asian Cooperation”, The Second Japan-US-Asia Dialogue: an East Asian Community and the US, 2008.

田中明彦:“Meeting a Rising China”, Meeting a Rising China, 2008.

田中明彦:“Japanese Domestic Politics and East Asian Policy”, The 8th Taiwan-Japan Research Forum: Taiwan, Japan and East Asia, 2008.

田中明彦:“Legal and Constitutional Issues of Japan”, Constitutional revision in Japan Research Project, 2008.【招待講演】

田中明彦:“Legal and Constitutional Issues of Japan”, Constitutional revision in Japan Research Project, 2008.【招待講演】

田中明彦:「2008年の国際情勢と日本」, 社団法人クラブ関西, 2008.【招待講演】

一般向け記事・報道等

田中明彦:「首相演説と外相演説の不思議な不整合」, FORESIGHT, No.3 月, 2007 年.

田中明彦:「潮流 07 日本の「孤立」はありえない」, 論座, No.4 月, pp.22-23, 2007 年.

田中明彦:「靖国は本当に中国の外交「カード」なのか」, FORESIGHT, No.5 月, 2007 年.

田中明彦:「潮流 07 「主張する外交」を説明する時期がきた」, 論座, No.5 月, pp.22-23, 2007 年.

田中明彦:「毎日フォーラム政策座談会 どこへ向かう? 安倍外交 対米偏重からの脱却路線も」, 毎日フォーラム, No.2007 年 5 月, 2007 年.

田中明彦:「潮流 07 いつ作った? 東アジア青年団大交流計画」, 論座, pp.20-21, 2007 年.

田中明彦:「言うは易く行は難き「価値観外交」」, FORESIGHT, No.7 月, 2007 年.

田中明彦:「潮流 07 凧のときにこそ必要な外交の「布石」と「戦略」」, 論座, No.7 月, pp.20-21, 2007 年.

田中明彦:「潮流 07 画期的だった首相の「首相温暖化」対策演説」, 論座, No.8 月, pp.20-21, 2007 年.

田中明彦:「悪いことではない「分割政府」の出現」, FORESIGHT, No.9 月, 2007 年.

田中明彦:「潮流 07 「空飛ぶモンキー」が示す歴史的アジアの統一」, 論座, No.9 月, pp.20-21, 2007 年.

田中明彦:「いまこそ第2の福田ドクトリンを」, FORESIGHT, No.11 月, pp.27, 2007 年.

田中明彦:「『第 19 回アジア・太平洋賞』受賞作の講評」, アジア時報, No.11 月, pp.10-11 頁, 2007 年.

田中明彦:「日本の指導力を世界に示せ 直面する日本外交の課題」, imidas SPECIAL 時事&トレンド 解体新書, pp.22-23 頁, 2007 年.

田中明彦:「注意すべき歴史議論の「底流」と「タイム・ラグ」」, FORESIGHT, No.2008 年 1 月号, pp.27 頁, 2007 年.【査読有】

田中明彦:「国際ニュースのギモン 東アジアサミットの役割とは?」, Jica, pp.30-31, 2008 年.

田中明彦:「外交は「トライラテリズム」の時代に」, FORESIGHT, No.1 月, 2008 年.

田中明彦:「開戦時の賛成論 振り返ると」, 朝日新聞, 2007.

田中明彦:「検証 憲法第 9 条 「解釈」展開 安保に障害 第 2 項の削除まず必要」, 読売新聞, 2007.

Akihiko Tanaka: 「EAST ASIA SYMPOSIUM」, THE JAPAN TIMES, 2007.

田中明彦:「外交文書公開 日本企業関与は必然的」, 宮崎日日新聞, 2007.

田中明彦:「9・11から6年 テロとの戦いの現在 上 非国家主体が重要な存在に」, 公明新聞, 2007.

田中明彦:「9・11から6年 テロとの戦いの現在 下 世界は国家間協調の流れに」, 公明新聞, 2007.

田中明彦:「新首相の課題 環境・対北 外交の軸に」, 読売新聞, 2007.

田中明彦:「私の視点-ワイド- 与党協力、外交では可能」, 朝日新聞, 2007.

田中明彦:「背水の陣 山積課題どう対処 福田内閣 有識者座談会 逆転国会知恵必要 民主との論議注目」, 読売新聞, 2007.

田中明彦:「大連立識者に聞く 可能性の模索は当然」, 読売新聞, 2007.

田中明彦:「第 19 回アジア・太平洋賞 激動の時代冷徹に書く 圧倒的迫力毛沢東との関係」, 毎日新聞, 2007.

田中明彦:「どうする防衛省 1 政治が監視すべき」, 静岡新聞, 2007.

田中明彦:「東アジア情報社会コース誕生」—東大を様々な言葉が飛び交うコスモポリタンに—, 学環学府, 2008.

田中明彦:「ほんを語る 大河小説的な外交史」, 山陰中央新報, 2008.

田中明彦:「コラム」, 中央日報, 2008.

田中明彦:「論点 アジアの中の日本を考える 遠近の両地域と結べ」, 毎日新聞, 2008.

田中明彦:「アジア共通の関心をもとう」, 中央日報, 2008.

西垣通・教授

研究テーマ(主たるもの)

基礎情報学

生命情報から社会情報、機械情報にわたる情報学の基礎的な検討。マトウラーナ／ヴァレラのオートポイエーシス論、ホフマイヤーの生命記号論、ルーマンの理論社会学、グレイザーズフェルドのラディカル構成主義などを批判的に摂取しつつ、情報メディア思想を理論的に検討する。

インターネット社会論

基礎情報学の応用として、21世紀インターネット社会における諸問題(企業組織、オンライン共同体、情報倫理、サイバースペース心理など)を理論的かつ実践的に検討する。

研究業績(2007年度)

著書等

西垣通:「科学に生きる」, 茂木健一郎、西垣通、原田憲一、佐倉統 編, リブリオ出版, 2007年.

西垣通:「ウェブ社会をどう生きるか」, 岩波書店, 2007年.

西垣通:「情報倫理の思想」, 西垣通、竹之内禎 編, NTT出版, 2007年.

西垣通:「サイバーペット／ウェブ生命情報論」, 千倉書房, 2008年.

口頭発表等

西垣通:「ユビキタスネットとWeb2.0」, 東京工科大学オープンメディアリソース2007シンポジウム, 2007.【招待講演】

一般向け講演等

西垣通:「ウェブ時代の生命的組織」, 日本ユニシス・テクニカルシンポジウム, 2008.【招待講演】

一般向け記事・報道等

西垣通:「生命的な情報組織」, 日本経済新聞, 2008.

橋元良明・教授

研究テーマ(主たるもの)

情報行動に関する社会心理学的分析

メディア利用やコミュニケーション行動などが、社会変化に伴ってどのような変容を遂げているのか、そうした情報行動のパターンを規定する要因は何か、等について社会心理学的観点から実証的に分析している

メディアの効果、とくに青少年に及ぼす影響の研究

テレビやインターネットなどが社会生活や世論形成過程、青少年の精神的発達に及ぼす影響、携帯電話などの新しいコミュニケーション・ツールが対人関係、家族関係に及ぼす影響などを調査等の実証的手法で分析している。

言語的コミュニケーションの了解・伝達過程、変容に関する研究

言語的コミュニケーションに関し、おもに語用論的視点から了解・伝達構造を研究している。また、日本人の言語行動が、社会システムの変化とどのようにかかわっているか、あるいはマスメディアや新しいメディア・ツールの普及によってどのような影響をこうむっているのかに関する研究をおこなっている。

研究業績(2007 年度)

著書等

橋元良明(編著):「メディア・コミュニケーション学」, 大修館書店, 2008 年.

論文等

橋元良明:「オンライン・コミュニティの日韓比較」, 日本バーチャルリアリティ学会誌, Vol.13, No.1, pp.30-34, 2008 年.【査読有】

橋元良明:「社会的スキルと親子関係、諸メディアの利用、友人関係、対他信頼度」, ユビキタス社会のケータイ利用と親子関係, 21 世紀 COE プログラム「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」「ケータイ調査チーム」平成 19 年度研究成果報告書, 2007 年.

橋元良明:「小中学生のメディア環境」, 今、テレビは子どもたちにどう見られているか?—小中学生 36 人インタビュー & アンケート調査—報告書, 放送倫理・番組向上機構「放送と青少年に関する委員会」報告書, 2007 年.

橋元良明:「多メディア時代における青少年のテレビ視聴」, 第 5 回情報化社会と青少年に関する意識調査報告書, 2007 年.

橋元良明:「学校と若者のメディア環境」, 自治体チャンネルプラス, 2008 年.

口頭発表等

橋元良明:「望ましい人間関係の作り方~ケータイ社会にどう対応すべきか」, 海老名市教育委員会講演, 2007.【招待講演】

橋元良明:「オンライン・コミュニティの日韓比較」, 日本バーチャルリアリティ学会 サイバースペースと仮想都市研究会 10 周年記念シンポジウム 招待講演, 2007.【招待講演】

一般向け記事・報道等

橋元良明:「今、テレビは子どもたちにどう見られているか?」, 月刊民放, pp.28-32, 2007 年.

一般:「若者は面倒くさがり?」, 日本経済新聞, 2008.

濱田純一・教授

研究テーマ(主たるもの)

情報法にかかわる研究

個別テーマとして近年取り組んできたのが、情報化ないしインターネットがもたらす法制度の変容に関する研究である。情報に関する法は、通常の物財に関する法と異なり、複製や移転の容易さなどの特質から法的にも固有の扱いを必要としている。また情報は、表現の自由や情報をめぐる自由・権利などの精神的諸価値と密接に結びついており、特有の法体系を構成している。こうした諸特質に基礎を置く情報法の体系構成を目指して、個別テーマについての研究を蓄積してきている。

情報政策にかかわる研究

情報政策は、メディアや通信システムをはじめ、情報技術政策や文化政策にも及ぶ射程の広い政策領域である。実務上個別的にはさまざまな情報政策が、地方や国のレベルで策定されてきたが、必ずしも総合的な体系性をもって行われてきたわけではない。これらの諸政策に総合的な展望を与え、またこうした政策に固有の政策形成過程や政策手法を分析することを研究の目標としており、「情報政策論」の授業と連動させながら、個別事例の検討を通じて、情報政策に関する研究の体系化に取り組んでいる。

社会情報学ないし情報学にかかわる研究

社会情報学あるいは情報学は、いま発展途上にある学問領域であり、学際性を共通の特質とする。これまで、基本的に社会科学の領域に足場を置く社会情報学の研究を主にすすめ、とりわけ情報を社会的文脈の中に置くことの意義を分析しつつ成果を積み重ねてきた。情報学は、より広く自然科学分野にも及ぶ学問領域であるが、たとえば生命や遺伝の仕組みなどは社会システムの構造とアナロジー可能な側面を有しており、情報という視点からそうした共通の枠組みを引き出すことにより、諸学問分野の連携を生み出す研究をすすめている。

研究業績(2007年度)

原島博・教授

研究テーマ(主たるもの)

ヒューマンコミュニケーションメディア

コンピュータと映像・音響技術を結び付けたメディア技術が広く普及し、人とコンピュータの関係は大きく変わりつつある。これに伴い、感性情報の処理、現実世界と仮想世界の境界に挑む複合現実感技術、空間を対象とした情報処理・アート・デザイン・インタフェース、人に優しいメディア環境などの話題が注目されるようになってきた。この研究では、その目指す方向、技術課題、メディア社会に与える光と影の問題を論ずるとともに、人間主体の「ヒューマンコミュニケーションメディア」へ至る道を総合的に検討している。

次世代インタラクティブメディアと感性空間の創出

ヒューマンコミュニケーションメディアにおいて、人とコンピュータをより密接な関係として構造化することは重要である。また、そのための技術課題も多く存在する。本研究では、より人間に近い関係にあるインタラクティブメディア環境の実現に向けて、インタフェースやコンテンツといったハードおよびソフト技術の融合と新たな感性空間の創出を目指している。

顔画像処理と感性コミュニケーション

人の顔・表情や身振り・手振りは、感性的な対人コミュニケーションの基本であり、その研究は将来の情報システムや通信システムにおけるヒューマンインタフェースの設計に大きなインパクトを与えるものと予想される。本研究では、画像処理並びにコンピュータグラフィックスの手法を駆使して、顔・表情画像や身振り・手振り画像の動的な分析と合成を行い、併せて、各種の心理学実験を通じて、顔・表情や身振り・手振りによる感性コミュニケーションモデルを構築することを目的としている。また、心理学者などとの共同研究を通じて「顔学」なる学際的な新分野の開拓を目指している。

研究業績(2007年度)

著書等

原島 博(共同執筆):「私が選んだ一品(鼠の巻)」グッドデザイン賞審査委員コメント集⑦(たかが絵本、でもその裏には…)」, 日本産業デザイン振興会編 編, 阪急コミュニケーションズ, 2008年.

論文等

原島 博:「未来の歴史書に、今はどう書かれるか」, 電子情報通信学会誌, Vol.90, No.9, pp.740 -- 741, 2007年.

原島 博:「夜目・遠目・笠のうち……」, 日本顔学会誌, Vol.7, No.1, pp.1 -- 2, 2007年.

原島 博:「特集／顔の科学 なぜ顔学なのかー日本顔学会の試みー」, 理大 科学フォーラム, Vol.24, No.12, pp.2 -- 6, 2007年.

原島 博, 土井 美和子:「情報技術が支えるアートとコンテンツの世界ー編集にあたってー」, 情報処理学会誌, Vol.48, No.12, pp.1318, 2007年.

原島 博:「トップは語る: 原島博超臨場感コミュニケーション産学官フォーラム会長に聞く」, 映像情報メディア学会誌, Vol.62, No.1, pp.巻頭 1 -- 9, 2008年.

中洲 俊信, チャンドラシリ N.P., 苗村 健, 原島 博:「対話型似顔絵作成システム NIGAO」, 画像ラボ(日本工業出版), Vol.19, No.1, pp.25 -- 28, 2008年.【査読有】

口頭発表等

原島 博:「ユニバーサルコミュニケーションの時代へ」, 第1回ユニバーサルコミュニケーション国際シンポジウム基調講演, 2007.【招待講演】

中洲 俊信, 苗村 健, 崔 昌石, 原島 博:「似顔絵作成における誇張の個人差に関する基礎検討」, 第12回日本顔学会大会, 2007.

原島 博:「コンピュータ画像処理で探る顔の秘密」, 第11回 Future of Radiology 研究所, 2007.【招待講演】

合原 一幸, 下條 信輔, 原島 博:「デジタルコンテンツは科学となるか」, 科学技術振興機構 CREST シンポジウムパネル, 2007.【招待講演】

中洲 俊信, 苗村 健, 崔 昌石, 原島 博:「似顔絵作成における経験者および初心者の誇張表現に関する考察」, 信学技報, 2008.

坂根 徹夫, 鈴木 康広, 久納 鏡子, 原島 博:「メディアとテクノロジーの融合ー何を生み出したのか, 何を生み出すのか」, 第11回文化庁メディア芸術祭協賛シンポジウム, 2008.【招待講演】

一般向け講演等

原島 博:「サイエンスプロデュース」, プロデュース能力研究会講演, 2007.

原島 博:「表現される顔」, 公開シンポジウム「顔と文化」シリーズ第 2 回基調講演, 2007.

原島 博:「情報技術は文化を目指すーコンテンツが主役となる時代ー」, 日本 SGI20 周年記念カンファレンス記念講演, 2007.

原島 博:「ICT 分野の研究開発人材育成」, 情報通信月間特別企画シンポジウムーICT 技術人材育成の現状と課題ー, 2007.

原島 博:「自分の顔と他人の顔ーコンピュータで探る顔の秘密」, 日本アンチエイジング歯科学会講座講演, 2007.

原島 博:「超臨場感メディアがめざすものー一体感メディアを超えてー」, 立体映像産業推進協議会 4 周年記念講演, 2007.

原島 博:「いい顔がいいまちをつくる」, 文京区制 60 周年記念事業・東京大学創立 130 周年記念事業, 文の京大いなる学びシリーズ第 1 回講演, 2007.

原島 博:「今宵もいい顔で…コンピュータで探るいい顔の秘密」, JST イノベーションプラン宮城仙台サイエンスサロン特別講演, 2007.

原島 博, 藤幡 正樹, 苅宿 俊文, 土佐 直道, 辻 政博, 横内 克之:「がんばれ図工の時間! はみだすときめき」, 第 46 回東京都図画工作研究大会中央大会シンポジウム, 2007.

原島 博:「時代を見る目ーなぜいま情報技術なのか?ー」, 科学技術と経済の会第 11 期代表者懇談会講演, 2007.

茂木 健一郎, 川口 洋一郎, 原島 博:「芸術と科学はどう結びつくのか?」, 文京区制 60 周年記念事業・東京大学創立 130 年, 文の京大いなる学びシリーズ第 2 回サイエンスサロン, 2007.

原島 博:「いい顔とは何か?ーコンピュータで探る顔の秘密」, 日本陶道会陶宮発表記念講演会特別講演, 2008.

藤幡 正樹, 季里, 原島 博:「感じる, 考える, 表現する」, ∞のこどもたち展トークサロン, 2008.

佐伯 胖, 原島 博, 辻 政博, 横内 克之:「「教える」から「学ぶ」へ, さらにその先に来るもの」, ∞のこどもたち展シンポジウム, 2008.

福岡 俊弘, 高橋 洋一, 森山 雅勝, 稲船 敬二, 原島 博:「成功するネットワークコミュニティのデザインとは?」, 東京大学創立 130 周年記念事業, 情報学環公開シンポジウム, 2008.

一般向け記事・報道等

原島 博:「がんばれ! 図工の時間」, 毎日新聞, 2007.

原島 博:「特集ワイド 2 人の「王子」なぜ人気?」, 毎日新聞, 2007.

原島 博:「顔の対称性と魅力」, NHK 解体新ショー, 2007.

原島 博:「暮らしサプライズ 顔の輪郭決め手 似顔絵にヒント そっくりさん見つけた」, 日本経済新聞, 2008.

原島 博:「ニセモノ社会 表面飾る政治家」, 朝日新聞(朝刊), 2008.

原島 博:「アニメ, マンガで科学への夢を一進化遂げる SF 作品」, 日刊工業新聞, 2008.

馬場章・教授

研究テーマ(主たるもの)

日本近世経済史

日本近世の度量衡をはじめとする計量制度、三貨を中心とする貨幣制度を文献資料と現物資料の連関に注目して実証的に解明する。

デジタルアーカイブズ科学

文化資源のデジタル化の理論と方法について研究する。

コンテンツ創造科学

デジタルコンテンツ、とりわけ電子的なゲームの面白さの解明とそれを構造化した制作理論の構築、およびシリアスゲームについて研究する。

研究業績(2007 年度)

著書等

Baba Akira: ““Situated Play: Proceedings of the Third International Conference of the Digital Games Research Association (DiGRA)””, Baba Akira 編, Japax, 2007 年.

論文等

研谷紀夫 津田光弘 馬場章:「文化資源統合アーカイブにおける時空間情報の活用とその課題」, 情報処理学会・人文科学とコンピュータ研究会シンポジウム 2007 論文集, pp.147-154, 2007 年.【査読有】

研谷紀夫・馬場章:「文化資源オントロジーの構築とその活用」, 情報知識学会誌, Vol.17, No.2, pp.129-134, 2007 年.【査読有】

馬場章・研谷紀夫:「海外におけるデジタルアーカイブの動向」, 映像情報メディア学会誌, Vol.161, No.11, pp.50-53, 2007 年.

国際会議等

NorioTogiya,Baba Akira: “Constructing Digital Archive of Architectural Material with ontology”, International Cultural Heritage Meeting 2007, 2007.【査読有】

Tomiyasu Shinsuke, Akira Baba: “Practice and Effect of Educational Uses of Commercial Online Games in History Classes”, DiGRA 2007, 2007.【査読有】

口頭発表等

馬場章:「国立国会図書館 憲政資料室 勉強会」, 国立国会図書館 憲政資料室 勉強会, 2007.

馬場章:「オンラインゲームの教育目的利用のための研究」, 領域シンポジウム「表現の未来へ」ーデジタルメディア作品の制作を支援する基盤技術ー, 2007.

Hichibe Nobushige, Akira Baba: ““Serious Games” in JAPAN”, Serious Games Summit 2008, 2008.【招待講演】

Tomiyasu Shunsuke, Akira Baba: “Educational Use of Commercial Online Games in History Classes: Practice and Effects”, Serious Games Summit 2008, 2008.【招待講演】

Baba Akira: “The results in Japan: Time Travel to the Medieval Ages – Historical Classes in Japanese High School-”, Symposium of “Encounter of online games and education”, 2008.【招待講演】

一般向け講演等

馬場 章:「ジャックが愛した海 唐津」, 映画「Blue Symphony～ジャックマイヨールの愛した海 唐津」試写会・シンポジウム, 2007.【招待講演】

馬場 章:「GDC08 に見るゲーム研究の現状と展望」, GDC08 報告会 in 関西, 2007.【招待講演】

飯沢耕太郎・馬場章・広川智基:「第二回アーティストトーク」, 「本郷零時 3 分」展 併催イベント アーティストトーク, 2007.【招待講演】

一般向け記事・報道等

馬場 章:「教育におけるゲームの効用は大きい」, 社団法人コンピュータエンターテインメント協会, 2007.

馬場 章:「研究室へ行こう!」, CS デジタル放送『ベネッセチャンネル』, 2007.

馬場 章:「デジタルゲームテクノロジーに関する学会「DiGRA2007」が開幕」, CNET Japan, 2007.

馬場 章:「国際的な学術会議 DiGRA2007 が開催。ファミコンの父と『パックマン』のクリエイターによる記念対談が実施」, ファミ通.com, 2007.

馬場 章:「「遊びをせんとや生まれけむ」--生みの親が語るファミコン成功の秘訣」, CNET Japan, 2007.

馬場 章:「パックマン生みの親に学ぶ、惹き込むゲームの作り方」, CNET JAPAN, 2007.

馬場 章:「DiGRA 基調講演「日本のゲーム産業史」特別レポート」, GAME Watch, 2007.

馬場 章:「DS で勉強をする 学術的検証が後押し」, 東京大学新聞, 2007.

馬場 章:「「良い影響にも注目を」 ゲーム研究に成果 東大で国際会議」, 朝日新聞、asahi.com, 2007.

馬場 章:「ゲームソフトから学ぶ 実用目的に活用の動き」, 読売新聞、YOMIURI ONLINE, 2007.

馬場 章:「知識が広がる! シリアスゲーム」, CS デジタル放送『日テレ G+ おとな館』, 2007.

馬場 章:「“Serious Games Summit”レポート:シリアスゲーム情勢を通して見る、世界の中の日本」, GameWatch, 2008.

馬場 章:「ゲームは子供に悪なのか?」, ファミ通 DS+Wii 2008 年 4 月号増刊ゲームスコ×ゲームスメ, 2008.

吉見俊哉・教授

研究テーマ(主たるもの)

戦争とメディア:両世界大戦期におけるプロパガンダと情報流通に関する歴史社会学的研究

本研究は、20世紀における戦争とメディアの緊密な関係を視野に収めつつ、情報学環が社会情報研究所の時代から受け継いできた重要な2つの戦時プロパガンダ関係の資料のコレクションについてのデジタル・アーカイブの構築を大きな目的としている。これらの2つのコレクションとは、①第一次大戦宣伝ポスター約660枚、及び、②内閣情報部の満州・フィリピンにおける宣伝資料の2つであり、いずれも日本国内では例を見ない貴重なものである。吉見研究室において組織された研究チームは、社会情報研究所時代から、これらの資料の修復と保存状態の改善に努め、上記資料を広く公開すべくデジタル・アーカイブの構築を進めてきた。このような基礎作業の上に立って、本研究では、これらの資料を関連諸資料と結びつけ、それらについて総合的に分析する学際的研究を、アーカイブそのものに組み込む仕方で展開している。

20世紀後半の東アジアの都市大衆文化における「アメリカ」の受容と反発

本研究は、冷戦期を通じた東アジアでのアメリカ的価値の受容や反発について、文化的な次元から比較歴史研究を進めるものである。その際、とりわけ米国の軍事的・経済的・文化的影響が大きな意味を持った日本本土、沖縄、韓国、台湾、フィリピンなどに焦点を当て、映画、テレビ、マンガ、音楽などから都市空間や基地文化までの大衆文化のレベルでの変化を、一方では政治的な次元と文化-メディア的次元の関係を精密に見据えながら、他方では東アジア全域を射程に収めて明らかにする。とりわけ本研究では、戦後日本及び東アジアの大衆意識のなかでの「アメリカ」の存在、アメリカ的文化商品の受容の過程を、韓国、台湾、フィリピンなどを中心に東南アジアまでの横断的な広がりの中で、また文化と軍事・経済的な覇権の構造を結びつけて明らかにしようとしている。

多言語対話型のデジタル百科全書の構築を通じた情報知の構造化

本研究は、デジタル・アーカイブの諸技術を基盤にしつつ、情報知を中核にした新しい多言語対話型の百科全書の構築とその大学教育のなかでの応用的展開を目指している。すなわちまず、情報学環教員が中核的に関与してきた『情報学事典』(弘文堂)、『社会情報学ハンドブック』(東京大学出版会)などの出版物のデジタルデータを、百科全書構築の実験素材として利用し、これらのデータを基礎にユビキタス社会における大学教育のモデルを示す知識形成実験を進めている。同時に、英国の Theory, Culture and Society 誌を中心とした New Encyclopedia Project、及び National Singapore 大学、Seoul National 大学などと協力しつつ、情報・言語の基礎理論、知覚情報、ジャーナリズム、メディア文化、情報行動、情報経済、情報法・政策などの中核的な諸領域についての知の対話的生成とその構造化を可能にするプラットフォーム作りを進めている。

研究業績(2007年度)

著書等

吉見俊哉:「親米と反米」, 岩波書店, 2007年.

暦本純一・教授

研究テーマ(主たるもの)

Human Computer Interaction

Ubiquitous Computing

Reality Sensing

研究業績(2007 年度)

論文等

暦本純一: 「WiFi 位置認識技術とロケーションアウェア・コンピューティングへの応用」, ヒューマンインタフェース学会誌, Vol.10, No.1, pp.21-26, 2007 年. 【査読有】

暦本純一, 味八木崇: 「WHEN-becomes-WHERE: WiFi セルフロギングによる継続的位置履歴取得とその応用」, 情報処理学会インタラクシオン 2007, 2007 年. 【査読有】

国際会議等

Jun Rekimoto, Takashi Miyaki, Takaaki Ishizawa: " LifeTag: WiFi-based Continuous Location Logging for Life Pattern Analysis ", 3rd International Symposium on Location- and Context- Awareness (LOCA2007), 2007. 【査読有】

Jun Rekimoto, Takashi Miyaki, Takaaki Ishizawa: "Personalized City by Continuous Location Logging", ACM SIGCHI 2007, 2007. 【査読有】

Jun Rekimoto, Takashi Miyaki, Takaaki Ishizawa: " LifeTag: A WiFi-based Location Life-Logging Device", ACM UIST 2007, 2007. 【査読有】

口頭発表等

Jun Rekimoto: "Toward Cybernetic-City: Sensoromy and Location Aware Computing", Geolocation and its social issues, Seminar TECOG, Fondation Maison des Sciences de l, 2007. 【招待講演】

暦本純一: 「記憶のテクノロジーによる拡張」, 日本認知科学会, 2007. 【招待講演】

暦本純一: 「Sensoromy: 実世界と融合するネットワーク」, 日本ソフトウェア科学会データベースと Web 情報システムに関するシンポジウム(DBWeb2007), 2007. 【招待講演】

暦本純一: 「テクノロジーによる記憶の拡張は可能か?」, MEMORY+, 2007. 【招待講演】

Jun Rekimoto: "From Folksonomy to Sensoromy: Convergence of Real World Activities and Online Space", International Symposium on Applications and the Internet (SAINT2007), 2007. 【招待講演】

一般向け講演等

暦本純一: 「ネットワーク 2.0」, New Context Conference, 2007. 【招待講演】

一般向け記事・報道等

暦本純一: 「ネットワーク技術先端研」, NETWORKWORLD, 2007.

暦本純一: 「マンスリーデジタルラボ」, TBS ニュースバード, 2007.

暦本純一: 「五感インタフェース」, 日経エレクトロニクス, 2007.

暦本純一: 「インタラクシオン研究とインタラクシオンデザインの接点」, AXIS, 2007.

暦本純一: 「サイバーワールド: 今どこにいるかが伝わる, わかる!」, ニュートン, 2007.

石川徹・准教授

研究テーマ(主たるもの)

空間の認知, 環境の心理

空間とは、その中で生活・行動する人間にとって、身近でありかつ欠くことのできない存在ですが、われわれはいったいどのように周りの空間をとらえているのでしょうか。私たちが周辺についての知識を獲得し、頭の中に記憶し、その知識を利用する一連のプロセスと、得られた知識(“頭の中の地図”)の構造について、とくに興味をもって研究をおこなっています。また、私たちはどのような景観・景色を好ましいと思うのかなどといった、空間における人間の心理的・感情的側面も、重要な研究課題のひとつです。

情報技術と空間情報の表現・視覚化

視覚化という方法は、空間的(および非空間的)現象を表現するのに適した方法ですが、その一方で、地図やグラフの理解はそう単純ではないこともわかっています。また、認知や学習のスタイル・好みにも個人差があり、たとえば、視覚的な方法を好む人と、言語的な方法を好む人がいます。このような利用者の属性や目的に応じて効果的に空間の情報を提示する方法はあるのでしょうか。とくに、ユビキタスネットワークを代表とする新しい情報技術とそれを利用する人間の認知・行動の問題(ユビキタス都市における空間行動)に関心をもっています。

空間的思考とビジュアライゼーション

空間的思考は多くの科学の分野に共通するテーマですが、なかでも地球科学においては、さまざまなスケールに渡る高度で複雑な空間的思考を必要とする問題や作業が多くあります。その一方で、そのような高い空間能力を必要とする問題や作業を苦手とする学生が多いこともわかっており、最近では、学生の理解を助けることを目的に、3D やアニメーションなどを用いた教育方法が試みられています。このような空間的思考と各種ビジュアライゼーション手法の有効性の問題について研究を進めたいと考えています。

研究業績(2007 年度)

論文等

Toru Ishikawa, Hiromichi Fujiwara, Osamu Imai, Atsuyuki Okabe: “Wayfinding with a GPS-based mobile navigation system: A comparison with maps and direct experience”, *Journal of Environmental Psychology*, Vol.28, No.1, pp.74-82, 2008 年。【査読有】

Toru Ishikawa: “Ubiquitous computing and spatial information: Toward a ubiquitous spatial information society”, 3rd Asia Construction IT Round-Table Meeting Abstract, http://www.jacic.or.jp/acit/3rd-meeting_abstract.pdf, 2007 年。

国際会議等

Toru Ishikawa, Anthony G. Barnston, Kim A. Kastens, Patrick Louchouart, Chester F. Ropelewski: “Understanding and use of climate forecast maps by prospective policy makers: An empirical study”, annual meeting of the Association of American Geographers, 2007.

口頭発表等

石川 徹:「地球科学と空間的思考」, 地球惑星システム科学セミナー, 2007.

Toru Ishikawa: “Ubiquitous computing and spatial information: Toward a ubiquitous spatial information society”, 3rd Asia Construction IT Round-Table Meeting, 2007.

Toru Ishikawa: "Topics in environmental psychology and their implications for urban housing research", special seminar at the Institute of Geographical Sciences and Natural Resources Research, Chinese Academy of Science, 2007.

石崎雅人・准教授

研究テーマ(主たるもの)

コミュニケーションにおける同調現象に関する研究

社会の基礎である共同行為の解明に向けて、共同注視・模倣・同調などの現象について研究がすすめられている。本テーマでは、共同行為の中でもコミュニケーションの同調現象に焦点をあてて、行為主体が、言語・音声・身体動作により、どのように行為の調整を行っているかについて検討し、新しいコミュニケーションのモデルを構築することを目指す。

多人数インタラクションにおける話題構造に関する研究

社会において立場の異なる複数の人々の間で合意を作っていくためにパブリックアセスメントなどさまざまな試みがなされている。しかし、多くの人たちが合意を作っていく過程について、実証的に明らかにした研究は少ないのが現状である。本テーマでは、この過程の解明の第一歩として、多くの人たちがかかわるインタラクションにおいて、参加者が話題がどのように遷移させていくかについて明らかにすることを目的とする。

専門家－非専門家コミュニケーション技術に関する研究

専門家が非専門家にどのようにして知識を伝えるかが大きな問題になっている。この問題を解決するためには、知識をわかりやすく伝えるだけでなく、問題をかかえる非専門家が納得するためのコミュニケーション技術が必要である。本テーマでは、具体的に医師と患者とのコミュニケーションに焦点を絞り、その技術の解明を行う。

研究業績(2007 年度)

著書等

石崎雅人:「コミュニケーションの原動力は「理解への意志」にある」, ベルシステム 24 総合研究所編 編, ベルシステム 24, 2007 年.

論文等

伝康晴、石崎雅人、深代千之:「会話における音声・身体動作の同調傾向:遅延条件下での姿勢の揺れの分析」, 日本認知科学会第 24 回発表大会論文集, pp.426~429, 2007 年.【査読有】

片桐恭弘、松坂要佐、坊農真弓、伝康晴、高梨克也、榎本美香、石崎雅人:「多人数合意形成課題における非言語的反応の類別と位置について」, 社会言語科学第 20 回研究大会発表論文集, pp.238~241, 2007 年.【査読有】

橋元良明、石崎雅人、小笠原盛浩、木村忠正、石井健一、金相美、金仁培:「新聞記事にみるインターネット・イメージの日中韓比較」, 東京大学大学院情報学環 情報学研究 調査研究編, Vol.24, pp.49~77, 2007 年.【査読有】

伊東乾・准教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2007 年度)

著書等

團藤 重光, 伊東 乾:「反骨のコツ(朝日新書 69)」, 朝日新聞社, 2007 年.

伊東乾:「ケダモノダモノ—調教と傷心のアメリカ」, 集英社, 2007 年.

北田暁大・准教授

研究テーマ(主たるもの)

日本メディア史の実証的研究

広告、映画、新聞など近代のコミュニケーション文化において重要な役割を果たしてきたメディアを、歴史社会学的な手法で分析している。その成果を公刊したのものとして、『広告の誕生』(2000 年、岩波書店)、『<意味>への抗い』(2004 年、せりか書房)などがある。

若者のコミュニケーション研究

現代若者たちのコミュニケーションの変容を、「保守化」傾向や「バックラッシュ」などの現象とあわせ、メディアの果たす役割に着目しつつ分析している。その成果を公刊したのものとして、『広告都市・東京』(2002 年、廣済堂出版)、『嗚う日本の「ナショナリズム」』(2005 年、NHK出版)などがある。

理論社会学、コミュニケーション理論についての基礎的研究

「行為の同定問題」、「行為(者)責任の生成メカニズム」など社会学基礎論にかかわるテーマについて、政治哲学、倫理学的行為論なども射程に入れつつ、考察を加えている。その成果を公刊したのものとして『責任と正義』(2003 年勁草書房)がある。

研究業績(2007 年度)

著書等

北田暁大・大多和直樹他:「子どもとニューメディア」, 北田暁大・大多和直樹 編, 日本図書センター, 2007 年.

論文等

北田暁大:「研究動向:分野別研究動向(理論)領域の媒介」, 社会学評論, Vol.58, No.1, pp.78-93, 2007 年.

口頭発表等

北田暁大:「/ナショナリズム/バックラッシュ<若者の保守化>という問題機制をめぐって」, 日本社会学会, 2007.【招待講演】

一般向け講演等

北田暁大他:「国家・暴力・ナショナリズム」, 「思想地図」創刊記念シンポジウム, 2008.

一般向け記事・報道等

北田暁大:「人間工学をめぐって 2」, トリップパー, 2007 年.

倉田博史・准教授

研究テーマ(主たるもの)

Euclid 距離行列の順序構造

p 次元空間に n 個の点が与えられたとき、各点間の距離を $n \times n$ 非負対称行列の形で表現出来ることは明らかである。この逆が成立するとき、すなわち、 $n \times n$ 非負対称行列が与えられたときに、それを相互距離として持つ n 個の点が適当な次元の Euclid 空間に存在するとき、その非負対称行列を Euclid 距離行列と呼ぶ。統計学では、多次元尺度構成法などで用いられる概念である。本研究では、Euclid 距離行列の順序構造を調べている。近著については、業績欄を参照のこと。

多変量確率分布の Principal Points

平均は、確率分布を1つの点で要約する量として最も自然なものであろう。平均は最小2乗値でもある。より一般に、確率分布を複数個(k 個)の点で要約しようとするならば、どのような点の集合が選ばれるべきか。この問いに対する一つの答として、principal points (主点)があり、これは最小2乗原理を応用することによって得られる。本研究では、複数個の確率分布の混合として得られる多変量確率分布の principal points の性質を調べている。最近の研究として、H. Kurata "On principal points for location mixtures of spherically symmetric distributions" (Journal of Statistical Planning and Inference, 近刊)と H. Kurata, T. Hoshino and Y. Fujikoshi "Allometric extension model for conditional distributions"(Journal of Multivariate Analysis, 近刊)がある。

群不変性統計理論

群論特に変換群や不変積分の概念を統計学に応用することにより、不変検定、共変推定、確率不等式などの分野を中心に数多くの有用な事実が導かれてきた。これらは群不変性統計理論と呼ばれる。本研究では、「群によって誘導される順序(group induced ordering)」の概念を用いて、ある種の相関行列の性質を議論している。H. Kurata, "Inequalities associated with intra-inter class correlation matrices" (Journal of Multivariate Analysis, 2004), H. Kurata, "One-sided tests for independence of seemingly unrelated regression equations" (Journal of Multivariate Analysis, 2004).

研究業績(2007 年度)

論文等

Hiroshi KURATA and Tadashi SAKUMA: "A group majorization ordering for Euclidean distance matrices", Linear Algebra and its Applications, Vol.420, pp.586-595, 2007 年. 【査読有】

国際会議等

Yasunori FUJIKOSHI and Hiroshi KURATA: "Information criterion for some independence structures", New Trends in Psychometrics, 2007. 【査読有】

口頭発表等

藤越康祝:「ある種の条件付独立構造に対する情報量基準」, 統計関連学会連合大会, 2007.

越塚登・准教授

研究テーマ(主たるもの)

Ubiquitous Computing

Sensor Network

Operating System

研究業績(2007 年度)

著書等

越塚登: 「ユビキタスコンピューティングが日本の未来を拓く: 遍在する情報社会基盤の意義と展望」(交感する科学: ビジネスを深化させる最先端コミュニケーション研究), ベルシステム 24 総合研究所編, BELLSYSTEM24, 2007 年.

越塚登: 「ユビキタス ID センターとその活動」(2008 RFID 技術ガイドブック, Electronic Journal 別冊), 電子ジャーナル編集部編, 電子ジャーナル, 2007 年.

論文等

T. Nakagawa, G. Ono, R. Fujiwara, T. Norimatsu, T. Terada, M. Miyazaki, K. Suzuki, K. Yano, Y. Ogata, A. Maeki, S. Kobayashi, N. Koshizuka, and K. Sakamura: "1-cc Computer: Cross-Layer Integration with UWB-IR Communication and Locationing", IEEE Journal of Solid-State Circuits, Vol.42, No.4, 2007 年. 【査読有】

T. Norimatsu, R. Fujiwara, M. Kokubo, M. Miyazaki, A. Maeki, Y. Ogata, S. Kobayashi, N. Koshizuka, K. Sakamura: "A UWB-IR Transmitter With Digitally Controlled Pulse Generator", IEEE Journal of Solid-State Circuits, Vol.42, No.6, pp.1300-1309, 2007 年. 【査読有】

坂村健, 越塚登: 「ユビキタス情報社会基盤構築に向けて」, 情報メディア学会, 2007 年.

R. Fujiwara, A. Maeki, K. Mizugaki, G. Ono, T. Nakagawa, T. Norimatsu, M. Kokubo, M. Miyazaki, Y. Okuma, M. Hayakawa, S. Kobayashi, N. Koshizuka, K. Sakamura: "0.7-GHz-bandwidth DS-UWB-IR System for Low-power Wireless Communications", IEICE Transactions on Communications, Vol.E91-B, No.2, pp.518-526, 2008 年. 【査読有】

小野豪一, 中川樹生, 藤原亮介, 乗松崇泰, 寺田崇秀, 宮崎祐行, 鈴木敬, 矢野和男, 緒方祐次, 前木陽, 小林真輔, 越塚登, 坂村健: 「3.4nW/bps 通信, 22cm 測位を実現する 1cc センサノード」, 電子情報通信学会, 平成 19 年 7 月集積回路(ICD)研究会, ICD2007-37-68, 2007 年.

寺田崇秀, 藤原亮介, 小野豪一, 乗松崇泰, 中川樹生, 水垣健一, 宮崎祐行, 鈴木敬, 矢野和男, 前木陽, 緒方祐次, 小林真輔, 越塚登, 坂村健: 「間欠動作型 CMOS UWB-IR 受信機アナログフロントエンド」, 電子情報通信学会 平成 19 年 7 月集積回路(ICD)研究会, ICD2007-37-68, 2007 年.

紙名哲生, 小林真輔, 越塚登, 坂村健: 「汎用的ユビキタス基盤による場所識別子に基づくキャンパスツアー」, FIT2007 第 6 回情報科学技術フォーラム 一般講演論文集 第 4 分冊, 2007 年.

藤原亮介, 水垣健一, 中川樹生, 宮崎祐行, 前木陽, 緒方祐次, 小林真輔, 越塚登, 坂村健: 「高精度 TOA 推定 UWB 受信器の開発」, 電子情報通信学会ソサイエティ大会, B-20-10, 2007 年.

水垣健一, 藤原亮介, 中川樹生, 宮崎祐行, 前木陽, 緒方祐次, 小林真輔, 越塚登, 坂村健: 「マルチパス環境下での UWB 高精度測位システム」, 電子情報通信学会ソサイエティ大会, B-20-9, 2007 年.

寺田崇秀, 藤原亮介, 小野豪一, 乗松崇泰, 中川樹生, 水垣健一, 宮崎祐行, 鈴木敬, 矢野和男, 前木陽, 緒方祐次, 小林真輔, 越塚登, 坂村健: 「間欠動作型低消費電力 UWB-IR 受信機アナログフロントエンド」, 電気学会「超集積化・環境 CMOS デバイス調査専門委員会」, 「高度ワイヤレスユビキタス社会を支える超高速デバイス・回路技術調査専門委員会」合同委員会, 2007 年.

久保寺祐一, 鷗坂 智則, 小林 真輔, 越塚 登, 坂村 健: 「パノラマ写真による歩行者ナビゲーションサポートシステムの提案と実装」, 電子情報通信学会・IN 研究専門委員会・技術研究報告 IN Vol. 107, No. 314, IN 研究賞, 2007 年.

国際会議等

T. Kamina, T. Aoki, Y. Eto, N. Koshizuka, J. Yamada, and K. Sakamura: "Verifying Identifier-Authenticity in Ubiquitous Computing Environment", 2007 IEEE International Symposium on Ubiquitous Computing and Intelligence (UCI-07), 2007. 【査読有】

G. Ono, T. Nakagawa, R. Fujiwara, T. Norimatsu, T. Terada, M. Miyazaki, K. Suzuki, K. Yano, Y. Ogata, A. Maeki, S. Kobayashi, N. Koshizuka, K. Sakamura: "1-cc Computer: Cross-Layer Integration with 3.4-nW/bps Link and 22-cm Locationing", 20th IEEE Symposium on VLSI Circuits, Vol.9-4, 2007. 【査読有】

T. Terada, R. Fujiwara, G. Ono, T. Norimatsu, T. Nakagawa, K. Mizugaki, M. Miyazaki, K. Suzuki, K. Yano, A. Maeki, Y. Ogata, S. Kobayashi, N. Koshizuka, K. Sakamura: "A CMOS UWB-IR Receiver Analog Front End with Intermittent Operation", 20th IEEE Symposium on VLSI Circuits, Vol.9-2, 2007. 【査読有】

Masahiro Bessho, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "A Pedestrian Navigation System Using Multiple Space-Identifying Devices Based On A Unique Identifier Framework", International Confererence on Machine Learning and Cybernetics (ICML) 2007, pp.2100-2105, 2007. 【査読有】

T. Nakagawa, T. Matsuura, E. Imaizumi, J. Kudoh, G. Ono, M. Miyazaki, A. Maeki, Y. Ogata, S. Kobayashi, N. Koshizuka, K. Sakamura: "1-GHz Input Bandwidth 6-bit Under-Sampling A/D Converter for UWB-IR Receiver", 33rd European Solid-State Circuits Conference 2007, 2007. 【査読有】

R. Fujiwara, K. Mizugaki, G. Ono, T. Nakagawa, T. Norimatsu, T. Terada, M. Miyazaki, A. Maeki, Y. Ogata, S. Kobayashi, N. Koshizuka, K. Sakamura: "Accurate TOA Estimating UWB-IR Receiver for Ranging/Positioning System in Multi-path Environment", 2007 IEEE International Conference on Ultra-Wideband, 2007. 【査読有】

T. Nakagawa, M. Miyazaki, G. Ono, R. Fujiwara, T. Norimatsu, T. Terada, A. Maeki, Y. Ogata, S. Kobayashi, N. Koshizuka, K. Sakamura: "1-cc Computer using UWB-IR for Wireless Sensor Network", 13th Asia and South Pacific Design Automation Conference (ASP-DAC, pp.392, 2008. 【査読有】

Masahiro Bessho, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "A Space-Identifying Ubiquitous Infrastructure and its Application for Tour-Guiding Services", 23rd Annual ACM Symposium on Applied Computing, 2008. 【査読有】

口頭発表等

Noboru Koshizuka: "uicode: Real-world Identification Scheme for Internet of the Things and Places", 2008 EU-Japan Cooperation Forum on ICT Research, 2007. 【招待講演】

越塚登: 「ユビキタス情報社会基盤の構築にむけて(各論)」, 第六回情報メディア学会研究大会, 2007. 【招待講演】

越塚登: 「『自律移動支援』からみた情報社会」, 関東地区視覚障害教育研究会, 2007. 【招待講演】

越塚登:「ITRON, T-Engine, T-Kernel のこれから」, 2008 年度 ITRON/T-Kernel オープンセミナー, トロン協会, 2007. 【招待講演】

Noboru Koshizuka: “Networked ID/Ubiquitous Computing in Japan”, ITU-T FG-IdM, 2007. 【招待講演】

Noboru Koshizuka: 「Ubiquitous: How Ubiquitous ID Realize the “Ubiquitous Computing Society”」, 2007 Taiwan RFID Summit, 2007. 【招待講演】

越塚登: 「ネットワーク型 ID (NID) の標準化」, マルチメディア推進フォーラム PART 410「次世代ネットワーク (NGN) における新しい ID サービス」, 2007. 【招待講演】

Noboru Koshizuka: “Multimedia Delivery Services Triggered by Object and Places in the Real World”, ITU-T NGN Workshop “Multimedia in NGN”, 2007.

越塚登: 「ユビキタス ID 技術を用いた、食品トレーサビリティシステム」, 食品トレーサビリティ公開講座 (2007 年度東京会場) —食品トレーサビリティの原理と応用—, 2007.

Noboru Koshizuka: “ucode: An Efficient Tag-based Location Identification System for Ubiquitous Geographic Information”, ISO/TC 211 Standards in Action Workshop, 2007.

一般向け講演等

越塚登: 「ユビキタス ID 技術が創るユビキタス社会」, ワイヤレス・テクノロジー・パーク (WTP) 2007, 2007. 【招待講演】

越塚登: 「すすむ UID の実用化」, 第2回 RFID ソリューション Expo., 2007. 【招待講演】

越塚登: 「ユビキタス ID センターの現状と動向～次世代ユビキタス情報インフラを目指して～」, e4c link, 2007. 【招待講演】

越塚登: 「YRP ユビキタス・ネットワークング研究所の研究成果」, 情報端末フェスティバル 2007, JEITA, 2007. 【招待講演】

越塚登: 「パネルセッション: 人と地域を結ぶ電子タグの高度利活用社会」, 電子タグ高度利活用技術に関する研究開発発表会, 2007. 【招待講演】

越塚登: 「ユビキタス技術が築くユニバーサル社会」, 「ユビキタス技術で拓くユニバーサルなくまもと」シンポジウム, 2007. 【招待講演】

越塚登: 「UCR によるユビキタス情報基盤の構築とその応用 —アジア規模のコンテキストウェア型国際ユビキタス情報基盤を目指して—」, ユビキタスネットワークングシンポジウム 2007, 2007.

越塚登: 「ucode と UCR のすべて」, TRONSHOW 2008, 2007.

越塚登: 「トロン技術者認定試験」, TRONSHOW 2008, 2007.

越塚登: 「24 万人のための
組込みリアルタイム教育を目指して
—教材、認定試験制度、講習プログラム、海外拠点—」, TRONSHOW 2008, 2007.

越塚登: 「ユビキタス空間基盤協議会活動報告 (インフラWG)」, TRONSHOW 2008, 2007.

越塚登:「ユビキタス技術による
建設共通パスシステム」, TRONSHOW 2008, 2007.

越塚登:「ユビキタス時代の情報端末」, JEITA 情報端末部会, 2008.【招待講演】

越塚登:「ユビキタス技術による
建設共通パスシステム」, 建設共通パスシンポジウム, 2008.

越塚登:「ユビキタス技術の実際と展望」, 第 55 回全国消防技術者会議, 2008.【招待講演】

一般向け記事・報道等

越塚登:「食の安心・安全とユビキタス技術」, 日経サイエンス, 第 37 巻, 第 13 号, 2007 年.

越塚登:「ユビキタス・コンピューティング」, 新建築住宅特集 262, 2008 年.

佐藤洋一・准教授

研究テーマ(主たるもの)

時系列フィルタと識別器の統合による人物三次元追跡手法の提案

従来の画像を手掛かりとした時系列フィルタによる人物追跡では, 色ヒストグラムや輪郭の類似性など, 比較的単純な画像特徴を利用するものが多く, 照明変動や複雑背景下における人物追跡では必ずしも十分ではなかった. 本研究では, 画像から人物の顔を検出する AdaBoost 学習に基づく識別器を, 時系列フィルタの枠組みに統合し, 頑健かつ高精度に人物頭部を追跡する手法を提案した. 本手法では, 複数の識別器を人物とカメラとの関係に基づいて適応的に用いることで, 頭部の向きを変えつつ移動する人物を追跡できる点の特徴としている. 視野を共有した複数のカメラを用い, 人物頭部を三次元追跡する実験により, 本手法の有効性を確認した.

拡散光源を用いた物体の見えの標本化

任意光源環境下における物体の 見えは周波数領域で定義される部分空間を用いて精度良く表現できることが従来研究により示されている. この部分空間は, 任意照明下での顔認識や画像合成の研究分野において有効に利用されてきた. しかしながら, 複雑な形状や反射特性を持つ実物体を対象とした場合, 部分空間を張る基底画像を準備することは容易ではない. 本研究では, 点光源ではなく面積を持った拡散光源を用いて物体表面の見えを観察することにより, 物体表面の反射特性の周波数帯域に制限をかけて不十分なサンプリングに起因するエイリアシングの問題を回避して基底画像を獲得する手法を提案する. 拡散光源の利用により, 複雑な反射特性を持つ物体表面に対しても, 物体表面の持つ周波数帯域に左右されず, 球面調和関数のサンプリング定理に基づき基底画像を獲得することが可能となる.

人間の視覚特性を考慮した投影画像の光学的補正

実世界内のさまざまな場所にプロジェクタで画像を投影するとき, 不均一な反射特性を持つ被投影面や環境光などの影響により, 正しい色で表示可能な画像のコントラストが制限されてしまうという問題がある. これに対して本研究では, 観測者に知覚されにくいような色成分と輝度成分の変動を積極的に利用して, よりコントラストの高い画像を表示することを可能にする手法を提案する. 提案手法では, 画素ごとに, 原画像の色成分を厳密に表示可能な輝度の範囲を求めたのち, 人間の視覚特性に関するモデルに基づいて, 色成分と輝度成分が許容しうる誤差を計算する. こうして得られた各画素の輝度範囲, および, 色成分と輝度成分の許容誤差を考慮し, かつ, 原画像から観測画像への変換が隣接画素間で過度に変化しないようにして, 観測画像

のコントラストを最大化するような光学的補正を行う。本稿では、提案手法のアルゴリズムを説明し、さまざまな被投影面を用いた実験により提案手法の有効性を示す。

研究業績(2007 年度)

論文等

Tatsuya Suzuki, Shinsuke Iwasaki, Yoshinori Kobayashi, Yoichi Sato, and Akihiro Sugimoto: "Incorporating environmental models for improving vision-based tracking of people", *Systems and Computers in Japan*, Vol.Vol. 38, No. No. 2, pp.1592-1600, 2007 年.【査読有】

マークアシュダウン,佐藤いまり,岡部孝弘,佐藤洋一:「人間の視覚特性を考慮した投影画像の光学的補正」, 電子情報通信学会論文誌, Vol.D-II, Vol. J90-D, No.No. 8, pp.pp. 2115-2125, 2007 年.【査読有】

小林貴訓,杉村大輔,関真規人,平澤宏祐,鈴木直彦,鹿毛裕史,佐藤洋一,杉本晃宏:「パーティクルフィルタとカスケード型識別器の統合による人物三次元追跡」, 電子情報通信学会論文誌, Vol.D-II, Vol. J90-D, No.No. 8, pp.pp. 2049-2059, 2007 年.【査読有】

小野泰弘,岡部孝弘,佐藤洋一:「低解像度画像からの視線方向推定:カーネル多重線形モデルによる個人差への対応」, 電子情報通信学会論文誌, Vol.D-II, Vol. J90-D, No.No. 8, pp.pp. 2212-2222, 2007 年.【査読有】

熊野史朗,大塚和弘,大和淳司,前田英作,佐藤洋一:「変動輝度テンプレートを用いた頭部姿勢変動に頑健な確率的表情認識手法」, 情報科学技術レターズ, Vol.Vol. 6, pp.pp.215-218, 2007 年.【査読有】

Imari Sato, Takahiro Okabe, and Yoichi Sato: "Appearance sampling of real objects for variable illumination", *International Journal of Computer Vision*, Vol.Vol. 75, No.No. 1, pp.pp.29-48, 2007 年.【査読有】

Jonathan Sahagun, Takahiro Okabe, and Yoichi Sato: "Tracking people in crowds by feature point cluster analysis based on spatial and frequency domain cues", 情報処理学会コンピュータビジョンとイメージメディア研究会, 2006-CVIM-157-29, 2007 年.

長谷川信幸,鈴木直彦,藤野陽三,水野裕介,佐藤洋一:「画像を用いた人物動線データの解析による行動理解の試み ~小規模店舗を例として」, 第 35 回土木計画学研究発表会(春大会), 2007 年.

菅野裕介,佐藤洋一:「顔変形を伴う 3 次元頭部姿勢の単眼推定」, 画像の認識・理解シンポジウム (MIRU2007), pp.311-317, 2007 年.【査読有】

杉村大輔,小林貴訓,佐藤洋一,杉本晃宏:「行動履歴に基づいた環境属性の自動構築を伴う三次元人物追跡」, 画像の認識・理解シンポジウム (MIRU2007), pp.405-411, 2007 年.【査読有】

岡部孝弘,佐藤いまり,Qiong Yu,佐藤洋一:「照明変化に伴う輝度変化の類似度に基づく物体形状復元」, 画像の認識・理解シンポジウム (MIRU2007), pp.333-339, 2007 年.【査読有】

木谷クリス真実,佐藤洋一,杉本晃宏:「映像に基づく人物行動の文法学習」, 画像の認識・理解シンポジウム (MIRU2007), pp.149-155, 2007 年.【査読有】

Yuyu Liu,Yoichi Sato: "Talking speaker segmentation using audiovisual correlation", 画像の認識・理解シンポジウム (MIRU2007), pp.95-101, 2007 年.【査読有】

熊野史朗,大塚和弘,大和淳司,前田英作,佐藤洋一:「変動輝度テンプレートを用いた頭部姿勢変動に頑健な表情認識手法」, 画像の認識・理解シンポジウム (MIRU2007), pp.1259-1264, 2007 年.【査読有】

岡部孝弘,佐藤洋一:「近接点光源は未較正照度差ステレオにおける形状復元の不定性を解決するか?」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2007), pp.881-886, インタラクティブセッション優秀賞, 2007年.【査読有】

小林貴訓,杉村大輔,関真規人,平澤宏祐,鈴木直彦,鹿毛裕史,佐藤洋一,杉本晃宏:「分散カメラとレーザ測域センサの統合によるエリア内人物追跡」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2007), pp.839-844, 2007年.【査読有】

熊野史朗,大塚和弘,大和淳司,前田英作,佐藤洋一:「表情認識のための変動輝度テンプレートとその頭部姿勢変動に対する頑健性の一検討」, 情報処理学会コンピュータビジョンとイメージメディア研究会, 2007-CVIM-160-24, pp.145-152, 2007年.

堀口研一,熊野史朗,山口大助,佐藤洋一,須田義大,鈴木高宏:「ドライバの頭部姿勢及び自転車情報を用いた脇見状態推定手法」, 自動車技術会 2007年秋季大会予稿集, No. 110-7, 2007年.【査読有】

堀口研一,熊野史朗,山口大助,佐藤洋一,須田義大,鈴木高宏:「運転状況を考慮した脇見推定手法」, ITSシンポジウム 2007, 2007年.【査読有】

国際会議等

Kris M. Kitani, Yoichi Sato and Akihiro Sugimoto: "Recovering the Basic Structure of Human Activities From a Video-Based Symbol String", IEEE Workshop on Motion and Video Computing (WMVC 2007), 2007.【査読有】

Imari Sato, Takahiro Okabe, Qiong Yu, Yoichi Sato: "Shape Reconstruction Based on Similarity in Radiance Changes under Varying Illumination", IEEE Int'l Conf. Computer Vision (ICCV 2007), 2007.【査読有】

Yusuke Sugano, Yoichi Sato: "Person-Independent Monocular Tracking of Face and Facial Actions with Multilinear Models", IEEE International Workshop on Analysis and Modeling of Faces and Gestures (AMFG2007), 2007.【査読有】

Hideki Koike, Shintaro Kajiwara, Kentaro Fukuchi, Yoichi Sato: "Information Layout and Interaction on Virtual and Real Rotary Tables", IEEE International Workshop on Horizontal Interactive Human-Computer Systems (Tabletop2007), pp.95-102, 2007.【査読有】

Naohiko Suzuki, Kosuke Hirasawa, Kenichi Tanaka, Yoshinori Kobayashi, Yoichi Sato: "Learning Motion Patterns and Anomaly Detection by Human Trajectory Analysis", IEEE Int. Conf. Systems, Man and Cybernetics (SMC2007), 2007.【査読有】

Sotaro Tsukizawa, Kenji Oka, Kensuke Maruya, Yoichi Sato: "Eye-gaze detection for driver monitoring", 14th World Congress on Intelligent Transport System, 2007.【査読有】

Shiro Kumano, Kazuhiro Otsuka, Junji Yamato, Eisaku Maeda, Yoichi Sato: "Pose-Invariant Facial Expression Recognition using Variable-Intensity Templates", Asian Conference on Computer Vision (ACCV2007), pp.324-334, 2007.【査読有】

Gabriel Pablo Nava, Yoichi Sato, Shinichi Sakamoto, Yosuke Yasuda: "In situ estimation of acoustic impedance on the surfaces of realistic interiors: An inverse approach", The 154th Meeting of Acoustical Society of America, 2007.【査読有】

Yoichi Sato: "Viewing Behavior Analysis for Personalized Video Browsing", IJARC/ACCV Joint International Symposium on Computer Vision, 2007.

口頭発表等

Yoichi Sato: "Manifold-based Photometric Stereo", Peking University, 3D Vision Computing and Robotics Group seminar, 2007. 【招待講演】

Yoichi Sato: "Manifold-based photometric stereo", Tsinghua University, Institute of Human Computer Interaction and Media Integration seminar, 2007. 【招待講演】

佐藤洋一: 「分散センサ統合による人物追跡と監視カメラ映像解析への応用」, ビジョン技術の実用化ワークショップ ViEW2007, 2007. 【招待講演】

七丈直弘・准教授

研究テーマ(主たるもの)

知識形成プロセスの分析

企業等においては、組織を単位として知識生産がおこなわれていくが、現在では組織間でのコラボレーションによる知識生産の効率化が重要視されてきている。特にR&Dに焦点を当て、研究者が果たす知識生産における2つの側面(生産と媒介)を定量的に求め、知識生産に与える影響を解析する。

コンテンツ分野における能力形成プロセスの分析

コンテンツ分野においては、突出した才能をもった個人が生産物の品質を大きく規定すると考えられてきた。しかし、個人の能力形成のマイクロ分析を進めることにより、個人が置かれた環境が持つ効果(embeddedness)が定量的にわかりつつある。本テーマでは、才能をもつに至った個人の能力形成プロセスの分析を行い、制度面での含意を得ることを目標とする。

研究業績(2007 年度)

著書等

七丈直弘・馬場靖憲: 「緊密な連携が大学の科学研究に与える影響」, 馬場靖憲、後藤晃 編, 東京大学出版会, 2007 年.

論文等

七丈直弘、馬場靖憲: 「イノベーションの創発ネットワーク: 光触媒におけるコミュニティ形成とその機能」, 数理科学, Vol.46, No.537, pp.78-83, 2007 年.

国際会議等

Yasunori Baba and Naohiro Shichijo: "The Role of Core Researchers for Increasing Firms' R&D Productivity: the Evidence of University-Industry Collaboration in Science-based Industry", DRUID Summer Conference 2007, 2007. 【査読有】

七丈 直弘: "コンテンツ市場の国際化とアジア圏での人材育成の可能性", 中日韓三国における大衆文化の交流と影響, 2007. 【査読有】

口頭発表等

小関珠音、七丈直弘、馬場靖憲: 「有機 EL 分野におけるイノベーション・プロセスの計量的検証に関する考察」, 日本知財学会, 2007.

小関珠音、七丈直弘、馬場靖憲:「有機 EL に関する知の軌跡から見るイノベーションへの投資」, 研究・技術計画学会第 22 回年次学術大会, 2007.

久保友香, 七丈直弘, 馬場靖憲:「フランスのファッション企業におけるデザイナーを中心としたクラフト的生産体制」, 研究・技術計画学会第 22 回年次学術大会, 2007.

Simon Liu, 七丈直弘, 馬場靖憲: “知識スピルオーバーと企業の立地選好”, 研究・技術計画学会第 22 回年次学術大会, 2007.

久保友香, 七丈直弘, 馬場靖憲:「日本のアニメーションスタジオにおけるクラフト的生産体制技術導入が分業体制に与える影響の歴史的考察—」, 研究・技術計画学会第 22 回年次学術大会, 2007.

宮脇啓透, 七丈直弘, 馬場靖憲:「特許からみた科学技術知識の反応・拡散機構の分析」, 研究・技術計画学会第 22 回年次学術大会, 2007.

松野将宏, 七丈直弘:「日本版 LLP を活用した技術移転」, 研究・技術計画学会第 22 回年次学術大会, 2007.

七丈直弘, 馬場靖憲:「サイエンス型産業での産学連携の効果の定量的分析」, 研究・技術計画学会第 22 回年次学術大会, 2007.

七丈直弘, 大井修一, 中島一人, 馬場靖憲:「特許・論文と質問票調査を用いた大学教員の産学連携・研究活動の定量的分析」, 研究・技術計画学会第 22 回年次学術大会, 2007.

馬場靖憲、七丈直弘:「光触媒分野における研究開発～特許と科学論文の利用～」, 光触媒工業会平成 19 年度第 2 回技術研究会, 2007.【招待講演】

鈴木高宏・准教授

研究テーマ(主たるもの)

超柔軟マニピュレータに関する研究

本研究では、従来の弾性の存在を前提とした柔軟系モデルでは扱えない、より柔軟な非弾性的柔軟系の運動を解析し、その特性を利用して新たなマニピュレーションの可能性を拓くことを目的としている。このような系を超柔軟系と呼んでいるが、例えばひもや糸、ワイヤー、テザー、ファイバー等のような要素はその例として考えられ、これらを利用することで従来より格段に軽量かつコンパクトな機構が実現できる。こうした超柔軟系を用いた従来にない新たなロボットマニピュレーションについて研究を行っている。

メカトロニック人工食道の開発

食道のただ一つの重要な機能は蠕動による咀嚼物の嚥下である。そのため、これは機械的機構で代替することが可能であると考えられ、それにより食道癌手術等における多大な外科的侵襲を低減することができる。本研究では、スクリーン搬送機構を利用したメカトロニック人工食道の開発を行っている。現在、試作実験機において、様々な粘度の対象物について搬送実験を行い、その有効性を確認している。

人間-自動車-交通流系の動的挙動と制御

CCR サステナブル ITS プロジェクト(sITS)に参加し、その 1 テーマとして研究を行っている。ITS 環境の普及段階においては、自動運転車と人間の運転する手動運転車の混在が予想される。本研究では、そうした混在交通流の動的挙動を解析し、安全性や効率を向上させる制御法を提案する。

研究業績(2007 年度)

論文等

1) N. A. WEBSTER, T. SUZUKI, and M. KUWAHARA: "Tactical lane change model with sequential maneuver planning", *Transportmetrica*, Vol.4, No.1, pp.63-78, 2008 年.【査読有】

国際会議等

2) N. A. Webster, T. Suzuki, E. Chung and M. Kuwahara: "Tactical Driver Lane Change Model Using Forward Search", *Transportation Research Board Annual Meeting*, 2007.【査読有】

1) T. Suzuki, Y. Ebihara and T. Suzuki: "Casting Control for Hyper-Flexible Manipulation", 2007 IEEE International Conference on Robotics and Automation(ICRA' 07), 2007.【査読有】

口頭発表等

結城, 近藤, 鈴木, 國井:「マイクロ交通シミュレータを用いた免疫ネットワークによる協調回避システムの評価に関する研究」, 日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス部門講演会(ROBOMECH' 07), 2007.

軍司, 木下, 鈴木:「超柔軟 3 次元ディスプレイの動的シミュレーション」, 日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス部門講演会(ROBOMECH' 07), 2007.

木下, 軍司, 鈴木:「重力下3R 劣駆動マニピュレータの動的安定化制御」, 日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス部門講演会(ROBOMECH' 07), 2007.

鈴木高宏:「RT(Robotics Technology)と社会」, 科学技術社会論学会第 6 回年次研究大会 WS「社会が最先端の科学と出会うとき—何が必要なのか?」, 2007.【招待講演】

鈴木高宏:「非線形ロボティクス ~超柔軟ロボティクスから ITS まで~」, 第16回システム情報科学研究会, 2007.【招待講演】

鈴木高宏:「システムインテグレーションとしての ITS とマルチスケール交通制御」, 第 8 回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(SI2007), 2007.【招待講演】

森, 結城, 河合, 貴志, 鈴木, 國井, 桑原:「マクロ・マイクロ両面からのドライバーモデル同定に基づく交通挙動シミュレーション」, 第 8 回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(SI2007), 2007.

軍司, 木下, 鈴木:「動力学シミュレーションを用いた超柔軟 3 次元ディスプレイのパターン設計」, 第 8 回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(SI2007), 2007.

木下, 軍司, 鈴木:「重力下3R劣駆動マニピュレータの位置制御」, 第 8 回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(SI2007), 2007.

結城, 森, 近藤, 鈴木, 國井, 桑原:「マイクロ・マクロ両視点からの高速道における車線変更モデルの同定と検証」, 第 6 回 ITS シンポジウム 2007, 2007.

一般向け講演等

鈴木高宏:「統合 ITS プラットフォームのための人間運転行動モデルとそれによる次世代運転支援・交通制御」, ITS シンポジウム in 福岡, 2007.【招待講演】

田中秀幸・准教授

研究テーマ(主たるもの)

産業技術のイノベーション・システムに関する研究

技術的限界に直面した産業においては、それを乗り越えるために不確実性の高い技術の方向性を明らかにするような焦点化が求められる。市場メカニズムは、そのような焦点化の機能が全般的に弱いために、従来は、国家のイニシアティブによって、企業の境界を越えたイノベーションの取り組みが進められてきた。しかしながら、近年、最先端の技術限界を突破するためには、必ずしもドメスティックな企業間協力だけでは対応が困難になってきており、それに伴い、国家でもなければ企業でもない非営利の中間組織がグローバルに展開することで、新たなイノベーション・モデル形成する例が生まれつつある。i 以上のような問題意識の下、産業技術のイノベーションにおける、市場、国家、企業、そして中間組織の機能などについての研究を進めている。

情報セキュリティ・マネジメントのインセンティブ設計に関する研究

情報システムのネットワーク化の進展によって、情報セキュリティは相互依存性が高まっている。相互依存的な環境下では、ある主体の情報セキュリティ水準は自らの管理努力だけではなく、ネットワークで接続された相手方のセキュリティ・マネジメントの影響も受けるようになる。こうした相互依存性は、外部効果を通じて市場の失敗をもたらすことになり、何らかの制度的な手当が必要となる。このような情報セキュリティを巡る組織の境界の変容に対して、いかなるインセンティブ設計があり得るのかなどについての研究を進めている。

地域情報化に関する研究

現在進められている電子自治体の取り組みは、行政内部の業務プロセスを抜本的に変えるのみならず、従来、行政の外側にあった主体との関係にも大きな変化をもたらす。具体的には、地域住民、地域企業やNP〇との相互関係を深めることで、新たな地域づくりが実現しつつある。電子自治体を契機として展開する地域情報化の中で、行政の境界がどのように変容し、いかなる制度が求められるかなどについての研究を行っている。

研究業績(2007 年度)

論文等

上野景真、田中秀幸:「企業の情報セキュリティ投資に対する市場評価の実証分析」, 社会・経済システム, No.28, pp.33-39, 2007 年。【査読有】

上野景真,田中秀幸:「情報セキュリティ投資と企業価値に関する実証分析:インタangible・アセットとしての情報セキュリティ」, 経済政策ジャーナル, Vol.14, No.2, pp.43-46, 2007 年。【査読有】

Wei Liu,Hideyuki Tanaka,Kanta Matsuura: "Empirical-Analysis Methodology for Information-Security Investment and Its Application to Reliable Survey of Japanese Firms", IPSJ Journal, Vol.48, No.9, pp.3204-3218, 2007 年。【査読有】

須藤修,後藤玲子,田中秀幸:「情報化と社会制度の構築に関する研究」, 情報処理, Vol.48, No.6, pp.653-661, 2007 年。【査読有】

田中秀幸,近藤勝則:「立地地域が情報通信ネットワークの利用に与える影響:日本企業を対象とした実証分析」, 東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究, No.74, pp.1-20, 2007 年。

田中秀幸:「内発的な経済発展に向けての地域情報化に関する研究」, 「第 14 回社会情報システム学シンポジウム」学術講演論文集, pp.1-10, 2007 年。

田中秀幸:「企業の立地地域が情報セキュリティ対策に及ぼす影響に関する研究」, 第 70 回情報処理学会全国大会講演論文集, pp.5-76,5-77, 2007 年。

岡本健志,田中秀幸:「地域情報化施策とネットワーク形成に関する研究」,第70回情報処理学会全国大会講演論文集, pp.5-77, 5-78, 2007年.

田中秀幸:「企業の立地地域と情報セキュリティ対策に関する実証研究」,本経済政策学会第64回大会論文集, pp.1-23, 2007年.

田中秀幸,劉いく立:「東アジアにおけるICT製造業の相互依存関係に関する実証分析」,日本社会情報学会合同研究大会研究発表論文集, pp.8-13, 2007年.

田中秀幸,杉山幹夫:「インタangibleズに着目した地域情報化投資の評価に関する研究」,日本社会情報学会合同研究大会研究発表論文集, pp.232-237, 2007年.

藤原正弘,田中秀幸:「モバイル・インターネットにおける日韓の産業構造分析」,日本社会情報学会合同研究大会研究発表論文集, 2007年.

岡本健志,田中秀幸:「地方自治体による地域情報化施策とソーシャル・キャピタルに関する研究」,第12回進化経済学会大会報告論文集, 2008年.

田中秀幸,劉いく立:「東アジア地域でのICT産業の相互依存関係の変容に関する実証分析」,第12回進化経済学会大会報告論文集, 2008年.

田中秀幸,近藤勝則:「企業立地と情報通信ネットワーク利用に関する研究」,第12回進化経済学会大会報告論文集, 2008年.

国際会議等

Hideyuki Tanaka: "Geography and Information Security: Does Location Affect Information Security Effort?", 4th Forum on Financial Systems and Cyber Security: A Public Policy Perspective, pp.1-14, 2007. 【査読有】

口頭発表等

田中秀幸:「地域 SNS の事例紹介」,学習院大学 e-Democracy 研究会, 2007. 【招待講演】

Hideyuki Tanaka and Masahiro Fujiwara: "An Analysis of the Industrial Structures of the Mobile Internet in Japan and Korea", Seoul Symposium on Mobile Communication(SSMC2007), 2007. 【招待講演】

藤原正弘,田中秀幸:「モバイル・インターネット発展における産業構造のインパクト」,社会・経済システム学会第26回大会, 2007.

Hideyuki Tanaka and Masahiro Fujiwara: "An Analysis of the Business Structure in Japan", The New Trends of Socio-information in East Asia, 2007. 【招待講演】

田中秀幸,近藤勝則:「電子自治体政策と地域 IT 企業の振興に関する研究」,社会・経済システム学会第26回大会, 2007.

田中秀幸:「内発的な経済発展に向けての地域情報化」,第14回社会情報システム学シンポジウム(主催:社会情報システム学研究会、共催:経営情報学会社会情報と情報ネットワーク研究部会、日本社会情報学会 環境・教育・GIS 研究部会、電気通信大学 Social Informatics(社会情報学)研究ステーション), 2008. 【招待講演】

一般向け講演等

田中秀幸:「住民視点に立った電子自治体に向けて」,財団法人地方自治情報センター主催『地方自治情報化推進フェア 2007』, 2007. 【招待講演】

田中秀幸:「地域の課題解決に向けての電子自治体」, 藤沢市主催『コンピュータ利用管理者及び IT 推進リーダー研修会』, 2007.【招待講演】

田中秀幸:「学術情報メディアセンターセミナー「公的機関の IT 調達、課題とグッドプラクティス」, 京都大学学術情報メディアセンター・セミナー, 2008.【招待講演】

中尾彰宏・准教授

研究テーマ(主たるもの)

オーバーレイネットワーク基盤構築技術の研究

オーバーレイネットワークの研究分野では、現在そして新しい将来のインターネットを支える様々なネットワークサービスやネットワークの仕組みを、インターネット内に埋め込まれた実験基盤(オーバーレイネットワークテストベッド)を用いることで実証実験し、性能評価や問題発見などを行うことを目的とする。本研究テーマでは、このような実証実験を広域で可能にする実験基盤の構築やノードの高度化技術の研究を目的とする。

オーバーレイネットワークを用いた経路制御技術の研究

オーバーレイルーティング(Overlay Routing)と呼ばれる、インターネットの可用性を向上したり様々なデータ通信の特性(QoS)を最適化する技術の研究を進めている。

サステナブル・ネットワーク・サービス基盤技術の研究

インターネット上に実装されたネットワークサービスへの DoS アタックや DDoS アタックなどの脅威に対し、サーバの仮想化とプロセスのマイグレーションを利用してサステナブルなサービスを実現するための基盤技術を研究開発し可用性を向上する研究を進めている。

研究業績(2007 年度)

林香里・准教授

研究テーマ(主たるもの)

システムとしてのマスメディアにおけるジャーナリズムという活動の諸相の検討

マスメディアは、近代、テクノロジーの発展とともに拡大し、近代のシステムとなった。他方で、ジャーナリズムも、権力を監視し、それと対峙する近代民主主義において必要とされた営為である。この2つは 20 世紀には表裏一体となって発展してきた。21 世紀に入り、テクノロジーの一層の発達とともにこの2つの合致が自明ではなくなった。それによるジャーナリズム活動の変遷を見極めていく。

東アジアにおけるジャーナリズム

現在、中国をはじめ、台湾、韓国においても「ジャーナリズム」概念が転換期に来ている。東アジアにおけるジャーナリズムという活動を支える制度やシステムについても検討している。また、各国の研究者やジャーナリストたちと積極的に交流するためのシンポジウムやワークショップを開催していく。

東アジアの大衆文化交流について

現在、東アジアでは大衆文化交流がますます活発になり、オーディエンスの流動化、国際化が始まっている。そのような現象がもつ政治的含意、国際的世論への影響を検討中である。

研究業績(2007 年度)

著書等

Kaori Hayashi: "The Dilemmas of Reforming Japan", David Ward 編, Lawrence Erlbaum Associates, 2007 年.

論文等

座談会: 「NHK番組改編問題 控訴審判決は何を定期したか」, 世界, No.4, pp.36-47, 2007 年.

林香里: 「「公共性」から「連帯」へー 労働としての「メディア」と「ジャーナリズム」を考える」, 世界, No.7, pp.54-65, 2007 年.

林香里: 「「メディアの公共性」とは何か —フリーランスの処遇が示す日本の現状」, 公明, No.8, pp.49-55, 2007 年.

Kaori Hayashi, Eun-jeung Lee: "The Potential of Fandom and the Limits of Soft Power: Media Representations of on the Popularity of a Korean Drama in Japan.", Social Science Japan Journal, Vol.10, No.2, pp.197-216, 2007 年.【査読有】

林香里、リン・イーシェン: 「「ジャーナリズムのイメージ」—日・台・韓の新人記者記者たちがもつプロフェッションへの憧憬と懷疑」, 『AIR 朝日総研レポート』, No.212, pp.2-26, 2008 年.

座談会: 「社会における”公共性”のゆらぎと放送の課題 —公共性の再構築に向けて—」, 『放送メディア研究』, No.5, pp.129-159, 2008 年.【査読有】

国際会議等

Kaori Hayashi: "The Public Sphere as a Site of Popular Protest in Japan", , 2007.【査読有】

口頭発表等

林香里: 「冬のソナタ」が残したもの: 日本社会における韓国文化のソフトパワーの可能性」, 韓国・成均館大学・武漢大学共同交流シンポジウム「東アジアの文化交流の現在」, 2007.

林香里: ""Muno Takeji, A journalist struggling through Japan", Presentation at : 臺灣大学新聞研究所主催、徐元智先生紀念基金会協賛 「臺灣解嚴 20 週年研討會、威權解體與新聞自由的崎嶇路」2007 年 10 月 13 日、臺灣大學新聞研究所にて。、2007.

林香里: 「「韓流ドラマ文化」の「政治的なるもの」」, 京都フォーラム「自己と他者のあわい」, 2007.【招待講演】

Kaori Hayashi: "", "Ubiquitous Media: Asian Transformations" at the University of Tokyo. July 16, 2007, 2007.

一般向け講演等

信濃毎日新聞社専務取締役 猪股征一、読売新聞東京本社代表取締役社長 老川祥一、中国新聞社代表取締役社長 川本一之、高知新聞社代表取締役社長 藤戸謙吾、林香里: 「研究座談会「未来の読者を育てるために」」, 社団法人日本新聞協会主催 第 60 回新聞大会 , 2007.【招待講演】

林香里、佐々木俊尚、藤代裕之、橋場義之: 「ネット社会の情報と言論～新聞ジャーナリズムの将来」, 毎日新聞労働組合主催 第 21 回毎日新聞社編集綱領制定記念のつどいシンポジウム, 2007.【招待講演】

林香里ほか: 「東アジアにおける英字新聞の挑戦」, ジャパンタイムズ・東京大学国際シンポジウム, 2008.

一般向け記事・報道等

林香里:「潮流」, 論座, 2007 年.

林香里:「潮流」, 論座, 2007 年.

林香里:「潮流」, 論座, 2007 年.

林香里:「潮流」, 論座, 2007 年.

原田至郎・准教授

研究テーマ(主たるもの)

情報社会のガバナンスに関する研究

ICT に依存する情報社会のガバナンスについて、特に技術的側面とそれを支える制度および専門家に着目した研究

クメール文字やその他の文字のコンピュータ処理に関する技術的・制度的研究

クメール文字やその他の文字のコンピュータ上での利用に関する技術的研究開発、およびその標準化をめぐる制度的研究

アジアの人々の価値観・政治意識に関する研究

アジア・バロメーター・プロジェクトの調査結果などに基づいた分析

研究業績(2007 年度)

論文等

原田至郎:「アジア・バロメーターの対外情報基盤構築」, AsiaBarometer Project Series, Vol.7, pp.4-14, 2008 年.

原田至郎:「クメール文字コードをめぐる諸問題」, 東京大学東洋文化研究所編『アジア学の明日にむけて』白峰社, 選抜再録, 2008 年.

国際会議等

HARADA Shiro: “Cambodia in AsiaBarometer2007”, AsiaBarometer2007 Workshop, 2007.

口頭発表等

HARADA Shiro: “Khmer script in computers: Its impacts for international and national societies”, Seminar on “Empowering Human Capacity using Khmer Script in Computers” held at Sunway Hotel, Phnom Penh, 2007. 【招待講演】

HARADA Shiro: “Discussion”, AsiaBarometer2007 Symposium: Analysing Southeast Asia 2007, 2007.

一般向け講演等

原田至郎:「UT-CA 部局 RA 報告・情報学環編」, UT-CA 報告会—東京大学認証局構築に向けて—, 2007.

原田至郎:「S/MIMEをはじめとした情報学環での全体の取り組み」, UT-CA 報告会—東京大学認証局構築に向けて—, 2007.

原田至郎:「講演」, ラ・サール高等学校東京大学見学会, 2007.

原田至郎:「見えにくい権力」, 第107回(平成19年秋季)東京大学公開講座東京大学公開講座「力<チカラ>」, 2007.

開一夫・准教授

研究テーマ(主たるもの)

発達認知神経科学:乳幼児を対象とした脳機能計測

人間の認知活動の根源的部分を解明するため,近赤外分光法(NIRS)や高密度脳波計(HD-EEG)を用いて,安全かつ低拘束で,乳幼児の脳活動を計測している.これらの脳活動計測によって得られたデータを,視線計測や行動実験を重ね合わせることで生後間もない乳児の脳機能がどのように発達していくのかを分析する.

さらに,ヒト乳児で得られた脳活動計測の結果を,チンパンジー等大型霊長類での脳活動計測結果と比較する研究にも着手している.

人工物・メディアの発達の認識過程に関する研究

TVやゲームが若年齢の子どもにどういった影響を与えるのか(与えないのか)を明確にするため,行動実験・質問紙調査・脳活動計測実験を行っている.

アンドロイドロボットの認知科学

外見が人間と酷似したロボットを,人間がどのように認知するのかという疑問に答えるため,認知科学的手法を用いた実証的研究を行っている.なお,本研究は,大阪大学・ATRとの共同研究として実施している.

研究業績(2007年度)

著書等

Miyazaki,M. and Hiraki, K.: "Video Self-Recognition in 2-year-olds:Detection of Spatiotemporal Contingency", Watanabe,S. 編, Keio Press, 2007年.

論文等

開一夫:「乳幼児における自己認知と発達の変遷」,臨床神経医学(Japanese Journal of Clinical Psychiatry), Vol.36, No.8, pp.947-951, 2007年.【査読有】

開一夫・旦直子・有田亜希子:「ロボットは社会的随伴性を獲得できるか」,ベビーサイエンス, Vol.6, pp.48-50, 2007年.

開一夫・旦直子・有田亜希子:「乳児の人工物認知と人認知」,ベビーサイエンス, Vol.6, pp.32-40, 2007年.

Hirai,M. and Hiraki, K.: "Neural Responses to Humans vs. Robots: An Event-related Potential Study", Brain Research, Vol.1165, pp.105-115, 2007年.【査読有】

口頭発表等

開一夫:「自己と他者の発達認知神経科学」, 第7回精神疾患と認知研究会, 2007.【招待講演】

開一夫:「コミュニケーションロボットの条件」, 第1回浅田共創知能システムシンポジウム, 2007.【招待講演】

Hiraki,K.: "On child-artefacts interaction:towards future media enviroment", 第1回ユニバーサルコミュニケーション国際シンポジウム, 2007.【招待講演】

福島宏器, 池田攻毅, 開一夫:「前頭部 α 帯パワーの左右半球比とMFN/P300 振幅の関連の検討」, 第25回日本生理心理学会大会, 2007.

松中玲子, 旦直子, 開一夫:「現実および映像観測時における EEG の時間周波数解析」, 第7回日本赤ちゃん学会大会, 2007.

福島宏器, 嶋田総太郎, 開一夫:「ヒトの社会性を支える脳神経メカニズム」, 日本シミュレーション学会第26回大会, 2007.

福島宏器, 開一夫:「他人の失敗は自分の失敗? ~社会性の神経的基盤をさぐる~」, 「比較認知発達神経科学の挑戦(1)―社会的認知の発達と進化―」(ワークショップ), 日本心理学会第71回大会, 2007.

松中玲子, 開一夫:「社会的参照行動の発達メカニズム:ターゲット理解に関する視線計測研究」, 京都大学霊長類研究所 2007 年度共同利用研究会, 2007.

福島宏器, 開一夫:「他人の損失は自分の損失? ~「他者」とは何か? ~」, 京都大学霊長類研究所 2007 年度共同利用研究会, 2007.【招待講演】

一般向け講演等

開一夫:「赤ちゃんはどのようにして自分や他人を知るのか」, 新・赤ちゃん学入門講座第6回, 10月20日, 産経新聞大阪本社, 2007.【招待講演】

開一夫:「心の起源―赤ちゃん研究と人工物研究」, 日本学際会, 2007.【招待講演】

開一夫:「赤ちゃん学と社会」, 赤ちゃんの脳、子どもの脳―科学と育ちの倫理―, 2007.【招待講演】

開一夫:「「私」と「あなた」の発達科学」, 社会で育つ知能と心II, 2007.【招待講演】

深代千之・准教授

研究テーマ(主たるもの)

スポーツにおける情報伝達

スポーツは、文学・音楽・絵画・彫刻などと並んで、人間がつくりあげた文化の一つといえる。競技スポーツの中のダイナミックな身体運動は、芸術と呼ぶにふさわしいが、その「動作」は選手自らの努力とともに指導者からの巧みな情報伝達によって構築される。ダイナミックな身体運動を構築するには、動き自体のメカニズムが明らかになっていること、情報伝達が効率よく行われることが必要である。深代研では、次の2点に関して研究を行っている。

動作メカニズムの解明

遺伝的・環境的に最高のパフォーマンスが出力されている競技スポーツの動作を対象に、高速度ビデオ撮影を用いて2次元および3次元解析を行う。そのデータを基に、逆ダイナミクスを用いて動作構築のメカニズムを究明する。一方、コンピュータ・シミュレーションによって、身体運動の「力」発生源をコントロールし、その結果として運動を具現させる。このように、実験研究とシミュレーション研究を併用することによって、運動の本質を明らかにする。特に、運動を支える筋・腱複合体の粘弾性特性の役割に注目している。

非言語コミュニケーション

ダイナミックな身体運動の構築において、情報発信者である指導者から受信者である選手へ様々な情報が伝達される。この情報伝達は、科学知・言語知などの形式知に加えて、非言語コミュニケーションである身体知（あるいは暗黙知）が多く用いられる。この身体知について、他分野との比較研究（例えば音楽・文学では、情報発信者は指揮者・作家であり、受信者が楽器奏者あるいは歌手・読者になる）を行うとともに、身体知の情報伝達システムを可視化することを試みている。

研究業績(2007年度)

著書等

深代千之:「スポーツができる子になる方法」, アスキー, 2007年.

深代千之:「成長・発達とバイオメカニクス」, 加賀谷淳子 編, 日本学術会議, 2007年.

論文等

Yoshioka S, Nagano A, Himeno R, Fukashiro S.: "Computation of the kinematics and the minimum peak joint moments of sit-to-stand movements. ", Biomed Eng Online, Vol.Jul 3, No.6, pp.26, 2007年.【査読有】

Nagano A, Komura T, Fukashiro S.: "Optimal coordination of maximal-effort horizontal and vertical jump motions—a computer simulation study. ", Biomed Eng Online., Vol.Jun 1, No.6, pp.20, 2007年.【査読有】

Nagano A, Yoshioka S, Komura T, Fukashiro S.: "Influence of the Fascicle Length and Physiological Cross-sectional Area of M. soleus on Ankle Joint. ", Int. J. Sport & Health Sci. , Vol.15, pp.98-104, 2007年.【査読有】

Kawamoto R, Miyagi O, Ohashi J, Fukashiro S.: "Kinetic comparison of a side-foot soccer kick between experienced and inexperienced players. ", Sports Biomech., Vol.6, No.2, pp.187-198, 2007年.【査読有】

深代千之:「跳躍のしくみ」, 体育の科学, 57巻7号, 2007年.

口頭発表等

深代千之:「スポーツにおける科学の役割を考える」, 中京大学特別講演会, 2007.【招待講演】

深代千之:「動きのトレーニング視点とエビデンス」, 日本トレーニング科学会, 2007.【招待講演】

一般向け講演等

深代千之:「アジリティ向上のバイオメカニクスの考察」, SAQシンポジウム, 2008.【招待講演】

本郷和人・准教授

研究テーマ(主たるもの)

王権の成立と進展

日本の政治史といえば、天皇と将軍を中心とする叙述がなされるのが常である。だが両者の関係についてはいまだ検討課題が多く残る。そこで、王権という概念を用いて一度天皇や将軍といった日本独自の権力の具体的なあり方をニュートラルにして、新しい政治史の構築を目指してみたい。

研究業績(2007 年度)

著書等

本郷和人:「武士から王へ」, ちくま新書, 2007 年.

本郷和人:「『現代語訳 吾妻鏡2』」, 五味文彦氏と共編翻訳 編, 吉川弘文館, 2007 年.

本郷和人:「『現代語訳 吾妻鏡1』」, 五味文彦氏と共編翻訳 編, 吉川弘文館, 2007 年.

口頭発表等

本郷和人:「やっぱり歴史は面白い」, 講演, 紀伊國屋ホール, 2007.

一般向け記事・報道等

本郷和人:「座談会「日本の中世像を更新する」」, 『RATIO4』 講談社, 2007 年.

前田幸男・准教授

研究テーマ(主たるもの)

内閣支持率の研究

新聞社等が報道している世論調査の集計結果の検討を中心に、マクロ・レベルにおける内閣支持率の変動およびミクロ・レベルにおける個人の内閣支持について基礎的な研究を行っている。

性役割分業と政治参加・政治的態度の研究

社会科学研究所が大阪商業大学と共同で行っている日本版総合社会調査 JGSS のデータを利用して、性・性役割分業と政治行動との関係を検討している。

データ・アーカイブの研究

社会科学研究所附属日本社会研究情報センターに設置されている SSJDA の運営上の基礎的研究になるが、諸外国のデータ・アーカイブについて歴史および現状 について研究している。最近は米国センサス個票の保存および公開用ミクロ標本データの提供方法について調査を行っている。

研究業績(2007 年度)

論文等

前田幸男:「自治体の統計・調査・政策立案体制を問う」, 都市問題 後藤新平生誕150周年記念 増刊号, pp.112-118, 2007 年.

前田幸男:「もう一つのアーカイブ」, 情報学研究, Vol.73, pp.85-87, 2008 年.

前田幸男:「書評論文『政治のリアリティと社会心理』『変容する日本社会と投票行動』『選挙制度改革以降の日本型民主主義』, 選挙研究, Vol.23, pp.176-181, 2008 年.

口頭発表等

Yukio Maeda: "How Wives and Husbands Influence Each Other", Midwest Political Science Association Annual Conference, 2007.

前田幸男:「米国人口センサス・データの保存・公開について—歴史的考察—」, 統計関連学会連合大会(日本統計学会), 2007.

Yukio Maeda: "Archiving and Data Sharing in Japan", ICPSR OR Meeting, 2007. 【招待講演】

前田幸男:「社会調査データの保存と公開—SSJDA の活動を中心に—」, 日本応用数理学会数理政治学研究会, 2007. 【招待講演】

一般向け記事・報道等

前田幸男:「安倍政権期の内閣支持率と政党支持率」, 中央調査報, 2007 年.

前田幸男:「民主、年金機に地方で勢い 復党で政権失速、世論分析」, 共同通信社, 2007.

水越伸・准教授

研究テーマ(主たるもの)

ソシオ・メディア論

メディアを情報技術の側からだけでなく、人間や社会の営みの側からもとらえるメディア論の構築。そのために「批判的メディア実践」という方法論を生み出しつつある。

メディア史

19 世紀後半から 20 世紀半ばにかけての電氣的メディア、電子的メディアをめぐる技術と社会のダイナミズムについての歴史的研究。

メディア・リテラシー

メディア・リテラシーについての理論と実践に関する総合的な研究。

研究業績(2007 年度)

一般向け記事・報道等

水越伸:「「あるある問題」テレビとどう向き合うか:メディアリテラシーの観点から探る」, 中日新聞夕刊, 2007.

山内祐平・准教授

研究テーマ(主たるもの)

情報通信技術を利用した学習環境のデザイン

教育の情報化が急速な勢いで進んでいるが、学習は空間／活動／共同体／人工物の微妙なバランスの中で発生する複雑な事象である。インターネットなどの情報通信技術を学びの場に導入する際に、様々な要因をどうデザインすれば適切な学習環境を構成できるかを、実践研究の中で明らかにする。

研究業績(2007 年度)

論文等

山内 祐平 久松 慎一 北村 智 飛騨 信崇:「RFID を利用した把持状態検出型インタラクティブ博物館展示システムの開発」, 日本科学教育学会年会論文集 Vol31, 2007 年.

中野 真依 和気 竜也 池田 涼子 川上 太一 細川 真伸 佐藤 充 山内 祐平:「おやこ de 食育: 携帯電話を活用して親子で学ぶ「野菜を学習素材にした食育プログラム」の開発」, 日本科学教育学会年会論文集 Vol31, 2007 年.

山内 祐平 望月 俊男 永田 敬:「教養教育アクティブラーニングのための IT 支援型教室ー 駒場アクティブラーニングスタジオのデザイナー」, 日本教育工学会第 23 回大会講演論文集, 2007 年.

山内 祐平:「実践研究をどのようにデザインし, 論文にまとめるかー「学校と専門家を結ぶ実践共同体のエスノグラフィー」論文を事例としてー」, 日本教育工学会第 23 回大会講演論文集, 2007 年.

山口いつ子・准教授

研究テーマ(主たるもの)

表現の自由・メディアの自由に関する判例分析

ユビキタス時代におけるサイバー法の理論的体系化と具体的課題

知的財産権と自由な情報流通との調整のあり方

研究業績(2007 年度)

著書等

山口いつ子:「マス・メディアの表現の自由と個人の表現の自由ーブログスフィア時代に求められる記者の「特権」論への視点 (『岩波講座 憲法 2 人権論の新展開』141 頁以下)」, 西原博史責任編集 編, 岩波書店, 2007 年.

山口いつ子:「知的財産権と自由な情報流通との調整の在り方をめぐる憲法学的考察ー情報技術に関する法における基本原理の探求 (特許庁委託・財団法人知的財産研究所 平成 19 年度産業財産権研究推進事業報告書)(英文要約として、Itsuko Yamaguchi (translated by David C. Buist), Some Observations on the Balancing of Intellectual Property Rights with Information Freedom from the Perspective of Constitutional Law: In Search of Basic Principles in Law Relating to Information Technology)」, 財団法人知的財産研究所, 2008 年.

口頭発表等

山口いつ子:「知的財産権と自由な情報流通との調整の在り方をめぐる憲法学的考察—情報技術に関する法における基本原理の探求」, 特許庁委託・財団法人知的財産研究所 専門家派遣研究成果報告会, 2008.

山本隆一・准教授

研究テーマ(主たるもの)

医療情報の安全性確保とプライバシー保護に関する研究

医療情報の可用性、完全性、機密性の適切な確保と、情報主権者の権利としてのプライバシーと教育・研修・研究・公益目的の利用を調和させるための技術的課題および制度や運用を中心とする人的要素の課題についての研究。

広域分散診療情報データベースへの知識発見手法の応用

電子カルテが普及した際に構成されると予想される広域分散診療情報データベースをモデル化し、随時蓄積される診療情報に対して動的な知識発見手法の適応についての研究

医療における公開鍵基盤の応用に関する研究

公開鍵基盤を医療ドメインに応用するにあつての、資格属性の取り扱いなどの問題の解決と国際的な調和に関する研究

研究業績(2007 年度)

著書等

山本 隆一:「医療経営イニシアティブ — 電子カルテからEHRへ」, 木村 廣道 編, かんき出版, 2007 年.

論文等

山本 隆一:「日本版EHRの構築を目指して」, 健康保険, Vol.61, No.3, pp.40-45, 2007 年.

2007-08:「医療情報の安全管理」, 医学のあゆみ, Vol.222, No.8, pp.571-575, 2007 年.

山本 隆一:「電子カルテからEHRへ」, 医学のあゆみ, Vol.222, No.12, pp.955-958, 2007 年.

山本 隆一:「病院情報システムと個人情報保護」, 映像情報, pp.814-817, 2007 年.

山本 隆一:「電子化診療情報のプライバシー保護」, 医学のあゆみ, Vol.222, No.6・7, pp.502-506, 2007 年.

山本 隆一:「医療情報システムの安全管理に関するガイドライン第2版適用のポイント」, 新医療, Vol.34, No.9, pp.144-146, 2007 年.

山本 隆一:「情報共有のための基」, 医学のあゆみ, Vol.222, No.11, pp.897-901, 2007 年.

国際会議等

K. Tanaka, M. Yoshida, R. Yamamoto: "Secure Remote Access for Web Based Clinical Information System Using Policy Control of PCs and Healthcare PKI Authentication", Medinfo 2007, pp.720-723, 2007. 【査読有】

口頭発表等

R. Yamamoto: "Key note: Security Guidelines for Health Information Systems by Japanese Ministry of Health Labor and Welfare", Annual Meeting Korean Society of Medical Informatics 2007, 2007. 【招待講演】

山本 隆一:「日本医療情報学会の果たすべき責任」, 第27回医療情報学連合大会, 2007. 【招待講演】

山本 隆一:「ヘルスサービスリサーチにおける学術交流、連携、協力に向けて」, 日本病院管理学会シンポジウム, 2007. 【招待講演】

山本 隆一:「診療情報システム間のデータ移行において最小限の相互運用性を確保した J-MIX および HL7-CDA に準拠した包括的形式に関する検討」, 第27回医療情報学連合大会, 2007.

一般向け記事・報道等

渡邊 宏樹、山本 隆一:「医療のIT化の現在、そして未」, 月刊保険診療, Vol.62, No.10, pp.38-42, 2007 年.

荒木淳子・助教

研究テーマ(主たるもの)

知識労働者のキャリア開発

企業で働く個人、とりわけ、研究開発者や金融専門職、コンサルタントといった知識労働者のキャリア開発を促す学習環境に関する研究。こうした知識労働者のキャリア開発では、領域における専門性の確立が重要視される。これまでのキャリア開発研究では、キャリア開発がなされる学習環境については十分研究されてこなかった。そこで、ネットワークやコミュニティの観点から、知識労働者のキャリア開発が促される環境について研究を行う。

大学における新しいキャリア教育のデザインに関する研究

文部科学省を中心として、学校(初等中等教育、高等教育)におけるキャリア教育が推進されている。これらのキャリア教育は進路指導や就職支援といった性格が強いものである。しかし、社会人大学院の発達や産学連携の流れを踏まえれば、大学におけるキャリア教育には、こうした就職支援的なものに留まらず、社会人が働きながらキャリアを磨くことを支援するものであることが望まれる。そこで、大学における新しいキャリア教育のデザインについて研究を行う。

研究業績(2007 年度)

論文等

荒木淳子:「企業で働く個人の「キャリアの確立」を促す学習環境に関する研究—実践共同体へ」, 日本教育工学会論文誌, Vol.31, No.1, pp.15-27, 2007 年. 【査読有】

口頭発表等

荒木淳子:「知識労働者のキャリアの確立を促す実践共同体のあり方に関する質的分析」, 第21回日本教育工学大会, 2007.

一般向け講演等

荒木淳子:「研究開発者のキャリアとモチベーション—実践コミュニティへの参加に着目して—」, (社)研究産業協会パネルディスカッション「研究開発人材のキャリアとモチベーション」, 2007. 【招待講演】

一般向け記事・報道等

荒木淳子:「キャリア開発と人材育成」, 経営システム, 2007 年.

荒木淳子:「コラム「学校の放課後」のような場づくりを」, リクルートマネジメントソリューションズ, Message, 2007 年.

有賀清一・助教

研究テーマ(主たるもの)

風力発電のための景観評価

地球温暖化の問題が注目されるなか、風力発電は自然エネルギーの中でも有望なエネルギー源として期待されている。しかし大型化する風力発電タービンは周囲の景観を壊すものと受け取られる場合があり、建設のための合意形成の段階で問題化することが多くなっている。本研究では、この問題をシミュレーションによって解決するための手法を開発している。

流体力学を使ったメディアアート

透明であるため目で見ることができない、風や水の流れを、CG を使いリアルタイムに描画し、視覚によって流れを体験させる作品の制作および計算手法の開発。

東京湾における風況の調査

風に関するデータは風力発電開発の基礎になるものである。しかしながら、最近までの風況観測はおもに気象の把握を目的としたものであり、風車にとって有用なデータとなるものは少ない。本研究では、東京湾において風力発電に特化した観測を行い、気象予測シミュレーションの精度向上を目指している。

研究業績(2007 年度)

著書等

松本 勝, 田村幸雄, 牛山 泉, 大熊武司, 加藤信介, 河井宏允, 野村卓史, 白土博通, 林 泰一, 日比一喜, 藤野陽三, 村上周三, 山田 均 ほか 106 名:「風工学ハンドブック」, 日本風工学会 編, 朝倉書店, 2007 年.

論文等

有賀清一, 荒川 忠一, 飯田 誠:「東京湾臨海部における気象モデルを用いた風況予測」, 日本風工学会論文集, Vol.32, No.1, pp.11-20, 2007 年.【査読有】

有賀清一, 白谷栄梨子, 鈴木太郎, 飯田誠, 荒川忠一:「リアルタイム数値流体力学にもとづく視覚による風体験システム」, 日本バーチャルリアリティ学会論文誌, Vol.12, No.3, pp.277-283, 2007 年.【査読有】

作品等

1) 白谷栄梨子, 有賀清一, 鈴木太郎, 飯田誠, 荒川忠一:「風、知。」, 文京区制 60 周年記念事業 東京大学 130 周年記念事業 文の京・大いなる学びシリーズ アートとサイエンス その不思議な関係, 2007.

鈴木莉紗, 有賀清一:「風の音楽」, 東京大学大学院情報学環学際情報学府・コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム制作展 “iii exhibition 8”, 2007.

白谷栄梨子, 有賀清一:「風、知。」, 東京大学創立 130 周年記念事業／情報学環・福武ホール工事中景「考える森」 Thinking Forest image forest”, 2007.

伊藤陽一・助教

研究テーマ(主たるもの)

遺伝子情報を利用した抗がん剤開発における実験計画および統計解析手法の開発

近年開発されてきた分子標的薬と呼ばれる抗がん剤は、がん細胞の増殖メカニズムに特異的に作用することで効果を発揮するよう設計されたものである。しかし、人間を対象とした臨床試験においては、基礎研究から予想された結果が必ずしも出るとは限らないため、薬剤の投与によって、遺伝子発現変化が起きているかをモニタする必要がある。そのための方法として、数万種類の遺伝子を同時に測定するマイクロアレイという技術が注目されている。マイクロアレイデータの解析では、数万種類の遺伝子を同時に解析するため、統計的多重性の問題など様々な問題が発生する。このような問題に対する有効な解析手法開発を行うことを目的とする。

HRQOL データに対する項目反応理論の応用

癌等の難治性疾患は、劇的な効果のある治療方法が存在しない。そのような状況下では、患者さんの生活の質(Quality of Life; QOL)を測定し、QOL が平均的に高い治療方法を選択することが望まれている。QOL の測定方法としては、自記式の質問票による測定が一般的であり、このようなデータは患者さんの健康関連のQOLを調査することから Health Related Quality of Life (HRQOL)データと呼ばれる。近年、このHRQOLデータに対して、教育学の分野で発展した項目反応理論を応用することが試みられている。項目反応理論は学力などの対象者の潜在的な特性を、潜在変数としてモデル化し、テストに対する反応からこの特性を推定しようとする理論である。QOL 研究の分野では、対象者の潜在的な特性をHRQOLとし、QOL 質問票の質問項目に対する評価を行っているが、現時点では、教育学における項目反応理論を直接応用しただけであり、臨床的に有用な情報を得ることができていない。そこで本研究では、項目反応理論の枠組を発展させ、医学に特化したモデルを開発することを目的とする。

研究業績(2007 年度)

論文等

Ito YM, Fujiwara Y, Ohashi Y.: "The Q-Q plot of p-values for predicting outcome with the gene expression data.", Japanese Journal of Biometrics, Vol.28, No.1, pp.37-46, 2007 年。【査読有】

倉橋一成、伊藤陽一、松山裕、大橋靖雄、西尾和人:「cDNA マクロアレイデータ解析における正規化手法の性能評価」, 日本統計学会誌, Vol.36, No.2, pp.147-163, 2007 年。【査読有】

谷口隆司、伊藤陽一、大橋靖雄:「多施設共同臨床試験における施設間差を考慮にいれた症例集積期間再推定」, 計量生物学, Vol.28, No.2, pp.91-100, 2007 年。【査読有】

口頭発表等

Ito YM, Ohahi Y.: "Measurement scale categorization and its resolution. A gene reduction approach to the microarray data analysis.", East Asia Regional Biometric Conference, Tokyo, 2007.

伊藤陽一、大橋靖雄:「測定尺度のカテゴリー化とその解像度 -マイクロアレイデータに対する遺伝子縮約アプローチ-」, 文部科学省科研費(B)「テーラーメイド医療実現に向けての統計的基盤技術の開発と研究」(代表 大瀧 慈 広島大学教授), 広島, 2007。【招待講演】

大東誠・助教

研究テーマ(主たるもの)

レガシー情報システムのビュー統合・検索統合に関する研究

多面的情報検索理論に基づく3次元情報アクセス空間の自動構成

大量の情報を目の前にして、アクセスしたい対象が曖昧模糊にしか規定できない状況が多々あります。しかし、我々は視点や焦点を変えて見ることを繰り返すことにより、次第に要求している対象が明らかになる状況を多く経験しています。このような情報アクセスのプロセスを、3次元仮想空間を渡り歩くという直感的なインタフェースで実現するための技術を研究しています。具体的には、3次元仮想空間内での移動動作を、関係モデルのクエリ修正操作に対応付けることによって、コンテキストに応じて動的に変化する3次元情報空間を構成するための理論とその実装について研究開発しています。

インタラクティブ3次元情報視覚化

データベースに蓄積されたレコード集合を、3次元仮想環境で「仮想的なもの」として扱うことを可能にする技術の研究開発。ユーザは、個々のレコードの表現デザインやレコード集合の配置規則を3次元のインタラクティブ部品を組み立てて定義することが可能です。仮想実体化されたレコードは、画面上での直接操作により他のアプリケーションと連携したり、DBレコードを利用した3次元アプリケーションの構築部品として利用することが可能です。RDBに限らず、OODBやORDBに格納された入れ子構造等、複雑なデータ構造を持つレコードも、同じフレームワークを用いて仮想実体化することを可能にしました。

研究業績(2007年度)

国際会議等

Masahiko Itoh, Jun Fujima, Makoto Ohigashi, Yuzuru Tanaka: "Spreadsheet-based Framework for Interactive 3D Visualization of Web Resources", International Conference on Information Visualization(IV 2007), pp.65-73, 2007.【査読有】

口頭発表等

大東誠:「実世界の空間情報に基づく情報サービスの統合・検索のための位置モデル」, 電子情報通信学会 知能ソフトウェア工学研究会(KBSE), 2007.

Zhen-Sheng Guo, Makoto Ohigashi, Yuzuru Tanaka: "View and Query Integration of a Legacy 2D GIS with 3D Geographic Simulation Systems", Internatinal Workshop on Perspectives of Intelligent Systems Assistance 2007(PISA 2007), 2007.

影澤政隆・助教

研究テーマ(主たるもの)

高度交通システムに関する研究

路側設備や車載設備を利用した道路交通に関する認識システム、および表示システム。具体的には、路側カメラによる車両認識システムや、車載レンジセンサによる街や駐車車両の認識システム、車載カメラを利用した仮想空間表示システム。

研究業績(2007年度)

論文等

トウ利洪, 小野晋太郎, 影沢政隆, 池内克史: 「動的計画法を利用した市街地の住宅地図と実体形状の統合化」, 生産研究, 2007 年.

国際会議等

Shirmila Mohottala, Masataka Kagesawa, Katsushi Ikeuchi: “Vehicle Classification in Traffic Surveillance”, 第 13 回 ITS 世界会議, 2007. 【査読有】

Shintaro Ono, Tetsuro Morimoto, Jun Takamatsu, Takeshi Oishi, Masataka Kagesawa, Katsushi Ikeuchi: “ヴェズヴィオ火山埋没遺跡の三次元モデリング — ソンマ遺跡・ポンペイ遺跡 —”, 第 5 回火山都市国際会議島原大会, 2007. 【査読有】

池内克史, 小野晋太郎, 高松淳, 影沢政隆, 森本哲郎, 川上玲, 鎌倉真音, 肥後智昭, 大蔵苑子: “火山被災遺跡における形状と色彩再現: ソンマヴェスビアーナとポンペイを例として”, 火山噴火罹災地の文化・自然環境復元 — ソンマ・ヴェスビアーナ, 指宿, 浅間 戦略的学融合研究 2007 —, 2007. 【査読有】

樺島榮一郎・助教

研究テーマ(主たるもの)

コンテンツ産業の経済学的分析

新聞、テレビなど既存の大メディアから、音楽や映画、ゲームなどの既存メディア、ネット上の掲示板や Wiki まで、あらゆるコンテンツ産業に共通する経済特性に関する研究を行う。これを起点に、デジタルコンバージョン化やそのほか技術変化に伴う産業構造の変化の予測、それぞれのコンテンツ産業の特色や、コンテンツ制作時にかかる経済的圧力の違いなどについての知見を得る。

著作権および著作権関連制度の経済学的分析

コンテンツ産業をビジネスとして成り立たせているのは、コンテンツに権利を設定する著作権および著作権に関連した制度に他ならない。特に著作物の創造や、流通・マネジメントの技術革新に対応した変化を促進する観点から、適切な著作権および著作権関連制度の在り方についての研究を行う

創造の多様性と進化の速度を向上させる条件・環境についての研究

Wikipedia や掲示板の書き込みを収録した書籍、音楽のインディーズ、漫画・アニメ・ゲーム・フィギュアなどにおける大規模な見本市場的空間に関連した創作などに見られるように、著作者と消費者の相互作用による著作物の形成の重要性が高まっている。こういったオープンな相互作用による創造環境に着目し、多様性と技術革新の速度を向上させる条件・環境・制度に関する研究を行う。

研究業績(2007 年度)

論文等

樺島榮一郎: 「放送番組二次利用の著作権許諾制度に関する研究」, 社会情報学会誌, Vol.19, No.2, pp.5-16, 2007 年. 【査読有】

口頭発表等

樺島榮一郎: 「集合的創造における遊びの役割についての考察」, 日本社会情報学会第 22 回全国大会, 2007.

杉原周治・助教

研究テーマ(主たるもの)

基本権競合論

研究の目的は、これまで主として刑法学や民法学で論じられてきた競合の考え方を憲法学の領域に応用して、新たに「基本権競合論」という理論を織り成すことを主眼とする。基本権の領域では、しばしば、ある一つの事実関係に複数の基本権の構成要件が同時にかかる状況が生じうるが、わが国の憲法学は、こうした問題に対してこれまでなんらの解決策も講じてこなかった。基本権競合論とは、まさにこのように、複数の基本権が重なり合う複雑な状況を解決するための理論である。本研究は、右理論の内実を、基本権における「真正な」または「不真正な」競合、「法条競合」、「規範的・規範論理的特別関係」、「補充関係」、「吸収関係」、「受け皿的機能」、「保護補完機能」、「補充機能」そして「観念的競合」といったタームを用いて、これを明らかにしていく。

研究業績(2007 年度)

著書等

杉原周治:「フレームワーク法学入門」, 石川明 編, 不磨書房, 2007 年.

口頭発表等

杉原周治:「報告判例 : 連邦憲法裁判所 2002 年 2 月 6 日決定「商業広告と意見表明の自由—合成皮/社団法人AGA事件決定」」, 第 146 回ドイツ憲法判例研究会, 2007.

辻本篤・助教

研究テーマ(主たるもの)

組織論

リスクマネジメント論

研究業績(2007 年度)

論文等

辻本 篤:「経営組織における内部統制の意味」, 『郵政総研レビュー —イントラネット特別編集号—』, pp.pp.19-23., 2007 年.

辻本 篤:「コンプライアンス再考—法令・倫理を遵守する組織—」, 『郵政総研レビュー —イントラネット特別編集号—』, pp.pp.15-17., 2007 年.

一般向け記事・報道等

辻本 篤:「事業継続管理(BCM)—緊急組織とコミュニケーション・プロセスの設計—」, 『OHM』第 94 巻, 第 4 号, 2007 年.

辻本 篤: 「自然災害と土着伝統産業の被害 —能登半島沖地震を事例に—」, 『OHM』第 94 巻, 第 6 号, 2007 年.

辻本 篤: 「ジェットコースター脱線事故の教訓 —組織問題、JIS 規格の社会的認識などの問題—」, 『OHM』第 94 巻, 第 7 号, 2007 年.

辻本 篤: 「生活製品・大量リコールが示唆するもの —M 社の組織対応と若干の懸念—」, 『OHM』第 94 巻, 第 8 号, 2007 年.

辻本 篤: 「ネットワーク型生産構造への提言 —新潟県中越沖地震を事例に—」, 『OHM』第 94 巻, 第 9 号, 2007 年.

辻本 篤: 「親会社—子会社間の情報共有不足による事故 その 1」, 『OHM』第 94 巻, 第 10 号, 2007 年.

辻本 篤: 「親会社—子会社間の情報共有不足による事故 その 2」, 『OHM』第 94 巻, 第 11 号, 2007 年.

辻本 篤: 「内部統制」, 『OHM』第 94 巻, 第 12 号, 2007 年.

原田隆宏・助教

研究テーマ(主たるもの)

Computational Mechanics

Mainly fluid simulation.

Computer Graphics

Physically based simulation.

研究業績(2007 年度)

著書等

越塚誠一, 原田隆宏, 田中正幸, 近藤雅裕: 「粒子法シミュレーション 物理ベース CG 入門」, 越塚誠一, 原田隆宏, 田中正幸, 近藤雅裕 編, 培風館, 2007 年.

Takahiro Harada: “Real-time Rigid Body Simulation on GPUs”, Hubert Nguyen 編, Addison-Wesley Professional, 2007 年.

論文等

原田隆宏, 越塚誠一: 「離散境界を用いた距離関数の構築手法」, 情報処理学会論文誌, Vol.48, No.4, pp.1820-1828, 2007 年. 【査読有】

原田隆宏, 越塚誠一: 「布と高解像度のモデルとのリアルタイム衝突計算」, 情報処理学会論文誌, Vol.48, No.4, pp.1829-1837, 2007 年. 【査読有】

原田隆宏, 越塚誠一: 「SPH 法における壁境界計算手法の改良」, 情報処理学会論文誌, Vol.48, No.4, pp.1838-1846, 2007 年. 【査読有】

原田隆宏, 田中正幸, 越塚誠一, 河口洋一郎: 「グラフィックスハードウェアを用いた個別要素法的高速化」, 日本計算工学会論文集, No.20070011, 2007 年. 【査読有】

原田隆宏, 田中正幸, 越塚誠一, 河口洋一郎: 「粒子法シミュレーションの並列化」, 情報処理学会論文誌, Vol.48, No.11, pp.3557-3567, 2007 年. 【査読有】

原田隆宏, 越塚誠一, 河口洋一郎: 「粒子からの表面構築の改良」, 情報処理学会論文誌, Vol.48, No.12, pp.4059-4063, 2007 年. 【査読有】

原田隆宏, 越塚誠一, 河口洋一郎: 「GPU を用いた粒子法シミュレーションのためのスライスデータ構造」, 日本計算工学会論文集, No.20070028, 2007 年. 【査読有】

Takahiro Harada, Seiichi Koshizuka, Yoichiro Kawaguchi: "Improvement of the Boundary Conditions in Smoothed Particle Hydrodynamics", Computer Graphics & Geometry, Vol.9, No.3, pp.2-15, 2007 年. 【査読有】

原田隆宏, 越塚誠一, 島崎克教: 「MPS 法における壁境界計算モデルの改良」, 日本計算工学会論文集, No.20080006, 2007 年. 【査読有】

原田隆宏, 越塚誠一, 河口洋一郎: 「GPU を用いた SPH シミュレーション」, 第 12 回日本計算工学講演会論文集, 2007 年. 【査読有】

原田隆宏, 越塚誠一, 河口洋一郎: 「GPU を用いた Smoothed Particle Hydrodynamics の高速化」, Visual Computing/グラフィクスと CAD 合同シンポジウム, 2007 年. 【査読有】

嶋田有紀, 新谷幹夫, 白石路雄, 原田隆宏: 「GPU シェーダーを用いた雲の高速レンダリング」, Visual Computing/グラフィクスと CAD 合同シンポジウム, 2007 年. 【査読有】

原田隆宏, 越塚誠一, 河口洋一郎: 「流体と布のリアルタイム連成シミュレーション」, 情報処理学会研究報告, 2007 年. 【査読有】

国際会議等

Takahiro Harada, Seiichi Koshizuka, Yoichiro Kawaguchi: "Acceleration of Smoothed Particle Hydrodynamics using Graphics Hardware", International Conference on Computational Mechanics, 2007. 【査読有】

Takahiro Harada, Seiichi Koshizuka, Yoichiro Kawaguchi: "Smoothed Particle Hydrodynamics in Complex Shapes", Spring Conference on Computer Graphics, pp.235-241, 2007. 【査読有】

Takahiro Harada, Masayuki Tanaka, Seiichi Koshizuka, Yoichiro Kawaguchi: "Acceleration of Rigid Body Simulation using Graphics Hardware", Symposium on Interactive 3D Graphics and Games, 2007. 【査読有】

Takahiro Harada, Seiichi Koshizuka, Yoichiro Kawaguchi: "Smoothed Particle Hydrodynamics on GPUs", Computer Graphics International, pp.63-70, 2007. 【査読有】

Takahiro Harada, Seiichi Koshizuka, Yoichiro Kawaguchi: "Real-time Fluid Simulation Coupled with Cloth", Theory and Practice of Computer Graphics, pp.13-20, 2007. 【査読有】

Yuki Shimada, Mikio Shinya, Michio Shiraishi, Takahiro Harada: "Real-time Rendering of Dynamic Clouds", SIGGRAPH 2007 Poster, 2007. 【査読有】

Masahiro Kondo, Masayuki Tanaka, Takahiro Harada, Seiichi Koshizuka: "Elastic Objects for Computer Graphic Field using MPS method", SIGGRAPH 2007 Poster, 2007. 【査読有】

Takahiro Harada, Masayuki Tanaka, Seiichi Koshizuka, Yoichiro Kawaguchi: "Real-time Particle-based Simulation on GPUs", SIGGRAPH 2007 Poster, 2007. 【査読有】

Takahiro Harada, Seiichi Koshizuka, Yoichiro Kawaguchi: "Construction of Non-Bloppy Surface from Particles", Eurographics Short Paper, pp.41-44, 2007. 【査読有】

Takahiro Harada, Masayuki Tanaka, Seiichi Koshizuka, Yoichiro Kawaguchi: "Real-time Coupling of Fluids and Rigid Bodies", Asian-Pacific Congress on Computational Mechanics, 2007. 【査読有】

Takahiro Harada, Seiichi Koshizuka, Yoichiro Kawaguchi: "Slided Data Structure for Particle-based Simulations on GPUs", GRAPHITE, pp.55-62, 2007. 【査読有】

口頭発表等

原田隆宏, 政家一誠: 「複数の GPU を用いたリアルタイム粒子法シミュレーション」, CUDA カンファレンス, 2007. 【招待講演】

吉海智晃・助教

研究テーマ(主たるもの)

柔軟ヒューマノイドにおける対人・対環境適応インタラクションのための自律行動統合システムの開発

人や環境に対して、適応的なインタラクションを実現するためには、身体自身の柔軟性、そして、その行動生成システムの柔軟性のどちらも欠くことはできない。そこで、全身に 3 軸の力センサを分布させ、それを柔軟ウレタン素材で覆うタイプのヒューマノイドを開発し、それを用いて、人や環境とインタラクションを行う際に、そこで目的とする行動タスクと、自身の身体維持のために常に作用している自律反応機能を自動的に統合していくことのできる行動システムの開発を行っている。

研究業績(2007 年度)

論文等

吉海智晃, 林摩梨花, 稲葉雅幸: 「柔軟肉質ヒューマノイド macra における並列監視評価構造を用いた自律行動統合システム」, 第 25 回日本ロボット学会学術講演会講演会予稿集, 2007 年.

水内郁夫, 中西雄飛, 袖山慶直, 並木勇太, 西野環, 村松直矢, 浦田順一, 本郷一生, 吉海智晃, 稲葉雅幸: 「筋骨格型ヒューマノイド小次郎プロジェクト」, 第 25 回日本ロボット学会学術講演会講演会予稿集, 2007 年.

浦田順一, 吉海智晃, 水内郁夫, 稲葉雅幸: 「形状記憶合金の抵抗値制御を用いた超小型多自由度腱駆動ロボット」, 第 25 回日本ロボット学会学術講演会講演会予稿集, 2007 年.

西野環, 水内郁夫, 吉海智晃, 稲葉雅幸: 「活線挿抜検知可能なロボット体内 USB 神経系の基盤情報システムの設計と実現」, 第 25 回日本ロボット学会学術講演会講演会予稿集, 2007 年.

西野環, 袖山慶直, 吉海智晃, 岡田慧, 水内郁夫, 稲葉雅幸: 「筋骨格ヒューマノイド小次郎の頭部・眼球機構の設計」, 第 25 回日本ロボット学会学術講演会講演会予稿集, 2007 年.

村松直矢, 吉海智晃, 西野環, 水内郁夫, 稲葉雅幸: 「筋骨格ヒューマノイド小太郎の脊椎を利用した視覚に基づくクランク回し行動の獲得」, 日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会, 2007 年.

林摩梨花, 鷺坂隆志, 吉海智晃, 稲葉雅幸: 「全身接触行動を行うヒューマノイドロボットのための柔軟外装の設計評価」, 日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会, 2007 年.

林摩梨花, 吉海智晃, 稲葉雅幸: 「発泡樹脂柔軟外装を持つヒューマノイドにおける全身分布三軸力センシング」, 第 25 回日本ロボット学会学術講演会講演会予稿集, 2007 年.

林摩梨花, 石坂唯, 植田亮平, 吉海智晃, 稲葉雅幸: 「全身分布三軸力覚センサを有する柔軟外装ロボットの密着インタラクション」, 第 25 回日本ロボット学会学術講演会講演会予稿集, 2007 年.

鷺坂隆志, 林摩梨花, 吉海智晃, 水内郁夫, 稲葉雅幸: 「柔軟外装をもつヒューマノイドによる寝返り動作のシミュレーションと行動実現」, 日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会, 2007 年.

石坂唯, 林摩梨花, 吉海智晃, 稲葉雅幸: 「アニメーションを感じさせる全身柔軟外装を持つロボットのための顔モデルの開発」, 第 25 回日本ロボット学会学術講演会講演会予稿集, 2007 年.

植田亮平, 小倉崇, 石坂唯, 林摩梨花, 吉海智晃, 稲葉雅幸: 「Eusdyna における PhysX を用いたヒューマノイドの柔軟外装のモデリングと柔軟物の操作行動生成」, 第 25 回日本ロボット学会学術講演会講演会予稿集, 2007 年.

国際会議等

T.Yoshikai, M.Hayashi, Y.Ishizaka, T.Sagisaka, and M.Inaba: "Behavior Integration for Whole-body Close Interactions by a Humanoid with Soft Sensor Flesh", Proceedings of the 2007 IEEE International Conference on Humanoid Robots (Humanoids, 2007. 【査読有】

Yoshinao Sodeyama, Tomoaki Yoshikai, Tamaki Nishino, Ikuo Mizuuchi, and Masayuki Inaba: "The Designs and Motions of a Shoulder Structure with a Wide Range of Movement Using Bladebone-Collarbone Structures", IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems, pp.3629-3634, 2007. 【査読有】

Junichi Urata, Tomoaki Yoshikai, Ikuo Mizuuchi, and Masayuki Inaba: "Design of High D.O.F. Mobile Micro Robot Using Electrical Resistance Control of Shape Memory Alloy", IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems, pp.3828-3833, 2007. 【査読有】

Marika Hayashi, Takashi Sagisaka, Yui Ishizaka, Tomoaki Yoshikai, and Masayuki Inaba: "Development of Functional Whole-Body Flesh with Distributed Three-axis Force Sensors to Enable Close Interaction by Humanoids", IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems, pp.3610-3615, 2007. 【査読有】

山田和明・特任講師(科学技術振興)

研究テーマ(主たるもの)

オンラインコミュニティにおけるユーザ意思決定プロセスの解

本研究では、オンラインコミュニティの活動履歴(アクセスログデータ)を解析することで、コミュニティメンバーの意思決定がメンバー間の相互作用によりどのように変化・発展しているか解明する。そして、マーケティングやオンライン教育サービスなどのコンテンツ開発支援への適用を目指す。

研究業績(2007 年度)

著書等

山田和明:「創発とマルチエージェントシステム」, 上田完次 編, 培風館, 2007 年.

口頭発表等

山田和明:「オンラインコミュニティにおける制度設計に関する一考察」, 第 11 回 Web インテリジェンスとインタラクション研究会, 2008.

吉田正高・特任講師(科学技術振興)

研究テーマ(主たるもの)

コミックのデジタル・アーカイブ

印刷状況が劣悪であった昭和20年代～30年代を中心とした児童向けコミックのデジタル・アーカイブ作製と、その歴史資料としての活用に関する研究

近世江戸における鎮守の研究

近世江戸の各所に設置されていた信仰施設である鎮守について、特に地域住民の意識を通して、都市文化史の視点から考察する研究

コンテンツ文化史

戦後国内におけるコンテンツの発展と歴史について、当該時期の政治・社会状況を考慮しながら、コンテンツ分野(コミック、アニメーション、ビデオゲームなど)の枠を超えた文化史的な視点から、統合的に考察をする研究

研究業績(2007 年度)

大谷智子・特任助教(科学技術振興)

研究テーマ(主たるもの)

視覚的注意の周辺領域における色特徴の処理とその空間特性

我々は多くの情報を取捨選択し、それを基に知覚・認知および記憶をして、行動を決定している。この情報処理過程の中で、視覚的注意の役割は重要である。近年、意図的注意が向けられている対象と向けられていない対象が同時に存在するとき、それらが同じ特徴を持つ場合には、意図的注意が向けられていないはずの対象が検出されやすくなるという研究がいくつか報告されている。この現象が生起する要因について、色特徴処理の観点から検討する。

コンテンツ

コンテンツ創造における大学の果たす役割について、地域社会や産業と連携した仕組み作りを主に模索する。

研究業績(2007 年度)

口頭発表等

大谷智子・永井淳一・横澤一彦:「空間的注意の中心および周辺領域における色特徴の処理」, 日本心理学会注意と認知研究会(第5回), 2007.

堀聖司・特任助教(科学技術振興)

研究テーマ(主たるもの)

作品制作を中心とした錯視的映像表現に関する研究

コンピュータ・グラフィクスを使用し制作した複数の異なった視点移動の映像を、ひとつの画面内に部分的に合成することによって生じる視覚の競合を利用した錯視的映像作品の制作。切り抜き合成用に使用する動画素材にも視点移動する三次元形状のシルエットを用いることでさらに視覚の競合が助長される。

研究業績(2007 年度)

松野将宏・特任助教(科学技術振興)

研究テーマ(主たるもの)

スポーツを核とした地域活性化に関する研究

プロスポーツの存在は、その経済波及効果の観点から都市におけるビッグビジネスであるとされている。本研究では、地域における行政や財界、地域住民の連携を通じた組織間学習やソーシャルキャピタルの蓄積と応用といった視点から新たな「地域づくり・まちづくりの核」と位置づけて、地域活性化メカニズムを解明していく。

日本版 LLP 制度を活用した技術移転メカニズムに関する研究

平成 17 年 8 月より施行された有限責任事業組合(LLP)法により、人的資源を活用した共同事業化による創業促進が期待されている。本研究では、事例データを用いて、日本版 LLP 制度による技術移転メカニズムを分析し、新たな技術移転パースペクティブを提示する。技術系 LLP の技術移転モデルを分析枠組として、技術特性、不確実性、資源補完性、複雑性、LLP の組織・制度的要因を分析指標とし、技術移転を促進するメカニズムを分析する。

プロスポーツ産業におけるリーグ・ガバナンス構造とビジネスシステム

プロスポーツ産業のガバナンス構造およびビジネスシステムの解明である。その特徴は、リーグ内で各チームが「競争」しながら同時に「協調」行動をとることにより共同体を形成し、リーグ全体の利益拡大および市場拡大を意図して構築される社会的合意形成システムである。本研究では、J リーグを事例にプロスポーツ・リーグにおける社会的合意形成プロセスを考察していく。

研究業績(2007 年度)

論文等

松野将宏:「日本版 LLP 制度を活用した技術移転」, JAPAN VENTURES REVIEW, Vol.11, 2008 年。【査読有】

口頭発表等

松野将宏・堀内晃:「日本版 LLP 制度を活用した技術移転」, 日本ベンチャー学会, 2006.

松野将宏・七丈直弘:「日本版 LLP を活用した技術移転」, 研究技術計画学会, 2007.

藤原正仁・特任研究員(科学技術振興)

研究テーマ(主たるもの)

コンテンツ分野におけるインターンシップ・コーオプ教育に関する実践的研究

インターンシップは、理論と実践を統合する産学連携教育であり、個人のキャリア発達のみならず、学術的な発展、さらには社会変革を促すものとして大きく期待 されている。とりわけ、コンテンツ分野においては、国の施策に位置づけられ、インターンシップが重点的に推進されている。

インターンシップの有意性を明らかにするとともに、カリキュラム開発、評価制度の確立、運営体制の考察などに努め、望ましいインターンシップの普及・発展にも貢献を果たしていきたい。

コンテンツプロデューサーのキャリア・ディベロップメントに関する研究

プロデューサーの育成方法について、コンテンツ業界の方に伺うと、次のような回答が多い。「プロデューサーは育てるものではなく、育つものだ。学校教育より もむしろ現場経験が大事だ。」と。プロデューサーの育成は、産学でどのような役割分担のもとに行っていけばよいのだろうか。

学校教育と職業とのレリバンスや一皮むける経験、キャリア発達理論などを再統合し、プロデューサーのキャリア発達と、キャリア開発プログラムについて考察を重ねている。

研究業績(2007 年度)

一般向け記事・報道等

藤原正仁:「北米におけるゲームの産学連携」, 平成 19 年度「デジタルコンテンツ制作の先端技術応用に関する調査研究委員会報告書」, 2007 年.

剛谷紀夫・特任助教(特別教育研究)

研究テーマ(主たるもの)

Digital Archive Digital Heritage における情報統制手法の確立

文化資源をデジタル化して公開する Digital Archive や Digital Heritage における、メタデータやオントロジなどの情報統制手法の確立を行う。

近代メディア表象論 国葬におけるメディア表象を中心として

近代におけるメディア表象を、近年では特に明治以降の国葬を対象としたメディア表象について研究する。

研究業績(2007 年度)

論文等

馬場章 研谷紀夫:「海外におけるデジタルアーカイブの動向」, 映像情報メディア学会誌, Vol.161, No.11, pp.50-53, 2007 年.

研谷紀夫:「集合知を活用したデジタルアーカイブの構築とその課題」, デジタル図書館, Vol.No. 33, 2007 年. 【査読有】

研谷紀夫,馬場章:「赤水図デジタルアーカイブプロジェクトの概要」, 東京大学史料編纂所画像解析センター通信, 2007 年.

研谷紀夫,馬場章:「文化資源オントロジーの構築とその活用」, 情報知識学会誌, Vol.17, No.2, pp.129-134, 2007 年. 【査読有】

研谷紀夫 津田光弘 馬場章:「文化資源統合アーカイブにおける時空間情報の活用とその課題」, 情報処理学会シンポジウム じんもんこん 2007 論文集, 2007 年. 【査読有】

研谷紀夫:「デジタルアーカイブにおけるオンラインコミュニティの活用とその課題」, 情報文化学会第 15 回研究大会 発表予稿, 2007 年. 【査読有】

研谷紀夫:「ネットワーク文化情報資源で活用する人物典拠情報の構築とその課題」, 日本図書館情報学会研究 2007 年度研究大会 予稿集, 2007 年. 【査読有】

国際会議等

Norio Togiya, Akira Baba: "Constructing Digital Archive of Architectural Material with ontology", International Cultural Heritage Meeting 2007, 2007. 【査読有】

口頭発表等

研谷紀夫:「明治期における「国葬」の創成とそのメディア表象—伊藤博文の国葬を中心として—」, 表象文化論学会 2007 年 第 2 回研究発表集会, 2007.

研谷紀夫:「アーカイブを未来に～デジタルアーカイブの光と影～『事例報告・建築資料を中心としたリアル／バーチャルアーカイブの構築』」, 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会 2007 年度 資料保存研究セミナー, 2007.

Norio Togiya:「Redefinition of the Archive and Future Perspective of the Compound Knowledge Space in the Digital Society」, Ubiquitous Media: Asian Transformations, 2007.

石川雄章・特任教授(研究拠点形成)

研究テーマ(主たるもの)

新技術の社会への実装(イノベーション・モデル)

IT をはじめとする新しい技術を社会に実装する際には、多くの場合、技術というよりはむしろ、多様なステークホルダーとの調整や既存の社会システムの見直し等が課題となる。こうした解題に対応しつつイノベーションを実現するためには、ステークホルダーの把握、共通目標の設定、コアメンバーの任命とチームの結成、権利と責任の適正な分担、検討プロセス及び場の設計、といった幅広い領域にわたる戦略的な取り組みが必要となる。

21世紀COEプログラム「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」では、ユビキタス技術の現場への適用をテーマに、国土交通省などの取り組みを通じて、実証的にこのテーマにアプローチしている。

ITガバナンス(公的セクターにおける枠組みとCIOの役割)

ITガバナンスとは「企業が競争優位構築を目的に、IT戦略の策定・実行をコントロールし、あるべき方向へ導く組織能力」(「企業のITガバナンス向上に向けて」(通商産業省 1999)とされているが、公的セクターにおいてもIT戦略の策定・実行をコントロールすることは重要な課題である。特に、公的セクターは民間セクターとは異なる評価基準、行動制約があり、また社会的な制度設計という特別な機能を有する。こうしたことを前提に、COBITなどの標準的なITガバナンスのフレームワークを参考に、自らの県でのCIOの経験などを踏まえて、公的セクターにおけるITガバナンスの枠組みとCIOの役割について研究している。

社会的合意形成

新しい技術・制度の社会への導入など、社会的に大きな影響をあたえる行為を行う際には、事前に関係者の合意を得たうえで進めることが望ましく、こうした活動を怠った場合には、最悪の場合、社会的な反発を招く恐れもある。その一方で、こうした活動を行う組織は社会的に確立しておらず、また方法論も制度として十分ではない。このため、社会的合意形成を支援するNPO法人PI-Forum(ピー・アイ・フォーラム)の活動を通じて、実証的に社会的合意形成の意義、方法、知恵、事例などを研究している。

研究業績(2007年度)

一般向け講演等

石川雄章:「ITガバナンスの導入にあたって」, 中野区情報システム調達ガイドライン導入に伴う講演会, 2008. 【招待講演】

一般向け記事・報道等

石川雄章:「現場で使うEA(第1回)ーEAを現場の業務改善手法として使う」, 日経コンピュータ, No.676, pp.129, 2007年.

石川雄章:「現場で使うEA(第2回)ーEAドキュメントと検討プロセスを見直す」, 日経コンピュータ, No.677, pp.139, 2007年.

石川雄章:「現場で使うEA(第3回)ー段階的な検討プロセスと先行する業務改善」, 日経コンピュータ, No.678, pp.105, 2007年.

石川雄章:「現場で使うEA(最終回)ーシステム導入は業務改善の始まり」, 日経コンピュータ, No.679, pp.161, 2007年.

「情報システム調達研究会」事務局:「第1回 自治体の「調達ガイド」の内容を比較する」, WEB ITpro, 2007.

「情報システム調達研究会」事務局:「第2回 自治体の「情報システムのベンチマーク」実施とその意義」, WEB ITpro, 2007.

「情報システム調達研究会」事務局:「第3回 【事例研究】神戸市における総合評価の取り組み」, WEB ITpro, 2007.

「情報システム調達研究会」事務局:「第4回 情報システムのベンチマークから何が分かるのか」, WEB ITpro, 2007.

「情報システム調達研究会」事務局:「第5回 情報システム・モデル取引・契約書のポイントを解説する」, WEB ITpro, 2008.

小林真輔・特任准教授(研究拠点形成)

研究テーマ(主たるもの)

センサーネットワーク

小型で無線通信可能なセンサーネットワークの研究。ハードウェアからソフトウェアまでのトータルアーキテクチャの研究を行っている。

研究業績(2007 年度)

論文等

Takayasu Norimatsu, Ryosuke Fujiwara, Masaru Kokubo, Masayuki Miyazaki, Akira Maeki, Yuji Ogata, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "A UWB-IR Transmitter With Digitally Controlled Pulse Generator", IEEE Journal of Solid-State Circuits, Vol.42, No.6, pp.1300--1309, 2007 年.【査読有】

小林真輔, 諸隈立志, 坂村健:「様々な通信規格に対応 可能なマルチプロトコル RFID リーダライタの提案」, 情報処理学会論文誌, Vol.48, No.9, pp.2946-2955, 2007 年.【査読有】

R. Fujiwara, A. Maeki, K. Mizugaki, G. Ono, T. Nakagawa, T. Norimatsu, M. Kokubo, M. Miyazaki, Y. Okuma, M. Hayakawa, S. Kobayashi, N. Koshizuka, K. Sakamura: "0.7-GHz-bandwidth DS-UWB-IR System for Low-power Wireless Communications", IEICE Transactions on Communications, Vol.E91-B, No.2, pp.518-526, 2008 年.【査読有】

小野豪一、中川樹生、藤原亮介、乗松崇 泰、寺田崇秀、宮崎祐行、鈴木敬、矢野和男、緒方祐次、前木陽、小林真輔、越塚登、坂村健:「3.4nW/bps 通信、22cm 測位を実現する 1cc センサノード」, 電子情報通信学会平成 19 年 7 月集積回路(ICD)研究会, ICD2007-37-68, pp.59-64, 2007 年.

寺田崇秀、藤原亮介、小野豪一、乗松崇泰、中川樹生、水垣健一、宮崎祐行、鈴木敬、矢野和男、前木陽、緒方祐次、小林真輔、越塚登、坂村健:「間欠動作型低消費電力 UWB-IR 受信機 アナログフロントエンド」, 電気学会「超集積化・環境 CMOS デバイス調査専門委員会」、「高度ワイヤレスユビキタス社会を支える超高速デバイス・回路技術調査専門委員会」合同委員会, 2007 年.

紙名哲生, 小林真輔, 越塚登, 坂村健:「汎用的ユビキタス基盤による場所識別子に基づくキャンパスツアー」, FIT2007 第 6 回情報科学技術フォーラム 一般講演論文集, 第 4 分冊, pp.259-260, 2007 年.

水垣健一、藤原亮介、中川樹生、宮崎祐行、前木陽、緒方祐次、小林真輔、越塚登、坂村健:「マルチパス環境下での UWB 高精度測位システム」, 電子情報通信学会ソサイエティ大会, B-20-9, 2007 年.

藤原亮介、水垣健一、中川樹生、宮崎祐行、前木陽、緒方祐次、小林真輔、越塚登、坂村健:「高精度 TOA 推定 UWB 受信器の開発」, 電子情報通信学会ソサイエティ大会, B-20-10, 2007 年.

久保寺祐一、鶴坂智則、小林真輔、越塚登、坂村健:「パノラマ写真による歩行者ナビゲーションサポートシステムの提案と実装」, 電子情報通信学会技術研究報告, IN, Vol.107, No.314(20071108) pp. 19-24, 2007 年.

藤原亮介、水垣健一、中川樹生、宮崎祐行、前木陽、緒方祐次、小林真輔、越塚登、坂村健:「UWB-IR を用いた相対位置検出システムの開発」, 電子情報通信学会全国大会, B-20-58, 2008 年.

国際会議等

Shinsuke Kobayashi, Ken Sakamura, and Tatsushi Morokuma: "A Dynamic Retargettable Multi-Protocol RFID Reader/Writer", IEEE International Symposium on Ubiquitous Computing and Intelligence 2007, No.2, pp.340-346, 2007. 【査読有】

G. Ono, T. Nakagawa, R. Fujiwara, T. Norimatsu, T. Terada, M. Miyazaki, K. Suzuki, K. Yano, Y. Ogata, A. Maeki, S. Kobayashi, N. Koshizuka, K. Sakamura: "1-cc Computer: Cross-Layer Integration with 3.4-nW/bps Link and 22-cm Locationing", 20th IEEE Symposium on VLSI Circuits, Vol.9, No.4, pp.90-91, 2007. 【査読有】

T. Terada, R. Fujiwara, G. Ono, T. Norimatsu, T. Nakagawa, K. Mizugaki, M. Miyazaki, K. Suzuki, K. Yano, A. Maeki, Y. Ogata, S. Kobayashi, N. Koshizuka, K. Sakamura: "A CMOS UWB-IR Receiver Analog Front End with Intermittent Operation", 20th IEEE Symposium on VLSI Circuits, Vol.9, No.2, pp.86-87, 2007. 【査読有】

T. Nakagawa, T. Matsuura, E. Imaizumi, J. Kudoh, G. Ono, M. Miyazaki, A. Maeki, Y. Ogata, S. Kobayashi, N. Koshizuka, K. Sakamura: "1-GHz Input Bandwidth 6-bit Under-Sampling A/D Converter for UWB-IR Receiver", Proceedings of the 33rd European Solid-State Circuits Conference 2007, pp.163-166, 2007. 【査読有】

R. Fujiwara, K. Mizugaki, T. Nakagawa, M. Miyazaki, A. Maeki, Y. Ogata, S. Kobayashi, N. Koshizuka, K. Sakamura: "Accurate TOA Estimating UWB-IR Receiver for Ranging/Positioning System in Multi-path Environment", 2007 IEEE International Conference on Ultra-Wideband, 2007. 【査読有】

T. Nakagawa, M. Miyazaki, G. Ono, R. Fujiwara, T. Norimatsu, T. Terada, A. Maeki, Y. Ogata, S. Kobayashi, N. Koshizuka, K. Sakamura: "1-cc Computer using UWB-IR for Wireless Sensor Network", 13th Asia and South Pacific Design Automation Conference, pp.392-397, 2008. 【査読有】

口頭発表等

小林真輔:「超小型・超低消費電力アクティブタグ "Dice" —ユビキタス・プラットフォームの実現へ向けて—」, ユビキタスネットワークングシンポジウム 2007, 2007.

金相美・特任講師(研究拠点形成)

研究テーマ(主たるもの)

social and psychological impacts of communication

Sangmi Kim, specialize in social and psychological impacts of communication and information technologies (e.g. mobile devices, Internet, TV, etc), Information Behavior (IB), network communication, ubiquitous media, social and cultural impacts of digital technology, culture, and policy in Japan and S. Korea. I received a top paper awards from The Japan Society for Socio-information Studies (JSIS) in 2004. My current research is funded by the Hideo Yoshida Foundation and I am also currently working with Yoshiaki Hashimoto

New Media, Information technology and Communication (CMC)

Communication Effects and Processes

研究業績(2007 年度)

竹之内禎・特任講師(研究拠点形成)

研究テーマ(主たるもの)

情報倫理学への基礎情報学的・解釈学的アプローチ

「情報」を客観的な「物」としてではなく、生きた「意味」として捉える基礎情報学的・解釈学的アプローチから、情報と人間との諸関係を理論化し、情報社会の倫理的諸問題の分析に応用する。解釈学的アプローチの一環として、ラファエル・カプーロ、チャールズ・エスらの議論を手がかりに、東西の比較思想的アプローチに重点を置く。

ユビキタス情報社会における情報環境のユニバーサルデザイン:ウェブアクセシビリティを中心に

「いつでも、どこでも、誰でも」情報技術に支援された環境を利用できるユビキタス情報社会基盤の構築に向けて、特にウェブアクセシビリティを中心として、情報環境のユニバーサルデザインのあり方と現状、認知度、制度、教育手法を批判的に検討する。

研究業績(2007 年度)

著書等

西垣通、竹之内禎、ルチアーノ・フロリディ、ラファエル・カプーロ、チャールズ・エス:「情報倫理の思想」, 西垣通、竹之内禎 編, NTT出版, 2007 年.

口頭発表等

竹之内禎:「ウェブアクセシビリティ(WA)に関する社会的認知と情報環境のユニバーサルデザイン」, 日本社会情報学会・合同研究大会 WG「少子高齢社会に社会情報学は何かができるか」, 2007.

Toru Nishigaki and Tadashi Takenouchi: "Who observes the ", ReGIS-FH Stuttgart (HdM) Joint-Workshop, 2007.

Tadashi Takenouchi and Kazuyoshi Watanabe: "Intellectual Freedom from the Viewpoint of Hierarchical Autopoietic Systems Theory", ReGIS-FH Stuttgart (HdM) Joint-Workshop, 2007.

竹之内禎、渡邊一由:「現代的モノドロロジーとしての基礎情報学に基づく情報倫理学研究の可能性に関する予備的考察」, 社会文化情報学会研究大会, 2008.

添野勉・特任助教(研究拠点形成)

研究テーマ(主たるもの)

メディア史

メディア論

アーカイブ研究

研究業績(2007 年度)

論文等

添野勉:「新規教育研究事業「高度アーカイブ化事業」の立ち上げについて」, 東京大学大学院情報学環社会情報研究資料センターニュース, 2008 年.

口頭発表等

Soeno Tsutomu: "From Technology to Media :Between History of Photography and Photographer Ogawa Kazumasa", UBIQUITOUS MEDIA:ASIAN TRANSFORMATIONS, 2007.

D.ビュースト・特任助教(研究拠点形成)

研究テーマ(主たるもの)

近代性、グローバル化とナショナリズムの諸問題(日本・東アジアを中心に)

文化とアイデンティティの政治学(文化政策を含めて)

近代思想とその人文・社会科学への影響(解釈学を中心に)

研究業績(2007 年度)

論文等

Shigehiko Hasumi (trans. David C. Buist): "Fiction and the "Unrepresentable"", Theory, Culture & Society, 2007 年.【査読有】

Itsuko Yamaguchi (trans. David C. Buist): "Some Observations on the Balancing of Intellectual Property Rights with Information Freedom from the Perspective of Constitutional Law", 特許庁への報告書, 2007 年.

国際会議等

Tatsuro Hanada (trans. David C. Buist): "Returning to Journalism in the Post-mass-media Age", Seoul National University Media Studies Symposium, 2007.

山本拓司・特任助教(研究拠点形成)

研究テーマ(主たるもの)

近代日本における身体文化の形成

概要説明 主に日本をフィールドとしながら、社会の近代化の過程における、体操やスポーツ等の身体文化および大衆文化の関係について研究を行っている。

東京大学情報学環所蔵 戦時宣伝資料のデジタル・アーカイブの作成について

概要説明 情報学環が所蔵する戦時宣伝資料(第一次世界大戦期の欧米プロパガンダポスターおよび日中戦争～第二次世界大戦にかけての日本側プロパガンダ・パンフレット、戦時号外コレクション)の整理とデジタル・アーカイブの作成を行い、それら戦時宣伝資料のメディア史においてもつ意義について研究を行っている。

研究業績(2007 年度)

著書等

山本拓司:「社会学の饗宴Ⅱ 逍遙する記憶 一旅と旅程標一」, 山岸健 編, 三和書籍, 2007 年.

口頭発表等

山本拓司:「ユビキタス情報社会と身体、ヴィークル」, 慶應義塾大学大学院理工学研究科 先端デザインスクールプログラム, 2007.

山本拓司:「日中戦争期伝単資料について 一東京大学大学院情報学環所蔵資料より一」, 東アジアメディア産業研究会(東京大学駒場キャンパス), 2007.

七邊信重・特任助教(受託研究)

研究テーマ(主たるもの)

オンラインゲームの教育目的利用のための研究——教室談話の分析・考察から

近年、Nintendo DS や Wii をはじめとするデジタルゲームの教育利用に、世界的に関心が集まり、日本でも学校での教育利用が行われるようになってきている。しかし、ゲームを用いた授業で生徒の学習が行われるプロセスを、実証的データに基づいて考察した研究は多くない。筆者は、歴史オンラインゲーム『大航海時代 Online』(株式会社コーエー)を使用した授業における教師と生徒との教室談話のデータを用いて、ゲームを使った授業と生徒の学習の連関について探究を行っている。

サブカルチャーの文化産業論的研究——オタク現象の構造連関分析を中心に

ポスト高度成長期に出現した「オタク」と呼ばれるアニメやマンガのコアなファンは、メディアを媒介に独自のシーンや文化を形成している。そしてこのサブカルチャーシーンは、コミックマーケットに象徴的に見られるように、日本のポピュラー文化産業の通底部で、優れた人材を育成し革新的な文化的コンテンツを産業界に供給している。筆者の関心は、従来の社会科学で十分に探究されてこなかった、日本のオタク・サブカルチャーと産業界との複雑で潜在的な相互連関を解明する点に向けられている。

現在は、文化社会学や組織論、社会心理学における集団・組織・文化・制度についての理論枠組とそれらに基づいて蓄積された先行研究に依拠しつつ、ゲームを事例とした分析をおこなっている。具体的には、1980年代以降の日本の家庭用ゲーム産業の興隆・停滞・縮小・再生と、PCゲーム企業やアマチュア制作のデジタルゲーム(Key『CLANNAD』や 07th Expansion『ひぐらしのなく頃に』等)の活況の社会的・歴史的な背景、両者の構造連関等を、定性的データの分析・考察から探究している。

研究業績(2007 年度)

一般向け講演等

Hichibe. Nobushige and Akira Bab: ““Serious Games” in JAPAN”, Serious Games Summit 2008 (Game Developers Conference 08), 2008. 【招待講演】

一般向け記事・報道等

七邊信重:「東京大学「オンラインゲームの教育目的利用のための研究」プロジェクト」, シリアスゲームの動向調査報告書, デジタルコンテンツ協会, 2008 年.

七邊信重:「DiGRA2007 におけるシリアスゲームの最新事情」, シリアスゲームの動向調査報告書, デジタルコンテンツ協会, 2008 年.

七邊信重:「デジタルゲームの応用利用について——GDC2008 における米国のシリアスゲームの最新事情」, シリアスゲームの動向調査報告書, デジタルコンテンツ協会, 2008 年.

七邊信重:「世界におけるシリアスゲームの現状——GDC2008 における米国のシリアスゲームの最新事情」, シリアスゲームの動向調査報告書, デジタルコンテンツ協会, 2008 年.

七邊信重:「DiGRA とゲーム技術の研究開発」, デジタルコンテンツ制作の先端技術応用に関する調査研究報告書, デジタルコンテンツ協会, 2008 年.

馬場章、七邊信重:「“Serious Games Summit”レポート:シリアスゲーム情勢を通して見る、世界の中の日本」, GameWatch, 2008.

馬場章、七邊信重:「東大研究員がシリアスゲームの現状を報告、“本当のシリアスゲーム”を見抜くために」, ファミ通.com, 2008.

米倉将吾・特任助教(受託研究)

研究テーマ(主たるもの)

情動ロボティクス

ロボットが人間のように感情・情動を持つようになるためには、何が必要なのか。
また、そもそもロボットが感情や情動を持っているとはどういう事なのか。
現象論、進化論、脳科学を出発点として、エモーショナルなロボットの構成を試みている。

思いやり共感システム

誰かの悲しみを敏感に感じ取りそっと寄り添ったり、
自然や芸術の美しさを感じたり、その感動を誰かと共有したり、
このような夢のようなシステムをつくり出すために必要な
脳型情報処理システムを構築する事を試みている。

身体性知能

非限定的状況においても適応創発的に対応する事の出来るシステムを構築するために、
アフォーダンス・ゲシュタルト・価値システム・身体性を軸として知能の創発、
行動の創発のための構成論に取り組んでいる。

研究業績(2007 年度)

国際会議等

Shogo Yonekura, Yasuo Kuniyoshi, and Yoichiro Kawaguch: “Neural and behavioral substrates of emotions as actions to reduce embodied dissonance”, 6th IEEE International Conference on Development and Learning (ICDL’ 07), pp.11-13, 2007. 【査読有】

口頭発表等

米倉将吾、國吉康夫、河口洋一郎:「身体性に由来した不協和緩和のための情動の行動基盤について」, ロボティクス・メカトロニクス講演 2007, 2007.

荒牧浩二・特任准教授(寄付講座)

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2007 年度)

下畑光夫・特任准教授(寄付講座)

研究テーマ(主たるもの)

ユビキタスサービス学の研究

RFID やモバイルネットワークといったユビキタスの要素技術は着実に開発が進んでおり、次にはその技術を活用したサービス(ユビキタスサービス)の普及が期待されている。本研究はユビキタスサービス普及に向けて、技術的、社会的、制度的課題について基礎学問的アプローチから明らかにすることを目的としている。また、事業化、ビジネス化といった実践的方法論まで取り組みたいと考えている。

研究業績(2007 年度)

北村智・特任助教(寄付講座)

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2007 年度)

論文等

松河秀哉, 北村 智, 永盛祐介, 久松慎一, 山内祐平, 中野真依, 金森保智, 宮下直子: 「データマイニングを活用した学習方略フィードバックシステムの開発」, 日本教育工学会論文誌, Vol.31, No.3, pp.307-316, 2007年.【査読有】

口頭発表等

山田政寛, 島田徳子, 北村 智, 三宅正樹, 舘野泰一, 山口悦司, リチャード・ハリソン, 秋山大志, 中野真依, 中原 淳: 「英語リスニング能力育成を目的としたモバイルデバイス向けシステムの開発と試行」, 外国語教育メディア学会第 47 回全国研究大会, 2007.

中原 淳, 島田徳子, 山田政寛, 北村 智, 三宅正樹, 舘野泰一, 山口悦司, リチャード=ハリソン, 秋山大志, 中野真依, 歌代崇史, 大房潤一, 山内祐平, 長岡 健, 重田勝介, 脇本健弘, 関根聖二: 「なりきり English ! : 企業人材育成向けモバイル英語リスニング学習システムの開発と評価」, 日本教育工学会第 23 回全国大会, 2007.

松河秀哉, 北村 智, 永盛祐介, 久松慎一, 山内祐平, 中野真依, 金森保智, 宮下直子: 「データマイニングを活用した学習方略フィードバックシステムの開発と評価」, 日本教育工学会第 23 回全国大会, 2007.

山内祐平, 久松慎一, 北村 智, 飛弾信崇: 「RFID を利用した把持状態検出型インタラクティブ博物館展示システムの開発」, 日本科学教育学会第 31 回年会, 2007.

久松慎一, 北村 智, 山内祐平, 飛弾信崇: 「モノとの相互作用と知識伝達学習を融合した博物館展示システムの開発」, 日本教育工学会第 23 回全国大会, 2007.

山田政寛・特任助教(寄付講座)

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2007 年度)

論文等

Yamada, M & Akahori, K: "Social Presence in Synchronous CMC-based Language Learning – How Does It Affect the Productive Performance and Consciousness of Learning Objectives?", CALL, Vol.20, No.1, pp.37–65, 2007 年. 【査読有】

Yamada, M & Akahori, K: "An Analysis of the relationship between presence, consciousness and performance in learner-centered communicative learning using SCMC- Experimental study", The Journal of Asia TEFL, Vol.4, No.4, pp.59–91, 2007 年. 【査読有】

Yamada, M & Akahori, K: "Presenting Information to Assist Learners in Learner-centered Communicative Language Learning Using Videoconferencing", The Journal of Information and Systems in Education, Vol.5, No.1, pp.5–16, 2007 年. 【査読有】

国際会議等

Yamada,M., Saito,Y., Horiuchi,Y., Gondo,T., Tamaki,K.: "Relationship between Learning Consciousness and Performance in Blended and Online Learning with and without CMC-based Learner-Centered Communication", AACE SITE conference, 2007. 【査読有】

Yamada, M & Akahori, K: "Factors Raising Consciousness of Target in Learner-Centered Communicative Language Learning Using Videoconferencing", AACE ED-MEDIA Conference, pp.3828–3836, 2007. 【査読有】

Yamada,M., Saito,Y., Gondo,T., MOCHIZUKI,T., GODA,Y., IWASAKI,F., MATSUDA,T., TAMAKI,K.: "Relationship among course type, self-efficacy, mentor and learning performance: Toward e-learning satisfaction model", AACE E-Learn conference, pp.543–548, 2007. 【査読有】

須見徹太郎・特任教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2007 年度)

論文等

須見徹太郎、松尾一郎、関谷直也、新堀賢志、飯田圭子:「平成 19 年台風 9 号出水における洪水予報・避難勧告等実態調査」, 日本災害情報学会第9回研究発表大会予稿集, 2007 年.

口頭発表等

須見徹太郎:「平成 19 年台風 9 号出水における洪水予報・避難勧告等実態調査」, 日本災害情報学会第9回研究発表大会, 2007.

大石岳史・特任講師

研究テーマ(主たるもの)

大規模文化遺産のデジタルコンテンツ化

大規模な文化遺産を 3 次元的に記録し, コンテンツ化する研究を行っている. 主に幾何形状のモデル化に従事しており, レーザレンジセンサを用いて計測された複数の距離画像を位置合わせ, 統合する手法の開発を行っている. 現在はカンボジア・アンコール遺跡群のバイヨン寺院を対象としてプロジェクトを進めている.

研究業績(2007 年度)

論文等

鎌倉真音, 大石岳史, 高松淳, 池内克史:「3 次元モデルによるバイヨン寺院尊顔の解析と制作背景の考察」, 映像情報メディア学会誌, Vol.61, No.4, pp.82-87, 2007 年.【査読有】

K. Ikeuchi, T. Oishi, J. Takamatsu, R. Sagawa, A. Nakazawa, R. Kurazume, K. Nishino, M. Kamakura and Y. Okamoto: "The Great Buddha Project: Digitally Archiving, Restoring, and Analyzing Cultural Heritage Objects", International Journal of Computer Vision, Vol.75, No.1, pp.189-208, 2007 年.【査読有】

佐川立昌, 大石岳史, 阪野貴彦, 池内克史:「大型有形文化財モデルの実際」, 映像情報メディア学会誌, 2007 年.

国際会議等

T. Kakuta, T. Oishi and K. Ikeuchi: "Real-time Soft Shadows in Mixed Reality Using Shadowing Planes", IAPR Conference Machine Vision Applications, 2007.【査読有】

K. Ikeuchi, T. Oishi, J. Takamatsu: "Digital Bayon Temple -e-monumentalization of large-scale cultural-heritage objects-", ASIAGRAPH 2007, Vol.1, No.2, pp.99-106, 2007.

口頭発表等

角田哲也, 大石岳史, 池内克史:「高速陰影法による飛鳥京 MR コンテンツの提案とその評価」, 第 26 回CG・可視化研究会(CAVE研究会), 2007.

角田哲也, 大石岳史, 池内克史:「バーチャル飛鳥京:複合現実感による遺跡の復元」, 第 3 回デジタルコンテンツシンポジウム, 2007.

角田哲也, 大石岳史, 池内克史:「バーチャル飛鳥京:複合現実感技術による遺跡の復元」, 日本文化財科学会第 24 回大会, 2007.

T. Oishi, K. Nakao, Y. Okamoto, K. Ikeuchi: 「Integration and Visualization of Large 3D models」, The 3rd Int'l Joint Workshop of KAIST-RCV and U. Tokyo-Ikeuchi Lab. on Robust Vision Technology, 2007.

中尾一貴, 大石岳史, 池内克史: 「PC クラスタを用いた大規模距離画像の並列統合」, 3次元映像シンポジウム, 2008.

一般向け記事・報道等

大石岳史, 池内克史, 中川武: 「3D で再現されたアンコール王朝の都」, Graphic Science Magazine Newton, 2007.

池内研究室: 「技術の粋 古代見えた -バーチャル飛鳥京プロジェクト-」, 朝日新聞, 2007.

池内研究室: 「バーチャル飛鳥京」, 朝日放送「NEWS ゆう」, 2007.

池内研究室: 「いにしへの謎に迫れ 情報考古学最前線 「アンコール遺跡を守れ」」, 日本放送「サイエンスZERO」, 2007.

ヘイ ウェスリー ディーン・特任講師

研究テーマ(主たるもの)

ユビキタス・トータルウェルネスシステム

高齢化社会が問題となっているが、人間の QOL という観点からは、自力で移動できるということが最低限保障されなければならない。それは、脳の高次機能を中心とした呼吸循環系能力と筋・骨格系能力の維持と活性化であるが、これらの機能は、通常の社会生活を過ごすだけでは維持できない社会となっているのである。そこで、本研究では、行ってきた基礎研究を基に、通常の運動を気楽に行うことだけで、データを自動的に収集して、トータルに身体健康状態を維持・管理するシステムの構築をめざす。

反動動作を用いた跳躍における左右不均衡の影響

身体運動における左右不均衡は、パフォーマンスに大きく影響すると考えられている。本研究の目的は、1. 反動動作でのパフォーマンス、仕事量および運動能率に対する左右不均衡の影響を評価すること、2. バイオフィードバックトレーニングが、左右不均衡を減少させることやパフォーマンスおよび運動能率を改善することに及ぼす影響を調べることの2つである。

研究業績(2007年度)

論文等

Oda, T., Himeno, R., Hay, D.C., Chino, K., Kurihara, T., Nagayoshi, T., Kanehisa, H., Fukunaga, T., and Kawakami, Y. : " In vivo behavior of muscle fascicles and tendinous tissues in human tibialis anterior muscle during twitch contraction", Journal of Biomechanics , Vol.40, No.14, pp.3114-3120, 2007年. 【査読有】

IV. 外部資金獲得状況

平成20(2008)年3月31日時点で情報学環に在籍していた教員各人が関係する外部資金の状況を、情報学環研究協力係のデータをもとに、収録しています。(※は、競争的資金と判断されるものである)

1. 21世紀COEプログラム
2. 平成19年科学研究費補助金交付一覧
3. 寄附講座
4. 平成19年度厚生労働科学研究費補助金交付一覧
5. 平成19年度受託研究受入一覧
6. 平成19年度共同研究受入一覧
7. 平成19年度奨学寄附金受入一覧
8. 平成19年度外部資金受入総計

1. 21世紀COEプログラム※

申請分野	拠点番号	研究課題	研究代表者等・職名	直接経費	間接経費	計
K<革新的な学術分野>	K08	次世代ユビキタス情報社会基盤の形成	坂村 健教授	186,000,000	18,600,000	204,600,000
		計	1件			204,600,000

2. 平成19年度科学研究費補助金交付一覧※

研究種目	課題番号	研究課題	研究代表者等・職名	直接経費	間接経費	計	備考
特定	16089203	わが国における火山罹災地の複合的資料による歴史的文化・自然景観の復元	馬場 章教授	5,500,000	0	5,500,000	H18より代表=8000、H20=4400、H21=6400
特定	18018010	科学コミュニケーションにおけるメディアの影響と役割―実態調査とモデルの提言―	佐倉 統教授	2,200,000	0	2,200,000	
特定	18049023	知識社会経済システムの共創的発展とそのガバナンスに関する研究	須藤 修教授	14,700,000	0	14,700,000	
特定	18049024	電子化診療情報の患者への提供のあり方に関する調査研究	山本 隆一准教授	4,600,000	0	4,600,000	
若手B	18700077	2次元レガシーGISのビュー統合による3次元地理シミュレーション・システム	大東 誠助教	1,500,000	0	1,500,000	
若手B	18700247	ブロードバンド時代の日米欧におけるユニバーサル・サービス制度に関する比較研究	清原 聖子 その他	700,000	0	700,000	
若手B	18730520	ゲーム分野における人材育成に関する研究	藤原 正仁 その他	1,700,000	0	1,700,000	
若手B	19700498	スポーツを核とした地域活性化に関する研究:仙台市を事例として	松野 将宏 その他	400,000	0	400,000	
若手B	19720162	50年代のカストリ雑誌に関する文化史の実証研究―GHQ撤退以降の時期を中心に―	吉田 正高 その他	1,400,000	0	1,400,000	
若手B	19730166	大学研究者が産業競争力向上に果たす役割の定量分析:知識の生産と流通	七丈 直弘准教授	1,500,000	0	1,500,000	
基盤A	17200005	生き物のように凹凸反応する情感的な屏風画像装置システムの創出	河口 洋一郎教授	13,400,000	4,020,000	17,420,000	
基盤A	18200018	ヒトとロボットの原初的コミュニケーションに関する発達認知神経科学的研究	開 一夫准教授	8,000,000	2,400,000	10,400,000	
基盤B	16330097	20世紀後半の東アジアの都市大衆文化における「アメリカ」の受容と反発	吉見 俊哉教授	2,200,000	660,000	2,860,000	
基盤B	17300080	テレビ・コンテンツ分析の情報記号論的研究とハイパーメディア型事典の作成	石田 英敬教授	2,600,000	780,000	3,380,000	
基盤B	17330111	ネット社会の展開と社会的信頼性の関係に関する日韓比較研究	橋元 良明教授	2,000,000	600,000	2,600,000	
基盤B	18300277	把持状態を利用したウェアラブル展示教材の開発	山内 祐平准教授	3,800,000	1,140,000	4,940,000	
基盤B	18320103	歴史史料と中世都市の情報学的研究	本郷 和人准教授	3,700,000	1,110,000	4,810,000	
基盤B	19300056	空間共有通信を軸とした3次元光線情報処理技術の体系化	原島 博教授	6,700,000	2,010,000	8,710,000	H20=4900
基盤B	19300217	ユビキタスによるトータルウェルネスシステムの構築	深代 千之准教授	4,800,000	1,440,000	6,240,000	H20=3700、H21=3300、H22=2900
基盤B	19390040	薬物胎盤移行と作用のPK・PD評価に基づく胎児毒性予測システムの構築	澤田 康文教授	7,500,000	2,250,000	9,750,000	H20=3500、H21=3400

基盤C	17500157	電子自治体投資の地域経済への波及効果に関する研究	田中 秀幸 准教授	900,000	270,000	1,170,000	
基盤C	18530508	「差異性に基づく思考」のメカニズムの解明	岡田 猛 准教授	1,100,000	330,000	1,430,000	
萌芽	18650169	日本古来の身体技法を西洋自然科学によって究明する	深代 千之 准教授	1,000,000	0	1,000,000	
若手スタートアップ	18800012	ユビキタス・アクセス・ネットワーク・アーキテクチャの研究	中尾 彰宏 准教授	1,350,000	0	1,350,000	
特別研究員奨励費	17・10394	在日／南北朝鮮人メディア史研究：1948年・1953年－空間的拡張の機制と論理－	小林 聡明 PD	1,100,000	0	1,100,000	
特別研究員奨励費	17・54081	ユビキタス場所情報システムに関する研究	別所 正博 DC1	800,000	0	800,000	
特別研究員奨励費	18・10202	現代都市再開発期の空間的隔離と社会的排除に関する研究－都市生活と諸制度の関係性－	田中 研之輔 SPD	3,000,000	0	3,000,000	
特別研究員奨励費	18・11200	サウンドフィードバック制御を用いた動作解析および生成に関する研究	白鳥 貴亮 PD	900,000	0	900,000	
特別研究員奨励費	18・11694	メディア研究と実践の有機的結合に向けて－ポピュラー音楽／映像をめぐるメディア史－	溝尻 真也 DC1	500,000	0	500,000	
特別研究員奨励費	18・11696	Self-helpの歴史社会学－近代日本社会における〈自己の技法〉の構築と変容	伊佐 栄二郎 DC1	900,000	0	900,000	
特別研究員奨励費	18・11698	近代日本音楽におけるメディアと子どもに関する歴史社会学的研究	周東 美材 DC1	500,000	0	500,000	
特別研究員奨励費	19・202	<広告制作者>の歴史社会学：近現代日本のメディア論的主体形成に関する研究	加島 卓 DC2	900,000	0	900,000	
特別研究員奨励費	19・6234	合衆国の対アジア文化政策－アメリカナイゼーションとVOAのラジオ放送に着目して－	市川 絃子 DC2	1,000,000	0	1,000,000	
特別研究員奨励費	19・6636	現代的アメリカ映画の視聴覚的様式分析－表象技術と文化形態に関するイメージ論的研究	中路 武士 DC2	900,000	0	900,000	
特別研究員奨励費	19・7952	複合現実感技術による飛鳥京の復元	角田 哲也 DC2	1,000,000	0	1,000,000	
特別研究員奨励費	18・06018	メディア政策 文化政策 電気通信政策 情報産業政策	HADL,Gabriele 外国人特別研究員	1,200,000	0	1,200,000	
特別研究員奨励費	19・07757	現代日本における情報通信分野の産官連携とイノベーションモデルに関する研究	JARVIS,S 外国人特別研究員	800,000	0	800,000	特別研究員奨励費 13件計 13,500,000
研究成果データベース	198037	データベース20世紀・21世紀年表	田中 明彦 教授	5,300,000	0	5,300,000	
特定(分担金)	18049073	情報爆発に対応する新IT基盤研究支援プラットフォームの構築	須藤 修 教授	5,000,000	0	5,000,000	情報学研究所(代表:安達淳教授)
基盤B(分担金)	17200015	鶏の形態嗜好に関する日本とタイの多面的比較完成モデル	池内 克史 教授	500,000	0	500,000	札幌市立大学(代表:原田昭教授)
基盤B(分担金)	19300309	地理情報技術を用いた人間の空間認知・空間行動の分析とその応用に関する研究	石川 徹 准教授	700,000	0	700,000	首都大学東京(代表:若林芳樹)
基盤B(分担金)	17330112	ジャーナリズム構築力の周縁からの形成をめざすジャーナリスト教育の研究開発	林 香里 准教授	850,000	0	850,000	早稲田大学(代表:花田達朗)
基盤B(分担金)	18360286	「聴く建築」、音の景相に基づいた新たな空間設計手法の立案に向けた研究	河口 洋一郎 教授	210,000	0	210,000	東京芸術大学(代表:北川原温)
		計	43件	119,310,000	17,010,000	136,320,000	除く特別研究員奨励費額 122,820,000

3. 寄附講座

寄附講座名称	寄附者	担当教員等		備 考
ベネッセ先端教育技術学	(株)ベネッセコーポレーション	飯吉透客員教授、 山内裕平准教授 (兼務)	50,000,000	(設置期間 H19.4.1 ~ H22.3.31)継続 3 分納の 1 回 目
OKI ユビキタスサービス学	沖電気工業(株)	坂村 健教授(兼 務)、 下畑光夫客 員准教授	24,000,000	(設置期間 H19.4.1 ~ H22.3.31)3 分納の 1 回目
電通 コミュニケーション・ダイナミクス	(株)電通	濱田純一教授(兼 任)、 清原聖子特 任助教	25,000,000	(設置期間 H19.4.1 ~ H22.3.31)2 分納の 1 回目
ユビキタス情報社会基盤学	凸版印刷(株)	坂村健教授(兼 務)、 荒牧 客員 准教授	30,000,000	(設置期間 H19.10.1 ~ H22.9.30)3 分納の 1 回目
計		4 件	129,000,000	

4. 平成19年度厚生労働科学研究費補助金交付一覧※

研究事業名	課題 番号	研究課題	研究代表者 等・職名	直接経費	間接経費	計	備 考
医療安全・医療技術評価総合研究事業	H19- 医 療 一 般 - 013	医療機関等が作成する書類の電子化の様式及び標準化に関する包括的研究	山本 隆一 准教授	28,000,000	0	28,000,000	
エイズ対策研究事業	H17- エ ィ ス - 001	HIV 診療支援ネットワークを活用した診療連携の利活用に関する研究	山本 隆一 准教授	2,000,000	0	2,000,000	国立国際医療 センターエイズ 治療・開発セン ター 菊地嘉代 表の分担
医療安全・医療技術評価総合研究事業	H17- 医 療 - 023	安全な保健医療情報流通を促進する保健医療認証基盤整備の技術的方策に関する研究	山本 隆一 准教授	1,000,000	0	1,000,000	東京工業大学 大山永昭代表 の分担
厚生労働科学特別研究事業	H19- 特 別 指 定 - 014	医師確保に資する医療機関内の環境改善に関する研究	山本 隆一 准教授	2,800,000	0	2,800,000	慶応義塾大学 武林 亨代表の 分担
		計	4 件	33,800,000	0	33,800,000	

8. 平成19年度外部資金受入総計

1,157,776,950 円

(本部・他部局分の間接費も含めた受入額総計)

東京大学 大学院情報学環・学際情報学府 年報

平成21年1月 発行

編集兼発行者 東京大学大学院情報学環・学際情報学府

東京都文京区本郷7丁目3番1号

郵便番号 113-0033

電話：03-5841-5905 Fax：03-5841-5916

Email: tosyo@iii.u-tokyo.ac.jp

印刷・製本

森重印刷株式会社

東京都新宿区市谷本村町 3-20 新盛堂ビル 6F 別館

郵便番号 162-0845

電話：03-5261-1541 Fax：03-5261-1543
